



第20回東北大学高等教育フォーラム
新時代の大学教育を考える [11] 報告書

グローバル人材の育成に向けて

—これからの高校教育・大学教育における課題—

平成26（2014）年12月

東北大学高度教養教育・学生支援機構

第 20 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [11]）

グローバル人材の育成に向けて

——これからの高校教育・大学教育における課題——

◇ 日 時：平成 26 年 5 月 16 日（金） 13:00～17:30

◇ 会 場：仙台国際センター「橘」

〒980-0856 仙台市青葉区青葉山

◇ 主 催：東北大学高度教養教育・学生支援機構

プログラム

司 会 東北大学高等教育開発推進センター教授 石井 光夫

13:00 開会挨拶 東北大学理事 / 東北大学高度教養教育・学生支援機構長
花輪 公雄

13:10 基調講演 1 グローバル社会に求められるもの
文部科学省参与（元ユネスコ本部中等・職業技術教育部長，
在仏日本大使館一等書記官，東北大学特任教授 WPI 担当）
岩本 渉 氏

13:50 基調講演 2 東北大学におけるグローバルリーダー育成の取組
東北大学副理事 / グローバルラーニングセンター長
（東北大学グローバル人材育成推進事業実施責任者）
山口 昌弘 教授

14:40 現状報告
英会話の先にあるもの——批判的思考とコミュニケーション能力の育成——
東北大学高度教養教育・学生支援機構
ダニエル・アイコースト 講師

高大、真の接続の観点から
北海道旭川北高等学校 松井 徹朗 教諭

グローバル化と高校教育
沖縄県立辺土名高等学校 東盛 敬 校長

16:00	討 議	ーパネルディスカッションー		
	司 会	東北大学高度教養教育・学生支援機構	北原 良夫	准教授
		東北大学高度教養教育・学生支援機構	倉元 直樹	准教授
17:25	閉会挨拶	東北大学高度教養教育・学生支援機構副機構長 /		
		東北大学大学院工学研究科	安藤 晃	教授
17:30	閉 会			

グローバル人材の育成に向けて

——これからの高校教育・大学教育における課題——

目 次

第20回東北大学高等教育フォーラム企画主旨	1
開会挨拶	3
第1部 基調講演	
基調講演者紹介	7
基調講演1：グローバル社会に求められるもの 文部科学省参与（元ユネスコ本部中等・職業技術教育部長， 在仏日本大使館一等書記官，東北大学特任教授 WPI 担当） 岩本 渉 氏	9
資料	18
基調講演2：東北大学におけるグローバルリーダー育成の取組 東北大学副理事 / グローバルラーニングセンター長 （東北大学グローバル人材育成推進事業実施責任者） 山口 昌弘 教授	23
資料	32
第2部 現状報告	
現状報告者紹介	37
現状報告1：英会話の先にあるもの ——批判的思考とコミュニケーション能力の育成—— 東北大学高度教養教育・学生支援機構 ダニエル・アイコースト 講師	41
資料	47
現状報告2：高大、真の接続の観点から 北海道旭川北高等学校 松井 徹朗 教諭	73
資料	77

現状報告 3：グローバル化と高校教育				
沖縄県立辺土名高等学校	東盛 敬 校長			97
資料				102
第 3 部 討議 ——パネルディスカッション——				109
閉会挨拶				127
講評				
講評 1：第 20 回東北大学高等学校教育フォーラム				
「グローバル人材の育成に向けて」に参加して				
青森県立青森東高等学校	菊池 真理子 教諭			129
講評 2：				
岩手県立盛岡第二高等学校	鳴海 譲 教諭			134
講評 3：第 20 回東北大学高等教育フォーラムに参加して				
宮城県仙台第一高等学校	阿部 伸 教諭			139
講評 4：第 20 回東北大学高等教育フォーラムに参加して				
秋田県立秋田南高等学校	山本 長幸 教諭			144
講評 5：第 20 回東北大学高等教育フォーラム				
「グローバル人材の育成に向けて」に参加して				
山形県立山形南高等学校	高橋 徹 教諭			148
講評 6：第 20 回東北大学高等教育フォーラム「グローバル人材の育成に向けて				
—これからの高校教育・大学教育における課題—」に参加して				
福島県立福島高等学校	浜田 伸一 教諭			152
アンケート・参加者統計				
アンケート集計結果				157
アンケート自由記述				158
参加者統計				168

第 20 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨



情報通信技術の飛躍的発展と経済のボーダレス化が進み、近未来の社会を担う子どもたちを育成する教育もグローバル化に対応することが求められています。

2003（平成 15）年 3 月に文部科学省から『英語が使える日本人』育成のための行動計画』が発表されて以来、矢継ぎ早にさまざまな改革が打ち出されてきました。小学校では 2011（平成 23）年度から 5、6 年生で必修化された「外国語活動」が、次の学習指導要領では小学校 3 年生への前倒しと高学年での教科化が検討されています。高校の英語は「英語で行うことを基本とする」となりました。2014（平成 26）年度からは「スーパーグローバルハイスクール」の指定が始まります。大学入試でも 2006（平成 18）年度から大学入試センター試験にリスニングが導入され、英検や TOEFL などのような外部試験の導入も検討されています。

大学教育でも 2012（平成 24）年 6 月に文部科学省から発表された「大学改革実行プラン」に「グローバル化に対応した人材育成」が掲げられました。東北大学は 2012（平成 24）年度にスタートした日本学術振興会「グローバ

ル人材育成推進事業」に全学型の事業が採択され、東日本の拠点大学としてグローバル人材育成の推進役を担う立場です。

ともすると「グローバル人材の育成＝英語教育の改革」という観念に目が向きがちですが、それでよいのか再考の余地がありそうです。また、一口に「グローバル人材」と言っても雑多なイメージが混在しています。そこで、今回のフォーラムではユネスコ本部や在外公館など国際経験豊かな岩本渉氏および「東北大学グローバルリーダー育成プログラム（TGL プログラム）」の実施責任者である山口昌弘教授の基調講演とともに、地方の公立高校の立場からいち早く国際的な視野による人材育成に取り組んできたお二人の先生方および東北大学の全学教育で実践的英語教育を担っているダニエル・アイコースト講師からの現状報告をいただき、グローバル人材とは何か、高校、大学それぞれの立場で具体的に何ができるのかを議論していきたいと考えています。

本報告書は、フォーラムの録音記録に修正を加えた原稿、「招待参加者」としてフォーラムに参加し、フロアの立場からフォーラムに対してお寄せいただいた講評、および、アンケート・参加者統計から成る。招待参加者は、東北地方6県の高等学校進路指導研究会進学指導部会等を通じ、各県1名ずつ選ばれた方々である。

本報告書は、録音テープから起こした原稿に対し、フロアからの発言を除き、発言者が校正を加え、最終的に編集責任者が表現の修正を加えたものである。招待参加者の原稿については、体裁の統一に関わる部分を除いて、校正を行っていない。

編集過程で生じた不具合に関しては、全て編集者の責任である。

(編集担当:

東北大学 高度教養教育・学生支援推進機構

高等教育開発部門入試開発室

教授 石井光夫・准教授 倉元直樹)

開 会 換 拶

東北大学理事

東北大学高度教養教育・学生支援機構長

花輪 公雄

石井光夫教授（司会）：

それではお待たせいたしました。ただいまから、第20回東北大学高等教育フォーラム「グローバル人材の育成に向けて」を始めさせていただきますと思います。

私は本日司会を務めさせていただきます東北大学の石井と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

（拍手）



石井光夫教授（司会）：

では、最初に主催者を代表いたしまして、東北大学理事、高度教養教育・学生支援機構長の花輪公雄理事からごあいさつがございます。

花輪公雄理事：

皆さんこんにちは。お忙しい中、本当にたくさんの方々にお集まりいただきました。主催者

を代表して、感謝を申し上げます。

事前に登録していただいているのですが、180名の皆さんがここに参加されております。北は北海道から、南は沖縄県まで。本当にどうもありがとうございます。

第20回高等教育フォーラムですけれども、このフォーラムは平成16年度の秋から始まっております。今年で11年目です。20回というのは最初の年が1回だと先ほどお聞きしました。そういうことで、今回は20回目になります。春と秋でテーマが違いまして、春は高大接続という観点から、秋は高等教育に関するということなので、もっぱら大学の中ということなのですが、これはIDE大学協会という組織がありまして、そこの共催ということになっております。

さて、今ご紹介いただきましたが、私の所属を高度教養教育・学生支援機構と紹介していただきました。この機構は、この4月から発足いたしました。従来、東北大学には高等教育開発推進センター……これがもともとこのフォーラムを主催していた組織なんですけれども……、それと国際交流センター、国際教育院、教養教育院、それから高度イノベーション博士人財育成センター等々、東北大学の中にいくつかの教育を担う組織があったのですが、我々の言葉で「高度教養教育」と呼んでいます。初年次、2年次だけではなくて学部や、あるいは大学院までも教養教育というのは大事ではないか、それから、学生支援に関しても、より一層充実させたいということで、五つの組織を統合、再編しまして、さらに教員等の確保をいたしまして、発足したものであります。



もう一つご紹介したいのは、昨年の夏ですが、具体的には8月7日になりますけれども、「里見ビジョン」というものを本学は公表いたしました。総長の里見先生の名前を取って里見ビジョンという名前を付けているのですけれども、里見先生が総長の間にこういう大学を作りたいということで、七つの観点、「ビジョン 1」～「ビジョン 7」までの七つの観点で、「こういう大学を作ります」と宣言したものです。工程表も含めてビジョンを公表しました。その第1のもの、「ビジョン 1」が教育に関するものでありまして、そこでは端的に言いますと「グローバルリーダーを育成したい」ということをうたっています。そのグローバルリーダーを育成するために、非常に大きな柱として、この「高度教養教育・学生支援機構」が教養教育の部分で担います、ということをやっております。

その中で、グローバルリーダーというのはどんな人材像かな、ということをや、色々議論してきました。次に上げるような六つぐらいの力を持っている人ではないかなというふうに、我々自身は考えております。一つは「専門力」。これはもちろん大学で学問分野、この分野で私は勉強して力を付けたいということで入ってくるのですけれども、これが専門力。これは当然のことです。その他に、「鳥瞰力」。普通

は俯瞰する力、「俯瞰力」という言葉を使うと思いますけれども、私たちは議論の中で、俯瞰というのは高みから下を見ているような印象だよなと。そうじゃなくて、ダイナミックに視点を変えて見る力というのは大事じゃないかと。高みはいいのだけれども近づいてみる、と。そういう臨機応変に物事を捉えていくような力が必要なんではないかということで「鳥瞰力」という言葉を使っています。三つ目が「問題発見解決力」。四つ目が「異文化国際理解力」。五つ目が「コミュニケーションの力」。六つ目が「リーダーシップ力」であります。実は、言うは易しくて、これを具体的にどういう授業科目でどういうふうに学生に力を付けてもらうか。大変難しいところで試行錯誤が続くと思うのですけれども、一応私たちの目標としては、そういうところでやっております。

さて、グローバルリーダー、あるいはグローバル人材という言葉は、もう毎日のように新聞に活字が踊っているわけなのですけれども、どういう人材像かというのは、先ほど「私たちはこう考えた」というのを言いましたけれども、大変難しいところでもあります。この辺のところを今日は、基調講演の最初に岩本渉先生にお願いしております。岩本先生はユネスコ等々でご活躍された先生でありまして、具体的にグローバルリーダーの一人なのですが、その辺のご自分の経験も踏まえて、グローバルリーダーが持つべき力等をご紹介していただけるんじゃないかというふうに思います。

それから、もちろん文部科学省の方も、グローバル人材育成しようということで、色んな私たちの言葉で言うと競争的資金と言いますが、プロジェクトが走っております。その一つに、グローバル人材育成推進事業という事業が一昨年秋から始まっております。全学推進型、二つのタイプがあるんですけれども、全学でグローバル人材を育成する取り組みをする大学が、11大学が選ばれております。その11大学の中に、本学が入っているのですけれども、

この中身ですね。具体的にどういうプログラムで走らせているのかを、本学の副理事でありまして、グローバルラーニングセンター長で、この事業の責任者であります山口昌弘先生の方から、本学の取り組みをお話させていただきます。

今日の二つ目のパート、皆さんのお手元の議事次第ですと「3」になりますが、現状報告ということで、3人の先生からも話題提供をしていただきます。本学講師のダニエル・アイコースト先生からは、「英会話の先にあるもの——批判的思考とコミュニケーション能力の育成——」ということで、具体的に実践されているその取り組みの中身が話題提供されるというふうにお伺いしております。さらに、公立高校ですでに国際的な人材を育成しようということで、取り組みが色々行われていると思いますが、今日は北海道旭川北高等学校で実践されておられます松井徹朗先生に、「高大、真の接続の観点から」と題して。もう1件、沖縄県立辺土名高等学校の東盛敬校長先生からは、「グローバル化と高校教育」ということで、高校における実践の紹介をしていただくことになっております。

最後が1時間半ばかり時間を取っておりますが、討議ということで、様々な話題提供をなされますけれども、それを土台にして「維新の高大接続—グローバル人材育成の観点からの真の高大接続はどうあるべきか—」等々に議論していただけたらというふうに思います。どうか今日の午後長丁場ですけれども、大いに議論を楽しんでいただきたいというふうに思います。お願いを申し上げます、私のあいさついたします。どうもありがとうございました。

(拍手)

石井光夫教授（司会）：

今、理事の方からもお話がございましたが、簡単に本日の進行についてご説明いたします。

お手元のプログラムにございますように、基調講演お二方、現状報告3人の先生にお願いしてございます。基調講演はそれぞれ40分ずつ、現状報告は20分ずつということをお願いしてございます。そのお話が終わった後、ちょっと長めの休憩を取らせていただいて、その後、ふたたび先生方に登壇いただいて、フロアの皆様方と討議の時間を持たせていただくことにしております。終了時間は5時30分を目安に考えております。長丁場ですが、どうぞよろしく願いいたします。

お手元の封筒に、質問票が入っていると思います。この休憩の時間に、討議の際にお尋ねしたいこと、ご質問、ご意見ございましたら、ご記入いただいてフロアの係りの方にお渡しいただければというふうに思います。

どうぞよろしく願いいたします。

第 1 部 基調講演

基調講演者紹介

岩本 渉（いわもと わたる）氏

昭和 29 年 8 月 神奈川県生まれ

〔経歴〕

昭和 52 年文部省入省

昭和 54 年～56 年 人事院長期在外研究員としてフランスで研修
(パリ第 2 大学で行政学 DEA 取得)

平成 2 年～5 年 在フランス日本国大使館一等書記官

その後、文部省学術国際局学術課長等を歴任した後、ユネスコに採用される。

平成 13 年～18 年 ユネスコ教育局中等・職業技術教育部長

平成 18 年～21 年 ユネスコ人文社会科学局社会科学・政策研究部長

帰国後、平成 21 年から 24 年 東北大学特任教授 (WPI 担当)

平成 24 年～26 年 文部科学省国際統括官付国際交渉分析官

平成 26 年 3 月退官。現在、文部科学省参与を務める。

〔現在の主な活動〕

持続可能な開発のための教育 (ESD) の 10 年に関するユネスコ世界会議 (本年 11 月, 日本で開催) の準備のため東奔西走。

山口昌弘（やまぐち まさひろ）氏

1963 年山形県生まれ

〔教員歴〕

東北大学教養部助手(1 年間)

東北大学理学部物理学科助手(3 年間)

東北大学大学院理学研究科物理学専攻准教授(7 年間)

東北大学大学院理学研究科物理学専攻教授(11 年間)

〔主な研究歴〕

専門は物理学（素粒子理論・初期宇宙の研究）

〔主な著書、研究業績〕

〔学会活動等〕

〔その他の特記事項〕

2012 年～ 東北大学総長特別補佐(教育国際交流担当)
グローバル人材育成推進事業実施責任者

2014 年～ 東北大学副理事(国際交流担当)
東北大学高度教養教育・学生支援機構グローバルラーニングセンター長

基調講演 1：グローバル社会に求められるもの

文部科学省参与（元ユネスコ本部中等・職業技術教育部長，
在仏日本大使館一等書記官，東北大学特任教授 WPI 担当）

岩本 渉 氏

【講師紹介】

石井光夫教授（司会）：

では，早速，基調講演に入らせていただきます。最初のご講演は，文部科学省の岩本渉先生にお願いしてございます。

岩本先生のご経歴はお手元のプログラムの中に入っていますが，文部科学省に入省後，フランスの方に留学されております。また，フランスの日本大使館，それから本省課長を経て，それからユネスコに，普通は出向という形を取るのですが，岩本先生の場合ユネスコから新たに採用されるというような形で，ユネスコに長年お勤めになっております。その後，本学の特任教授もお勤めになるということで，本学とのご縁もございます。現在，やはり本省でユネスコを中心とした国際的なお仕事をなさっております。

このような豊富な国際経験を元に，本日は「グローバル社会に求められるもの」という題でお話をいただきます。では，先生お願いいたします。

（拍手）

岩本渉氏：

皆さんこんにちは。ただいま石井先生からご懇篤なご紹介をいただき，誠にありがとうございます。岩本と申します。基調講演ということですが，本当に貴重な講演になるかどうかは，皆さん次第ということでやりたいと思いますので，よろしくお願いいたします。ただいまご紹介にあずかりまして，また，お手元の方

に私の略歴も配られております。



ユネスコは，フランスのパリのエッフェル塔からシャンドマルス，エコールミリテール，それをちょっと行ったところに本部がございまして。ここで8年働きましたので，留学時代，大使館時代を含め通算13年フランスにいたことになります。37年の社会人生活の3分の1以上はフランスにいたということで，経歴だけ見ると，何ともイヤミな男であろうというふうに思われるわけですが，根っこは日本人でございまして，そういう観点から今日はお話をさせていただきます。

私自身なぜこういうキャリアを選んだかということを今にして思いますと，私の父は1910年生まれで，戦争に負けた後に，アメリカ軍の横須賀の基地で勤めていたそうです。小さい頃，私が父のアルバムを見ていましたら，古い我が家の中で，両親とアメリカ人の兵隊が仲良くご飯を食べているという写真が出てきました。「お父さん，これなあに」と聞くと，

「昔米軍のベースに勤めた時兵隊さんがうちに遊びに来て、みんなで食事をしたんだよ」と。国の違う人とこういう付き合い方もあるのかというふうなことを思いました。

それからもう一つ個人的なことで申し訳ありませんが、私は中学、高校、実はイエズス会の学校でございました。私は仏教徒なのですが、そこでは校長はドイツ人だったり、英語を教えるのがアイルランド人であったり、ということからして、あまり外人というものがそんなに **strange** なものではなかったということもあります。あとは生まれも横浜というようなこともありましたので、そういう意味では、そんなに国際化ということについて、裱を着なくてはいけないというようなことはございませんでした。

しかしながら、後ほど役所に入ってから 1970 年代、あるいはもっと前の 60 年代ぐらいから、日本の教育は国際化の波にさらされていると言っておりました。今みたいに、インターネットでどこの大学の単位は取れるなどという時代ではもちろんなかったわけですが、
「留学生政策をどうするんだ」という議論はもうずっと文部省の課題であったのであります。

私は、実は、大使館から帰ってきた後、配属になったのは、学術関係の仕事が多くて、例えば、素粒子物理の世界で、「B ファクトリー」という加速器があります。これは、筑波の、高エネ研のトリスタンという大型の加速器を改造したものでございます。この加速器で電子と陽電子を違うスピードで飛ばし衝突したときに起こる B 中間子の崩壊という現象を調べる訳です。誰も崩壊するところを目で見たことがないので何とも分からないのですが、これは確かにそういうことが起こるのだそうで、それを CP ヴァイオレーションということで説明するわけです。そういった加速器を筑波で一生懸命作りました。別に私が作ったわけではなくて、私が予算を獲得して作ったわけですが、そういうことをやっていましたら、面白いこと

にパリにある OECD の方で、「B ファクトリー」というのは日本に今作っているようだが、アメリカでも作っている」と。「世界にこういう高価なものは二つもいらん」というお話がありました。確かに日本で作っている時に 390 億円ぐらいかかっていました。せっかく当時の大蔵省からこの予算を 5 年間で使っていよいよと言われたのに、何でこうやって日本が作るのをまるで足を引っ張るようなことを言うのだろうと思ったら、他の国の研究者が、やはり自分のところが一番乗りになりたいというようなことがあって、B ファクトリーは二つもいらんというようなことを OECD、という経済産業振興のための国際機関にどうも話を持ちかけたいのです。私は、たまたまパリへ出張している時にその OECD の事務局の方と話しまして、・・・ここから先は物理学者の受け売りですが、トップクォークを見つけるような加速器でしたら世界にいくつも作ると言うのは無駄なのだけれども、B ファクトリーのように 0.0000... といった 10 のマイナス 10 何乗ぐらいの秒差で粒子が崩壊していくところを正確に見るようにするには二つの装置で検証することが必要なのだというような論を展開しまして、それで先方も理解してくれて何とか息をついたということなのです。

何を言いたいかというと、もうその頃から、「日本でこれを作る」ということが、筑波の中では、アメリカの研究者、ヨーロッパの研究者、日本の研究者がみんなで協力してやっているのですけれども、他方では、アメリカと日本の先陣争いみたいなものがありました。そういったのも、グローバル化ということの一つの面かなと思いました。

それから、グローバル化ということで言いますと、私自身、先ほどご紹介いただきましたようにユネスコに 8 年いました。当時、事務局長は松浦さんという、日本の外交官でフランス大使までやられた方です。この人は前任のマイヨールさんを破って当選された時の公約の一つ

が、「人事のえこひいきはしない」ということでした。つまり、松浦さんは「日本人だからといってえこひいきしない」と言って当選したわけです。そこに入るというのでこれは大変だったわけですが、200倍ぐらいの倍率のところを何とか面接まで行って、なったわけですが、それでも。

そのユネスコというところに行ってみてびっくりしたのは、職場はパリにあるわけですが、195ヶ国から構成される国際機関でございます。その事務職員も195ヶ国から全部ではないですが、大体120、130ヶ国からぐらいの人たちから構成されています。ワーキングランゲージは英語とフランス語であります。私の教育セクターにいた時の部下が25人ぐらい。これが国籍にして大体17、8ぐらいの国籍の人がいました。それから次に人文社会科学局に移った時は、部下が35、6人いて、国籍がやっぱり20ぐらいになりまして、時々、定期的に部のミーティングみたいなのをやるんですけれども、一生懸命ニュージーランドの国籍の部下に分かされたかと思ったら、今度はフランス語圏の国の部下が「今、何言っているのか良く分からない。こっちにちゃんとフランス語で話してくれ」と言われるという具合でした。ミーティングも英語とフランス語両方でしゃべらないと伝わらない。ところが、「さっきのお前のフランス語のニュアンスは英語と違うじゃないか」というようなことを言われて、「だったら、はじめから、お前は英語で分かっていたんじゃないか」ということもあったのですけれども、まあそういう世界で8年間おりました。

今日、私のタイトルは、文部科学省参与となっております。実は、3月末で一応、文部科学省の常勤の職は退きましたので、今は非常勤の参与ということになっておりますけれども、ただ、私の限られた経験からして、「これが文科省版のグローバル人材だよ」という上から目線で話すつもりは毛頭ございませんし、もし私の言うことから「文科省の進めているグローバル

人材がこれだ」ということを聞こうというふうにお考えでしたら、それはちょっとあきらめていただいた方がいいと思います。むしろ、これから皆さん自身が考えていく、今日、ずっと考えていく中で材料と言いますか、そういうものになればいいかなというわけであります。

大きく3つに分けてお話しします。「グローバル人材とは」、それからちょっと聞きなれない言葉ですが「ESDとは」。それから「学習：秘められた宝」ということでお話いたします。

最初に、「グローバル人材とは」ということですが、まずストレートにお答えは申しません。

言うまでもなく、21世紀になってから、あるいはその前から、経済のグローバル化というようなことが強く言われました。やはり、経済産業省は、やはり貿易等を通じて日本の産業をどう振興するかということに非常に敏感な役所でございます。そこで、「社会人基礎力に関する研究会」というのを設けまして、そこが社会人基礎力というもので、こういうことを言っております。

ここで注意しなくてはいけないのは、社会人基礎力が全てというわけではなくて、その前に、ひとつに基礎学力……これは読み書きだとかITスキル……それから専門知識、これは仕事に必要な資格であるとかスキル。そういったものが必要としたうえで、その他に社会人基礎力というものがこれからのIT化の進展等に対応していくために必要だと指摘しています。一つ目に前に踏み出す力。アクションだと言っているわけです。主体性、働きかけ力、実行力、それから、シンキング……考え抜く力……、課題を発見する力、計画する力、創造力。それから、チームワーク。チームで働くとして、発信力であるとか、傾聴力。それから柔軟性、状況把握力、規律性というようなことを言っております。

もう一つ、政府関係で、これは文部科学省の中教審が、「学士課程教育の構築に向けて」という答申で言っていることでございます。皆さんご案内の通り、日本の高等教育機関への進学

率というのは 50%を超えまして、まさに大学のユニバーサルアクセス化というのが進んでいる中で、学士課程の教育、換言すれば、日本の学士というのはどういう能力を保証されているのですということを言おうとして、それを学士力というふうに言っています。もちろん、専攻分野によって、その知識とかは変わってくるわけですが、まず、一つに、知識理解として、他文化・異文化に関する知識の理解というようなことであります。それから、汎用的技能。それから態度、志向性。汎用的技能として、コミュニケーションスキルですとか、こういったもの。それから態度、志向性として自己管理能力、チームワーク、リーダーシップ、倫理観。それから、市民としての社会的責任。生涯学習力、というようなことを言っているわけであります。かなり、もうこの二つを見ただけでも、共通するものが色々あると、当たり前の話ですけども、まず専門分野の能力は捨象して考えていますから、専門分野としての、例えば、物理で何の法則を知っているとか、数学でこの公式を応用できるという議論は、今、しません。それ以外に、いったいどういう力がないと、これから学士として名乗れないのか、あるいは、グローバル社会で生きていくために必要なのか、ということを言っているわけですが、コミュニケーションスキルであるとか、情報発信力であるとか、そういったものはかなり共通のものがあるのではないかなと思うわけです。

それから、一昨年ですが、グローバル人材育成推進会議というのが、文科省、厚労省、外務省、経産省、内閣府等によって作られました。そこで、グローバル化というもあらゆる分野で、人、物、金、情報が国境を越えて高速移動し、金融や物流の市場のみならず、人口、環境、エネルギー、公衆衛生等の諸課題への対応にいたるまで、全地球的規模で捉えることが不可欠になった時代状況と言っているわけであります。

ここでちょっと括弧書きで言いたいことは、グローバル化ということは、決してコスモポリ

タンと言いますか、地球市民社会というような国境が全くなくなった社会を言っているわけではないということです。これは、社会学者のサスキア・サッセンの本を読んでいますと、よく分かるのですが、グローバリゼーション、グローバリゼーションと言いながらも、決して、それは主権国家というものを否定しているわけではない。だから、TPP もそうですし、だからこそ、色々なフリクションが起こってくるわけです。今、今度、我々が抱えているのはそういった中でのグローバリゼーション。グローバリゼーションのためには英語ができなくてはいけない。英語ができた方がいい。英語ができるに越したことはない、というような論理がある。

しかし、その一方で、日本人としてのアイデンティティというものはどうなのだろうか。これは、決して伝統主義的な意味だけではなくて、外国に行って、何で武満徹の音楽ってあんなに美しいのだろうかと聞かれることがあるわけですね。私は、日本人というのは外の文化を吸収し加工する能力があるからああいう音楽に結実しているとか、わけの分からないことを言ってしまうのでありますが……そういうごまかし方も一つのテクニックなのですが……そういった言語以外に、自分の文化、自分の拠って立つところ、そういったものを大事にしていく。あるいは、それを外に発表できる力というものが必要になってくるのではないかなというふうに思うわけであります。

このグローバル人材の育成推進会議の中間まとめによりますと、グローバル人材の概念として、ここで「要素 1」として、語学力、コミュニケーション能力。「要素 2」としては主体性、責任性、チャレンジ精神、協調性等々を言っております。それから、先ほど申しました異文化に対する理解と、日本人としてのアイデンティティというわけであります。

先ほどは日本人としてのアイデンティティということで申しましたけれども、一番我々こ

ここで考えなくてはいけないのはグローバル社会というのは、我々が企業戦士を育てて、日本社会が一人勝ちする世界では決してない、ということであります。グローバル社会と言うからには、そのグローバル社会の中に、日本人としてそこにどうやって積極的に参画していくか。あるいは実際に参画しなくても、グローバル化の中で、たとえ、農山漁村に住んでいても、そこでグローバル化の中で自分たちの産業、自分たちの地域をどうやって守っていくのか、売り出していくのかということが、私は本来のグローバル社会に生きる人間ではないかと思うわけでありますけれども、そういった中では日本人としてのアイデンティティ。あるいはもっと言い換えれば宮城県民としてのアイデンティティ、横浜市民としてのアイデンティティという自分の地域というものに対してのアイデンティティも必要でしょうし、それと同時に、自分が付き合っている相手も同じように、彼らのアイデンティティがあるということを忘れてはいけないと思うのです。

例えば、私、東日本大震災の時に東北大学におりましたけれども、あの時、皆さんと同じようにお店にボンベを買いに行って2時間ぐらい並んだ仲間のひとりですけれども、あの頃、東北の多くの学校に外国の学校の子供たちから激励の手紙ですとか、絵が届きました。

「How are you」とか、「お元気ですか」とか、書いてくれました。自分がお父さんとお母さんと兄弟と、すごく苦しんでいる時に、聞いたこともないような名前の国から絵と一緒にメッセージが来て、頑張っってねというような小見が込められている、ということを知った時の子どもの気持ちというものを考えてみましょう。やはりこの世の中とは自分だけが生きているのではない。自分と家族だけが生きているのではない。私のことを、まるで地球家族の一員のようにして考えてくれている人がいるのだな。そういうようなことの分かる子供が欲しいと僕は思います。そこら辺の、敏感な心が重要と思

うのです。それは逆に他の国で困っている人があれば、大丈夫かしら、みんな私たちと同じような年なのに、どうかしらと思う心。国際機関でしょっちゅう会議のたびに大喧嘩しているような相手でも、例えば、その相手の親が亡くなったりすると、みんなでお葬式に行ったりするというようなことがありますけれども、そういったような気持ちの面。こういうエモーショナルな面をどうやって行くかというのがひとつ課題ではないかと思うわけであります。

ここでちょっとお話を変えます。今、ずっと私なりにグローバル人材とか、グローバル社会に求められるものみたいなことを言ってきました。これは、全部色々なものがグローバル化しているから、じゃあ、「どういう能力だ」というふうな、今、迫り方をしたのですが、ちょっと、今度、アプローチの仕方を変えます。**ESD**という言葉がございます。**ESD**というのは、**google** か何かでお引きになりますと、内視鏡の粘膜下層剥離術って出てきます。これは大腸がんや食道がんの時にやる手術の一種で、非常に日本で成功例の高い**ESD**というのがあるのですが、それとは全く違いまして、**Education for Sustainable Development** ということであります。「持続可能な開発のための教育」と言っております。

こういった持続可能な開発のための教育…**Education for Sustainable Development**…ということで、これは2002年のヨハネスブルグサミットで当時の小泉総理が提唱したものでして、**Sustainable Development**, 持続可能な開発のためには何が必要か、「まず人材です」と言ったのが小泉総理でありまして、国連としてこの10年間を**Education for Sustainable Development**のための10年というふうにすべきである、というふうに提唱いたしました。それが、国連総会でも可決されました、こういう中、今年がまさに10年の最終年なわけですが、なっております。

そんなの初めて聞いたとおっしゃる方もあ

るかもしれませんが、実は、教育振興基本計画なんかにもちゃんと書かれておりますし、学習指導要領にも持続可能性というようなことは方々に散りばめられているところであります。基本的な考え方として、持続可能な社会作りの担い手となるよう個々人を育成する能力である、と。ここでも、知識、価値観、行動。こういったものを、スポットライトを当てていきます。人格の発達や自立心、判断力、責任感等の人間性を育むことも重要です。例えば、環境教育というものがありますけれども、環境教育で「広瀬川の水質がこれだけ良くなりました」とか「悪くなりました」とかっていうだけではなくて、その広瀬川の水質というものが周りの地域の、例えば産業の立地であるとか、生活排水の状況であるとか、そういったものと全部絡めて考える。そうやって、自分たちの住んでいるこの仙台なら仙台の地域というものが、どういうふうに発展していくべきなのか、ということを考えさせるのが ESD と言っているものでありまして、今、現在、私どもの方で色々推進しているところでもあります。

ここで、ESD にて育みたい力として、私ども考えているのは、こういった持続可能な開発に関する価値観、人間の尊重ですとか多様性の尊重、それから、体系的な思考力、それから、代替案の思考力ですとか、データや情報の分析能力、コミュニケーション能力、リーダーシップの向上というのがあります。また、国立教育政策研究所では、ESD の視点に立った学習指導の目標ということで、いくつか例示しているところでもあります。次に、実は同じようなことは OECD……先ほどもお話しましたが、……OECD にとっては今後の経済開発のために人間の能力開発というのが非常に重要だ。そういった中でどういうふうにアプローチしていくか、という中で、「キーコンピテンシー」というようなことを言っております。ここにありますように、言語、シンボル、テキストを活用する能力として、社会文化的、技術的ツールを総

合的に活用する能力ですとか、多様な社会グループにおける人間関係形成能力であるとか、あとは自立的に行動する能力。こういうようなことを言っているわけでありまして。ですから、ESD で培おうとしている能力と、OECD で狙っているキーコンピテンシーというのは必ずしも遠いものではない。かなり重複するところがあるというわけでありまして。

それからさっきも国立教育政策研究所の研究にも出てきた批判的に考える力なんていうのが出てきましたけれども、批判的思考力ということでは、「IDE」の最新号(560号)に楠見先生という方が書かれているのですが、楠見先生の定義によれば、批判的思考力として、収集した情報を明確化し、隠れた前提、推論の土台となる根拠や証拠を吟味し、論理的、分離的推論によって適切な結論を導き、最終的に行動の決定や問題解決を行い、発表するということなわけだそうであります。とかく批判というニュアンスからして、日本ではあまりよく取られないのですが、批判と言うのは別に全然悪い意味ではございませんし、こういった批判的な思考力といったようなことも、今後ますます重要になってくるのかと思うわけでありまして。先ほど来申しております ESD, Education for Sustainable Development というのが、結局さっき申しました川の水質ということで、理科の先生だけがそれに取り組めばいいかというと、そういうわけではありませんで、それは社会の先生も、あるいは国語の先生も、そういったものに力を合わせてやるということが大事です。

文部科学省では、例えば、ユネスコスクールというものを通じまして、こういったものを推進しています。ユネスコスクールと言うのは、文部科学省を通じてユネスコに申請しますと、ユネスコがその理念に合致する学校ということで認めるわけですが、今、現在日本には 705 校あります。この ESD を通じて育てたい資質や能力につきまして、特に右側の方ですね。こ

の総合的な学習の時間を中心とした教科横断的な指導計画を立てる等、指導方法の工夫、改善に努めたと、85%ぐらいが、やはりこういう教科横断的な取り組みをしている、というようなことがございます。こちらは、問題を見出す解決を図っていく学習の過程を充実した教育課程を編成するというグラフです。単なる知識の詰め込みではなくて、子供たちにグループで考えさせるところは多いようであります。

次にお示しするのは、これは今の ESD から少し外れます。今度は総合的な学習の時間と学力の相関についてでございます。国立教育政策研究所の調査によりますと、総合的な学習の時間で、自分で課題を立て、色々調べたことを発表する等の学習活動に取り組んでいますか、という回答。、学力テストの A 問題と B 問題の正答率の差を比較したわけだそうであります。これは国立教育研究所の田村先生からお借りしたスライドですけども、総合的な学習の時間にしっかり取り組んでいるというところがと取り組んでないというところは 14 ポイントの差だと。これが、A 問題。応用力を見る B 問題ですと、こういう 18 ポイントの差、17 ポイントの差が出ます) というようなことが出ています。ですから、おいおい、総合的な学習の時間なんかやっていて、そうすると各教科の方が割りを食ってしまうのではないかと、必ずしもそうではない、ということが分かるわけがあります。飛ばします。こういった形で、自分で課題を設定して、それを整理分析して、まとめて表現し、またそれをこうやってどんどん新しい課題に取り組んでいく。さらにそのまとめた中で新しい課題が出てきたら、そういうふうな情報を収集してというふうな探求のプロセスが、これで生まれるのではないかと、というのが、国立教育政策研究所の田村先生のお話であります。

最後の大きな柱になります、三つ目です。これは、ユネスコの 21 世紀教育国際委員会というのは 1996 年に出したレポートがござ

います。「学習：秘められた宝」、英語の題名を“Learning: The Treasure within”) というタイトルであります。ユネスコと言うのは生涯教育、生涯学習ライフロングラーニングの考え方を 1960 年代半ばに生んだわけですけども、それについて 2 回ほどさらにその時代状況に応じて、レポートが出ております。この前に出たのがフォールレポートというのがありまして、それは Learn to be というレポートが出ました。それから 1996 年にはこういった形でレポートが出ているわけですけども、その中で学習の 4 本柱というのをあげております。ひとつは「知ることを学ぶ」、Learn to know。知識というか経験、そういったものがどんどん時代遅れなものになっていく今のインターネットでもそうですけども、どんどん知るための手段も学んでいかななくてはいけない。そういった意味で知ることを学ぶというのが大事だということをすでに言っているわけです。

それから 2 番目が、「なすことを学ぶ」、Learn to do、頭でっかちばかりではいけないので、どうやって生きていくかを学ぶ、Life skill というような意味でも、なすことを学ぶということが大事だということを言っているわけであります。

それから、3 番目に「共に生きることを学ぶ」と言っております。Learn to live together と言っておりますけれども、その先ほど来申しておりますように、宗教、言語、あるいは文化、こういったものが全然違う人たちと、どうやって共生していくのかということです。もちろん、そんなに言うほど簡単なことではありませんし、寛容とかそういったことは重要だと言っておりますけれども、具体の局面では、寛容であるということと、自分のアイデンティティに対する忠実さというもののバランスというのをどうやってとっていったらいいのかというのは、悩む局面が必ず出てくるわけですけども、そこら辺をさらに乗り越えて、かつ共に生きることを学ぶということはどういうことかとい

うことが、重要になってくるわけであります。

それと、これは以前のレポートから言われている人間として「生きることを学ぶ」と。自分というものをしっかり律すると言いますか、セルフディシプリンというものを考えた、人間として生きることを学ぶということを言っております。この4本柱の中で特に、共に生きることを学ぶという、従来ですと、国際理解教育というようなことで、こういうことが多く取り上げられてきましたし、それはそれで今後も大きなテーマでしょうけれども、これからグローバル社会で生きて行くという中で、先ほど来申しているように、「英語ができて、日本のことが紹介できて、それで済む」というのでは、ちょっと大変なのかなと思うわけであります。その意味では、こういった共に生きることを学習の中で、考えていくのが重要なと思います。

スライドは大体以上なのですが、これからちょっと結論めいたことというか、今まで全然論理的に話していませんので、結論めいたことというわけでないですが、ちょっとまとめに移りたいと思います。

一つはその日本の文化というものをどう考えるか、ということであります。先ほど来申しましたように、日本人というのは大陸と不即不離の関係にありまして、その大陸から攻めてこられそうになると台風があったりして、割と離れているんですね。その割には、仏教、漢字、あるいは陶芸なんていうのもそうですけれども、それを拝借してくるのには非常にいい距離にあるわけですね。そういうのをうまく活用してやってきた。そういった中で独自のいわゆる日本的なわびとかさびとかいうものを作ってきた。けれども、こういったわびとかさびとかできるのも、では、日本だけでできたかという、私はそうは思わない。例えば、茶道なんていうのがございます。これは、ここから先は推理小説だと思って聞いていただければいいのですが、千利休というのは秀吉に殺されるわけですが、あれは「千利休がキリシタンだ

から」という説もあるわけであります。茶道の様式と言うのは、あれは全てカトリックのミサの様式をそのまま取り入れているという説もあります。ことほどさように我々が、これは私たち固有の文化だ、日本人だからこれができたのだと思っているものほど結構怪しくて、元をたどればどこかから来ているものです。

ただ日本人の場合、これは何も証拠がありませんけれども、私の感じからするとそういうのをうまく取り入れて、何か作っちゃうというのはいまいかなというのは、あるかなと思います。そういえば、アンパンというのがあります。あれは日本のあんこと、西洋から来たパンと一緒にしたあんにうまいものを作ってしまう。すき焼きというのがあります。江戸時代は牛肉を食べることは仏教の教えで禁じられていました。だけど、明治維新以降、それを農機具のすきの上で焼いて、それをすき焼きというふうにしていった。アンパン、すき焼きということで、非常に日本の文化はそういった移入して加工して、洗練化するというのは非常にすばらしいものがあるなというふうに思います。もっとさかのぼれば、神仏習合なんていうのもこれは中国の人や、あるいはインド人もびっくりするようなことばかりであります。

我々は非常にそういうことは自慢していいのですが、これからのグローバル社会の中で、では、相変わらずこれをやっているというのでいいのか。私が一番ショックだったのはユネスコの色々国際会議で、まさに事務局の席に座ってしまして、そうすると色々と、例えばラポルトゥールをやってくださいとか、このセッションの司会はどの国にお願いしますとかやるのですけれども、日本政府にお願いすると、いやあ、英語は苦手だから他の国の人にやってもらってというようなことが多くありました。さて、その国際会議の終盤に、いよいよ最終文書の起草委員会等を開きます。起草委員会のメンバーはそもそも自分から名乗りを上げた人や地理的バランスを見て決めた国から事務局か

ら指名したり、という事で決めるのですが、かつて、起草委員会には参加せず、そこで出来上がった最終文書案を事務局から入手し本国に送付するという、要領のいい（？）日本の代表団に遭遇したことがあります。さすがに、今は、そんなことはなくなっただしょうけれども。日本という国として発言して、グローバル社会に貢献しようと思うのであれば、他の国と同様に参加していただきたい。あるいは、もっと広くいえば、他の国と一緒にルールを作っていくぐらいの気構えを持っていただきたいのです。外国がこんなルールを作った、さあこれをどうしよう、というのが今まで多かったと思うのですが、これから国際社会というのはこういうふうに向いていかなくてはいけない、そのためにはこういったルールが必要なんだ、というのを自分から持ち出すぐらいの気構えや発想が必要なのではないかなというふうに思うわけであります。

ですから、繰り返しになりますけれども、グローバル社会。一番初めにお見せしたのは経済産業省のレポートでした。経済産業省でございますから、当然日本の産業構造。あるいは我々の生活、経済を守っていくためにはどうしたらいいか、ということで、ああいう提言ができてくるし、それは当然のことだと思います。しかもこういったレポートが言っていることは、必ずしも日本人それぞれが世界でバリバリ働いて、稼ぎまくる企業戦士を養成することになるのではないということだと思っわけです。

もっと言えば、先ほど来グローバル化と言っていましたけれども、それがローカルに対する影響。グローバルな地球温暖化ですとか、農産物の自由化ですとか、そういったものがローカルに対してどういう影響を及ぼすか。そういった時に、本当にローカルのことを自分たちがどうやっていこうかということを考えなくてはいけない。そういったことが、実はグローバル化社会っていうのは、ここから先は私の結論ですけれども、グローバル人材を育成す

ることが目的というよりも、こういった色々な能力を持った人々が育って、グローバル社会に対応していくことが重要だということが、私どもなりの結論でございます。どうもご清聴ありがとうございました。

(拍手)

石井光夫教授（司会）：

ありがとうございました。自分のご経験、あるいは身近な例を引き合いに出され、色んな角度からグローバル社会、あるいはグローバル人材ということをお話いただいたかと思います。

予定のお時間お話いただきましたので、質問、ご意見はまた後ほどの討議の時間にさせていただきますと思います。

グローバル社会に求められるもの

第20回東北大学高等教育フォーラム
平成26年5月16日

●

文部科学省参与 岩本 渉



1. グローバル人材とは？

2. ESDとは？

3. 「学習：秘められた宝」



1. グローバル人材とは？

(1)経済産業省
「社会人基礎力に関する研究会－中間とりまとめ－」
(平成18年1月20日)

多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力として、下記を提言。

- ・前に踏み出す力：主体性、働きかけ力、実行力
- ・考え抜く力：課題発見力、計画力、創造力
- ・チームで働く力：発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性等

1  文部科学省

(2)文部科学省中央教育審議会
「学士課程教育の構築に向けて(答申)」
(平成20年12月24日)

学士課程で育成する21世紀型市民の内容に関する参考指針として、以下を各専攻分野を通じて培う学士力と挙げている。

・知識・理解:他文化・異文化に関する知識の理解、
人類の文化、社会と自然に関する知識の理解

・汎用的技能:コミュニケーション・スキル、数量的スキル、
情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力

・態度・志向性:自己管理力、チームワーク・リーダーシップ、
倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力

・総合的な学習経験と創造的思考力

2

(3)「グローバル人材育成推進会議審議まとめ」
(平成24年6月)

「グローバル化:政治・経済・社会等あらゆる分野で「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」が国境を越えて高速移動し、金融や物流の市場のみならず人口・環境・エネルギー・公衆衛生等の諸課題への対応に至るまで、全地球的規模で捉えることが不可欠になった時代状況。」

グローバル人材の概念

・要素Ⅰ:語学力・コミュニケーション能力

・要素Ⅱ:主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性
・柔軟性、責任感・使命感

・要素Ⅲ:異文化に対する理解と日本人としての
アイデンティティー

3

2. ESDとは？

(1) ESDに関する我が国の取組

➢ 2005年 内閣官房に関係省庁連絡会を設置

➢ 2006年 DESD国内実施計画を策定

➢ 2011年 DESD国内実施計画を改定

基本的考え方(国内実施計画)

ESDは、持続可能な社会づくりの担い手となるよう個人を育成する教育。

特に、

・人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと。

・個々人が他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性の中で生きており、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと。

ESDの基本的考え方
(知識、価値観、行動等)

環境教育
国際理解教育
エネルギー教育
防災教育
生物多様性
気候変動
環境、経済、社会の統合的な発展
世界温度や地域の文化財等に関する教育
その他関連する教育

4

ESDにて育みたい力

○持続可能な開発に関する価値観（人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等）

○体系的な思考力（問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方）

○代替案の思考力（批判力）

○データや情報の分析能力

○コミュニケーション能力

○リーダーシップの向上

【ESDの視点に立った学習指導の目標】

教科等の学習活動を進める中で、
「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。

【持続可能な社会づくりの構成概念】(例)

I 多様性

II 相互性

III 有限性

IV 公平性

V 連携性

VI 責任性 など

【ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度】(例)

① 批判的に考える力

② 未来像を予測して計画を立てる力

③ 多面的、総合的に考える力

④ コミュニケーションを行う力

⑤ 他者と協力する態度

⑥ つながりを尊重する態度

⑦ 進んで参加する態度 など

出典：「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究 最終報告書」（平成24年 国立教育政策研究所）

5

文部科学省

キー・コンピテンシー(OECD、2005)※

社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力

○言語、シンボル、テキストを活用する能力

○知識や情報を活用する能力

○テクノロジーを活用する能力

多様な社会グループにおける人間関係形成能力

○円滑に人間関係を構築する能力

○協調する能力

○利害の対立を調し、解決する能力

自律的に行動する能力

○大局的に行動する能力

○人生設計や個人の計画を作り実行する能力

○自らの権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力

※ OECDがグローバルに適用する資質・能力として提唱。単なる知識や技能だけでなく、特定の文脈の中で様々な要求に対応することができる。

◎批判的思考力

(1) 収集した情報を明確化し、

(2) 隠れた前提、推論の土台となる根拠や証拠を吟味し、

(3) 論理的・分析的推論によって適切な結論を導き、

(4) 最終的に、行動決定や問題解決を行い、発言する、文章化する。

補見孝：「批判的思考力」と大学教育
「IDE：現代の高等教育」
No.560 (2014-5)

6

文部科学省

(2) ユネスコスクールアンケート

Q. ESDを通じて育てたい資質や能力を明確にし、自分で、あるいは協働して、問題を見出し解決を図っていく学習の過程を重視した教育課程を構成するよう努めましたか。

しなかった、20% (88)

した、80% (350)

Q. 総合的な学習の時間を中心とした教科横断的な指導計画を立てるなど、指導内容を適切に定め、さらに指導方法の工夫改善に努めましたか。

しなかった、15% (63)

した、85% (381)

出典：平成24年度ユネスコスクールアンケート

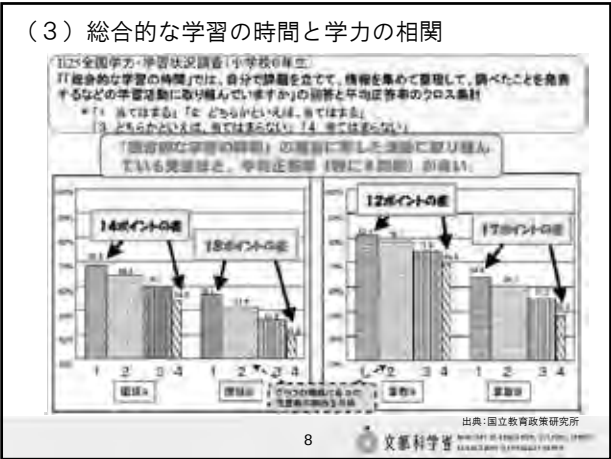
7

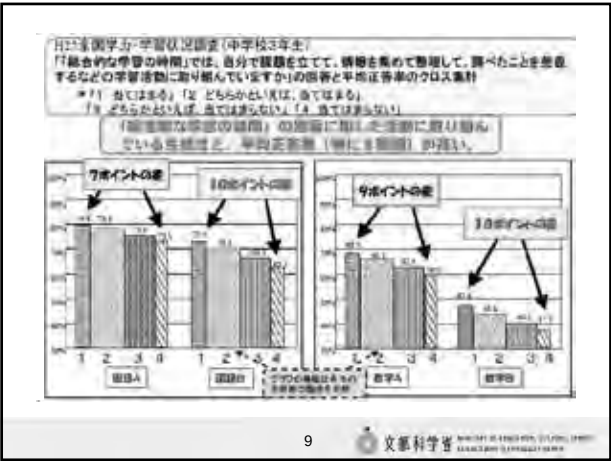
文部科学省

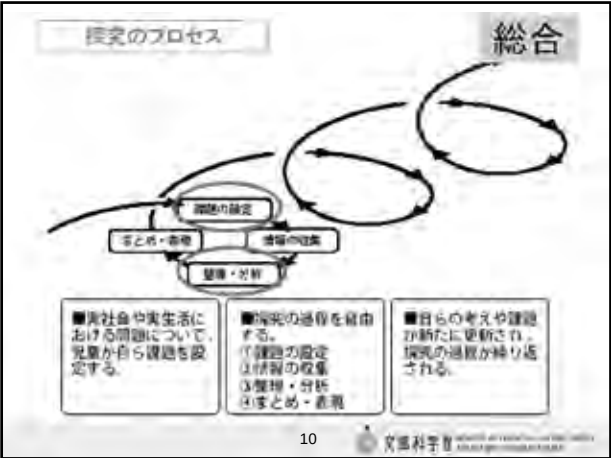
基調講演1 配付資料

20

(3) 総合的な学習の時間と学力の相関







3.「学習：秘められた宝」

(ユネスコ「21世紀教育国際委員会」,1996年)

学習の四本柱

- 1) 知ることを学ぶ
- 2) 為すことを学ぶ
- 3) 共に生きることを学ぶ
- 4) 人間として生きることを学ぶ

11



ご静聴ありがとうございます

iwamoto@mext.go.jp

日本ユネスコ国内委員会Webサイト
日本ユネスコ国内委員会Facebook
ESD Facebook

<http://www.mext.go.jp/unesco/>
<http://www.facebook.com/jpnatcom>
<https://www.facebook.com/esd.jpnatcom>



基調講演 2：東北大学におけるグローバルリーダー育成の取組

東北大学副理事 / グローバルラーニングセンター長
山口 昌弘 教授

【講師紹介】

石井光夫教授（司会）：

引き続きましてお二人目の基調講演をお願いしたいと思います。東北大学副理事の山口昌弘教授をお願いしたいと思います。山口先生、お手元にございますように理学部の教授でありますけれども、東北大学グローバルラーニングセンター長という職で、本学でも、今、目玉になっています、先ほど理事からもお話がございました、グローバルリーダー育成プログラムというのを推進している。あるいはその他の様々な国際交流プログラムを責任者としての立場で推進されている方でございます。

本日は、「東北大学におけるグローバルリーダー育成の取組」という題で、東北大学のそうしたプログラムの紹介、あるいは先生のお考えになるグローバル人材ということをお話いただきたいと思います。

では、山口先生、お願いします。

（拍手）

山口昌弘教授：

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました東北大学の山口です。石井先生からご紹介いただきましたように、私は理学部、実はその中でも物理、素粒子理論というのをやっておりまして、その意味ではただいまの岩本先生には、非常に奇遇だなと思っております。岩本先生が先ほど一番冒頭に B ファクトリー、KEK での B ファクトリーに携わられていたということなのですが、物理学というのが、100 年以上前に大体理論と実験に分かれて、理論と言うのは実験ができないやつがやるというような

感じなんですけれども、その B ファクトリーというのはまさに何と言うんでしょうか、我々の実験の方のパートナーのようなものです。あれがないと我々の理論ができない、といったところでお金を取ってきて、それでちゃんと作っていただいたということで、まさに恩人であるというふうに思った次第です。それがあって、ご存知のように小林、益川というお二人がノーベル賞を貰ったのですけれども、それはまさに、このことがあってということです。



さらにちょっとせっかくですので、付け加えさせていただきますと、先ほど岩本先生のお話にありましたように、最初はアメリカが、「何で日本がこんなの作るんだ」と。「うちの方、アメリカの方が圧倒的にいいものができる」と

言っていたのですが、最終的には **KEK** の方が加速器の性能、測定器の性能、実験結果共にアメリカを・・・別に国粋主義者ではありませんけれども・・・凌駕いたしました、非常にいい成果を収めたということであります。

こういった、素粒子物理学の実験、あるいは理論研究もそうなのですが、国際的にやるというのは当たり前のことになっておりまして、その中で、例えば、日本で行われている実験に日本人しか集まらないかというところではなくて、アジアの様々な国をはじめとして、アメリカ、ヨーロッパ等、各国から来ます。さらに日本の研究者も、ある人はアメリカの方のところでやっています。この **KEK** のものにもアメリカから参加している。そういったような形で、国際協力と国際競争。それがなしにはもう始まらないような世界になっております。

ちょっと前振りが長くなりましたけれども、私はそのたまたま教育の国際交流をなさいと、花輪先生から、グローバルラーニングセンターという、このたびの今回の機構化に伴って、・・・またこれは後ほど紹介しますが、・・・グローバルラーニングセンターのセンター長を仰せつかっております。そこで、東北大学におけるグローバルリーダー育成の取組についてご紹介させていただければというふうに思います。

東北大学の話に入る前に、少し周辺のことをお話させていただければと思いますので、多少岩本先生のお話と重複があるかと思いますが、ご勘弁ください。グローバルという言葉は本当に色々なところで今出てきている言葉ですけれども、特に文科省の施策の中でも、「グローバル」と名前がついたプロジェクト、補助金とかそういったものっていうのは多くなっています。ここにあげたのは、その典型的なもので、一つ、2006 年から「グローバル COE」。これは大学院の研究教育に関する、世界トップレベルの教育研究拠点を作るということで、行われたものですが、それか

ら 2009 年「グローバル 30」と。これは、名前を聞いたことがある方が多いかと思いますが、これは留学生 30 万人計画というのがございまして、2020 年までにそれを達成すると。その一環でもあります。本学も採択されて、留学生の受け入れ、特に英語だけで学位が取れるようなプログラムの構築、そういったものを行っております。

2012 年から先ほどから紹介していただいている「グローバル人材育成推進事業」というものが始まりました。今度は、日本人の学生のグローバル化と言いますか、教育のグローバル化。あるいは海外への送り出しとか、そういったもの。これについては後でお話したいと思います。

一方、高校側で何がこれまであったかということは、ちょっと完全には、私、整理してないんですけれども、少なくとも、スーパー・グローバル・ハイスクールというような施策がありまして、大学側もそれに協力するように、という話が来ております。今、公募中なのですが、これも、「スーパーグローバル大学」。これは、色々世間でも、例えば、世界ランキング 100 位以内に 10 校入るとか、そういったような標語で言われているようなものというのがあります。これは、題名に「グローバル」と付いているものだけを拾ってきたのですが、もちろん国際化、グローバル化に関連するような施策というのは、これだけではなくて、様々な施策があるということです。

それはどうしてなのだろうか、と。もちろんそれは、グローバル化ということが、進展しているかということだと思うのですが、ここに写真であげたのは、これを典型的に表しているものだというふうに、私なりに思っています。グローバル化というのが、多分、一番最初に・・・・色んな本を読みますと・・・・起こったのは大航海時代だということ、確かにこれはグローバル化の第一歩だと思うのですが、その時代はさておいて、近年、

最近の今のコンテキスト上でグローバル化ということが言われるようになってきたのは、比較的最近のことかな、と思います。特に、ベルリンの壁の崩壊によって、東と西というふうに分かれていた経済が、やはり世界規模で展開するようになった。それで、私は先ほど言いましたように、素粒子の研究者で、社会学者でも国際教育の専門家でもないの、かなり多分、必ずしも正確な表現とかそういったものを使っていないとは思いますが、私見ということでお許しいただければと思います。ベルリンの壁崩壊、やはりその頃から人々の流動性が高くなってきたな、と感じます。典型的には飛行機代が安くなったという感じをものすごく受けております。

それともう一つ、どうしても忘れてはいけないのは、情報通信革命といったことが起こっています。現象としてこういうことが起こっている。これがインデペンデントなのか、僕はかなり相互に関係しつつ起こっていると思うのですけれども、まず、こういった現象があるということです。その中でグローバル化ということはどう定義するかというのも、これもかなり多岐に渡っての定義があると思うのですけれども、狭義には、こういう経済や人々の往来のグローバル化、全球化ですね。地球全体に渡ったもの。あるいは一つの現象が瞬時に地球の裏側に、地球の全体に影響を与えると、そういうことが起こるようになってきたと。そういうことがグローバル化だと思います。

それに加えて、広義にはどこまで広げられるかというのは色々ありますけれども、私自身は、さらにそれに情報通信革命が起こって、それによって、インターネットでいつでも情報が得られる。これは私自身が外国に出た時はそんなものはありませんでしたので、日本の情報を得たいと思ったら、どこかに行って日本の新聞を買ってくるなり、あとは短波ラジオで聞くなり、そういったことをする以外になかなか日本の情報なんて入ってこなかった。今はいたるとこ

ろで手に入るという状況になっている。それから、急激な技術革新が起こっている。これも一見関係ないように見えるのですが、きっと関係するんだと思っています。

というのは、私の研究分野の話で申し訳ないのですが、例えば自分が研究を始めた、研究者として独立し始めた1990年前後の頃というのは、例えば、外国の研究と自分の研究が1ヶ月ぐらい差があったとしても、それは船便で、例えばプレプリントが送られてくるとか、そういったのが普通でしたので、多分、インデペンデントだ、これは独立した研究だというふうに認められる要素があったのですね。ところが、今は、あっという間に世界を研究成果が駆け巡ります。なので、1ヶ月遅れるなんていうのはありえない。それが同時にインデペンデントに見つけたなんてありえない。数日遅れたら、もう順番付けられます。だから、世界で誰かが最初に見つけてしまったら、次はもうそれを追いかけるしかない立場になります。そうすると、一つのことに参加しているプレイヤーの数がものすごくなります。そういったことがありまして、やはりこれはグローバル化の狭義の意味でのグローバル化が技術革新に影響を与えていると。

そういった意味では、また急激な社会変化が起こります。例えば、リーマンショック。アメリカで起こったことがすぐに日本に影響を与えるという、そういったことを通してみても、そういう時代なのだろうなというふうに感じております。

それをちょっと区別する意味で、今日はこれが正しい表現かどうか分かりませんが、そういう現象まで含めて、グローバル時代というふうに呼ばせていただいて、狭義の意味でのグローバル化とちょっと区別したいというふうに思っています。このグローバル化というのは、単なるフェノメノン、一過性の現象だとは思えない。おそらくこれは新しい文明なんだと、大きく言えば捉えられるかと思います。つまり、

産業革命に続いて起こった時代の大きな流れ。それをこの情報通信革命の方から、グローバル化という方向から話をするかというのは別にしても、今は非常に時代が変わってきているということは確かなんだろうなというふうに思っております。

一方、日本はということなのですが、よく言われる失われた 20 年。そして、もちろんそうしている間に中国が台頭して。エネルギーがもともと乏しい上に少子高齢化、こういう非常にネガティブな言葉をちょっと並べましたけれども、そういった現象が起こっています。それにも関わらず、僕には、過去の成功への郷愁とか、それがゆえの現状維持への大きな慣性力が働いて、なかなか動けない。そういうふうに、この日本が見えてしまう。

さらに、最近言われていることですが、若者が内向き思考である。明らかにグローバル化、あるいはグローバル時代への対応がこの国は遅れているんじゃないかという心配をするわけです。それで、色々言われているのが、おそらく手遅れになる前に、グローバル化への対応をしなくてはならないんじゃないかと。それがすなわち、「グローバル人材育成」ということではないかと、私は私なりに考えております。

それで、グローバル人材と言った時に、これもまた様々な人によって定義が違っておまして、私自身も話している時にぐらぐらするところがあるんですけども、例えばグローバル人材、グローバルに活躍する人材というふうに言ったとしても、それは狭義のグローバル社会、グローバルに地球規模で色々なことが起こっていると。それに対応できるような人なのか。あるいは、今、言いましたある時代の変化が起こっている。その時代において活躍できるという人材を指しているのか。これは多分そのコンテキストによって話す人とか色々なことによって違っているんだなというふうに感じています。それによって、それが何を指すかによって、その後導かれる結論なり、どうしなくては

いけないのか、そういったことがやはり違ってくるというふうに感じるわけです。

それでこの、ただグローバル人材、例えどちらの意味であったとしても、グローバル人材イコール＝英語なのか。確かに英語は大事なのですが、英語のできる人材だけではない。それだけではないということは、どうも色々な方の意見とか、色々なものを見ているとそういうふうに考えられますし、私自身そう思います。例えば、ということで、これは岩本先生が挙げられたものと同じになっていますけれども、例えば、「グローバル人材育成推進会議」でのグローバル人材の定義の中に、どういったものが入っているかということを見ますと、もちろん、学力、コミュニケーション能力、これは出てきます。要素としての第 1 に出てきますが、それだけではない。主体性、積極性、チャレンジ性、協調性、柔軟性、責任感、使命感。そういったものを持っていないといけないということが出てきます。そして異文化に対する理解だけではなくて、日本人としてのアイデンティティ。つまり、自分というものは何であるかということをしかりと確立した上で、他者と関わっていくと。自分を持ちながら、多様性を認めていくと。そういった態度ですね。そういった知識と態度。そういったものが求められている。何かこうこれを見ると、本当にスーパーマンのような感じがするんですけども、少なくとも方向性として、やはりこういったことを考えながら、色々な施策を作っていく時もそういったものを考えながらやっていかなければいけないんだろうな、というふうに思うところです。

こういった前置きのもとに、東北大学でどういう取り組みをしてきたか。これは、非常に長い歴史と言いますか、ここでは三つだけあげさせていただきますが、当然グローバル人材、…あるいはグローバル人材という言葉ではなかったかと思いますが…様々な意味で、こういうコンセプトで、人材を育成するということをやっております。ここでは、

ごく最近、ここ数年間にやっている取組についてご紹介させていただきます。

なお、大変申し訳ないことに、このスライドは昨日の夜とか今朝ぐらいまで作ってしまって、レジュメとしてお配りすることはできなくて申し訳ないと思っております。ただ、我々の東北大学のグローバル人材の育成の取り組みについて、こういう冊子を作っておりまして、それに今日お話しするいくつかのことは盛り込まれておりますので、ぜひ、後ほどご覧いただければというふうに思います。

一つは、先ほどから紹介いただいております「グローバル人材育成推進事業」です。今年が年度で言いますと3年目を迎えている取り組みです。二つ目、……これは時系列で並べていますが、……二つ目が里見総長、本学の総長の名前を冠しました「里見ビジョン」におけるグローバル人材育成の位置付けということでございます。最後、これも非常に重要な出来事だと思っておりますが、高度教養教育・学生支援機構の設立といったこと。こういったようなことを最近の重要なイベントとして、東北大学で行っているということです。

最初に、里見ビジョンにおけるグローバル人材の位置付けをちょっとお話させていただきたいと思います。これは本学の里見先生、総長になられて1年たった時点で、今後、任期の間にどういった大学を作っていきたいかということで、5年後の姿を七つのビジョンという形でまとめて、さらにそこに重要な施策と、そしてそれにいたる工程表を付けるということをやったものであります。この全体的なイメージとしましては、東北大学は里見総長になられて、ワールドクラスへの飛躍ということと、やはり東日本大震災の中心にある大学として、被災地の中心にある大学として、復興、新生への先導を行うと。この二つを目標に掲げました。それで、そこにいたる道筋として、東北大学をここにありますように世界に開かれた知の共同体として作っていくのだと。そして、ゴールを目

指すというような位置付けで考えております。

七つのビジョンと申しましたが、その「ビジョン1」として、こちらに学生が国際社会で力強く活躍できる人材へと成長していく場を、この大学が創出しますということであっています。「ビジョン2」以降は研究、それから復興への取り組み。そういったところになっていくわけです。その「ビジョン1」のさらに、これをどういう重要な施策で進めていくかということで、三つの大きな重要施策をあげています。

一つは、グローバルリーダーを育成するための教養教育の充実、それを核とする教育全体の改革ということを唱えています。後ほど説明しますが、「高度教養教育」というちょっと耳慣れない言葉かもしれないのですが、そういったことを力強く推進していきたい。そのための組織改革をします。実際に組織改革をしました。この半年で組織改革をして、新たな歩みを進めています。

2番目にあげているのが、グローバルな就学環境の整備。これは、一つには留学生の受け入れを促進。今、東北大学には去年の1年間を通じて、留学ビザを持っている学生、持っていない学生全部を合わせますと、約1,900人の学生がきています。東北大は、学部、大学院を合わせて約18,000人なのですが、10%ぐらいは何らかの形で短期、あるいは長期に渡っている留学生になっています。そういったことを、さらに拡充していきたい。今、目標としているのは2020年までに3,000人です。長期的にこれを倍増していくということを考えています。

もう一つが本学の学生の海外留学、国際体験の促進。そして異文化への理解、実践的なコミュニケーション能力の養成。そういったことを進めたい。これはまさにこれからお話ししますが、グローバルリーダー育成プログラムというものに関わる部分でございます。

そして、3番目に学生支援の充実強化ということで、単に授業だけではなく、学生がしっか

りした課外活動,それから私生活を含めてしっかりした生活ができるようなサポートをしたいということです。次に、ここにありました高度教養教育ですね。そのことについてお話をさせていただきたいと思います。東北大学は、ここにもありますように大きな目標として、国際社会で力強く活躍できる人材へと成長する場を創出しますと。まさにグローバルリーダーを作る、育成するということを教育の柱に据えました。じゃあ、そのために教養教育の組織を再編するというを行ったわけですが、では、どういう人材を作りたいんだということがなければ、どういう組織を作って、誰が集まってきて、どういうプレイヤーがそこに関与すべきか、ということができないわけですね。それで我々が考えたものというのは「六つのキーコンピテンシー」と呼んでいますが、六つの主要な能力。そういったものとして、次の六つということを考えました。これは先ほど花輪先生から紹介があったことですが、一つはもちろん「専門力」。研究型の総合大学として、高い専門力を身に付けていくというようなこれまでもあったことですし、これからは東北大学はそれを捨てません。次に、「鳥瞰力」です。これは、これだけ色々なことが早く動いていくような世の中にあって、一つの専門だけにこだわって、そこを深くつめること、それは非常に重要なことですけれども、様々な角度から、では、いったいこれはどういうふうになっているのだろうかということを見る力。そういう鳥瞰力というのを養っていききたいということを考えています。そして、「コミュニケーション力」。これが先ほどのグローバル人材の定義の中にも入ってきたところですが、そして「問題発見、解決力」。そういったものですね。この辺に対する取り組みというのは決して大学だけのことではございませんで、主体的に学ぶという、そういった学びの転換の部分から含めて、高大で連携しながらやっていくことだというように思っております。5番目は「異文化、国際理

解力」。この中には自分の文化を理解するといったことも入って参ります。そして「リーダーシップ力」。その六つに分類しまして、これを強化していくための取り組みをしたいと。それで、ひとつここに奇妙な高度という名前がついているわけです。

高度教養教育。教養教育というのは大学で最初の2年間ぐらいは教養教育をやります、ということでおなじみだと思いますが、これを変えたいということです。さらに、高度には二つ意味があるのですけれども、一つは高年次までの提供。1,2年生でもう教養教育は終わりです。その後は専門教育です、という話にはしません。3年生になって、4年生になって、専門を勉強しつつ、そこでより専門が分かった上で、学際的なことを勉強していく。そういったこともできる。あるいは、今、色々なことで研究者の倫理ということが問われているわけですが、そういったものというのもやはり、大学1年生に話をして分かる部分と、大学院に入って通じる、分かる部分っていうのはやっぱりあると思います。それぞれの年代に応じて、教育をしていきたいと。

教養教育を施していきたいという考え方と、もう一つがここにあげました、教育内容の高度化ということ。そして、方法の高度化。これには主体的な学びとかそういったことが入ってくるということでございます。そういったものを、新たな教養教育のモデルとして東北大学は作っていききたいということです。そのために何をしたかということですが、そういうグローバルリーダーを育成する。

実は、そういったファンクションは、東北大学は色んなところで持っておりました。例えば、高等教育開発推進センター。これは全学教育に関しても非常に強く推進されていたところで、さらにこの中に入試センター。これは入試だけをやっているわけではなくて、高大接続から入試、そういったことも全部やられているところなわけですが、そういう色んなファンク

ションを持っている部署が色んなところに散らばっていたわけです。それを、こういった高教センター、それから国際に関わるものも実は乱立してばらばらになっておりました。国際教育、海外に学生を送り出したり、あるいは学生を受け入れたり。そういったプロジェクトというのはばらばらにやられていたと。それからこれは博士人材に対するキャリア、あるいはリーダーシップをサポートするようなところなのですけれども、これも独立してやっていた。というようなことがありますて、これをそういうプレイヤーを結集するという形で、新たな高度教養教育・学生支援機構というのを作りまして、この4月から動き始めたところです。私自身は、この三つのセンターを統合した新たな「グローバルラーニングセンター」というのを作りまして、そこをまとめることを仰せつかっております。今、急ピッチでこのシステムを構築しているというところです。

さて残りの時間で、「グローバル人材育成推進事業」についてお話させていただきたいんですけれども、これは文科省のグローバル人材育成推進事業、5年間の事業で、全学推進型11大学、特色型31大学を選定しました。東北大学は全学推進型に選ばれています。目的は日本人学生の内向きを打破。語学力の強化とか、海外留学の促進。グローバル人材の育成ということなのですが、東北大学の取り組みとしては、こういった人材像、こういった学生を育てたいかと言いますと、グローバル、かつ、予測困難な社会を牽引して産学官の様々な分野で課題に果敢に挑戦し、新しい価値を創造できるような指導的人材ということで、これは先ほどの高度教養教育・学生支援機構の理念にも重なるんですけれども、私が最初に定義しましたグローバル時代ですね、新たな時代を切り開いていく、先導していくような人材を育てたいということ。理念としてはそういったものを掲げております。

学部の学生を対象に、グローバルリーダー育

成プログラムということ、今、やっております。これは、このTGLプログラムの概念図ですが、これとちょっと、若干違う絵がパンフレットにございますけれども、学部対象の登録制の教育プログラムになっています。昨年度から開始していますが、現在約1,000名の登録者がいます。1、2年生が多くて、1年生、2年生ともに約400名ずつ登録してやっております。アイディアとしては対外研鑽を中心として、語学力、コミュニケーション力、国際行動力。そういったものを身に付けていく、総合的なプログラムを作っております。これは、私としては、教養教育の再編の中でのパイロットプログラムというような位置付けをしております。

これは色んな人に注目されるんですけども、その一つ面白いことは、正課の授業と、課外の活動を両方とも認めていくと。それを取り入れていくと。そうすると単位という概念がなかなか使えないので、ポイントという概念を使って、「ポイントを貯めてもらうと何とかカード」みたいな感じなんですけれども、貯めてもらうというような形でやっております。それで、修了者の認定として、修了証の授与とか、グローバルリーダーの認定ということを行っています。一つは具体の取り組みとしましては、…ここに書いていますが、時間の関係上あまり言いませんけれども…語学力に関しては、やはり英語力って非常に重要だ。それだけではないと言いましたけれども、英語力が重要だと思っていまして、TOEFL-ITPでいうと550以上を超える学生を10%にしたいという、5年以内に10%にしたいという目標を掲げています。ただ、現在非常に辛い状況なのは、平均480点ぐらいです。これが550を超えているのは3%ぐらいです。これを増やしたいのですが、聞くところによると、ITPで480から500まで上げるのに600時間かかると。約600時間とされています。それは、1日1時間勉強したとしても2年間かかるということで、かなりきついんですけれども。ここの550というのはど

うして掲げているかということ、北米の大学に交換留学で行きたいと思った時に、向こうから要求される英語水準です。それは、つまり、北米の大学にとってみれば、ここまで達してなければ、授業も何も分かりませんよ、というぎりぎりの数字なんですね。そこに何とか達させたいということで様々なことを行っています。

これがちょっと、後でまたお話しいただけると思うのでスキップします。そして国際教養力。ちょっとこれは写真を見てもらった方がいいかと思います。これは、国際共修授業として、日本人と留学生が先ほど言いましたように、1,900人とかいます。それが、単にアイソレートしていたら、何も大学には意味がないと言ったらおかしいのですけれども、ただ隣に座っているだけでもましだと思えるのですけれども、そうではなくて、インタラクションを持たせるように、いわゆるアクティブラーニング、課題解決型授業に、留学生と日本人が共に入ってやっていく。そういったことをやってみる。そうすると、すごく面白いことが起こります。日本人は15週あるわけですけれども、その中で「さあやりなさい」と言われた時に、何かつまらない、何か几帳面に色々なことをやろうとする。だけれども、留学生の方はもっとビッグピクチャーで、色々な話をするのだけれども、なんだかんだ言ってもなかなか決まらない。ということで、一つのものに対するアプローチが全然違うということを学びます。だけど7週、ある程度経つと、あと1ヶ月しかない、やらなきゃ、ということになって、何かを始めると。そこで何か違うアプローチを取っている人たちが、何とか一つのものを作らないといけないということでやり始めると、非常に面白い。こういったプログラムをやっています。それから、グローバルキャリアセミナーとか、海外研修。そういったものに力を入れています。

東北大学は、これはグローバル人材育成推進事業の前から、相当前から主体的な行動力を養成するというので、1年生ほぼ全員に基礎ゼ

ミというのを開講しています。最初、入ってきた1セメですね。そこで行動する学習、主体的な学習、多様な観点からの思考ということをやってもらうために、平均15人程度の非常に小さいクラスを作って、そこで課題解決型の学習をするということをやっています。

最近、去年からですけれどもこれは1セメですが、秋学期もやりたいという声が非常に多かったので、展開ゼミと称してこれの発展版というのをやっているというところです。そして、海外留学の促進です。東北大学の戦略は、短期の国際体験。これは3週間とか5週間ぐらいでいいんですけれども、1ヶ月ぐらい。それに参加して、それによって、それを増やすことによって、より長期の経験に向かってもらおうと。そういう戦略で現在取り組んでいます。その短期のものをスタディーアブロードプログラム、短期学生海外派遣研修ということで行っています。この写真は里見総長ですけれども、非常にこの短期の派遣プログラムに対して理解があります。サポートを得ながら、これは年次でどのくらい伸びたかということ、この1、2年で非常に数が増えています。まだまだ全体の人数の中では、少ないのですけれども、1学年に2,400人いますので、その10%強しか送っていないんですが、これをどんどん増やしていきたいというふうに考えているところです。

ちなみに、高大連携ということでもありますので、実は大学に入る前に派遣するというプログラムを今年作りまして、実施いたしました。3月にカリフォルニア大学のリバーサイド校というところなんですけれども、そこにAOⅡ期で合格した学生さん。つまり、12月頃ですね、その時期に合格が決定している学生を対象にして送り出しました。約150~60名ぐらいの対象者がいるんですけれども、その中で17名が今年参加しました。これは比にすると10分の1なので、結構な割合でこのプログラムに参加してもらったということです。これは私も数

日付き添いましたけれども、かなり非常にアクティブにやっていました。こういった学生、東北大学としてはこういう学生がコアになってくれて、周りの学生に影響を与えてくればいいなというふうに思っております。

ちょっとだけお話させてください。これは、我々が独りよがりのことをやっているのではないということで、色んな企業にアンケートを取りました。その中で、グローバル人材育成推進事業の中で期待することとして、やはり課題解決型の授業をしてほしいとか、外国語能力とか、専門分野とか、プレゼンテーションを鍛えてほしいというような声が聞こえています。それから、これはちょっともう時間がないのでスキップしますが、東北大学の学生に意識調査をしました。そうすると、グローバル人材になるために何をやっているかということを知っていると、これは細かいことが読み上げませんが、TGL プログラムの学生が青です。それから普通の登録していない学生が赤なんですけれども、明らかに TGL の学生の方が色んなことに取り組んでいて、特に何もしていない学生というのが非常に少ないというような結果が出ています。少しそういった意味で、まあこれは学習成果なのか、それともそういう学生がこれに応募しているのかというのは、そこはよくわからないのですが、そういったプロフィールを持っております。

すみません、まとめさせていただきます。やはり、グローバル時代が到来していると。その時代において活躍できるような人材を育てるということは急務であろうというふうに考えております。

ということで、紹介させていただいたようなプログラムを行っていますが、今後、またさらに教育システムの改革とか、教育カリキュラムとか、方法について普段の改善をしていきたいというふうに考えております。

ちょっと延びてしまいました。どうもありがとうございました。

(拍手)

石井光夫教授（司会）：

ありがとうございました。山口先生のお考えになるグローバル時代の人材育成というお話から、後半は本学のグローバル人材育成についての取り組みを、色んなプログラムの紹介ということからお話いただきました。語学だけではなく、色んな授業活動からの人材育成プログラムによるアプローチということであったかと思えます。

ご質問は後の討議の時間にさせていただいて、ここでちょっと休憩を挟みたいと思います。10 分間ご休憩いただいて、それからお三方の先生の現状報告ということにさせていただきたいと思いますので、47 分。ちょっと中途半端ですが、47 分再開ということで、休憩を取らせていただきます。ではいったん休憩です。



東北大学における グローバルリーダー育成の取組

山口 昌弘
東北大学
副理事(国際交流担当)
総長特別補佐(教育国際交流担当)
高度教養教育・学生支援機構
グローバルラーニングセンター長

第20回東北大学高等教育フォーラム
グローバル人材の育成に向けて
2014年5月16日@仙台国際センター



今「グローバル」花盛り

文科省「グローバル」プログラム

	大学	高校
2006～	グローバルCOE (GCOE) 12拠点	
2009～	グローバル30 (G30) 採択	
2012～	グローバル人材育成 (GGJ) 全学推進型	
2014～	スーパーグローバル大学 (公募中)	スーパーグローバルハイスクール(SGH)

他にも多数の関連するプロジェクト



グローバル時代の到来





ベルリンの壁崩壊(1989):
地球規模での経済活動が加速

地球規模での人々の流動性

情報通信革命

グローバル化:
(狭義) 経済や人々の往來のグローバル化(全球化)
(広義) 上記に加えて、
情報通信革命+急速な技術革新+急激な社会変化 (グローバル時代)

**グローバル化(国際化)は新しい文明(ライシャワー)
産業革命に続く時代の大きな流れ**



一方 日本は。。。

失われた20年 経済の失速

過去の成功への郷愁

新興国の台頭によるシェアの縮小

現状維持への大きな慣性力

エネルギー・資源小国

少子高齢化の急激な進行

内向き志向

「グローバル化」への対応の遅れ

**手遅れになる前に
グローバル化への対応を！＝グローバル人材育成**



グローバル人材の定義の色々

○「グローバル人材＝グローバルに活躍する人材」としても

1. 狭義のグローバル化社会において活躍する人材
という意味だったり
2. 「グローバル時代」において活躍する人材
という意味だったりする。

いずれにしても グローバル人材＝英語のできる人材 ではない。

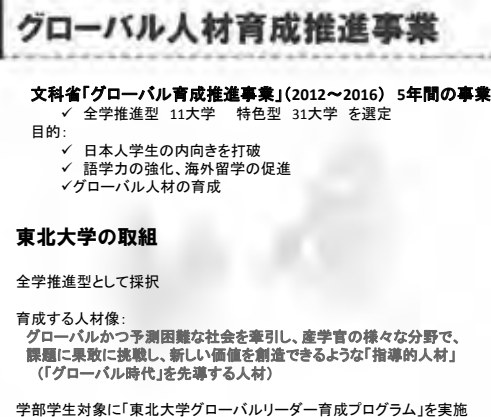
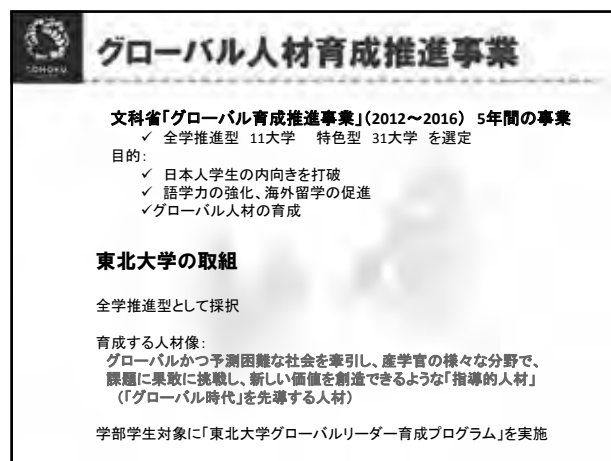
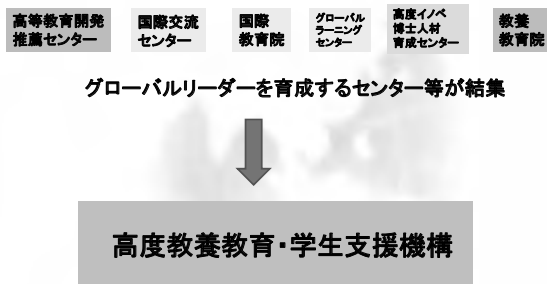
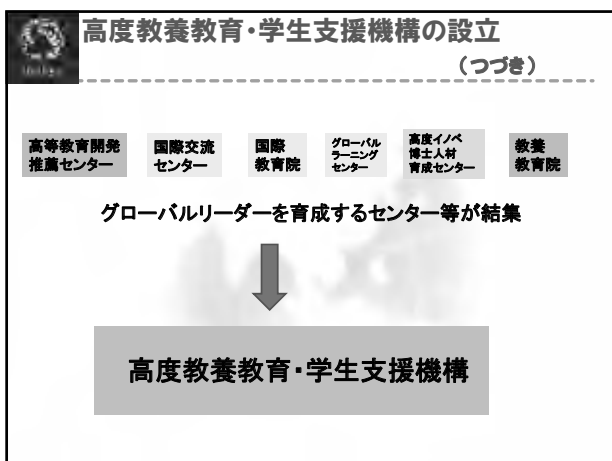
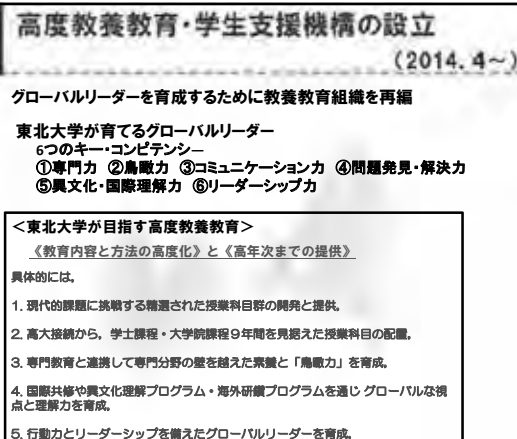
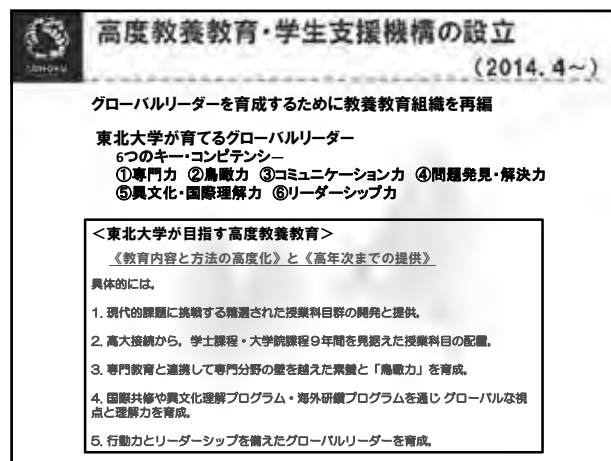
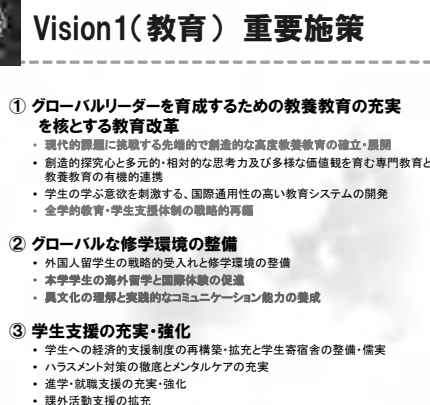
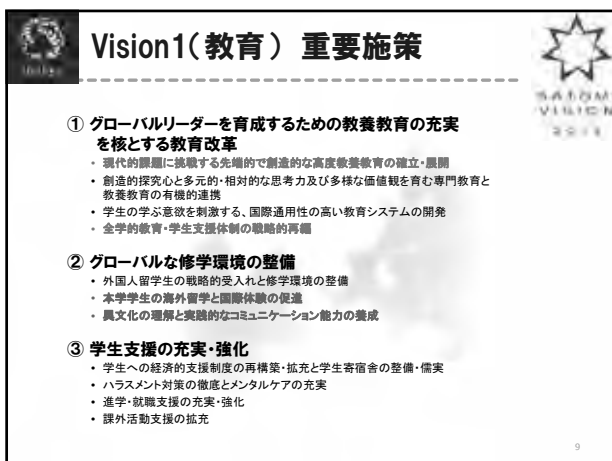
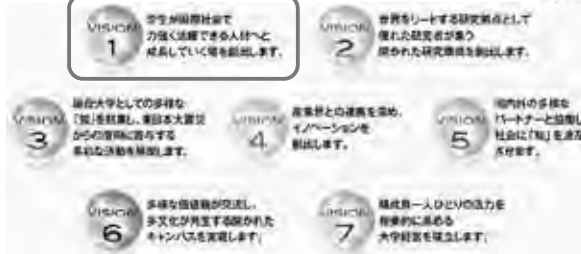
○たとえば、グローバル人材育成推進会議(2011年)での
グローバル人材の定義

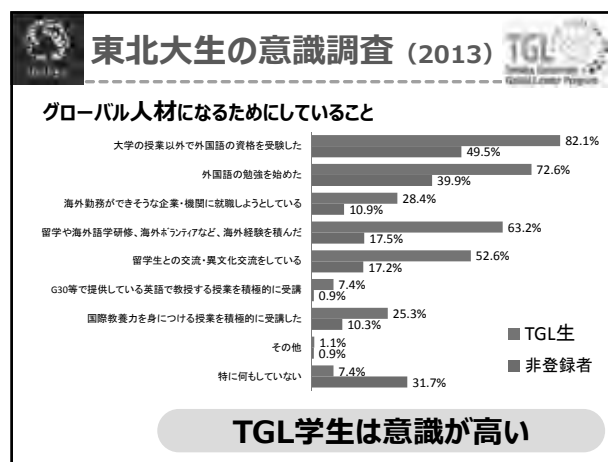
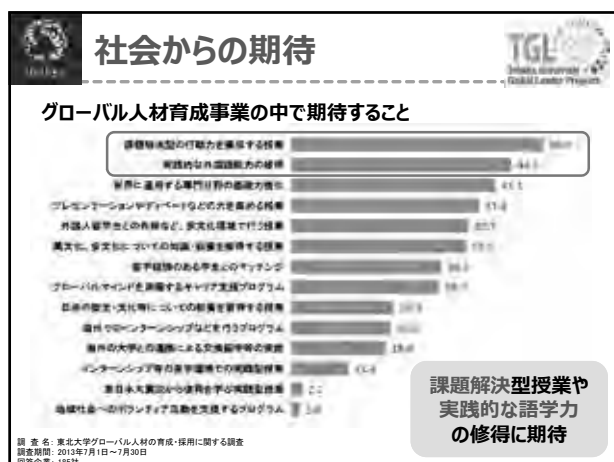
要素Ⅰ: 語学力、コミュニケーション力
要素Ⅱ: 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
要素Ⅲ: 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ



東北大学の取組

1. グローバル人材育成推進事業 (2012.10～)
2. 里見ビジョンにおけるグローバル人材育成の位置付け
(2013.8)
3. 高度教養教育・学生支援機構の設立 (2014.4)





まとめ

- **新たな時代＝グローバル時代の到来**
経済や人の往来のグローバル化(全球化)
＋情報通信革命＋急速な技術革新＋急激な社会変化
- **「グローバル時代において活躍する人材＝グローバル人材」を育成することが教育の急務**
- **東北大学のグローバル人材育成の取組**
・グローバルリーダーを育成することを教育の目標とし取組を加速(里見ビジョン)
- **これまでの取組:**
 - ・東北大学グローバルリーダー育成プログラム(TGLプログラム)
 - ・教養教育組織の改編: グローバルリーダー育成に関わる組織が結集
- **今後の課題:**
 - ・教育システム改革(国際通用性等)
 - ・教育カリキュラム・方法の不断の改善

第 2 部 現状報告

現状報告者紹介

Daniel Eichhorst (ダニエル アイコースト) 氏

Profile of Daniel Eichhorst

Daniel Eichhorst earned his Bachelor of Arts in English from Concordia College, Moorhead, MN; Degree of Occupational Proficiency in Electronic Data Processing from St. Cloud Technical College, St. Cloud, MN; Professional Education Certification in Language Arts/ESL from the University of Washington, Seattle, WA; and Master of International Management from Thunderbird School of Global Management, Glendale, AZ. He first came to Japan in 1982 and taught at a private English school for 2 years in Fukushima. Next, he worked 18 years as a full-time English teacher at Shokei Gakuin Junior & Senior High School in Sendai. During this time he received Japanese high school teacher certification and experienced being a homeroom teacher. In 2007 he started university teaching and has taught at private and public universities in Sendai. He is currently a senior assistant professor in the Institute for Excellence in Higher Education (IEHE) at Tohoku University teaching communication and reading courses where he focuses on discussion and extensive reading, respectively.

〔学歴〕

コンコーディア・カレッジ（ミネソタ州モアヘッド市）英文学士課程修了
セントクラウド・テクニカル・カレッジ（ミネソタ州セントクラウド市）
電子データ処理課程修了
ワシントン州立大学（ワシントン州シアトル市）英語教員免許取得課程修了
サンダーバード・スクール・オブ・グローバル・マネジメント
（アリゾナ州グレンデール市）国際経営学修士課程修了

〔職歴〕

1982 年初来日、民間英語学校（福島県福島市）講師(2 年間)
尚絅学院女子中学校高等学校（宮城県仙台市）専任教師(18 年間)
その間に日本の教員免許を取得し学級担任を務める。
2007 年より仙台市内の公立および私立大学講師
現在、東北大学高度教養教育・学生支援機構講師としてコミュニケーションおよびリーディング講義を担当。主な講義内容はディスカッションと多読。

松井 徹朗（まつい てつろう）氏

1955年生まれ。北海道立旭川北高等学校教諭。

平成17・18年度、国立教育政策研究所より「教育課程研究指定校事業（外国語）」の指定を受け、英語科主任として、新学習指導要領下で行う英語の授業のモデル及び評価法を研究する。

その後、平成19年度より3年間、SELHi 研究指定校事業を受け、国立教育政策研究所からの課題研究を継続する。研究内容は、

1. 「英語で行うことを基本とする授業」の研究
2. 「日本語を介さない読解力」及び「積極的に自分の考えを伝えようとする態度や表現力」を育成する指導法の研究
3. 生徒の学習意欲を向上させる評価方法の研究

現在、旭川北高校では、

1年「コミュニケーション英語基礎」「コミュニケーション英語Ⅰ」「英語表現Ⅰ」

2年「コミュニケーション英語Ⅱ」「英語表現Ⅱ」

3年「リーディング」

の科目で、コミュニケーション能力の育成を目指す「英語による授業」の研究・実践を継続して行っている。

その指導法は、進学指導重視校の生徒だけでなく、生徒指導重視校の生徒の両者を含む。

高校現場で教鞭をとる傍ら、各都道府県教育委員会や各教育研究団体が主催する英語教員向けの講演及び授業体験型ワークショップの講師として、全国各地を回る。

日本英語検定協会（英検）派遣講師。

東盛 敬（ひがしもり けい）氏

1960 年 6 月 沖縄県コザ市（現沖縄市）生まれ

1986 年 3 月 國學院大學文学部文学科 卒業

〔教員歴〕

1990 年 9 月 沖縄県立北中城高等学校臨時的任用教諭（4 ヶ月）

1991 年 4 月 沖縄県立球陽高等学校教諭（3 年間）

1994 年 4 月 沖縄県立名護高等学校教諭（4 年間）

1998 年 4 月 沖縄県立那覇国際高等学校 <新設校> 教諭（5 年間）

2003 年 4 月 沖縄県立読谷高等学校教諭（6 年間）

沖縄県立読谷高等学校主幹教諭（2 年間）

2011 年 4 月 沖縄県立宜野座高等学校教頭（3 年間）

2014 年 4 月 沖縄県立辺土名高等学校校長（現職）（1 年目）

〔主な教育活動〕

- 国語の授業とコンピュータ（1992/4～1993/12）：研究委員
沖縄県教育委員会指定高等学校 C A I 研究委員となり「国語の授業とコンピュータ」を研究し、現代文の授業でワープロソフト「一太郎」を活用した。
- 古典におけるコンピュータ活用（1997/10～1998/3）：
沖縄県立総合教育センター研修員
「和歌の表現世界を読みとる力を育てる学習指導」を研究・実践した。「①和歌の品詞分解から単語への気づき，②反語や省略，修辞などの分析から作者の想いの読解，③必要資料を画面に，瞬時に提示し『ソウゾウ』を広げ，和歌の表現世界を読みとる力が向上」するようコンピュータを活用した。
- シラバスについて（1997/3～1998/2～1999/3）：研究委員
教育内容等調査研究員会に属し，県内初のシラバス（高校国語）の調査・研究・作成にあたり，那覇国際高校にて実践した。特に現代文と古典の各単元のパターン化を意識して取り組んだ。
- 沖縄県高等学校文化連盟弁論専門部（1998～1999）：専門委員長
- 沖縄県立那覇国際高等学校オーストラリア海外研修計画・立案・実施（1988～2000）：
学年主任
- 学力向上研究（2009/4～2011/3）：研究主任
「やる気から波紋する学習意欲向上～進路のしおり活用による進路指導を中心とした学力向上～」をテーマに「3 年間持ち上がり・書き込み式」の進路のしおりを作成し，その活用を通して学習意欲向上を促した。
- 県立宜野座高等学校 H24 年度全日本学校関係緑化コンクール特選
「文部科学大臣賞」：教頭
- 県立宜野座高等学校 H25 年度キャリア教育優良校「文部科学大臣表彰」：教頭

[その他の特記事項]

- 株式会社 FM 沖縄制作部（1986/9～1988/3）：アナウンサー
- WooD House（1988/4～1990/9）：フリーアナウンサー
- アメリカ語学留学（1989/3～1990/2）：UC カリフォルニア，
UC テキサス，UC フロリダ
- 沖縄空手道上地流山会 2 段（2005/11 當山清幸会長より授与）
- Central Texas College（米軍基地内大学）入学（2007/7～）
- 平成 26 年度沖縄県国語教育研究会会長
- 平成 26 年度沖縄県高等学校体育連盟ボート専門部部長

現状報告 1：英会話の先にあるもの

——批判的思考とコミュニケーション能力の育成——

東北大学高度教養教育・学生支援機構

ダニエル・アイコースト 講師

【講師紹介】

石井光夫教授（司会）：

それでは、再開させていただきます。これからお三方の先生に現状報告ということで、先生方から実践されている教育をご紹介します。最初は東北大学、これはお手元のプログラムに所属が間違っておりまして、高等教育となっておりますが、先ほど来、東北大学高度教養教育・学生支援機構のダニエル・アイコースト先生に、英会話教育の実践についてご報告いただきたいと思います。先ほどからグローバル人材、語学だけではないということを申し上げておりますが、これからおふたりの先生に英語教育の話をしていただきます。そうは言うものの、やはり英語教育というのは必要条件として欠かせないということもまた事実でございまして、先生は英語教育を手がかりに、さらに様々な、例えばコミュニケーションスキルを育てていくという試みをされているということでございまして、それではアイコースト先生、お願いします。

ダニエル・アイコースト講師：

Good afternoon. The first thing that we're going to change is the language. I'm going to be speaking in English with a little bit of Japanese maybe. All right? And immediately I see heads up. OK, so you are going to have to concentrate now. Good luck! I'm Daniel Eichhorst. I'm not famous. So I want to tell you quickly about myself. 1982, that is not the year I was born. And you can

tell. That is the year that I came to Japan. So, actually I've been in Japan a long time. My favorite sumo is *Chiyonofuji*. I remember when Japan was No. 1. Ok so I have quite a long experience in Japan. Twenty. What do you suppose 20 is? Twenty is the number of years I was a high school teacher and most of my working career was in a high school in Sendai. Eight. That's the number of years I've been teaching in university. And 5 is the number of years at Tohoku University.



My teaching background and primarily my teacher training came at the University of Washington and that's where I

got my high school teaching certification. And as a result of that, when I came to Japan back in 1982, this is before there was any JET program or those kinds of special programs, I obtained my Japanese high school teaching certification. So, while I am now teaching at Tohoku University, really, I am not a researcher. I am an educator and I think this is part of the change for this “Global Jinzai”; the need for educators in universities.

Today, I am really excited because I’m going to introduce to you a course I have developed. And this is what I call “Discussion and Extensive Listening-based Communication Course”. You should have this handout describing this course. Now in this title you will see there are two parts: Discussion and Extensive Listening. Today I’m going to primarily introduce to you the Discussion element of this course. The Extensive Listening element is described in this handout.

Now, you see the color here. This is the Tohoku University purple. When you see this color I want you to participate; this is active learning. I want you to read this slide so let’s start over. Are you ready? Yes.

(audience participation)

もう、全然ダメ！ほんとにね、active learningは難しいよ。はい、もう一度、やり直し。

OK. Are you ready?

(Yes)

Yes, thank you.

(audience participation – inaudible))

Now, I consider myself to be an educator and this is really the key question. Why would you create a certain kind of course? Now the answer comes from my teaching philosophy and this is something that I think all teachers need – it is a teaching philosophy consistent with their situation.

First of all, I want students to be able to clearly distinguish the difference between studying English in high school and university. I want them to be able to build on their previous six to seven years of English study and become autonomous learners. There is something very difficult about teaching English in university. The reason for this is the purpose of English has changed all of a sudden. For 6 years, students study English like it is mathematics, for a specific purpose, the entrance examinations. Then when they enter university, all of a sudden they have to change this to real-world English. Ok. And so, I really want students to see the difference.

Second I want students to be able to express their personal experience and views and to develop their general knowledge and critical thinking ability. You will see here there is nothing about studying English. It is really about using English now, especially to develop their general knowledge.

Finally I want students to have an experience with a foreign teacher that is different from what they have had in their previous studies. In other words, I want to use my abilities in a way that the students see something different.

Now today’s handout I just want to

quickly go over, ok? This is a very extensive handout and the reason for this is that I do not use a textbook. So this in essence is the student textbook. First of all, the first 15 pages of this handout are the student guide. In other words, this is the method, the method to learn how to do discussion. So you will notice that this guide is in both English and Japanese. Most of my students are Japanese students but there are many international students and so this serves both purposes. Ok, both types of students can understand.

Second, pages 16 to 18 are the Discussion topic guide and Discussion question pages. This shows the kind of topics that students discuss. Finally page 19 is a preparation sheet example. And I want you to remember this word “Preparation”. Page 20 is an Extensive Listening log sheet and this is something if you look at the guide you understand what this is. Finally, page 21 is an original question list. What I want to comment about this original question list, these are questions that students have created, not Daniel.

Finally, page 22 and 23 are the reaction. Again I want you to remember this word, “Reaction”; this is what students write following a discussion. From the point of view of being an educator, I want you to look at page 23. This is where students write their name, so you understand that when I grade their writing on page 22, I do not see their name. This name has a big impact in some cases when you are grading. So that is the reason I do that.

Finally page 24 gives a flow of this discussion course. Everybody...

(audience participation- inaudible)

はい、はい、遅い、遅い……。You’ve got to concentrate, concentrate here OK? Hi!

(audience participation- inaudible)

Pretty good. Thank you very much. I know this is a surprise to you that you have to do this, ok. There are 3 underlined words here. Critical Thinking, Discussion, English. These are quite distinct things actually. The general answer to this for most people I talk to is “No”. My answer is “Yes I do”. I really have believed this from my experience.

Now, I want you to believe this. So first of all, before I explain this, I want to show you the learning outcome for this course. There are 2 primary learning outcomes. I want to show you the first one.

(audience participation – inaudible)

Now I know it was difficult to hear what they were saying but it is quite clear that they were speaking English, right? The first outcome from this course: students are able to talk almost naturally to each other in English. The key is “almost naturally”. It’s unnatural Japanese students speaking to Japanese students; that is not a natural situation in English. Okay? But you saw these students were almost natural; they were not intimidated by the English. That is the first outcome of this course.

The second outcome is students are able to naturally write a summary reaction in English at the end of a discussion. This is exactly 15 minutes long. These are examples of this kind of reaction. It is one page. This is

not something that is easy for students the first few times. But these students have a very high level of English ability and if my expectation is “in 15 minutes you write about one page” it’s very surprising how many can succeed at that. It is kind of setting your expectation that you believe that they can do that. It is very interesting this ability.

Now, in order to achieve these two outcomes, I have tried to develop a method. It has four parts. The keywords here are Preparation, Individual Preparation. Then Discussion and this means three short discussions during the class period. Finally, Written Reaction, the Reaction. This is a 15 minute time grading, individual time writing. And finally, my Evaluation.

Now for this preparation for this kind of discussion, you need an input. This input could be a written article or for this course, I’ve been using TED talks, video. These videos have English subtitles or Japanese subtitles available so it’s very useful this particular kind of video. And they are very short. They are 3 to 18 minutes usually, you can choose these. But this is the input. Students watch a video. Then they complete a preparation handout. This is really crucial. Students who have prepared can talk about something. You cannot give a student a topic and say “Talk about this”. They need to prepare. They are young people; they have not thought about these topics. They have mostly been studying to pass the entrance exam. So, this kind of preparation is vital.

Now, if you look at, this says page 24 but page 25, but your page 24, you have the flow for this class. I’d like to show you now a

video which pretty much follows the flow of this class. Now this video, this is about 5 mins long and you will not have to listen to me talk. This will clearly give you an idea of how this class runs for 90 minutes.

Now all this is happening before the chime. This is very important, the timing of this. So I’m talking to the students and students are writing on the chalkboard and class has not begun officially.

So here students are writing original questions on the chalkboard before the start of class.

(Video – “Show me your preparations for today, show me your preparations”)

So this is very interesting. I check their preparation at the very beginning of class. And I have two hankos – a red batsu and a blue OK. The power of the red batsu is amazing.

(Video – inaudible)

I go over these questions; there are many many English mistakes. I never say anything about those mistakes; it is unnecessary. I understand everything.

(Video – “one, one, one, one, two, two, two, two, three, three, three ## four, four, four, five, five, five, six, six, six, seven, seven, seven ##, eight, eight, eight, OK”)

Now this kind of course takes some training to explain this method but after about the third class it becomes very smooth.

(Video- inaudible)

So there are 3 discussions then from 15 to 20 minutes. And I generally do not participate in these discussions with more than just a comment or two. The students like to talk; they don't need Daniel speaking. (Video- "one, two, three, four, one, two, three, four, one, two, three, four, one, two, ##, five, six, seven eight, five, six, seven, eight, five, six, seven, eight ##")

So when we change groups like this, I insist that they finish changing in about 45 seconds. They are actually quite quick at this. I am the slow one sometimes. And you will see in the front of this class is a young man, he is a French student. OK. So we get international students in these classes and it really becomes interesting. The Japanese students they rise to the occasion and they really work hard at speaking. It is very interesting to see.

(Video- "### very good, very good. Thank you very much. ### Your final reaction ## paper is OK, the actual paper")

Now what is very interesting here is after 3 discussions and we change to this reaction writing, we see in just 30 seconds the atmosphere changes. They seriously start writing. It just becomes quiet. OK and they focus and it is very interesting.

So now 15 minutes of complete quiet while they are writing.

So that is the flow of this class.

(audience participation- inaudible)

もうちょっと関心あるように言ってほしいよ。

OK. So what do they think of this

course? I am going to read one reaction from a student.

"Today was my last time to attend this English class so I tried to speak more than ever. I was also able to organize and elaborate members' ideas and keep talking. The most interesting talk of today was the Definition of Dots. One of the members asked can dots be made. Is it a natural thing? This comes from a talk by Steve Jobs who you might know. My answer to this question was that we are making dots unconsciously and by changing the point of view, any experience can be your dot. The reason I answered like this is that I believe that everything is related. For me the motivation to study English was just it seemed to be cool and I saw a person who can speak English really fluently and I was inspired. So, though the motivation of my action is foolish I can stick to it and achieve goals."

これ、結構頑張ってるね、この・・・this reaction. OK?

"But it is also true that we can make dots by our efforts. For example, if a person wants to get a great job in the future, he or she can meet with many alumni of university and have connections with them. After that, he or she can make use of the dots to get a job. So we can make dots deliberately. Today so many of my classmates are talking about "Stay hungry, stay foolish". I thought these words were cool but after hearing others opinions I changed my mind."

This is the thing about this discussion; it changed his mind because of this class.

"If we keep being hungry we have to

expose ourselves to the severe environment but we also need relaxing time and time to do something dumb. So it is not always needed. Thanks for the valuable time in this class.”

So I think some students can have this kind of experience, I don't say every student. But these are the students we are trying to grow I believe.

(audience participation· inaudible)

So what do you think my answer is?
Yes, they can. Thank you very much.

(拍手)

石井光夫教授（司会）：

アイコースト先生, どうもありがとうございます
ました。アイコースト先生の英語の授業はいか
がだったでしょうか。私たちも巻き込まれてし
まいました。

Discussion & Extensive Listening-based Communication C1/2

Course Guide

2014-15



The aim of argument, or of discussion, should not be victory, but progress.

Joseph Joubert

Name _____

Table of Contents

1. What is the concept of the Discussion-based Communication Course? ..	1
2. What do students do in class?	1
3. What are the 3 Steps of Discussion?	1
4. What do students do for the Preparation Step?	2
5. What are the instructions for completing the Preparation Worksheet? ..	2
6. How is the Preparation Worksheet evaluated?	3
7. What do students do for the Discussion Step?	4
8. How do students warm up for discussion?	4
9. What are the instructions for the 3 Discussions?	4
10. What do students do for the Reaction Step?	6
11. What resources can you use when you write a reaction?	6
12. How is a reaction evaluated?	6
13. What is the grading scale for a reaction?	6
14. What is the format for writing a reaction?	7
15. How long should a reaction be?	7
16. Will grammar usage and English usage affect your score?	7
17. What should you write in a reaction?	7
18. What kind of mistakes will result in a bad evaluation?	8
19. What is expected of the leader during a discussion?	8
20. What is expected of participants during a discussion?	9
21. What does the teacher do during class?	9
22. Useful Expressions for Discussing a Topic	10
23. What is the purpose of the extensive listening activity?	11
24. What are the guidelines for the extensive listening activity?	11
25. How is the extensive listening activity evaluated?	11
Extensive Listening Weekly Score Chart	11
26. How should students report about what they watched?	12
27. Example of Extensive Listening Log Sheet	12
28. Recommended Internet Sites	13
29. What factors determine a student's grade?	15
30. What should a student do to get an AA grade?	15
31. What is the minimum required to get credit with a C grade?	15

1. What is the concept of the Discussion-based Communication Course?

ディスカッションを用いたコミュニケーション授業のコンセプトはなんですか。

Communication involves all 4 language skills: reading, writing, speaking, and listening. A discussion-based course can develop all of these skills.

Discussion is something that you actively do and the key to having a good discussion is doing good preparation. The preparation involves reading, listening, and writing. If you discuss a topic multiple times you can develop your thinking and become comfortable with the language related to a topic. A timed written reaction is a fair way to evaluate how much you have developed your thinking about a topic and how well you know the language related to a topic.

コミュニケーションには読む、書く、話す、聞くの4種類の言語スキルが必要です。ディスカッションを用いたコミュニケーション授業はそれらすべてのスキルを磨くことを目的とします。

学生は実際にディスカッションを行います。良いディスカッションをするためには十分な準備が不可欠です。準備の際に、読む、聞く、書くことをします。一つのトピックについて何度かディスカッションするうちに、自分の考えを発展させることができ、そのトピックに関する単語や表現を楽に使えるようになります。限定時間内で書く感想文は、一つのトピックについて自分の考えをどれくらい発展させたか、そのトピックに関する言葉をどれくらい覚えているかを正しく評価するために有効な方法です。

2. What do students do in class? 学生は授業中に何をしますか。

The main activity involves students doing 15-20 minute discussions about a topic in groups of 3 or 4 (approximately 50 minutes). Normally, students do three discussions. Following the discussions students individually write a reaction for that discussion (exactly 15 minutes).

主要部分は学生達によるディスカッションです。3-4人のグループに分かれ与えられたトピックについて15-20分話し合います。(約50分間) ディスカッションの回数は通常3回です。ディスカッションに続き、学生たちは各自感想文を書きます。(15分間)

3. What are the 3 Steps of Discussion? ディスカッションの3つのステップはなんですか。

1. **Preparation Step:** students read an article or watch a video about a topic and complete a preparation worksheet.
2. **Discussion Step:** students do three discussions in groups of three or four people that are 15-20 minutes long.
3. **Reaction Step (15 minutes):** students write a reaction in English focusing on the discussion topic.

1. **プレパレーションステップ:** 一つのトピックに関する記事を読む又はビデオを見る。プレパレーションワークシートに記入する。
2. **ディスカッションステップ:** 3-4人のグループで15-20分のディスカッションを3回行う。
3. **リアクションステップ (15分):** ディスカッションした内容を振り返り英語で感想を書く。

4. What do students do for the Preparation Step? プレパレーションステップ

For the preparation step you read an article in Japanese or English, or watch a video as input about a topic. The purpose of this input is to get you to think about the topic and to introduce some vocabulary related to the topic. In the case of an article, you are not expected to translate the article, and there will be no test about your understanding of it. Think of the input as a starting point for developing your thinking about a topic and evaluating your ability to discuss this topic in English.

プレパレーションステップでは、日本語または英語の記事を読むか動画を見てトピックに関する情報を得ます。情報を得る目的は、トピックについて考えトピックに関係した語彙を学ぶためです。記事を読む場合は自分で訳す必要はなく、どれくらい内容を理解しているかについてのテスト也没有。情報を得ることとはトピックに関する自分の考えを深め、また、トピックについて英語でディスカッションする能力を自己評価するための出発点と考えて下さい。

After reading or watching the input, complete the preparation worksheet. You are encouraged to research a topic on your own to further develop your knowledge and thinking about the topic. The preparation step has been designed to take around one hour to complete.

記事を読んだり動画をみて情報を得た後、プレパレーションワークシートを記入して下さい。自分自身で調べてトピックに関する自分の知識や考えをさらに発展させることを勧めます。プレパレーションステップは1時間程度で終わることができるよう作られています。

5. How do students complete the Preparation Worksheet? プレパレーションワークシートの書き方

1. Vocabulary section

In the vocabulary section you should write four words that you imagine will be keywords for this discussion. Write the Japanese meaning next to your word. Do not include any words that everyone will already know.

Vocabulary sectionでは、ディスカッションでキーワードとなると思われる単語を4つ書きます。その単語のとなりに日本語の意味を書きます。誰もが知っていると思われる単語は書かないようにして下さい。

2. Discussion Questions ディスカッション用の質問

For Question 1 you should write about your general impressions of the article you read or video you watched. Questions 2 thru 5 are listed in the Discussion Topic Guide. Write each question on the preparation worksheet and then write a complete answer in English. You are expected to use all of the space available for your answer. A complete answer will make doing a discussion much easier.

質問1には読んだ記事または観た動画の感想を書きます。質問2～5はDiscussion Topic Guideにあります。プレパレーションワークシートに各質問を書き英語で完全な答えを書きます。使えるスペース全部を使うようにして下さい。完全な答えを書いておくとディスカッションがずっと楽になります。

3. Original Question オリジナルの質問

You should think of a question appropriate for this discussion and write the question in English and your answer to it. Other students will be answering your question so take that into consideration when making it. You should write your original question on the blackboard at the beginning of class.

ディスカッションにふさわしい質問を考え、その質問を英語で書き自分の答えも書きます。他の学生たちがあなたの質問に答えることを考慮して質問を作成して下さい。授業のはじめに自分のオリジナルの質問を黒板に書きます。

4. Upon completing the preparation worksheet answer the question at the top: How much time did you spend preparing for this discussion? minutes. Write your answer as a number.

プレパレーションワークシートが完成したら一番上の質問: How much time did you spend preparing for this discussion? Minutes?に答えて下さい。数字で答えを書いて下さい。

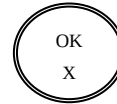
6. How is the Preparation Worksheet evaluated? プレパレーションワークシートの評価

At the start of class the teacher visually checks your preparation worksheet and stamps it with either a blue **OK** or red **X**. Experience has shown that students who are prepared are capable of having a high level and interesting discussion in English. Students who are not prepared cannot discuss well which negatively affects the improvement of other students.

教師は講義のはじめにあなたのプレパレーションワークシートを目視でチェックし、**OK**又は**X**のスタンプを押します。準備のよく出来ている学生ほど有益でレベルの高い英語のディスカッションができることが分かっています。準備の出来ていない学生はディスカッションがうまく出来ないばかりか、他の学生の実力向上も妨げてしまいます。

This is the circle for the **OK** or **X** stamp:

この○の中に**OK**または**X**のスタンプが押されます。



Red **X** Stamp Evaluation 赤の **X**スタンプ評価

1. If a stamp is placed in the circle the score is 0 (Unprepared).
○の中に **X**スタンプが押してあるときは 0 点です。(準備不十分)
2. If a stamp is placed in a place other than the circle the score will be 1(Could Do Better).
○の外に **X**スタンプが押してあるときは 1 点です。(準備に改善の余地あり)

Blue **OK** Stamp Evaluation 青の **OK**スタンプ評価

An **OK** in the circle indicates that all sections of the preparation worksheet have been completed. The teacher will later give it a score of either 2 (Satisfactory) or 3 (Fully Prepared).
ワークシートの全セクションが完成しているとき、○の中に**OK**スタンプが押されます。教師は内容を確認の上、スコア 2 (可)又は 3 (十分に準備済み)の評価をします。

Coming late 遅刻について

A student who comes late will not receive a stamp. This will result in a one point deduction of the score they would originally have received.

遅刻した学生はスタンプをもらえません。これは必ずもらえることになっている 1 点を失うということです。

Forgetting your worksheet ワークシートを忘れた場合

A student who forgets their worksheet may submit it the next week. A completed worksheet will receive a score of 1 point.

ワークシートを忘れた場合は次の週に提出できます。完成しているワークシートには 1 点が与えられます。

When you are absent 欠席について

If you were absent you can earn up to 3 points if you turn in a completed preparation worksheet immediately at the start of the next class for the discussion you missed.

欠席の場合は参加できなかったディスカッション用の完成したプレパレーションワークシートを次の講義のはじめに提出すれば 3 点を得ることができます。

7. What do students do for the Discussion Step? ディスカッションステップ

Format

1. Students are assigned to a group.
2. Students go to the location of their assigned group.
3. The members of the group select the leader for the discussion.
4. The leader starts the discussion.
5. All students participate about equally.

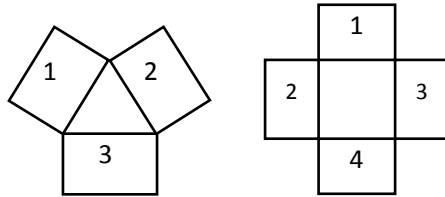
フォーマット

1. 教員がグループ分けをする。
2. 学生達は割り当てられたグループの場所に移動する。
3. グループのメンバーの中からディスカッションリーダーを選ぶ。
4. リーダーがディスカッションを開始する。
5. 全員が均等に参加する。

Desk Arrangement 机の配置

The arrangement of desks is important to facilitate discussion. In the case of three people, a triangle arrangement ensures the greatest eye contact, and in the case of four people, a cross-shaped arrangement is best.

ディスカッションを円滑にするためにはデスクの配置が重要です。3 人のグループの場合、三角が互いの視線が一番よく合う配置です。4 人のグループの場合、十字型の配置が最適です。



8. How do students warm up for discussion? ディスカッションに向けたウォームアップ

Oral Reading (3 minutes) 音読(3分)

Students warm up by reading their preparation worksheet out loud. After joining your group, get out your preparation worksheet and when the teacher tells you to begin, read the answers you have written out loud until the teacher stops you. You should read at your own pace with a voice slightly louder than you normally use.

ウォームアップとして、全員が声を出して自分のプレパレーションワークシートを読みます。グループにわかれ、各自プレパレーションワークシートを取り出し、教師の合図とともに自分の答えを教師がストップをかけるまで声を出して読みます。自分のペースでいつもより少し大きめの声で読みましょう。

9. What are the instructions for the 3 Discussions? 三回のディスカッションの指示

Discussion 1 (Practice):

1. Go over the vocabulary words.
2. Discuss all of the questions.
3. If time permits, talk about additional original questions.
 - ✧ **You are permitted to read** your answers on the preparation worksheet.
 - ✧ You may use a dictionary, cell phone, etc. to look up the meaning of words or expressions.

ディスカッション 1 回目(練習):

1. 書き出した単語を見直す。
2. すべての質問について話し合う。
3. 時間があれば、追加のオリジナル質問について話す。
 - ✧ プレパレーションワークシートに書いた自分の答えを読み上げてもかまいません。
 - ✧ 辞書、携帯電話などを使って単語や表現の意味を調べてもかまいません。

Discussion 2 (Practice Game) ディスカッション 2 回目 (練習試合):

1. Discuss the questions you are interested in as fully as possible.
2. Be sure to talk about your original questions.
 - ✧ You are permitted to refer to your answers on the preparation worksheet.
You should not read them.
 - ✧ You may use a dictionary, cell phone, etc. to look up the meaning of words or expressions.

ディスカッション 2 回目 (練習試合):

1. 自分に興味がある質問について可能な限り話し合う。
2. 自分が考えたオリジナル質問について必ず話す。
 - ✧ プレパレーションワークシートに書いた自分の答えを参考にしてもかまいません。
しかし、答えを読み上げてはいけません。
 - ✧ 辞書、携帯電話などを使って言葉や表現の意味を調べてもかまいません。

Discussion 3 (Game):

1. Discuss your original questions and the questions on the blackboard.
2. Discuss the questions you are interested in as fully as possible.
3. Following the final discussion you should complete the self-evaluation section on the reaction form.
 - ✧ You should talk about the questions without using your preparation worksheet.
 - ✧ You should not use a dictionary, cell phone, etc. to look up the meaning of words or expressions.
 - ✧ Ideally, this discussion will be 100% in English.

ディスカッション 3 回目 (試合):

1. 自分が考えたオリジナル質問と黒板に書き出された質問について話す。
2. 興味のある質問について可能な限り話し合う。
3. 最後のディスカッションの後、リアクション用紙の自己評価枠に記入する。
 - ✧ 参加者は自分のプレパレーションワークシートを使わずに質問について話すようにしましょう。
 - ✧ 単語や表現の意味を調べるために辞書、携帯電話などを使ってはいけません。
 - ✧ このディスカッションは 100%英語で行うことが理想です。

Following Discussion 3, remain seated with your group and take out the reaction form that you picked up at the beginning of class.

3 回目のディスカッション終了後、グループの自分の席にすわったまま、講義のはじめに受け取ったリアクション用紙を取り出します。

10. What do students do for the Reaction Step? リアクションステップ

The reaction form is used to write a reaction. When you pick up the reaction form you should immediately write your name card number on the front and write your name, student number and name card number on the back. The reason you write your name on the back is so that the teacher does not see your name when evaluating your reaction.

リアクション用紙を使って感想を書きます。リアクション用紙を手にしたらすぐにネームカード番号を表に、名前、学生番号、ネームカード番号を裏に書いて下さい。裏面に名前を書く理由は、教員が名前を見ずに評価できるようにするためです。

Following Discussion 3, you should immediately write a self-evaluation score in the self-evaluation score box.

3 回目のディスカッション 終了後すぐに自己評価ボックスに自己評価を記入してください。

What percentage of your speaking was in English? 自分のディスカッションの何パーセントを英語で話しましたか Less than 95% = 1 95% - 98% = 2 99% - 100% = 3 (未記入 = 1)	Self- evaluation
---	---------------------

Note: If you do not write a number in the score box on the right your score will be 1.

注意: スコアボックスに未記入の場合、評価は 1 点です。

You have exactly 15 minutes to write a reaction in English. A reaction should focus on the topic and content of the discussion and be logically organized and written in paragraph form. You should demonstrate your knowledge of vocabulary related to the topic and freely share your opinions, experiences and information regarding the topic.

英語で感想を書く制限時間は 15 分です。感想はディスカッションのトピックと内容に焦点を当てパラグラフ形式で理論的にまとめます。各自はトピックに関連する語彙の知識を示しながら、トピックに関する意見、経験、情報を自由に記述します。

11. What resources can you use when you write a reaction?

感想を書くときに使ってもよい資料は？

When writing a reaction you are allowed to use any resource you want. For example, you can use your preparation worksheet, dictionary, or cell phone. However, you should not copy directly from a resource.

感想を書くときにはどんな資料を使っても構いません。例えば、プレパレーションプリント、辞書、携帯電話などを使用できます。ただし、使用している資料から直接内容をコピーしてはいけません。

12. How is a reaction evaluated? 感想はどのように評価されるのか？

The teacher reads a reaction and scores it based on the quantity and quality of the content. The teacher is looking for a clear expression of your knowledge and thinking about the topic and your reaction to what other students said during the discussion time. The use of English that is specific to the topic will improve the evaluation.

教師は感想を読み内容の量と質に基づいて採点します。教師は本人の知識、考え、他の学生の発言に対する意見などが書かれているか確認をします。トピックに関連する重要な英語の語彙を使用すると評価に有利です。

13. What is the grading scale for a reaction? 感想の評価基準は？

The following grading scale is used for a reaction:

感想の評価基準は以下の通りです。

AA: 11 A: 10 B: 9 ~ 8 C: 7 ~ 6 D: 5 ~ 0

- 14. What is the format for writing a reaction?** 感想のフォーマットは？
1. Do not skip lines within a paragraph. パラグラフ内では行を空けない。
 2. Make a space of one line between paragraphs. パラグラフ間に一行分スペースを空ける
 3. Keep the left margin straight. 左端はきちんと揃える
 4. The right margin should be kept reasonably straight. 右端は大体揃うようにする。

15. How long should a reaction be? 感想の長さは？

These are general guidelines for how the length is evaluated.

感想は長さによって大方以下のように評価されます。

Below ½ of the paper	Below Average	用紙の 1/2 以下	平均以下
1/2 to 3/4 of the paper	Average	用紙の 1/2～3/4	平均
3/4 to on the back of the paper	Above Average	用紙の 3/4～裏面まで使用	平均以上

16. Will grammar usage and English usage affect your score?

文法および英語の使い方は評価に関係するの？

Grammar mistakes are only important if they make it difficult for the teacher to understand your message. I suggest you use the simplest and most direct grammatical constructions. You are under time pressure so you should not be thinking about grammar mistakes while you are writing. Use grammar that you are comfortable with.

Using English that is directly related to the topic can contribute to your evaluation. There is always some vocabulary specific to a given topic and demonstrating that you can use that vocabulary will improve your evaluation. On the other hand, simply using specialized words without being sure of how they are used will hurt your evaluation.

文法的間違いは、それによって本人が言わんとしていることを教師が読み取ることが困難な場合に問題となります。単純かつ最も直接的な文法構造を使用することを勧めます。時間に制限がありますから文法の間違ひはあまり心配せずに書きましょう。自分が使い慣れている文法を使いましょう。トピックに直接関係する英語を使用すると評価に有利です。与えられたトピックには必ず関連する重要な語彙があります。その語彙を使えることを示すと評価に有利です。一方、使い方をよく知らずにただ専門用語を書いているだけの場合は評価に不利となります。

17. What should you write in a reaction? 感想には何を書くか？

These are the kinds of things you should write in a reaction:

1. Your thinking, impressions, and opinions about the topic of the discussion
2. Your reaction to what classmates said during the discussion
3. Your experience
4. Some interesting information that you know
5. Comparing and contrasting two things

感想に書く事柄は以下のようなものがあります。

1. ディスカッションのトピックについて自分の考え、感想、意見
2. ディスカッション中に他の学生が発言した内容に対する自分の反応
3. 自分の経験
4. 自分が知っている興味深い情報
5. 二つの事柄の比較または対比

18. What will result in a bad evaluation? 低い評価になるのはどのような感想か？

These kinds of things will hurt your evaluation:

1. Not focusing on the topic of the discussion
2. Not clearly organizing your message
3. Not being able to properly follow the basic punctuation rules of English
4. Not following the directions about how to complete the form
5. Only repeating what you wrote in your preparation worksheet

以下のような場合は評価は低くなります。

1. ディスカッションのトピックに焦点を当てていない
2. 意見がきちんと整理されていない
3. 基本的な英語の句読法に従っていない
4. フォーム記入についての指示に従っていない
5. プレパレーションワークシートに書いたことをただ繰り返している

At the end of the 15-minute reaction writing time the leader for each group collects the preparation worksheets, reactions, and name cards of the members in their group and brings them to the teacher at the front of the class.

感想を書く時間(15 分間)の終わりに、各グループのリーダーはプレパレーションワークシート、感想、名札をメンバーから回収し教壇にいる教師のところに持っていきます。

Hints for writing a reaction:

1. Write down comments other students make during the discussion.
2. Make notes about what you think are the main points during the discussion.
3. Have your reaction planned in your mind before the reaction writing time.

良い感想を書くためのヒント

1. ディスカッション中に他の学生が言ったことを書きとめる。
2. ディスカッション中に主要なポイントだと思ったことを書いておく。
3. 感想を書く時間が来る前に頭の中で内容を組み立てる。

19. What is expected of the leader during a discussion?

ディスカッション中にリーダーに求められることは？

The leader:

1. Starts the discussion.
2. Ensures that each person has an equal chance to speak.
3. Ensures that each person can be heard.
4. Advances the discussion.
5. Communicates with the teacher in the event there is a problem.

リーダーは

1. ディスカッションを開始する。
2. 各メンバーが均等に話す機会を得られるようにする。
3. 各メンバーの意見が聞かれるようにする。
4. ディスカッションを展開する。
5. 問題が発生した場合に教師と相談する。

20. What is expected of participants during a discussion?

ディスカッション中に参加者に求められることは？

Each participant, including the leader, is expected to:

1. Be fully prepared for a discussion with a fully completed preparation worksheet.
2. Treat each participant in a discussion with respect.
3. Speak in a voice that other participants can hear.
4. Listen attentively to others.
5. Work to expand the discussion by making comments and asking and answering follow-up questions.
6. Use the expressions listed in the Useful Expressions for Discussing a Topic.

リーダーを含め各参加者は

1. 完全に準備したプレパレーションワークシートを使ってディスカッションの準備を完全にする。
2. ディスカッションに参加する一人ひとり敬意をもって遇する。
3. 他の参加者によく聞こえるような声で話す。
4. 他の参加者の言うことをよく注意して聞く。
5. コメントをしたりフォローアップの質問をしたりそれらに答えたりしてディスカッションを展開する。
6. Useful Expressions for Discussing a Topic に載っている表現を使ってみる。

21. What does the teacher do during class? 講義中教師は何をするのか？

The teacher:

1. Checks that students have a completed preparation worksheet for a discussion.
2. Determines the time for each discussion. One discussion is from 15 to 20 minutes long.
3. Observes individual students and discussions and occasionally joins in or even leads a discussion.
4. Answers any question a student has about a topic or English.
5. Solves any problem that a group may be having.
6. Supervises the reaction writing time.

教師は

1. 学生がディスカッションに使用する完全に準備されたプレパレーションワークシートを持っていることを確認する。
2. ディスカッションのタイムキーパーをする。一つのディスカッションの長さは 15 分から 20 分。
3. 各学生の様子およびディスカッションを観察する。時には自ら参加またはディスカッションをリードすることもある。
4. 学生から出されるトピック又は英語に関する質問に答える。
5. グループ内で起こる問題の解決をする。
6. 感想を書く時間を管理する。

22. Useful Expressions for Discussing a Topic

Asking someone for their opinion about a topic

(人にトピックについての意見を求める時)

1. *What do you think ...?*
2. *Do you believe ...?*
3. *Are you for or against ...?*
4. *What are the advantages and disadvantages of...?*

Giving your opinion about a topic

(トピックについて自分の意見を述べる時)

Expressing a strong opinion (強い意見を述べる時)

5. *In my opinion, ...*
6. *In my view, ...*
7. *I definitely think ...*

Expressing your opinion with high certainty

(高い確信をもって意見を述べたい時)

8. *According to government data ...*
9. *There's no doubt that ...*
10. *The truth is ...*

Expressing your opinion with fair certainty

(ある程度の確信をもって意見を述べたい時)

11. *I guess that ...*
12. *I suppose ...*
13. *I believe ...*

Agreeing (同意する時)

Expressing complete agreement (完全に同意する時)

14. *Exactly, ...*
15. *Precisely, ...*
16. *That's absolutely right.*

Expressing conditional agreement

(条件付きで同意する時)

17. *I'd agree with you if ...*
18. *I partially agree, but...*

Disagreeing (同意しない時)

Expressing complete disagreement

(まったく同意しない時)

19. *I don't agree.*
20. *I'm afraid I can't agree.*
21. *I disagree entirely.*

Disagreeing diplomatically (遠回しに同意を避ける時)

22. *I'm not so sure about that.*
23. *I wonder whether that's the case.*
24. *Are you sure about that?*

Disagreeing in part (部分的に同意しない時)

25. *That's not necessarily true.*
26. *That's not exactly right.*
27. *That's only partially correct.*

Countering an argument (反論する時)

Countering directly (真っ向から反論する時)

28. *But ...*
29. *But if ...*
30. *However, ...*

Countering politely using agreement

(相手の意見を受け入れながら柔らかに反論する時)

31. *Yes, but ...*
32. *That may be true, but...*
33. *I understand, but ...*

Logical argument (論理的な論拠)

Questions using "if" (ifを使って質問をする時)

34. *If ..., why ...?*
35. *What if ...?*
36. *What happens if ...?*

Strongly argued questions with "Why"

(Whyを使って強気の質問をする時)

37. *Why do I have to ...?*
38. *Why should ...?*
39. *Why is it necessary ...?*

Asking for clarification (具体的な説明を求める時)

40. *Can you be a bit more specific?*
41. *What's wrong with ...?*
42. *What do you mean by ...?*
43. *Could you explain that more?*
44. *Why do you say that?*
45. *Why not?*

Extensive Listening 多聴

23. What is the purpose of the extensive listening activity?

The purpose of this activity is:

1. to emphasize the autonomous nature of learning and give credit to those students who are interested in making an extraordinary effort to improve their English listening and comprehension skills, and
2. to introduce English language Internet websites which offer various types of viewing and listening content and through use of these develop language ability.

多聴活動の目的は何ですか。

この活動の目的は以下の通りです。

1. 自主的な学びを強調し、英語で聞き理解する能力を高めるために特に努力をしたいと思っている学生を評価する。
2. 様々なコンテンツを見たり聴いたりできる英語のインターネットサイトを紹介し、それらを活用することにより語学力を向上させる。

24. What are the guidelines for the extensive listening activity?

1. Any English language video content on the Internet is acceptable.
2. If a site is viewed multiple times, each time it is viewed the time can be applied to the total. For example, if a video that is 10 minutes long is viewed 3 times, it is 30 minutes.
3. The time logged should be rounded up to the nearest one minute. For example, 3:20 (3 minutes and 20 seconds) should be recorded as 4:00 (4 minutes). Before submitting the log sheet the times should be added and a total written in the Total Time box.

多聴活動のガイドラインは何ですか。

1. インターネットで配信されているあらゆる英語の動画コンテンツが利用可能です。
2. 一つのサイトを複数回閲覧した場合、一回ごとの閲覧時間を合計に加算できます。例えば、10 分間の動画を 3 回閲覧した場合は、30 分となります。
3. 記録する時間は 1 分単位で切り上げます。例えば、3:20 (3 分 20 秒) は 4:00 (4 分) となります。ログシートを提出する前に合計時間を計算し Total Time 欄に記入します。

25. How is the extensive listening activity evaluated?

Each week you write an Extensive Listening Weekly Score on the preparation worksheet. The score is based on the Total Time submitted for the week. The weekly scores will be totaled to calculate a final score. The general content of the written comments will be evaluated.

多聴活動はどのように評価されますか。

週ごとに、プレパレーションワークシートに Extensive Listening Weekly Score を記入します。スコアはその週に提出された Total Time を基にします。すべての週のスコアを合計し最終スコアを割り出します。記入されたコメントの全体的内容を評価します。

Extensive Listening Weekly Score Chart

Time (minutes)	Score
81+	5 excellent
61-80	4 above average
41-60	3 average
21-40	2 fair
10-20	1 passing

26. How should students report about what they watched?

閲覧した内容についてどのように報告すればよいですか。

Complete the log sheet on the back of your discussion preparation sheet. Comments should indicate what you think about the content. Use report paper if the back of the preparation sheet is not enough. The comments should be in English and be 3 or 4 sentences long. The English will not be corrected but the content will be evaluated.

ディスカッションプレパレーションシートの裏面にあるログシートに記入して下さい。閲覧したコンテンツに関して自分が考えたことをコメントして下さい。プレパレーションシートの裏面に書ききれない場合はレポート用紙を使って下さい。コメントは3～4個の英文で書いて下さい。英文の間違ひは訂正されませんが、内容が評価の対象となります。

27. Example of Extensive Listening Log Sheet

Name Card # [99] Total Time [61]

1. Date watched: Oct. 15	Time:	20 x 2 = 40
Program name: Ken Robinson: How schools kill creativity		
Web address: TED		
Comments: I first watched this with Japanese subtitles and then without subtitles. Ken Robinson's talk made me think about my experience growing up and overall I agree with what he said. I think it is important to try and change the educational system so that creativity is nurtured and not killed. One idea I have is to let students study at their own pace and advance to the next grade when they have mastered something.		
2. Date watched: Oct. 16	Time:	21
Program name: Sugata Mitra: Kids can teach themselves		
Web address: TED		
Comments: The hole-in-the-wall experiment is fascinating. This really shows the potential that people have if they are given the opportunity to learn. It also shows the potential uses of educational technology. I am interested in computer programming so I want to think about how I can contribute to developing education.		

28. Recommended Internet Sites

1. TED (**T**echnology, **E**ntertainment, **D**esign) {TED offers lectures by leading people in their field on a wide variety of topics. Talks are around 18 minutes long and have English subtitles.}

<http://www.ted.com/index.php/talks>

2. America's Heartland {This is a professionally produced TV program introducing agricultural related topics. Program segments are 5 minutes long and a full program is approximately 30 minutes}

<http://www.americasheartland.org/>

<http://www.americasheartland.org/episodes/index.htm>

3. RSA: Royal Society for the encouragement of Arts, Manufactures and Commerce {British English, high level}

<http://www.thersa.org/events/vision>

<http://comment.rsablogs.org.uk/videos/>

4. Justice with Michael Sandel {Justice is a complete course from Harvard University with course guide and readings. The lectures are around one hour long.}

<http://www.justiceharvard.org/>

5. VOA Voice of America {American English with some English subtitles & scripts available}

<http://www1.voanews.com/learningenglish/home/>

<http://www.youtube.com/voalearningenglish>

6. Battle of Ideas {British English – many debate-type topics}

<http://www.battleofideas.org.uk/>

7. YouTube EDU

<http://www.youtube.com/education?b=400>

8. Folk Streams {Documentary films about American culture}

<http://www.folkstreams.net/>

9. Democracy Now {Professionally produced TV program about covering various topics in depth.}

<http://www.youtube.com/user/democracynow>

10. Big Think {recommend Big Think's Top 10 videos / some scripts available}

<http://bigthink.com/>

11. MITOpenCourseware {Massachusetts Institute of Technology courses for free.}

<http://ocw.mit.edu/courses/>

<http://www.youtube.com/user/MIT>

12. MIT World Distributed Intelligence {On demand videos from MIT}

<http://mitworld.mit.edu/>

13. NASA video gallery

<http://www.nasa.gov/multimedia/videogallery/index.html>

14. Academic Earth {Online courses from the world's top scholars.}

<http://academicearth.org/> <http://www.academicearth.org/playlists/>

15. Weather Channel

<http://www.weather.com/>

16. C-SPAN TV {Live TV/Radio; Go To Video Library}

<http://www.cspan.org/>

17. Euronews {European news in a variety of languages; Watch Euro News Live}

<http://www.euronews.com/>

18. Reason TV {recommend Drew Carey videos Ep. 1-26}

<http://reason.com/reasontv>

19. NHK World

<http://www3.nhk.or.jp/nhkworld/english/news/>

English Language Learning Sites

20. English Central

<http://www.englishcentral.com/>

21. ello {English Listening Lesson Library Online}

<http://www.ello.org/>

Dictionary Sites

<http://www.popjisyo.com/WebHint/Portal.aspx>

<http://www.alc.co.jp/>

<http://trans.glova.jp/>

<http://rikaichan.mozdev.org/>

Translation Industry Related Sites

<http://www.translator.jp/english/>

<http://jpn.proz.com/>

29. What factors determine a student's grade?

成績の評価項目は何ですか。

1. Total preparation worksheet points
2. Total reaction points
3. Total in-class participation points
4. Total extensive listening points
5. Observation of student activity by the teacher
6. Attendance (In this course there is no test. Students receive points for every class. Therefore, each class a student misses means they will not receive the points for that class. It is typical that a student's grade drops one level for each absence.)

1. プレパレーションワークシートのトータルスコア
2. 感想の評価
3. 授業への参加
4. 多聴の評価
5. 教師の目から見た学生の活動状況
6. 出席率（このコースにはテストがありません。代わりに学生は各授業でスコアを取得します。従って、授業を欠席するたびにその授業に対するスコアを取りそびれることになります。通常、一回欠席するごとに成績が一段階下がると思ってください。）

30. What should a student do to get an AA grade?

AA 評価を得るには何が必要ですか。

1. Get a maximum score on ALL of the preparation worksheets.
 2. Participate positively as a member and leader during discussions.
 3. Average 10 points or more for the reactions. Consistently write reactions that are long enough to communicate your thinking in detail and demonstrate your knowledge of the topic and comprehension of what other students said.
 4. Average at least 4 for the Extensive Listening Weekly Score
 5. Attend all of the classes.
1. すべてのプレパレーションワークシートで満点を取る。
 2. ディスカッションにメンバーとしてまたリーダーとして積極的に参加する。
 3. 感想で平均 10 点以上を取る。自分の考えを詳細に伝え、トピックに関する自分の知識及び他の学生達の発言に対する自分の理解を実証する内容を含む十分な長さの感想を常を書く。
 4. 多聴の平均 Weekly Score が 4 以上であること
 5. すべての授業に出席する。

31. What is the minimum required to get credit with a C grade?

C 評価を得るには最低何が必要ですか。

1. Get an average of at least 2 on the preparation worksheets.
 2. Participate positively as a member and leader during discussions.
 3. Average 6 points or more for the reactions.
 4. Average at least 1 for the Extensive Listening Weekly Score
 5. Attend at least 2/3 of the scheduled classes.
1. プレパレーションワークシートで最低平均 2 点を取る。
 2. ディスカッションにメンバーとしてまたリーダーとして積極的に参加する。
 3. 感想で平均 6 点以上を取る。
 4. 多聴の平均 Weekly Score が 1.0 以上であること
 5. 授業の 3 分の 2 以上に出席する。

Discussion Topic Guide

&

Discussion Questions

2014-15 1st Semester C1/2

Name

Instructions:

1. Look at ALL of the TED Talk topics and discussion questions.
2. Choose the 3 you are most interested in discussing.
3. Write the numbers of your top 3 choices here: 1. _____ 2. __ 3. __

	#	TED Talks	
	1	Ken Robinson says schools kill creativity	学校教育は創造性を殺してしまっている
	2	Helen Fisher: Why we love, why we cheat	人が恋する理由
	3	Markham Nolan: How to separate fact and fiction online	オンライン上で 事実とフィクションを区別する方法
	4	Amy Cuddy: Your body language shapes who you are	ボディラングージが人を作る
	5	Jeff Speck: The walkable city	歩きやすい都市
	6	Hyeonseo Lee: My escape from North Korea	北朝鮮からの脱出
	7	Bryan Stevenson: We need to talk about an injustice	司法の不正について話さなければなりません
	8	Matt Cutts: Try something new for 30 days Graham Hill: Less stuff, more happiness	マット・カットスの 30 日間チャレンジ ものは少なく、幸せは多めに
	9	Dan Pink on the surprising science of motivation Derek Sivers: How to start a movement	やる気に関する驚きの科学 社会運動はどうやって起こすか
	10	Philip K. Howard: Four ways to fix a broken legal system	壊れた法制度を直す 4 つの方法
	11	Robin Ince: Science versus wonder? Tyler DeWitt: Hey science teachers -- make it fun	科学は驚きを失わせてしまうのか? 科学の先生へ呼びかけ・楽しくしましょう!
	12	Stewart Brand + Mark Z. Jacobson: Debate: Does the world need nuclear energy?	討論：原子力発電は必要か?
	13	Dave Meslin: The antidote to apathy	無関心への特効薬
	14	Patricia Ryan: Don't insist on English!	英語だけに固執しない!
	15	Mikko Hypponen: How the NSA betrayed the world's trust -- time to act	NSAはいかにして世界の信頼を裏切ったのか——今、行動の時
	16	Peter Saul: Let's talk about dying	死に方を話し合おう
	17	Joel Levine: Why we need to go back to Mars	なぜ今火星再探査が必要なのか
	18	Jamie Oliver: Teach every child about food	子ども達に食の教育を
	19	Shawn Achor: The happy secret to better work	幸福と成功の意外な関係
	20	Anas Aremeyaw Anas: How I named, shamed and jailed	どうやって名前をさらし、汚し、刑務所に送り込んだか
	21	Rodney Brooks: Why we will rely on robots P.W. Singer: Military robots and the future of war	なぜ、私たちはロボットに頼ることになるのか

1

Ken Robinson says schools kill creativity (19:29)

ケン・ロビンソン「学校教育は創造性を殺してしまっている」

http://www.ted.com/talks/ken_robinson_says_schools_kill_creativity.html

Sir Ken Robinson makes an entertaining and profoundly moving case for creating an education system that nurtures (rather than undermines) creativity.

サー・ケン・ロビンソンは、人間の創造性を（弱めてしまうのではなく）育てていくための教育システムを構築している。彼のやり方はエンターテインメント性に溢れると同時に、我々の心の奥底に何かを強く訴えかけてくる。

Discussion questions:

2. What do you think it means to be intelligent? What do you think it means to be creative?
3. How do you feel about your experience as a student? What good and bad experiences have you had?
4. What problems do you see in the education system in your native country?
5. How would you change the educational system in your native country to improve it?

2

Helen Fisher: Why we love, why we cheat (23:31)

ヘレン・フィッシャー氏が語る「人が恋する理由」

Filmed Feb 2006

http://www.ted.com/talks/helen_fisher_tells_us_why_we_love_cheat.html

Anthropologist Helen Fisher takes on a tricky topic - love - and explains its evolution, its biochemical foundations and its social importance. She closes with a warning about the potential disaster inherent in antidepressant abuse.

人類学者のヘレン・フィッシャー氏は、「恋愛」という難しい話題を取り上げ、その進化、生化学的な根拠、社会的重要性について述べる。最後には、抗うつ病薬の乱用がもたらす可能性のある害悪についても言及している。

Discussion questions:

2. What is “love” for you? How would you define it?
3. What do you think is important to build a good relationship with someone?
4. How is marriage viewed in your country? What are the marriage trends?
5. What activity do you think is appropriate for a first date? Why?

Example of a Preparation Worksheet プレパレーションワークシートの例

Name [] [] [] Name Card # []
romaji Japanese ID#

How much time did you spend preparing
for this discussion? 40 minutes

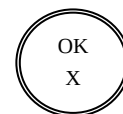
Extensive Listening
Weekly Score

5 / 5

Vocabulary: Write 4 keywords for this **topic**.

1. talent 才能 2. extraordinary 並外れた
3. creativity 創造力 4. innovation 革新

Fully prepared 3
Satisfactory 2
Could Do Better 1
Unprepared 0



Due Date _____ Topic # 1 Title: **Ken Robinson says schools kill creativity**

Discussion Questions:

1. What do you think about the presentation(s)?

A1. I agree with this presentation. I think schools kill creativity, too. In fact, children have extraordinary capacities for innovation. I like children, because when I talk with children they often say something funny or clever that I think is creative. In school, adults and teachers judge a student by their score. So, those things that are easy to give a score to become important. I think this kills creativity.

2. What do you think it means to be intelligent? What do you think it means to be creative?

A2. I have studied in school most of my life. So, I tend to think that an intelligent person is a person who gets a high score. But now, in university, I have met a lot of different types of people and I notice that intelligence does not only mean getting a high score. I think creative people tend to do things that ordinary people can't do.

3. How do you feel about your experience as a student? What good and bad experiences have you had?

A3. I am mostly satisfied with my experience as a student. When I was younger I was disappointed that I couldn't draw well or sing well, but when I got a good score it made me and the adults around me happy. My one bad experience was that everyone assumed that I would go to university. I am happy to be at Tohoku University, but I don't think it is necessarily good to force a student to go to university.

4. What problems do you see in the education system in your native country?

A4. I think the university entrance examination system is a bad point in Japan. We study for the examination and succeeding in the examination is the main goal. The point of education, especially in high schools, is to study for the university entrance exam. Schools do not encourage students to study something they are interested in. I think this is a very bad situation.

5. How would you change the educational system in your native country to improve it?

A5. First, we must throw away the thinking that everyone must go to university. School and society must be developed so that all types of people can realize their potential. Second, I think all universities should interview prospective students as part of their application process. This will make students think more about their purpose for going to university.

6. Write your own question related to this topic and write your answer.

Original Question: What do you think about the way your parents educated you?

A6. My father is an elementary school teacher so he has a lot of confidence that he knows everything about education. But, I don't like the way he treated me. He never thought about my feelings and always thought he was right. Even when I know he is right, I think he should listen to my opinion, too.

Example of an Extensive Listening Log Sheet 多聴ログシートの例

Name Card # [] Total Time [96]

1. Date watched: 4/7	Time:	20 x 2 = 40
Program name: Ken Robinson says schools kill creativity		
Web address: TED		
Comments: I watched it with Japanese subtitles the first time and the second time with English subtitles.		
2. Date watched: 4/8	Time:	20
Program name: Ken Robinson: How to escape education's death valley		
Web address: TED		
Comments: My parents are teachers so I am interested in this topic. I agree with Ken Robinson that teachers need to facilitate learning. I also think there is too much emphasis on standardized tests in education.		
3. Date watched: 4/9	Time:	3 x 2 = 6
Program name: Academic Writing: Beyond the Five-Paragraph Essay		
Web address: http://learningenglish.voanews.com/media/video/1615459.html		
Comments: In the future I will have to write academic papers in English so I was curious about this video.		
4. Date watched: 4/9	Time:	9
Program name: One Billion Tons of Food Wasted Each Year		
Web address: http://learningenglish.voanews.com/audio/audio/375067.html		
Comments: I am interested in this problem and concerned at how much food is wasted. I want to support local farmers as much as possible.		
5. Date watched: 4/10	Time:	21
Program name: Sugata Mitra: Kids can teach themselves		
Web address: TED		
Comments: The hole-in-the-wall experiment is fascinating. This really shows the potential that people have if they are given the opportunity to learn. It also shows the potential uses of educational technology. I am interested in computer programming so I want to think about how I can contribute to developing education.		
6. Date watched:	Time:	
Program name:		
Web address:		
Comments:		

Original Question List

1. What do you think about Japanese education?
2. What do you think is the problem with English education in Japan?
3. What kind of education do you want to see in elementary, junior high, and high school?
4. Do you think clever and creative are opposites?
5. Have you ever been taught by a very good or very bad teacher?
6. If you are given authority, what decision would you make to change the education system?
7. What subjects do you think are important for your own life?
8. Have you studied any kind of art outside of school?
9. If you become a teacher, how will you teach?
10. In the future, how should we bring up children?
11. Do you want to be a teacher?
12. What do you think about studying English in the Japanese education system?
13. Should we increase the amount of time students study technical subjects?
14. Which subjects did you like in high school?
15. What do you think about achievement tests?
16. What do you think about the way your parents educated you?
17. What do you think about home education?
18. Which do you think you are, a creative or intelligent person, or both?
19. Did you like your junior high and high school?
20. What do you think about the six-year education system combining junior and senior high school?
21. How will you teach your children?
22. What do you think about *yutori kyouiku*?
23. What is your image of a good teacher?
24. What do you think of Japanese universities?
25. If you have a certain specialty or skill, would you still go to university?
26. What do you do to develop your creativity?
27. Do you think that art and music should be required subjects in university?

Example of a Reaction リアクションの例

Date: April 14, 2014 Name Card # [99]

What percentage of your speaking was in English?	Self-evaluation
Less than 95% = 1 95% - 98% = 2 99% - 100% = 3 (未記入 = 1)	3

Reaction (Write in paragraphs in English)

Evaluation:	
AA: 11 A: 10 B: 9, 8 C: 7, 6 D: 5...	Score

I think that today's topic is very important. Many people all over the world are concerned about the problems of education. Through Ken Robinson's presentation and the discussion I could understand many things.

First, one of my classmates suggested that one of the education system problems in Japan is the compulsory education system. He said that while this system has many good aspects it also means that all students are allowed to graduate even if they don't study well. I listened to his idea and I think that this is a problem, too. Although this problem is very difficult to solve, some people are trying to address it. For example, the mayor of Osaka, Mr. Hashimoto, said that elementary and junior high school students who do not have passing grades will have to repeat that year in school. I think this idea is a method to solve an educational problem, but it also is an example of how schools kill creativity. This creates an environment where only the grades of certain subjects are important and all other subjects become unimportant. So, I don't think this is a good result.

Another thing I talked about with my classmates was the difference between intelligent and creative. I think they are different, but I could not explain what the main difference is, so during these discussions I asked my classmates what they thought. One person said that when intelligent people work they need direction from a boss or some other person, but creative people can find and discover work or something on their own. This explanation is very useful and gives me hope that I can be a creative person.

Finally, we discussed about "yutori kyoiku". At first I felt that it is good because we don't have to study hard. However, after hearing some ideas, my opinion changed. One student said that younger people study hard now because they did not experience "yutori kyoiku" and we have to compete with these people. They are more intelligent and creative, so now I resent it and feel I have to study more to keep up with them. This was a very bad policy by the government and shows how important educational policy decisions are.

Name Ichiro Watanabe 渡辺イチロ B0AA9999 Name Card # [99]
romaji Japanese ID #

Discussion-based Communication Class Flow

Time
(min.)

Prior to the start of class

1	Teacher writes location of groups in the classroom on the blackboard.	3
2	Teacher puts out student name cards, blank reaction paper,graded preparation worksheets and reaction papers from the previous class.	
3	Students pick up name card, blank reaction paper, graded preparation worksheet and reaction paper from the previous class.	10
4	Students write their original question from the preparation worksheet on the blackboard.	
Following the start of class		
5	Students write their original question from the preparation worksheet on the blackboard.	
6	Students put their preparation worksheet on their desk.	3
7	Teacher visually checks and stamps each student’s homework.	
8	Teacher introduces the original questions on the blackboard.	3
9	Teacher assigns students to a group.	2
10	Students move to their group location and organize their desks.	
11	Students warm up for discussion by reading their preparation worksheet out loud.	3
12	Students choose a group leader.	15 - 20
13	Discussion 1 (students discuss and teacher observes)	
14	Teacher ends Discussion 1	
15	Teacher assigns students to a new group.	2
16	Students move to their new group.	
17	Students choose a leader.	15 - 20
18	Discussion 2 (students discuss and teacher observes)	
19	Teacher ends Discussion 2	
20	Teacher assigns students to a new group.	2
21	Students move to their new group.	
22	Students choose a leader.	15 - 20
23	Discussion 3 (students discuss and teacher observes)	
24	Teacher ends Discussion 3	
25	Students write their individual reaction.	15
26	The group leader collects the reactions, preparation worksheets, and name cards and brings them to the teacher at the front of the class.	5

Post-class processing by the teacher

1	Evaluate the preparation worksheets.	10
2	Evaluate the reactions.	30
3	Input the scores: preparation worksheet, reaction, self-evaluation, extensive listening	10
4	Scan the preparation worksheets and reactions.	5

現状報告 2：高大，真の接続の観点から

北海道旭川北高等学校

松井 徹朗 教諭

【講師紹介】

石井光夫教授（司会）：

お二人目も英語教育の実践について、お話をいただきます。北海道旭川北高等学校の松井先生にお願いしたいと思っております。先生、どうぞよろしくお願いいたします。

松井徹朗教諭：

先ほど、アイコースト先生の東北大学での授業を見させていただきまして、現在、高校で英語での授業を受けている子たちがスムーズに入っていける授業だなという印象を受けました。

旭川北高校は、英語による授業をスタートして10年目になります。きっかけは、国立教育政策研究所の指定校事業です。指定にあたり、かなり厳しい条件が出されました。それは、英語の授業から訳読を排除すること。ALT とのティームティーチングではなく、ひとりの日本人教員が40人の生徒を相手に英語で授業を行うこと。それ以外にも色々条件がありました。後で分かったことですが、その指定校事業は、昨年よりスタートした「新学習指導要領」に向けたモデル校としての実践を求めるものでした。10年後の今も英語による授業を続けられているということは、生徒たちがその授業を受け入れたからなのです。これまでのことを、限られた時間ではありますが、先生方にお話ししたいと思います。

英語教育に関わる部分からスタートしますが、途中からは他教科の先生方とも共有できる内容と思っております。まず、10年前に指定校になった時、そこにいた英語科教員は、その指定校事業のために集められた人間ではなく、

たまたまそこにいた8人の教員でした。私たちには短期間でのパラダイムシフトが迫られました。発想の大転換が。少しずつ変えながら次の年度の4月からの本格スタートと思っていたのですが、その年の9月から始めるように言われました。準備期間はわずか2ヶ月です。



皆様のお手元にある資料は、私たちがそれぞれの学年の授業で使っているものです。教科書本文のプリントの後に、ティーチングプロシージャというプリントがありますが、それは、私たちが独自に作った「教員用指導マニュアル」です。これは、今の教科書のものですが、10年前も同じようなものを作りました。精神論で乗り切れるものではないので、少なくとも先生方にはある程度のシナリオを作ってあげて、それを参考にしながら授業を進めてもらいまし

た。2ヶ月、3ヶ月すると、先生方に自分らしさを出そうという気持ちが芽生え、マニュアルに頼り切らない、カスタマイズした授業を行うようになりました。そして生徒もそのような授業を受け入れました。

それまで行っていた英語の授業は、訳読・文法説明中心のものでした。それを、コミュニケーション能力育成の授業に変えたわけです。

文法・訳読中心の授業は、全て日本語を介して英語を理解するという授業の進め方です。実際の1対1のコミュニケーション場面で、逐一日本語から英語に、英語から日本語に頭の中で訳しては、即応が求められるコミュニケーションに対応できません。日本語を介さないで英語を読んだり聞いたりできるようにするには、分かっている語彙や表現、または文脈といったものを手がかりとして、意味を推測しながら理解するしかないわけです。また相手がいる場合は、その人の顔の表情とか、その場の状況、雰囲気などから判断しながら、相手が言わんとしていることを推測するしかありません。そうすると、教員がしなくてはならないことは、英文を説明しながら翻訳することではなく、生徒に内容理解のための「想像力」を身に付けさせることになります。仮に生徒が、話されたり書かれたりしている英語の7割しか理解できなくても、残りの3割を想像力で埋めるという、そういう力を。

私たちが小中学生の頃初めて手にした現代仮名遣いではない芥川龍之介や夏目漱石を読んだ時、分からない漢字や表現に出会う度に立ち止まって辞書を引いて読んでいないわけです。きっとこういうことを言っているのだろうと想像しながら読み進んだと思います。それと同じことを英語のリーディングの授業でもできると私たちは考えました。

想像力とは何なのか？小さな子どもが何かを伝えようとしている時に、足りない語彙力のためその内容が伝わらない時、聞く私たちは、その子が伝えたいことを想像しながら理解し

ようとするわけです。同じことが、お年寄りの言葉でも言えると思います。つまり、こういうことを言っているのかいと、こちらから質問して、相手が言わんとしていることを探ります。または、クラスで元気のない友達がいたら、どうしたのかなと気かけながら、放課後一緒に帰ってあげようかなとか、例えば、そういう気持ちが想像力です。相手の気持ちを察する力が。結局、コミュニケーションというのは、相手の気持ちを察することであって、自分の気持ちを相手に理解してもらうことです。ゆえに、想像力の欠如はミスコミュニケーションを招きます。

英語の授業で訳読をしないことで、私たちは生徒の想像力を鍛えています。曖昧さを受け入れながらも理解しようとする態度を育てています。私たちが英語の授業で教科書本文の和訳を渡さない理由もここに 있습니다。

訳読のない英語の授業では、生徒が口を開かなければ授業が成立しません。授業は、教師と生徒、生徒同士のインタラク션을中心に進められるからです。生徒からの反応がなければ、教師は50分間自分で英語をしゃべり続けることになります。

生徒にとっても、自分の考えを人前で、しかも英語で話すことは非日常的な体験です。指示を待ち、それに従うことに慣れている生徒たちにもパラダイムシフトが求められます。正しい答えはひとつと思っている生徒や、他者と話し合いながら自分の考えをまとめることに慣れていない生徒にとっても、発想の転換が求められます。自分から積極的に意見を言うとか、自分はそうは思わないと言うことは訓練されなければできません。生徒が教師の顔色を見ないで自発的に自分の意見を言えるようするには、それができる雰囲気を教師が教室内に作り出さないと駄目なんです。つまり、息苦しくない、楽しそうな、失敗しても先生に怒られない、そういう雰囲気をまず教室内に作らないと、「なぜ、お前たちしゃべらないんだ」とか、「もっ

と大きな声で」とか言っても、生徒は動かないでしょう。

教室の中には、様々な子供たちがいます。体の丈夫な子もいれば、弱い子もいますし、足の速い子もいれば、遅い子もいます。当然、学習の早い子もいれば、遅い子もいます。それは、その子たちの持つ個性の一部であって、遅いからといって教師によって責められるべきものではありません。それは子どもたちのせいではないですから。その認識が、コミュニケーションを教える教師の側に無いと、なかなか厳しいものになってしまいます。つまり、遅くても遅れてもいいから、個々の生徒をゴールまで連れて行くという教師の姿勢が子供たちに見えないと、彼らはついて来ません。当然のことながら、そのゴールは大学入試ではありません。

グローバル人材の育成に向けて高校で行っていることは、ここからは英語だけの話ではありませんが、それは、コミュニケーション能力と、他者と協働して答えを見出すコラボレーション能力を養うことです。授業の中でのペアワークやグループワークを通して、生徒同士が協力しながら、話し合いながら問題を解決するという、そういう力を授業の中で付けております。

もうひとつは、他者との違いを受け入れ、相手をリスペクトする心ですね。これを育てています。どこの国の誰であろうとも、リスペクトできる気持ちを持つ人を育てようとしています。

高校レベルでのグローバル人材の育成は、その部分に焦点が当てられています。そういう子供たちが高校を卒業し、社会へ出たり、大学で専門分野を勉強する時に、彼らが困らないよう、そのための基礎体力を今付けているのです。

まとめに入ります。「高大、真の接続の観点から」という今回の私の演題ですが、これまで述べてきたような教育環境で育った子供たちが大学へ進むことになります。大学ではそれぞれの専門分野において、学生たちの想像力、イマジネーションと、作り出す方の創造力、クリ

エイティビティを更に育てていってもらいたいと思っております。

ここ宮城県では 80%を超える高校で英語による授業が始まっております。海外に出なくとも、現在、日本のいたるところに異文化で生まれ育った人たちが多く暮らしています。グローバル教育は、一部のエリートを養成するためのものであって欲しくありません。

北海道で、私は、色々なところでワークショップのお手伝いをさせてもらっています。北海道以外でも、させてもらっていますが。去年は、北海道内の高校を 8 校を回って来ました。回って来るというのは、8 校それぞれの学校を、6 月と 11 月に分けて、年 2 回訪問するのです。その英語の先生と一緒に研修をしました。それらの学校の多くは小さな学校です。例えば襟裳岬って知っていますか？えりも町にあるえりも高校とか、阿寒の近くの屈斜路湖にある弟子屈(てしかが)高校など、本州の皆さんが漢字を見ても読めない学校です。あとは最北のサロベツ原野にある学校にも行って来ました。小さな学校では一人とか二人の英語教員が教えています。そういう先生方に支援をするために、私は昨年、JR で行ける所へは JR で行きましたが、行けない所は車で周り、去年は学校訪問だけで 4,800 キロ北海道を走りました。

その中のある学校では、一人しかいない英語の教員が、1 学年 20 人の生徒に英語で授業をしていました。過疎化が進む小さな町にある学校です。そこには、地元の子供ばかりでなく、離れた町村から通学してくる子もいます。中には、学習障害、そして知的障害が疑われる子もいます。そのような様々な個性を持った子供たちがそこに集まって来ているわけです。その子供たちに対して先生が色々サポートをしながら、子供たち同士で協力させながら、ほぼオールイングリッシュで授業をしていました。

英語の授業を英語で行うことについては様々な意見がありますが、北海道では、そういう子供たちが笑顔で授業を受けております。

「グローバル人材の育成」イコール「グローバルなビジネス等の世界で活躍できる人材の育成」イコール「エリート育成」ととらえられると困ります。世界で活躍できる人材の育成は大切です。しかし、世界へ出て活躍まではできなくとも、地域社会に住む異文化から来た人たちとともに暮らし、ともに働くことは、すでに私たちの暮らしの中での現実となっています。グローバルな視点を持つことは、すべての子供たちにとって必要なことです。彼らが、グローバル社会で日本人として逞しく、そして幸せに生きていけるよう、高大の接続が更に密接なものに進化することを希望します。

以上であります。ありがとうございました。

(拍手)

石井光夫教授（司会）：

ありがとうございました。生徒一人一人に向きあったきめ細やかなコミュニケーション能力を育てるというものをお話いただいたように思います。

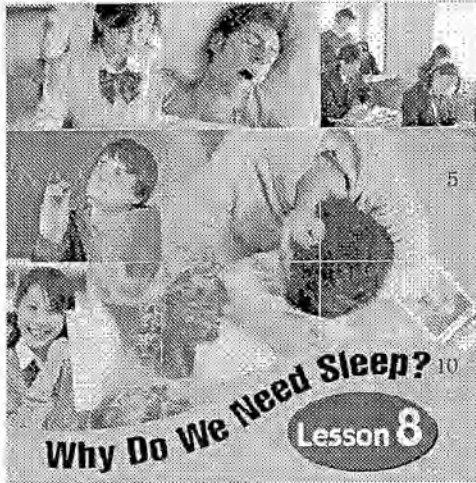
第20回東北大学高等教育フォーラム

グローバル人材の育成に向けて

— 資 料 —

「高大、真の接続の観点から」

北海道旭川北高等学校 松井徹朗



Nowadays, you are always flooded with information. At school, you study many subjects, such as math, history, and chemistry. Outside of school, you watch TV, surf websites, chat with friends, etc. No wonder you can't remember everything. But then, how do you prepare for exams?

Some students say they study all night long before exams. Have you done it, too? Did you get high scores, then? If not, maybe you needed more sleep.

Scientists still don't know whether sleeping directly improves memorizing ability. But they already know it slows down forgetting.

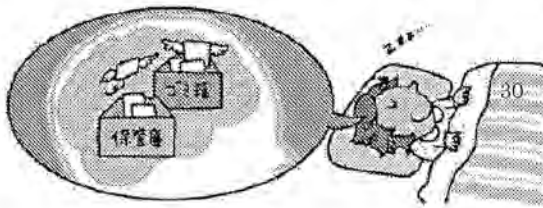
There have been many studies about the effects of sleep on memory. One of them has shown that sleep is good for keeping information longer.

In this study, 24 people were asked to memorize 20 random pairs of nouns at 9 a.m. They were told not to sleep for 12 hours. Then, at 9 p.m., they took a test that checked their memory.

Next, another 24 people memorized the same pairs at 9 p.m. Then, they slept for 7 hours before they took the test at 9 a.m.

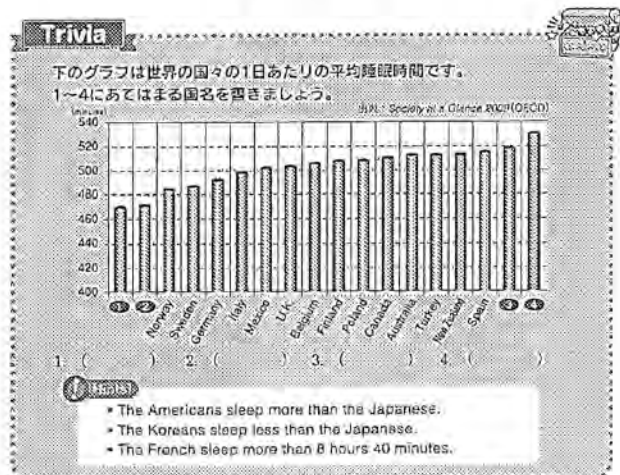
The result was interesting. The second group scored 13% higher than the first.

What does the result mean? Sleep is necessary for a good memory. While you are sleeping, your brain sorts out information first. It then keeps what's important and throws away what's not. Therefore, if you don't sleep, it becomes difficult to find information you need.



Sleep is also necessary for the health of your brain. While you are awake, your brain gets tired from processing so much information. Thus, you need to sleep for your brain's recovery, too.

"If I wanted to do well on tests, I would sleep right after studying. I would go to bed before getting any more unnecessary information," says a sleep expert.



Why Do We Need Sleep?

[Allotment]

- | | |
|-----------------------|---|
| • 1st to 3rd period : | <ul style="list-style-type: none"> • Introduction of the material • Using the supplementary handout, the teacher explains idioms, phrases and structures covered in the text, and does a pronunciation check of the example sentences. • Have students become accustomed to the usage of the expressions in the handout. • Introduction of "the subjunctive mood" [仮定法] • Presentation of the assignment |
| • 4th to 6th period : | <ul style="list-style-type: none"> • Students' silent reading of the text • Reading of the text and pronunciation check • Have students guess the content with the teacher's assistance. • Explanation of the content by the teacher • Chorus-reading of the text |

< 1st to 3rd period >

I. Introduction of the material [教科書本文への導入]

The average life span of your generation will be around 90 years. (*Write on the board "the average life span = 平均寿命."*) So you will probably be able to celebrate your 90th birthday. By the way, how many hours do you sleep? (*Ask.*) If you need 8 hours sleep every day and live to be 90, you'll spend 30 years of your lifetime sleeping in bed! Isn't it amazing? Do you think it's a waste? (*Write on the board "It is a waste! = もったいない"*) If you think it's a waste, put up your hands. Those of you who have answered yes, what would you like to do instead of sleeping? (*Find volunteers for the answer. This is a chance for interaction.*) [インタラクション] What would you like to do? (*Try to make the interaction with each volunteer as long as possible, occasionally directing questions to other students.*)

Now, those of you who have answered no, why do you not think it's a waste? This is a question for those of you who didn't raise your hand. (*Find volunteers for the answer.*) What do I think? I like spending one third of my life sleeping in bed. (*Write on the board "one third = 1/3"*) Because while I'm sleeping, I can dream. I can dream of me dancing with a princess (or a prince). I can be a Prince Charming in white tights (or a Snow White in a cute dress). (*Write on the board the words "Prince Charming" (or Snow White)" and have students look up the words in the dictionary.*) To dream in sleep is a good distraction from a stark reality, I think. (*Write on the board "a stark reality = 厳しい現実"*)

In this lesson, we will learn why we need to sleep.

II. The teacher explains the expressions covered in the text (using the supplementary handout).

Have students become accustomed to the usage of the expressions in the handout.

[supplementary handout を使って、本文中の重要表現の使い方を学ばせる。例文をコーラスリーディングで音読する。発音指導も行う。]

Take out your supplementary handout. I'm going to read the example sentences aloud. Everybody repeat after me. (*The teacher model-reads the example sentences and has students repeat several times, checking the pronunciation of the new words in the sentences.*)

(*As for the first 8 expressions "be flooded with ~," "No wonder ~," "prepare for ~," "all night long," "if not," "whether ~," "There have been ~" and "the effects of A on B," model-read the example sentences for students to follow, occasionally stopping for pronunciation check.*)

Refer to the box in the handout. You have 7 minutes for silent-reading. Try to understand the rule of these expressions. (*When the time is up, chorus-read the example sentences and then give the following instructions.*) Now, let's practice how to use these expressions.

[作文] Make at least one sentence using this grammar. You have 7 minutes. (*Give time. When the time is up, find some volunteers to write their work on the board.*) Any volunteers to write your work on the blackboard? (*If none, nominate 4 to 5 students. Correct mistakes if any.*)

(*For the next two expressions "while ~" and "sort out," just follow the reading procedure.*)

III. Introduction of the subjunctive mood [文法「仮定法」の解説及び演習]

(*Introduce "the subjunctive mood." Have students refer to the supplementary handout. Give time for students to silent-read the box in the handout dealing with "the subjunctive mood." Have them find out for themselves the rules of the grammar.*)

[supplementary handout 中の「仮定法」の部分を黙読させ、その文法のルールを見つけてさせる。]

Refer to the box dealing with the subjunctive mood (仮定法). You have 20 minutes. Silent-read the explanations and example sentences in the box. Find out for yourself the rules of this grammar. (Give 20 minutes. When the time is up, explain in Japanese. Chorus-reading of the example sentences follows.)

Now, I'll give you an assignment. [課題提示] Write "words of love that you want to text to someone." You have to use 仮定法, the subjunctive mood. You cannot use direct expressions such as "I love you" or "I like you." (← Write these instructions on the board. Say these first in English, and then in Japanese for the students' full understanding of the assignment they have just been given.)

You can start working on it now. In the next lesson, you are to present your work on the blackboard. The presentation of "words of love" will be like this: first, I'll pick 5 boys. When they have finished writing their work on the blackboard, all the girls in class evaluate the boys' work. Girls will choose the one they would like to receive. The boy who gets the most girls is a winner. Then we'll switch to girls as presenters and boys this time will evaluate their work. We'll repeat this procedures until everybody is done. Is the assignment clear? (← Give these explanations first in English and then in Japanese.)

[課題: 「メールでの愛の告白」: 好きという気持ちをメールで相手に伝える。(条件) ① 仮定法を使うこと。② "I love you" とか "I like you" という直接的な表現を使ってはいけない。]

(次回の授業で課題を発表する。最初は5人の男子に、黒板に出て「愛の告白」を書いてもらう。評価するのはクラス的女子全員。自分がもらって嬉しいメールをひとつ選ぶ。女子の支持が一番多かった男子が winner となる。次に発表する5人は女子。評価するのは男子となる。これを8回繰り返すと全員が発表したことになる。)

IV. Presentation of the assignment [課題の発表]

(Presentation is to be conducted as mentioned above.)

< 4th to 6th period >

I. Students' silent reading of the text [ここで初めて生徒は本文を読む。(本文の予習は禁止している)]

(Give 10 minutes to read and understand the passage. Students are not allowed to refer to the supplementary handout nor a dictionary.)

[黙読の時間を10分与える。supplementary handout も辞書も使わせない。]

You have 10 minutes. Read the passage silently. You cannot look at the supplementary handout. You cannot use a dictionary. (Give time for reading.)

II. Reading of the text and pronunciation check [本文の音読と発音指導]

(Have students chorus-read the passage after the teacher, occasionally stopping for a pronunciation check.)

Now, I'll read and you repeat after me.

III. Have students guess the content with the teacher's assistance. [生徒に本文内容を想像しながら理解させる]

Explanation of the content by the teacher

(The teacher helps students better understand the content by rephrasing the sentence, giving specific examples, or asking content-related questions.)

[想像しながらの内容理解を助けるために、教師は、文を言い換えたり、具体例を示したり、「内容に関連する質問」等をしてしながら授業を進める。]

First, take out your supplementary handout. (Wait until all the students have it on the desk.) In the textbook, you can find the expressions we previously checked in the supplementary handout. Underline these expressions in the textbook with a highlighter, and check your understanding. (Give time.)

<ここからの太字部分は、教科書本文>

[1]

Nowadays, you are always flooded with information. At school, you study many subjects, such as math, history, and chemistry. Outside of school, you watch TV, surf websites, chat with friends, etc. No wonder you can't remember everything. But then, how do you prepare for exams? Some students say they study all night long before exams. Have you done it, too? Did you get high scores, then? If not, maybe you needed more sleep. Scientists still don't know whether sleeping directly improves memorizing ability. But they already know it slows down forgetting. A lot of information keeps coming to you. From teachers, from TV and Internet and from your friends. You can't remember everything you learn from them. By the way, for exams, do you start preparing early? Or do you study all night long before exams? (Ask.) Which do you think is better for you to get high scores, to start early or to study all night long before exams? Why?

Now, this next question is for everyone. What do some scientists say about the effects of sleep on studying? (← Write this question on the board.) Answer this question using your own words. [英文を自分の言葉で言い換える] Don't just read the sentences from the passage. You have 5 minutes for preparation. (Give time. When the time is up, find volunteers.)

[2]

There have been many studies about the effects of sleep on memory. One of them has shown that sleep is good for keeping information longer. In this study, 24 people were asked to memorize 20 random pairs of nouns at 9 a.m. They were told not to sleep for 12 hours. Then, at 9 p.m., they took a test that checked their memory.

Next, another 24 people memorized the same pairs at 9 p.m. Then, they slept for 7 hours before they took the test at 9 a.m. The result was interesting. The second group scored 13% higher than the first. Look up the words "random" and "noun" in the dictionary. (*Give time.*) So, sleep is good for students to get high scores at exams.

[3]

What does the result mean? Sleep is necessary for a good memory. While you are sleeping, your brain sorts out information first. It then keeps what's important and throws away what's not. Therefore, if you don't sleep, it becomes difficult to find information you need.

Sleep is also necessary for the health of your brain. While you are awake, your brain gets tired from processing so much information. Thus, you need to sleep for your brain's recovery, too.

"If I wanted to do well on tests, I would sleep right after studying. I would go to bed before getting any more unnecessary information," says a sleep expert. Well, I didn't know our brain is working while we are sleeping. If we don't sleep, our brains get tired. So, sleep in bed. Don't sleep in class!

IV. Chorus-reading of the text [本文のコーラスリーディング]

(*Students chorus-read, following the teacher.*)

'Why Do We Need Sleep?'

○ Line 1. **be flooded with** ～ ～であふれている

(例) The hotel lobby is flooded with reporters. (ホテルのロビーは報道陣でごった返している。)
It is said that Lady Gaga is staying there. (レディー・ガガが泊まっているらしいんだ。)

○ L4. **No wonder S + V** S が V するのも(なのも)無理はない * S は主語、V は動詞を表す。

(例) Today is the announcement day of the audition for AKB48.
(今日は AKB48 の新規メンバーオーディションの発表の日なんだ。)
No wonder she has been restless. (どうりで彼女はさっきからそわそわしてるんだ。) * restless 落ち着きがない

○ L5. **prepare for** ～ ～の準備をする

(例) My grandma does push-ups every night before she goes to bed. She is preparing for the Honolulu Marathon.
(うちのばあちゃんは寝る前に毎晩、腕立て伏せをする。ホノルルマラソンの準備をしてるのさ。)
* do push-ups 腕立て伏せをする

○ L6. **all night long** 一晩中

(例) Crickets chirp all night long. Are they sleeping from exhaustion in the daytime? * from exhaustion 疲れ切って
(コオロギは一晩中、鳴く。昼間は疲れて寝てるのかなあ?)

○ L7. **if not** もしそうでないのなら

(例) Are you tired? If not, come and help me with my homework. * help 人 with ～ 人の～を手伝う
(疲れてる? もしそうでないなら、来て僕の宿題を手伝ってよ。)

○ L9. **whether S + V** S が V するかどうか

(例) Nobody knows whether humans will evolve into better beings. * evolve into ～ ～に進化する
(人間がさらに良い生き物に進化するかどうかは誰にも分からない。) * better beings より良い生き物
Ask Darwinians. They should know it. (進化論者に尋ねてみたら? 彼らなら知っているはずだから。)

○ L12. **There have been** ～ ～は以前からあった(いた)。～は昔から存在した。 [現在完了]

(例) There have always been people who stay with those left behind. * those left behind 集団から取り残された人たち
(取り残された人々に寄り添う人が、いつの時代にもいた。) (= the people who are left behind)
I want to be one of them. (私もそのような人になりたい。)

○ L13. **the effects of A on B** B に与える A の影響

(例) What are the effects of smartphones on teenagers?
(スマートフォンが 10 代の若者に与える影響はどのようなものですか?)
They rarely take the time to enjoy a starry night. * rarely ～ めったに～しない
(星明かりの夜を楽しむ時間がほとんど無くなっちゃうことかな。)

○ L16. 24 people were asked to ～ ～するようたのまれた [文法: 不定詞]

○ L18. They were told not to ～ ～しないように言われた

* 不定詞 用法その 1

- [公式] ① tell 人 to ～ 人に～するよう言う
② tell 人 not to ～ 人に～しないよう言う
③ ask 人 to ～ 人に～するようたのむ
④ ask 人 not to ～ 人に～しないようたのむ

- (例) ① The doctor told me to stay home. (お医者さんから家にいるよう言われた。)
I'm a little feverish. (ちょっと熱があるんだ。)
- (例) ① Our homeroom teacher always tells us to study more.
(担任の先生は、もっとべんきょうするようにといつも私たちに言う。)
- (例) ② The doctor told me not to play outdoors. (お医者さんは僕に外で遊ばないように言った。)
- (例) ② My mother tells me not to stay out late. * stay out late 遅くまで外出する
(母は、遅くまで出歩かないようにと私に言う。)
- (例) ③ May I ask you to drive me home? (家まで車で送ってもらえますか?) * drive 人 home 人を車で家まで送る
Sure. (いいよ。)
- (例) ③ She asked me to go into the haunted mansion before her. (僕が先にお化け屋敷に入るよう彼女にたのまれた。)
I couldn't say no. (嫌とは言えなかった。)
- (例) ④ I asked my mother not to wake me up until lunch time. (私は母にお昼まで起こさないようたのんだ。)

〈受身の形になると〉

- ② The doctor told me not to play outdoors. → I was told not to play outdoors by the doctor. [受身形]

* 教科書本文中の 24 people were asked to memorize 20 random pairs of nouns. と They were told not to sleep for 12 hours. は「受身形」です。

○ L24. **while S + V** S が V する間に

- (例) While I was snoozing, my little brother ate my bag of potato chips.
(僕がうたた寝している間に、弟が僕のポテチの袋を空にした。)

○ L25. **sort out ~** ~を分類する。 ~を処理する。

- (例) You have to sort out the information you get from the Internet. Don't just swallow it!
(インターネットで得た情報はきちっと整理しなくちゃダメだ。 うのみにしちゃダメだよ。)

○ L31. **right after ~ing** ~してすぐ。 ~した直後。

- (例) Baby turtles run toward the sea right after hatching. (ウミガメの赤ちゃんは、卵から生まれてすぐ海を目指す。)

○ L31. **If I wanted to do well on tests, I would sleep right after studying.** [文法: 仮定法]

* 「条件のif」の二つの異なる用法

1. 「実際に起こりえる状況」または「実際に起こった状況」を想定して言う場合

- ・ If anyone calls, tell them I'll be back at 10. (誰か電話してきたら、10 時にもどると言っておいて。)
 - ・ If you really want to learn French, you need to spend some time in France.
(本気でフランス語を勉強したいなら、フランスでしばらく暮らさなきゃ。)
 - ・ If you are going to sign up for the ski school, you should do it now. Soon there will be no vacancies.
(スキースクールの申し込みをするつもりなら、今すぐしなきゃ、空気がすぐなくなるよ。)
* sign up for ~ ~に申し込む
 - ・ If you leave now, you will be home in two hours. (今出れば 2 時間で家に着くよ。)
 - ・ If I made you angry, I apologize. (君を怒らせたのなら謝るよ。)
 - ・ If you press this button, the DVD pauses. (このボタンを押せば、DVD は停止します。)
 - ・ If it rains tomorrow, the fireworks display will be cancelled. (明日、雨が降ったら花火大会は中止です。)
* the fireworks display 花火大会
- * (注意) if 節が未来のことを言っている場合でも、if 節中の動詞は現在形を用いなければならない。[語法上の決まり]

2. 現在または未来において「実際に起こりえない状況」「ありえない状況」を想定したり、過去において「実際に起こらなかった状況」や「実際に起こった状況」に対しその反対の状況を想定して自分の思いを表現する場合

- ・ If my grandfather were (was) still alive, he would be one hundred today.
(もし、じいちゃんが今生きていたら、100 才になっているだろう。)

- ・ If I had a magic carpet here, I could fly you home.
(魔法のじゅうたんを持っていたら、君を家まで送ってやれるのに。)
- ・ If I had known how difficult the job was, I wouldn't have taken it.
(その仕事の難しさを知っていたら、引き受けなかったのだが。)

* fly 人 home 人を空を飛んで家まで送る

◎ 2は「仮定法」と呼ばれる文法で、下記のような公式を使うと理解しやすい。

[公 式]

- | | |
|--|--|
| ① If S <u>were</u> ~, S <u>would</u> ---- (動詞の原形)
S <u>could</u> ----
S <u>might</u> ---- | もし(今) S が~なら、S は---なのに(するのに)
S は---できるのに
S は---するかもしれないのだが |
| ② If S ~ (過去形の動詞), S <u>would</u> ---- (動詞の原形)
S <u>could</u> ----
S <u>might</u> ---- | もし(今) S が~すれば、S は---するのに
S は--- できるのに
S は---するかもしれないのだが |
| ③ If S <u>could</u> ~, S <u>would</u> ---- (動詞の原形)
S <u>could</u> ----
S <u>might</u> ---- | もし(今) S が~できたら、S は---するのに
S は---できるのに
S は---するかもしれないのだが |

* ①から③までを文法では「仮定法過去」と呼ぶ。

- | | |
|---|---|
| ④ If S <u>had been</u> ~, S <u>would have</u> ---- (過去分詞).
S <u>could have</u> ---- (過去分詞).
S <u>might have</u> ---- (過去分詞). | もし(あの時) S が~だったら、S は---しただろう
S は---できただろう
S は---したかもしれない |
| ⑤ If S <u>had</u> ~ (過去分詞), S <u>would have</u> ---- (過去分詞).
S <u>could have</u> ---- (過去分詞).
S <u>might have</u> ---- (過去分詞). | もし(あの時) S が~していたら、S は---しただろう
S は---できただろう
S は---したかもしれない |
| ⑥ If S <u>had been able to</u> ~, S <u>would have</u> ---- (過去分詞).
[= If S <u>could have</u> ~ (過去分詞)], S <u>could have</u> ---- (過去分詞).
S <u>might have</u> ---- (過去分詞). | もし(あの時) S が~できたら、S は---しただろう
S は---できただろう
S は---したかもしれない |

* ④から⑥までを「仮定法過去完了」と呼ぶ。

(例文)

- ① If I were a woodpecker, I would fly to you and peck on your door.
(もしも私がキツツキだったら、あなたの所へ飛んで行ってドアをくちばしでノックしちゃうよ。)
- ① If I were you, I wouldn't take the rap for him.
(僕が君だったら、彼をかばったりしないよ。)
- ① If there were two mothers in the house, I might get yelled at all day long.
(もし家に母親が2人いたら、1日中怒鳴られているかもしれない。)
- ① How would you feel if you were a caged bird? (もし君がかごの中の鳥だったら、どんな気持だろうか。)
- ① What would you do if you were bitten by a snake? (もし蛇にかまれたら、どうする?)

* be動詞は、主語が何であっても were となる。ただし、主語が I, he, she, it, this, that などの時は、was でもよい。

- ② If I said I didn't love her, I would be lying. (彼女のことを愛してないと言ったら、うそをついていることになる。)
- ② What would you do if you won the lottery? (宝くじに当たったら、どうする?)
- ② If a baby monkey didn't have a strong grip, it would easily fall from its mother's back.
(もし子猿に強い握力がなかったら、母親の背中からすぐに落ちてしまうだろう。)
- ③ If I could play the piano, I would make a song for you. (もしもピアノが弾けたなら、君に歌を作ってあげるのに。)
- ③ Where would you choose to live, if you could live anywhere in the world?
(もし世界のどこででも住めるとしたら、どこにしますか?)
- ③ I would like to stay out of it, if I could. (できることなら、それに係わりたくない。)
- ④ If I hadn't been so busy, I would have sent an e-mail to you sooner.

(あんなに忙しくなかったら、もっと早くあなたにメールを送ったのですが。)

- ④ If she hadn't been a mother of 5 children, she could have worked full-time.

(彼女が5人の子の母親でなかったら、フルタイムで働くことができたのだが。)

- ④ If he had been a compassionate person, he would have been loved by many people.

(彼が心の温かい人だったら、多くの人に愛されたのに。)

- ⑤ If you had listened to me, you wouldn't have burned the pizza to a crisp.

(私の言うことを聞いていれば、ピザを焦がさなくてすんだのに。)

* burn ~ to a crisp ~を焼き焦がす

- ⑤ Could they have saved her life, if they had done CPR?

(心肺蘇生術を施していたら、彼女の命を救うことができたろうか?)

* do CPR 心肺蘇生術を施す

- ⑤ If she had driven a few more kilometers, she might have found a better hotel.

(もう数キロ車を走らせていたら、彼女はもっといいホテルを見つけたかもしれない。)

- ⑤ If I had known you were in the hospital, I would have gone to see you.

(君が入院していたことを知っていたら、お見舞いに行ったのに。)

* 口で言う時は、I had had → I'd had, they had had → they'd had となる。

- ⑥ If she had been able to convince her father, she could have studied abroad.

(父親を説得できていたら、彼女は留学できたのに。)

* study abroad 留学する

- ⑥ Who would you have gone to the concert with, if you had been able to get two tickets for Exile?

(もしエグザイルのチケットが2枚手に入っていたら、誰とコンサートに行っていた?)

- ⑥ Where would you have gone, if you had been able to take a week off last summer?

(去年の夏に1週間の休暇が取れてたら、どこへ行ってた?)

* take ~ off ~休みを取る

Reading Passage

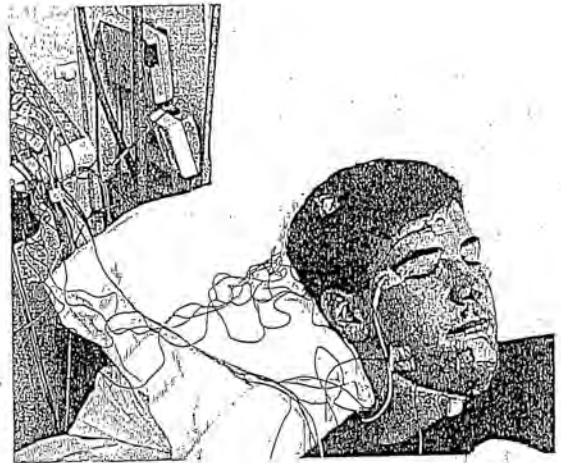
Are You Getting Enough Sleep?

- 1 What happens if you don't get enough sleep? Randy Gardner, a high school student in the United States, wanted to find out. He designed an experiment¹ on the effects of sleeplessness² for a school science project. With Dr. William C. Dement from Stanford University and two friends
5 watching him carefully, Gardner stayed awake for 264 hours and 12 minutes. That's eleven days and nights without sleep!

- What effect did sleeplessness have on Gardner?
After 24 hours without sleep, Gardner started having trouble reading and watching television. The words
10 and pictures were too blurry. By the third day, he was having trouble doing things with his hands. By the fourth day, Gardner was hallucinating. For example, when he saw a street sign, he thought it was a person. He also imagined he was a famous football player.
15 Over the next few days, Gardner's speech³ became so slurred that people couldn't understand him. He also had trouble remembering things. By the eleventh day, Gardner couldn't pass a counting test.⁴ In the middle of the test he simply stopped counting. He couldn't
20 remember what he was doing.

When Gardner finally went to bed, he slept for 14 hours and 45 minutes. The second night he slept for twelve hours, the third night he slept for ten and one-half hours, and by the fourth night, he had returned to his normal sleep schedule.

- 25 Even though Gardner recovered quickly, scientists believe that going without sleep can be dangerous. They say that people should not repeat Randy's experiment. Tests on white rats have shown how serious sleeplessness can be. After a few weeks without sleep, the rats started losing fur.⁵ And even though the rats ate more food than usual, they lost
30 weight. Eventually,⁶ the rats died.



¹ experiment a scientific test

² effects of sleeplessness things that happen when you don't get enough sleep

³ speech way of talking

⁴ a counting test a test of saying numbers in order: 1, 2, 3, 4, etc.

⁵ fur hair on an animal's body

⁶ eventually after some time

Has anyone stayed awake longer than Randy Gardner? Yes! According to *The Guinness Book of World Records*, Maureen Weston from the United Kingdom holds the record for staying awake the longest. She went 449 hours without sleep in 1977. That's 18 days and 17 hours!

- 35 During your lifetime, you will likely spend 25 years or more sleeping. But why? What is the purpose of sleep? Surprisingly, scientists don't know for sure.⁷ Scientists used to think we "turned our brains off" when we went to sleep. Sleep researchers now know, however, that our brains are very active when we sleep. Some scientists think we sleep in order to replenish⁸ brain cells. Other scientists think that sleep helps the body to grow and relieve stress.⁹ Whatever the reason, we know that it is important to get enough sleep.



Word Count: 427

Reading Time: _____
(Minutes)

Words per Minute: _____
(Word Count/Reading Time)

About Sleep.

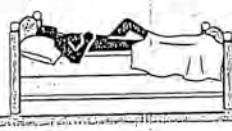
Each night, we pass through¹⁰ five stages, or periods, of sleep. In Stage 1, we fall asleep. We sleep lightly in Stage 2. We have deep, or sound, sleep in Stages 3 and 4. Stage 5—REM (Rapid Eye Movement) sleep—is the most interesting stage. This is the time when we dream. These stages last about one and one-half hours. After each REM stage, we return to Stage 2 (light sleep) and begin the cycle again.

STAGE 1: *Falling asleep.*



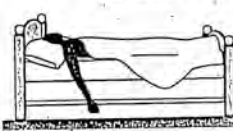
20 min

STAGE 2: *Light sleep.*



45 min

STAGES 3 AND 4: *Deep, slow-wave sleep.*



60 min

REM: *Dreaming stage.*



90 min

⁷ for sure definitely

⁸ replenish build new; renew

⁹ relieve stress remove or get rid of tense feelings

¹⁰ pass through experience

OXFORD Select Readings Pre-Intermediate 1 Are You Getting Enough Sleep?

(Supporting text for "English Communication" コミュニケーション英語)

Teaching Procedure

These materials were made with the permission of OXFORD UNIVERSITY PRESS.

[Allotment]

- 1st to 5th period:
 - Introduction of the material
 - Students do "Before You Read" activities
 - Students silent-read the text passage
 - Students do "After You Read" activities
 - Using "Supporting Material for Reflective Learning," students check the sentence structures
 - Chorus-reading of the text and pronunciation check
 - Students guess the content with the teacher's assistance
 - Explanation of the content by the teacher
 - Chorus-reading of the text passage
 - Students work on the rest of the activities in this chapter

* Regarding the students' lesson preparation, please discourage translation of the text. The emphasis of instruction is on having students guess the content without thinking in Japanese. Thus, the text passage is to be read for the first time during the lesson.

[*授業の予習はさせない。教科書本文は授業の中で初見で読ませる。]

< 1st to 5th period >

I. Introduction of the material [教科書本文への導入]

All living things sleep. Some sleep at night, some sleep in the daytime and some sleep whenever they feel like sleeping. Which group are you in? (*Ask and have students raise their hands.*)

Some animals hibernate. (*Write on the board the word "hibernate."*) Look up the word in your dictionary. (*Give time.*) They hibernate in winter. They sleep in a hole of a tree or in a den on the ground. Wild bears in Hokkaido spend a whole winter sleeping in a den. I have a question for you. Do bears in zoos hibernate? (*This is a chance for a little interaction.*) [インタラクション] Some bears hibernate, while others don't. Guess why. (*Give time for thinking and enjoy the interactions with the students.*) There are always the reasons for the actions of living things. Humans don't hibernate but we need to sleep every day. In this lesson, you'll read about why we need to sleep and what will happen if we don't sleep.

II. Students do 'Before You Read' activities on page 2

(*Give time for the task.*)

I'll give you time to do the "Before You Read" activities. First, each of you do "activity A." When you have done it, get into pairs and do "activity B." For "activity C," it's individual work. Ready? Here we go!

(*When the students are finished, share the answers to the "Previewing Chart."*)

III. Have students silent-read the text passage and then do 'After You Read' activities

Read the passage silently. You can refer to the footnote as you read. (*← Say this while pointing to the footnote. When the students have finished silent-reading, give the following instructions.*) Turn to page 5 and do the "After You Read" activity A. (*Give time and then pick one row in which students are sitting. Have students in that row answer each question.*) Thank you.

IV. Students check the sentence structures covered in the text (referring to "Supporting Material for Reflective Learning").

[*ここで Supporting Material for Reflective Learning のプリントを配布する。]

This task helps students become autonomous learners. [自立した学習者 (autonomous learners) を育てるための活動]

[生徒は、Supporting Material for Reflective Learning のプリントを使って内省的な学習を進め、学びを確かなものにする。このプリントは、教師が説明するためのものではなく、text passage (教科書本文) の内容を理解するために必要な sense (感覚) を生徒自らが身につけるためのものである。]

Supporting Material for Reflective Learning (SMRL) is provided for students to obtain a "sense" which helps them understand the content of the passage. Thus, SMRL focuses more on sentence structures than idioms. The teacher does not explain what is in SMRL but rather encourages students to read it for understanding and reflection. Give students enough time for this task.

Now, look at your "Reflective Learning" handouts. You have 10 minutes. Read silently. (*When the time is up, give the following instructions.*) I'm going to read the example sentences out loud. Everybody repeat after me. (*The teacher model-reads the example sentences and has students repeat, while checking the pronunciation and intonation.*)

Now, turn to the text passage on page 3 and 4. I'll give you time so you can check the parts explained in the "Reflective Learning" handouts. (*Give time.*)

V. Chorus-reading of the text passage and pronunciation check

(*Have students chorus-read the passage after the teacher, occasionally stopping for a pronunciation check.*)

Now, I'll read and you repeat after me.

VI. Have students guess the content with the teacher's assistance

(生徒に本文内容を想像しながら理解させる)

Explanation of the content by the teacher

(*The teacher helps students better understand the content by rephrasing the sentences, giving specific examples, or asking content-related questions.*)

[想像しながらの内容理解を助けるために、教師は、文を言い換えたり、具体例を示したり、「内容に関連する質問」等をしながら授業を進める。]

(● ここからの太字部分はテキスト本文 = Selections from the text are highlighted in bold.)

Now, check your understanding of the content as you read with me. (*From here on, slowly read the text passage out loud, occasionally stopping for Q&A and a little interaction.*)

What happens if you don't get enough sleep? Randy Gardner, a high school student in the United States, wanted to find out. He designed an experiment on the effects of sleeplessness for a school science project. With Dr. William C. Dement from Stanford University and two friends watching him carefully, Gardner stayed awake for 264 hours and 12 minutes. That's eleven days and nights without sleep! "To design an experiment" means the same as "to plan an experiment." (*Write this on the board.*) Gardner stayed awake for 264 hours and 12 minutes. He hadn't slept for 264 hours and 12 minutes.

I have a question for you. Why did Dr. Dement and two friends stay with Gardner and watch him carefully? (*Ask.*)

What effect did sleeplessness have on Gardner? After 24 hours without sleep, Gardner started having trouble reading and watching television. The words and pictures were too blurry. By the third day, he was having trouble doing things with his hands.

By the fourth day, Gardner was hallucinating. For example, when he saw a street sign, he thought it was a person. He also imagined he was a famous football player. Over the next few days, Gardner's speech became so slurred that people couldn't understand him. He also had trouble remembering things. By the eleventh day, Gardner couldn't pass a counting test. In the middle of the test he simply stopped counting. He couldn't remember what he was doing. I know you can guess the meaning of the word "blurry." If the words on a bookpage are blurry, you can't read the book. If a photograph is too blurry, you can't tell what is in the photo. From the context of the passage, what do you think "hallucinate" might mean? (*Give time and then have students check it in a dictionary.*) You can also guess the meaning of the word "slurred," can't you?

When Gardner finally went to bed, he slept for 14 hours and 45 minutes. The second night he slept for twelve hours, the third night he slept for ten and one-half hours, and by the fourth night, he had returned to his normal sleep schedule.

He slept on and on.

Even though Gardner recovered quickly, scientists believe that going without sleep can be dangerous. They say that people should not repeat Randy's experiment. Tests on white rats have shown how serious sleeplessness can be. After a few weeks without sleep, the rats started losing fur. And even though the rats ate more food than usual, they lost weight. Eventually, the rats died.

Underline the part "going without sleep," and put that part into brackets. This part is the subject of the sentence. (カッコで括った部分が「文の主語」であることを言う。)

Underline the part "tests on white rats," and put that part into brackets. This part again is the subject of the sentence. (カッコで括った部分が「文の主語」であることを言う。)

Scientists believe that sleeplessness is dangerous, because their rats died of sleeplessness.

Has anyone stayed awake longer than Randy Gardner? Yes! According to The Guinness Book of World Records, Maureen Weston from the United Kingdom holds the record for staying awake the longest. She went 449 hours without sleep in 1977. That's 18 days and 17 hours!

During your lifetime, you will likely spend 25 years or more sleeping. But why? What is the purpose of sleep? Surprisingly, scientists don't know for sure. Scientists used to think we "turned our brains off" when we went to sleep. Sleep researchers now know, however, that our brains are very active when we sleep. Some scientists think we sleep in order to replenish brain cells. Other scientists think that sleep helps the body to grow and relieve stress. Whatever the reason, we know that it is important to get

enough sleep.

Scientists used to think we "turned our brains off," just like we turn the TV off. But now, some scientists think we sleep in order to build new brain cells. Other scientists think our bodies grow while we are sleeping, and sleep removes stress.

By the way, how long have you ever gone without sleep? What happened afterwards? How did you feel? (*Give time for thinking and then nominate some students for the answer. Try to include other students in the interaction.*) [インタラクション]

VII. Chorus-reading of the text passage [本文のコーラスリーディング]

(*Students chorus-read, following the teacher.*)

VIII. Have students work on the rest of the activities in this chapter.

OXFORD Select Readings Pre-Intermediate 1 Are You Getting Enough Sleep?

(Supporting text for "English Communication" コミュニケーション英語)

Supporting Material for Reflective Learning

— 内容理解の感覚を研ぎ澄ますためのプリント —

These materials were made with the permission of OXFORD UNIVERSITY PRESS.

〔● ここからの太字部分はテキスト本文からの抜粋 = Selections from the text are highlighted in bold.〕

Line 4. With Dr. William C. Dement from Stanford University and two friends watching him carefully, Gardner stayed awake for 264 hours and 12 minutes. (付帯状況の with)

* with を使った付帯状況

〔 公式 〕 with + O + ~ O が(を)~した状態で、O を~しながら、
O を~したまま、O を~して

「 O = ~ 」の関係が成り立つ。O と~の間に be 動詞を入れると意味の通じる文となる。

- (例) Don't brush your teeth with the water running. (水を流しっぱなしにして歯を磨いちゃダメ。) the water = running
The water is running. (水が流れている。)
- (例) It is impolite to talk to someone with your hands in your pockets. (ポケットに手を入れたまま人と話をするのは失礼だ。)
your hands = in your pocket Your hands are in your pockets. (手がポケットに入っている。)
- (例) She sat on the chair with her legs crossed. (彼女は足を組んで椅子に座っていた。) her legs = crossed
Her legs were crossed. (脚が組まれていた。)
- (例) Don't go out with your hair wet. (髪の毛を濡らしたまま出かけちゃダメだよ。) your hair = wet
Your hair is wet. (髪の毛が濡れている。)
- (例) Mother came home with her shopping bags full. (母は買い物袋をいっぱいにして帰宅した。) her shopping bag = full
Her shopping bag was full. (買い物袋がいっぱいになっていた。)
- (例) She always sleeps with the light on. (彼女はいつも電気をつけっぱなしにして眠る。) the light = on
The light is on. (電気が点いている。)
- (例) With two nurses sustaining him, my father walked out of the hospital. two nurses = sustaining him
(ふたりの看護師に支えられて、父は病院から歩いて出てきた。)
Two nurses were sustaining him. (ふたりの看護師が彼を支えていた。)
- (例) With Dr. William C. Dement from Stanford University and two friends watching him carefully, Gardner stayed awake for 264 hours and 12 minutes. (スタンフォード大学のディメント博士とふたりの友人に注意深く見守られながら、ガードナーは 264 時間 12 分ずっと起きていた。) Dr. William C. Dement from Stanford University and two friends = watching him
Dr. William C. Dement from Stanford University and two friends were watching him.
(スタンフォード大学のディメント博士とふたりの友人が彼を見守っていた。)

Line 7. What effect did sleeplessness have on Gardner?

• have a --- effect on ~ ~に--- な影響を与える

- (例) Smartphones have both positive and negative effects on teenagers. (スマホは若者たちに良い影響と悪い影響を与える。)
If you are using a smartphone, then it's OK. (君がスマホを使っているのならいいです。)
If you let your smartphone control you, then it's not OK. (スマホに使われているのならダメです。)
- (例) What effect do smartphones have on elderly people? (スマホは高齢者にどのような影響を与えますか?)
I have no idea. (わかりません。)

Line 8. have trouble ~ing ~するのに苦労する。なかなか~できない。

- (例) I had trouble recognizing my pet zebra in a herd. (群れの中から私のペットのシマウマを探すのは大変だった。)

NEW FAVORITE

英語表現Ⅱ

〔東京書籍〕

Lesson 2

Online Addiction

健康

Target.....
インターネット上のゲームには落とし穴がありそうです。

- Are you a fan of computer games? If so, you should be careful. Online games can have harmful effects on your social interactions. Multiplayer role-playing games, for example, are considered the most addictive. Some addicts are afraid of talking with other people when they are offline. Some people want a feeling of power over others. These people may fail to form human relationships. Once you become addicted, you need to do something to overcome this "disease." Now that many people are said to have this addiction, it is necessary that we should consider the issue seriously.
- 5

[Allotment]

- | | |
|-------------|--|
| 1st | • Introduction of the material |
| to | • Students silent-read the text passage |
| 2nd period: | • Students check sentence structures and expressions in the passage (referring to "Supporting Material for Reflective Learning") |
| | • Reading of the text and pronunciation check |
| | • Explanation of the content by the teacher |
| | • Chorus-reading of the text |
| | • Content-related activity |

※ 1 年次「英語表現Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅰ」、2 年次「コミュニケーション英語Ⅱ」で生徒に渡している **Supplementary Handouts** (生徒のための予習補助プリント) は、2 年次「英語表現Ⅱ」では配布しない。
代わりに **Supporting Material for Reflective Learning** (内容理解の感覚を研ぎ澄ますためのプリント) を授業の中で渡す。
text passage (教科書本文) については、これまでと同様に予習を禁止し、授業において初見で読ませる。

< 1st to 2nd period >

I. Introduction of the material [教科書本への導入]

How much time do you spend using smartphones or the Internet? How much time do you spend talking with your family members?

Compare. Which do you spend more time on? (*Ask.*)

I have another question. Since the emergence of smartphones and the Internet, have we got closer to each other or have we gradually drifted away from each other? (← *Be flexible in rephrasing questions. The interaction and Q&A with students should be conducted in such a way that YOUR students can understand what is being said.*) [グループワーク + プレゼンテーション] Now, get into groups of 4 and share your ideas about the question. You have 15 minutes. When the time is up, the presenter from each group will tell the class about your ideas.

II. Students' silent reading of the text [ここで初めて生徒は本文を読む。(本文の予習は禁止している)]

(*Give 5 minutes to read and understand the passage. Students are not allowed to use a dictionary.*)

[黙読の時間を5分与える。辞書は使わせない。]

You have 5 minutes. Read the passage silently. Please do not use a dictionary. (*Give time for silent-reading.*)

III. Students check expressions in the text passage (referring to "Supporting Material for Reflective Learning").

[*ここで Supporting Material for Reflective Learning のプリントを配布する。]

Now, look at your "Reflective Learning" handouts. You have 5 minutes. Read silently. (*When the time is up, give the following instructions.*) I'm going to read example sentences out loud. Everybody repeat after me. (*The teacher model-reads the example sentences and has students repeat, checking the pronunciation and intonation.*)

IV. Reading of the text and pronunciation check [本文の音読と発音指導]

(*Have students chorus-read the passage after the teacher, occasionally stopping for a pronunciation check.*)

Now, turn to the text passage. I'll read and you repeat after me.

V. Have students guess the content with the teacher's assistance [生徒に本文内容を想像しながら理解させる]

Explanation of the content by the teacher

(*The teacher helps students better understand the content by rephrasing the sentence, giving specific examples, or asking content-related questions.*)

[想像しながらの内容理解を助けるために、教師は、文を言い換えたり、具体例を示したり、「内容に関連する質問」等をしてしながら授業を進める。]

Now, check your understanding of the content as you read with me.

◀ ● ここからの太字部分はテキスト本文 – Selections from the text are highlighted in bold. ▶

Let's read the passage. *(From here on, slowly read the text passage out loud, occasionally stopping for Q&A and a little interaction.)*

Are you a fan of computer games? If so, you should be careful. Online games can have harmful effects on your social interactions. Can anybody explain what "online games" are? *(Find a volunteer. Encourage the student to explain in easy English. If it's difficult, allow him/her to use Japanese.)* Here it says, "Online games can have harmful effects on your social interaction." What does this mean? If you play online games very often, what will happen? *(Give time to think and write ideas.)* Any volunteers? *(Pick some students.)* Yes, if you spend too much time playing online games, it will be difficult for you to talk to and work with other people in a real situation.

Multiplayer role-playing games, for example, are considered the most addictive. Some addicts are afraid of talking with other people when they are offline. What are "multiplayer role-playing games"? I have no idea what they are. Can anybody explain? *(Follow the same procedure as earlier.)* Thank you. So these games are the most addictive. Check the words "addictive" and "addict" in your dictionary. *(Give time.)* Some addicts are afraid of talking with other people when they are offline. "Offline" is the opposite of "online."

Some people want a feeling of power over others. These people may fail to form human relationships. "To want to have a feeling of power over other people" means the same as "to want to control other people." If you are such a person, your friends will leave you. Why? Because you are arrogant! *(Write on the board the word "arrogant.")* Look up this word in the dictionary. *(Give time.)*

Once you become addicted, you need to do something to overcome this "disease." Now that many people are said to have this addiction, it is necessary that we should consider the issue seriously. How can you help your friends who are addicted to online games? How can you help yourself get over it, if you are an addict? You'll think about it later.

VI. Chorus-reading of the text [本文のコラスリーディング]

(Students chorus-read, following the teacher.)

VII. Content-related activity

(Assign students the task below. This is individual work. Presentation follows.)

[Assignment: 課題提示]

Suppose you have a little brother who is heavily addicted to role-playing online games. When you told him how bad for him online games are, he talked back to you saying as follows. How will you respond to each of his denials?

Your little brother says: What's wrong with playing online games?

- They won't hurt anybody.
- They will train me to work together with others for the same goal.
- Watching TV is passive, while playing online games is a positive act.

A Critique of Word-for-word Translation

Translation から Interpretation へ

ー 日本語に訳さないで理解したいPaperbackの表現 ー

Stieg Larsson "millennium II・III"

- Salander was up to her neck in her own problems. (自分のことで手一杯)
- She felt like a chess piece in a game she could not control. (自分の意志では何もできない状況にあった)
- Blomkvist kept sticking to her life like gum on the sole of her shoe. (彼のことを忘れたくても彼女にはどうしてもできなかった)

Henning Mankell "One Step Behind" "Sidetracked"

- Their 19-year-old daughter, who still hadn't flown the nest, was fast asleep. (まだ親と一緒に暮らしている 19 才の娘)
- Having cancer is no longer a death sentence. (癌が死に直結する病ではなくなった)
- His stomach was hanging out over his trousers. (お腹がぽっこり出ている)
- Revenge was a sort of boomerang that was now on its way back and would soon hit your own head. (人に対する報復はいずれ自分に跳ね返ってくることになる)
- She was swallowed up by the crowd. (人ごみの中に消えていった)

Thomas H. Cook "Red Leaves" "Master of the Delta"

- My earlier optimism was flattened like an animal on the road. (当初の楽観的な考えは消え失せた)
- Time and loneliness and the long drip of disappointment had weathered her into a raggedly composed middle-aged woman. (長年の苦勞が、彼女を疲れ果てた中年女性に変えてしまっていた)

Robin Cook "Acceptable Risk" "Mindbend" "Chromosome 6" "Shock"

- You've got eyelashes girls would die for. (女の子がうらやましがるようなまつげ)
- I'm happy the way I am. (今の自分で満足してます)
- Things are moving here at breakneck speed. (目まぐるしく変わる)
- The students can do without my hand-holding for the time being. (私がいなくてもやっていける)
- Kim sat on the closed toilet seat and hugged her knees to her chest. (ひざをかかえて)
- Edward was spread-eagled on top of his bed. (大の字になる)
- You are driving me to an early grave. (おまえのせいで長生きできそうにない)
- I was afraid our canoe would stand out like a sore thumb. (とても目立つ)

Stephen King "Rose Madder"

- The thought still sent a cold finger up her back, tracing the curve of her spine. (背筋がぞつとする)
- She wouldn't be able to remain on her feet, let alone keep walking. (立っていることができない)
- He's the principal of the high school where I'm student teaching. (僕が教育実習をしている学校)

の校長先生)

- Blinking back tears, she forced herself to continue. (涙をこらえながら)

John Grisham "The Testament"

- The name doesn't ring a bell. (その名前だけではびんと来ない)
- He is juggling ten things at once. (色々な仕事を同時にこなす)
- I took my first breath in the hospital in Chicago. (産声を上げる)
- She was everything he wasn't. (彼女と彼は全てにおいて正反対)
- I'm ashamed of the person I used to be. (昔の自分を思うと恥ずかしくなる)

Arthur Hailey "Strong Medicine"

- I take the world the way it is, not the way some dreamers think it ought to be. (私は、理想ではなく現実を受け止める)
- No matter how much we grow up, while at least one parent is alive, there's always a sense of having someone to fall back on. (頼れる人がいるという安心感)
- You are a natural teacher. (教師になるために生まれてきたような人)
- On the count of three, they moved the body. (1、2の3で)

V.C.Andrews "Melody" "Olivia"

- He looked at me as if being late for something was a violation of the eleventh commandment. (遅れて来たことを責めるような目で)
- He listened with half an ear. (人の話を真剣に聞いていない)
- She had the attention span of a hummingbird, hovering over some sweet possibility for a moment and then jerking herself away to explore another and another. (ハチドリみたいに落ち着きがなく、次々と甘い誘惑に乗ってしまう)

Jeffrey Archer "Sons of Fortune"

- Nat tried to read any sign of the result from the expression on his face, but even the Japanese would have been proud of Mr. Anderson's inscrutability. (ナットは、顔色から話し合いの結果を探ろうとしたが、アンダーソンは日本人でも感心するほど無表情であった)
- The thought is as evil as the deed. (悪いことは思うだけでもそれを行っただけに等しい)
- He just isn't cut out for a teacher. (教師には向いていない)

*「きっとうこういうことを言っているのだろう」という推測 (inferring) ができなければ、paperbacks を読みこなすことはできません。頭の中で日本語に訳しながらでは、いつになっても paperbacks を読むことはできないのです。そのことをどうしたら先生に理解してもらえるか、そしてそれができる生徒をどのようにして育てるか、私たちは、reading 指導の中でいつも考えています。

現状報告 3：グローバル化と高校教育

沖縄県立辺土名高等学校

東盛 敬 校長

【講師紹介】

石井光夫教授（司会）：

続きまして、沖縄県辺土名高等学校からお招きいたしました東盛先生。校長先生でございます。国語をご担当ではありますけれども、これまで様々なグローバル人材を育てるという実践をされてきたご経験からお話をいただきます。それでは先生、よろしくお願いいたします。

東盛敬校長：

こんにちは。多少まぶしいもので、照明を落としました。大丈夫ですね。私の発表というのが 20 分。せっかくでございますので、隣の方、右手の方に自己紹介を 20 秒お願いします。どうぞ。

（自己紹介中）

はい、非常にいいですね。攻守交替で、反対にご紹介をお願いいたします。

（自己紹介中）

どうもありがとうございました。ということで、お互い自己紹介の方終わりました。

では、グローバル人材とはと問いかけていきたいんですけども、それは一応私の話の後でということで、少しこらえていただきたいと思います。私も、「I'm not a famous person. So I will introduce by myself, first. Ok?」で、行きたいと思いますので、少しスクリーンの方をご覧ください。

プロフィールの方からいきたいと思います。東盛敬と申しまして、沖縄のコザ、沖縄市に産

まれ、国学院の文学部入学年を見ると、分かりますね。3 年かかりました。その間でございます。1970 年にコザ暴動が起こっております。実は、私の自宅近くで起こりましたので、今でも鮮明に覚えております。衝撃でした。



5 月 15 日は昨日ですね。本土復帰, 1972 年。通貨がドルから円に変わって、おもちゃみたいだなと思いました。人間、これまでの習慣というのは恐ろしいもので、これまで紙幣だと思っていたものが、変わると紙にしか思えないんですよ。

さらに、1978 年に交通ルールの変更がございました。それまで車は右側を走っておりました。これが一気に反対側となったのです。7 月 30 日はイベントでございました。高校生、夜中、出歩いてはいけませんが、県内の高校生

95%深夜徘徊？でございます。その瞬間を見ようと朝6時。ピーという合図でおまわりさんが一斉に出てきて、右側車線の車を一斉に左側へと変えました。歴史的な経験でした。

その私がなぜ国学院なのか。実はTBSラジオのナッチャコパック（パック・イン・ミュージック金曜日）の影響でした。いい番組ですよ、同年代の皆様。この番組が好きで、東京では、すばらしい世界が待っていると思い、自分の人生はそこに行かないと始まらないと考え始めました。それで浪人1年目から親をだまからかして東京に行きました。

大学卒業後、転職にて教員にということで、これまでの5校、パワーポイントをご覧下さい。5校でこういうふうに、全ての学校で何らかの研究に携わっておりました。

まず、球陽と名護では、国語とコンピュータ、古典とコンピュータ。そして那覇国際においては、シラバスを作りました。シラバスというのが1時間1時間の授業でございます。これを作って、この時のシラバスというのが、今の私の国語の授業はこうじゃないかな、というベースになっております。さらに、読谷高校に移りまして、学力向上の研究。これは子どもたちのやる気を高めながら、進路指導をしていこうというふうなことでございます。

そして、宜野座。こちらの方は教頭としてでございますけれども、2年連続で文科大臣賞を取ることができました。一つは緑化コンクール。もう一つはキャリア教育です。もちろん職員と協力をしながら、一つ一つまとめることができたというバックグラウンドがございます。

実は、私、転職して教員になっております。FM沖縄、今、結構大人気でございます。その開局2年目か3年目、途中入社です。途中入社ということでありますから、一時期はフリーターをしてございました。国学院を出た後、フリーターとして半年間、色んなアルバイトをしながらも、自分はどうしてもFM沖縄に入って番組を作りたいという思いがありました。

なぜか。やはり金パの影響ですね。ナッチャコパック。

ところが、その1年半後、フリーアナウンサーになりました。なぜか。アメリカに行きたいと思ったんですよ。なぜ、アメリカに。実は、私の友達、高校3年の時に英語の単位が取れなくて、追試を3回くらい経て、やっと取り、卒業にこぎ着けたんですよ。その彼が、アメリカに行きました。無謀なことをするなと当時は思っていたのですが。ところがです。帰ってきたらしゃべるわけですよ。何だ？人生何か違うんじゃないか、というふうに感じました。

ちょうどこの頃レスキューダイバーの免許も取りまして、ダイビングに彼と一緒によく行きました。彼は米軍基地に勤めておりましたので、アメリカの友人を何人か連れてくるわけですよ。すると、彼が楽しそうにしゃべっている横で、しゃべれない私。人生何か違うというふうに思いました。ということで上司に相談して辞めて、アメリカに行くことになってしまいました。

アメリカに行くのなら横断しようということで、カリフォルニアからテキサス、フロリダにある大学のESLクラスを転校転校？で行って参りました。

そのあとの一番大きなインパクトは、沖縄空手との出会いです。土地流山会というのがございます。その会長の當山清幸先生、すばらしい、筋肉の躍動が美しい演武です。YouTubeで名前を打ち込めば、必ず出てきます。お年は召しているのですけれども、技が見事なんですよ。説明するよりも、ご覧になって頂きたい。CDを用意致しましたが、時間がないということで却下されましたので、是非、ご自分でお願いします。

さて、私、セントラルテキサスカレッジ（基地内大学）の学生であります。1科目だけサブジェクトを取りました。Crime Scene Investigation and Reconstruction というもので、犯罪現場検証の講義です。その後も受講を

試みたのですが、米軍の、軍人のための教育機関であるので、何か急な派兵とかありますと、昨日まで隣にいた生徒が出席なくなります。すると本来の対象となる生徒がいなくなりますので、日本人のためだけのクラスで開講とはいわずにキャンセルとなります。この状況が2度ありまして、今は名前だけの学生ということでございます。

やっと本題に入ります。申し訳ございません。グローバル人材の育成に向けて、ということで話をいただきまして、正直、なんだろうと考えました。グローバル化とは何なのだろうかと。グローバリゼーション。考えました。その前に、インターナショナル化というのがあったなと。違いは何なのかなと考えました。そして、そもそもインターナショナル化というのは何なのかなということで、色々思い悩んでおりますと、先ほどの空手の大家當山先生が、私の頭の中に浮かんできました。

彼はこういった方かという、ヨーロッパ各地区に行ってデモンストレーションの空手をやると、全員が注目するんです。拍手喝采です。すばらしいと。そして、この流れは沖縄空手道上地流山協会へと引き継がれており、世界にも各支部がありまして、定期的にインド、あるいは、ポルトガル、ドイツ等から稽古に訪れます。この状態を継承・発展させているのが、私の直の師匠清山ブリエット先生と奥様でございます。少しだけ写真で説明を。向かって右手。こちらが清山ブリエット先生、隣が當山清幸先生です。これが、私が昇段試験、2段を取った時の写真で、隣は清山先生の奥様須磨子さんです。これは、インターネットのホームページ上に載っており、全世界に情報を発信しております。

グローバリゼーションというのをこの空手の継承と発展になぞらえてみます。これはあくまでも私の視点です。まず當山先生という存在が、しっかりこれは本物として存在する。次に、情報をしっかり集め、発信することができる。この発信が、交流として結びつき、空手

の協会として今にあるのではないのでしょうか。「時空を超えて変化に対応し、通用する状態」というふうに…、今、感じております。

すると改めて、先ほどの単純な方程式に当てはめ、この「時空を飛び越えて変化に対応する状態」というのが「本物の力」、それに「情報の収集や交流」というふうな「整理・発信の力」が合わさることが「グローバル化」ではなからうかとシンプルに考えてみました。

では、学校ではというところで少し考えて見ますと、実は先ほどのダニエル先生の授業風景。びっくりしました。コンセプトが一緒でございました。まず、グローバル化に対応する教育というのは、先ほどの當山先生と清山先生の関係からスライドしてくると、情報の収集、発信の力の育成だろうと。それから本物の技や知識を己に凝縮する力の育成だろうと。那覇国際高校のシラバス作成に当たってはこの「2つの力」の育成が念頭にありました。

授業に際しては「分からない」から「分かる」という感動体験がまずないといかんだろうと考えます。それから、コミュニケーションの場が必要であると。そのためにやったのが、パターン化による生徒の主体的活動の場の創造です。ダニエル先生の、授業が始まる前に始まっている授業がありました。感動しました。同じく私が目指したのは、古文でも漢文でも、まずは音読から入ることをパターン化し、教師が入室した瞬間に、生徒が立ち上がって読み始めることを実践しておりました。この実践に係る資料は、今日、お持ちしたシラバスの方に掲載してございますので、少しご覧いただきたいと思います。

先ほどのダニエル先生の授業風景を思い出してください。このパターンでした。生徒一人一人、まずしっかりと考えていきます。その中でグループを作りますので、やはりリーダーが出てきます。こういったことで40名1クラスですと5人のグループが出てきていると。さらに、グループの中で意見出したものを、今度は

全体で話をまとめていこうということで、そこに教師が登場してコーディネートをしていく。板書でも、生徒が書いてくれたものを比較しながら、この部分とこの部分はどうかということ、で、「答え」を提示をしました。

生徒たち同士での話し合いの場面で、グループの考えがまとまらない時には、必ず教師に聞いてきます。「僕はこう思うんですよ。先生どう思いますか」「彼はこう言っているんですがどう思いますか」。その時私は質問には何も答えずに「二人ともすばらしい」という返しで終わります。そのあとで、全体での話し合いの中でまとめていきます。これが大きな要ですね。この国語のシラバスを作って授業をした発展として、やっぱりやる気が出てきている、と。

先ほどお互い自己紹介をしていただきました。人間、やはり、しゃべるというのはいいですよ。自分の中のエネルギーを相手に伝える、また貰うと。やる気です。そしてこれが、やはり社会へつながる思考、判断、表現力の育成になってくる。つまり授業の中で、相手に自分の意見を出す時には、根拠を示さないといけない。「私はこう思うからこうなんですよ」と。

実は、こういったコミュニケーションが、沖縄の子どもたちは苦手であります。ですから、何とか力を付けていきたいと日頃から考えておりました。実は、那覇国際高校卒業生なんですけれども、結構、海外、県外に行くのを物怖じしない子供が増えてきました。そして「大学でのゼミで役に立っていますよ」という声をしょっちゅう聞くんですよ。それが、先ほど山口先生のお話に繋がると思いまして、なるほどなと合点がゆき、今日はこの場に来て、私、幸せでございます。ありがとうございます。

国語のシラバスの件は、前年度、県のある国語研究会で、指導書を作るということで提案したんですけれども却下されました。では、今、国語の話でございますけれども「情報の収集、発信力」と「知識を凝縮する力」の育成が求め

られており、これがつまりは「生きる力」と定義され、「21 世紀に求められている人材育成」となります。すると、これは、国語に限ったこととはならないはずです。

少し長くなりましたけれども、あと2分お付き合いください。実は、私、本年度から辺土名高校の校長です。「辺高グローバルプロジェクト」を立ち上げました。これは「教育環境を充実させ、校訓で語られ、校章に示されるグローバルな人材を目指す」ものであります。本校の置かれた現状は編成整理計画の只中であり、名護高校の分校になる道を歩んでおります。表に示された、本年度入学人数をご覧ください。42名です。定員は80でございます。非常に厳しい状況でありますので、これはプロジェクトを作って頑張っていこうじゃないかと計画いたしました。

では、辺土名高校どこにあるのか。スクリーン下の方が那覇でございます。ブルーのラインがございまして、読谷村の左の方の印。実は、ここが私の家でございます。そこから辺土名高校まで1時間31分、63.4キロでございます。当初、新車を購入して通おうと考え、ガソリンが高いのでハイブリッドをと買うことに決めました。ただ、周りからは反対もありました。なぜかと言うと辺土名高校、塩害が厳しいんじゃないかと。そうだなと思いながらも、先ほどの辺土名高校の状況を見ると、これは買ってしまおうと決断しました。これは初め通おうと思ったのことでしたが、今、住んでいるのは辺土名高校から走って5分のところですよ。すると、塩害はさらにひどくなります。僕の新車はどうなるんでしょう。車の心配はあるんですけども、ただ、やはり、それぐらい覚悟を決めて臨まないといかんなと感じました。

スクリーンをご覧ください。辺土名高校です。環境に恵まれて最高のところですよ。山に挟まれて、そして海があります。ちゃんと緊急避難地には、避難路も確保してございます。大丈夫ですよ。そこに校訓、「愛・誠・勇」でございます。

環境学科と普通科があるんです。環境学科、よくテレビでも取り上げられております。そして、校内、非常に美しい。特に右下、寮なんですけれども、ここにクーラーもついている。1人部屋というすばらしい恵まれた状況です。ちなみに私の住んでいる職員住宅、築36年、クーラーなし。どうしようかなと思いつながら、頑張っています。

こういった昔ながらの風景も見れます。先ほど校訓と校章の話が出ました。「誠を以て己を持し、愛を以て人に接し、勇を以て事に当れ」。まさにこれはグローバル化じゃないかと思いました。これが校章でございまして、「高」の文字が白、「波の模様」が下の方、金色ですね。波の上に高校があつて、外に、世界に向かって羽ばたく人材を願っていると言うことでございます。私は運命的なものを感じまして、今、この場に立っております。

校旗。これが、今、校長室にあります。実は、「辺高グローバルプロジェクト」を立ち上げて何とかせないかんと考えました。一番困ったのは、入学式です。子どもたちに、3年後はもしかしたら分校だと突きつけないといけない訳です。そこで問いかけました。「一人一人が大河ドラマの主人公になってくれ」と。そして「辺高のために何ができるかを考えて、一緒に頑張らしましょう」と。保護者にも「ドラマを感じてくれ」と。「保護者の皆様も重要なキャストなんだ」と。

最後には坂本竜馬の言葉を用いてまとめました。「道は百も千も万もある」と。色々あるんだと。そして、「我がなすことは我のみぞ知る」と。頑張っていこうということを、全てをこの校旗の校章に託しながら、今、頑張っております。スクリーン下の方にキーワードとキャッチフレーズでございます。これが「地球を構」に「Say・I・You」です。「Say・I・You」をもってあなたも私も共に声を上げようということです。何の声を上げるかというと、校訓です。で、「世界」ではなく「地球」として

グローバルを示しました。キャッチフレーズ「グローバルアイデンティティ辺土名」で、頑張っている校長でございます。

どうもご清聴ありがとうございました。

(拍手)

石井光夫教授（司会）：

ありがとうございました。本物の力を付けて、それを交流していく力とする。それを付けるのが本来のグローバル人材のあり方であるという、今の校長先生をなさっている辺土名高校のお話をいただきました。ありがとうございます。

それでは、お三方の先生からのご報告をいただきました。これから休憩をいただきまして、それから討議のお時間とさせていただきたいと思います。その準備にちょっと時間がかかりますので、20分ほどお時間をいただければと思います。4時15分に再開ということですのでよろしいでしょうか。20分間お休みをいただきます。それでは休憩いたします。

グローバル人材の育成に向けて ～これからの高校教育における課題から～

Ⅲ 現状報告③ 「グローバル化と高校教育」

I My profile

沖縄県立辺土名高等学校 校長 東盛 敬

1. 歴任 5 校における研究と取組

- ①【球陽】国語の授業とコンピュータ
- ②【名護】古典におけるコンピュータ活用
- ③【那覇国際】シラバス研究委員
- ④【読谷】学力向上研究主任
- ⑤【宜野座】H24/25 キャリア教育実践推進校：教頭

2. 現在に至るまで

- ① 1960 年 6 月 沖縄県コザ市（現沖縄市）に誕生
- ② 1986 年 3 月 國學院大學文学部文学科卒業
- ③ 1986 年 9 月 株式会社 F M 沖縄入社
- ④ 1989 年 3 月 渡米（UCCA<テラス>・UCTX<アールティ>・UC フロリダ）
- ⑤ 1991 年 4 月 沖縄県立高等学校教諭に採用：県立球陽高等学校勤務
- ⑥ 2005 年 1 月 沖縄空手道上地流山会 2 段（當山清幸会長より授与）
- ⑦ 2007 年 7 月 Central Texas College（米軍基地内大学）入学

II Globalization ? → !

- 1. What is globalization ?
- 2. What is the difference between internationalization and globalization ?
- 3. What is internationalization ?

III High school education

- グローバル化へ対応する教育 = 情報の収集・発信【交流】力の育成
+
本物の技や知識を己に凝縮する力の育成
- 「生きる力」の育成 ←←←←←

IV 授業【国語：シラバス 1998 年 4 月発行】

1. 授業の定義

- ① 「わからない」から「わかる」の感動体験とコミュニケーションの場。
- ② パターン化による生徒の主体的活動の場。【個人→グループ→クラス<with 教師>】

2. 授業の発展

- ① 「やる気」の波紋
- ② 社会へつながる思考・判断・表現力の育成

V 高等学校【辺高グローバルプロジェクト 2014 年 4 月】

- 1. 目標 教育環境を充実させ、校訓で語られ、校章に示されるグローバルな人材育成を目指す。

2. 現状

編成整備計画：中期計画にて「名護高等学校の分校化」予定
「辺土名高校を名護高校の分校とします。」
「ただし辺土名高校が両科の定員を満たした場合は計画を再検討します。」

： H26 年度入試（42 名＝5 割）、H25（48 名＝6 割）、H24（56 名＝7 割）

< H26 ～ 28 年度は準備期間 >			< H29 年度～：分校へ移行 >		
H26	H27(70 周年)	H28	H29	H30	H31
72 期 (H10)			分校 1 期		
	73 期 (H11)			分校 2 期	
		74 期 (H13)			分校完全移行

3. 校訓と校章

- ① 校訓 誠<誠を以て己を持ち>愛<愛を以て人に接し>勇<勇を以て事に当たれ>
- ② 校章「高」は白色、「波」は黄金色、「万里の波濤を蹴って進む高校の姿を表し、
「万里の波濤を蹴たてて進む姿」に「各地各界に進出する」「人材」育成を願う。



Keyword : 「地球を構」に「Say・I・You」(誠・愛・勇) Catchphrase : Global Identity ☆ HENTONA

シラバス作成・活用から「国語」を考える

平成9年3月沖縄県教育委員会より、教育内容等調査研究協力委員を委嘱され、県内初となる国語のシラバスづくりに携わりました。任期は翌年2月末日まで、内容は全授業190時間の略案作成。ただ、同年10月から半年間は沖縄県立総合教育センター後期長期研修員として、テーマ「和歌の表現世界を読みとる力を育てる学習指導～コンピュータ活用による言葉の発見を通して～」に取り組むこととなっており、教科書1冊の読み込みと全授業のイメージ化作業を9月中には終えなければなりません。しかし、実際には年末までの時間を要していた記憶があります。完成したシラバスは新設の県立NK高校にて活用することとなり、1期生を対象に国語科4教師が挑みました。本編ではこのシラバス作成に際して形となった「国語」と「授業」を紹介致します。

I シラバス「001 オリエンテーション」

平成10年4月発行の県立NK高校「高校生活のしおり－HOW TO STUDY－」の「3 各教科の学習の進め方に」として掲載した原稿をやや訂正を加えて紹介します。ただし、【学習のポイント】《国語表現》の項目は、平成年4月に県立YT高校「進路のしおり～BrushUp"D"～」（3年間持ち上りの「しおり」）発行に際して加筆しました。高校入学時のフレッシュな心持ちにて目を通して下さい。

学期	001	オリエンテーション	国語について考える
学習目標	1	国語学習としての国語学習の意義	
学習内容	2	国語学習の意義	
学習ポイント		①「ことば」とは何か ②国語のジャンルについて考える。（文学の鑑賞） ③言葉の機能と表現を把握する。（古典文法からの授業開始、授業評価大会について等）	
主な教材	《HomeWork》教科書《国語表現》、国語の教科書		
その他			

【KOKUGO とは】

通常我々は、小学校1年の「こくご」から中学校3年の「国語」まで9年にわたり KOKUGO の授業を受けます。高等学校第1学年では「国語総合」という科目で「国語」力の向上を図ります。

「国語」とは「国の言語」です。「国」が「日本」を、「言語」が「人間の思想や感情、意思などを表現したり、互いに伝えあったりするための、音声による記号、または、それを写した文字。ことば。」と定義すれば、「日本のことば」＝日本人の心にある想いを外に表現・伝達するための音声記号または文字ということになります。そしてこのことは世界のどの言語にも共通していることなのです。ということは小学校の「こくご」から高等学校の「国語」が目標とするものは「書き手の想いを的確に読解する力と読み取ったことを日常の言語活動にいかしていく力を養うこと」と言えるでしょう。

すると理系であれ、文系であれ、書物を読んだり、言葉で自分の「考え」を表さなければならない多くの場面が日常にはあるはず。特に「社会」においては「論理的」に「思考」し、「表現」する力が求められます。ほとんどの就職試験で「小論文」や「面接」試験が課されるのはこのためです。

【学習のポイント】

現代文・古文・漢文も言語という大きな枠でとらえてください。そこには「書き手の想い」が存在するはずです。ですから表記や文法においての相違点はありますが、「書き手の想い」を読み取ろうという姿勢は同じなのです。各担当から授業計画が提示されますので、それに則って学習して下さい。そこで重要なのは予習をすることです。予習の意義は「わからない箇所を明確にする」というところにあります。よってまずは赤ペンを持ち、疑問点等をしっかりと確認することが大切なのです。理解できない箇所を明確にして授業に臨むことが授業に楽しく参加するコツです。最初は「わからない」所だらけかもしれませんが、それでもよいのです。そして、間違ってもよいではありませんか、問題を解く際には正誤を気にせず自分の答えを、自信をもって書き込んで下さい。ただ自分の導き出した答えを訂正する際に、消しゴムを使うことだけはやめて下さい。自分で出した答えは大切なのです。なぜなら、そこにはあなたの思考の過程があるからです。わかる授業のためには「わからない」自分を知り、その思考過程を見直すことが大切なのです。

《国語総合》＝現代文＋古文＋漢文 ★予習と赤ペン Check が大切！

さて「国語総合」の内容はどうなっているのでしょうか。「現代文」と「古典」に大別され、さらに「古典」は古文・漢文に分かれます。中学で古典に多少触れたとは思いますが、それはまだ入門初期の段階です。ですから、現代文はある程度学んできた（つまり生まれてから今日まで現代の言葉の環境の中にいた）ことからすると、高校の「国語総合」と中学の「国語」の大きな違いは古典を本格的に学ぶところにあると言えるでしょう。しかし現代文も古典も書かれた文字という点では共通しています。つまり現代文と同じように、古文・漢文も「心にある想い」を外に表現・伝達するための手段なのです。国語総合は現代文、古文・漢文の基礎を固める科目です。ですから、後述の「現代文」・「古典＝古文・漢文」の解説をよく読んで下さい。

《現代文》＝国語総合－（古文＋漢文） ★ことばの定義と作者の視点が重要！

多くの教科書では、作品形態によって評論・小説・表現・詩歌の4つに大別されています。分けられかたは違いますが、作品の中に筆者の「想い」が存在するということは共通しています。ですから、文章のスタイルによ

時期	006	教科：世界（古文）	古典文法Ⅰ 第16	【教】「概説の指導、類見物のこと」～①～
学習 目標	1) 「古典文法」の概要（古文）からの文法理解 2) 「古典文法」入門編の知識整理			
学習 内容 指導	①「古典文法」19頁～18頁を読み、文法の種類と書きを整理する。 ②「古典文法」19頁を読み、単語と品詞の関係を再確認する。 ③「HomeWork」10頁の【教】の【教】。 ④「古典文法」入門編のまとめとして20頁～22頁の練習問題「1」を解答する。			
評価	①HomeWork【教】19～22頁の「古典文法のまとめ」の知識			
その他	97【国語ⅠⅡ】・97【国語ⅠⅡ】・96【国語ⅠⅡ】の第3問の②～④～⑤～⑥～⑦～⑧～⑨～⑩～⑪～⑫～⑬～⑭～⑮～⑯～⑰～⑱～⑲～⑳～㉑～㉒～㉓～㉔～㉕～㉖～㉗～㉘～㉙～㉚～㉛～㉜～㉝～㉞～㉟～㊱～㊲～㊳～㊴～㊵～㊶～㊷～㊸～㊹～㊺～㊻～㊼～㊽～㊾～㊿～			

ここで大切な点は、古典文法に注意を払わせ「品詞分解」から、日本語としてはどこまでも、自力による「直訳」へと導くことです。次にやはり、このオリジナルの「直訳」を4、5名を1グループとして話し合わせます。ここで場面設定から「意識」を考案させた後、各グループの発表、比較する場へとつなげます。グループで話し合った後ですので、結構強気で板書や説明をします。そして各グループの板書の比較により、古典文法の説明から「直訳」「意識」へと進めます。この時点でどうしても生徒に納得の表情が現れない場合には教師の登場となります。

時期	017	教科：世界（古文）	古典文法Ⅰ 第16	【教】「概説の指導、類見物のこと」～①～
学習 目標	1) 「古典文法」の概要（古文）からの文法理解 2) 「古典文法」入門編の知識整理			
学習 内容 指導	①「古典文法」19頁～18頁を読み、文法の種類と書きを整理する。 ②「古典文法」19頁を読み、単語と品詞の関係を再確認する。 ③「HomeWork」10頁の【教】の【教】。 ④「古典文法」入門編のまとめとして20頁～22頁の練習問題「1」を解答する。			
評価	①HomeWork【教】19～22頁の「古典文法のまとめ」の知識			
その他	97【国語ⅠⅡ】・97【国語ⅠⅡ】・96【国語ⅠⅡ】の第3問の②～④～⑤～⑥～⑦～⑧～⑨～⑩～⑪～⑫～⑬～⑭～⑮～⑯～⑰～⑱～⑲～⑳～㉑～㉒～㉓～㉔～㉕～㉖～㉗～㉘～㉙～㉚～㉛～㉜～㉝～㉞～㉟～㊱～㊲～㊳～㊴～㊵～㊶～㊷～㊸～㊹～㊺～㊻～㊼～㊽～㊾～㊿～			

時期	019	教科：世界（古文）	古典文法Ⅰ 第16	【教】「概説の指導、類見物のこと」～①～
学習 目標	1) 「古典文法」の概要（古文）からの文法理解 2) 「古典文法」入門編の知識整理			
学習 内容 指導	①「古典文法」19頁～18頁を読み、文法の種類と書きを整理する。 ②「古典文法」19頁を読み、単語と品詞の関係を再確認する。 ③「HomeWork」10頁の【教】の【教】。 ④「古典文法」入門編のまとめとして20頁～22頁の練習問題「1」を解答する。			
評価	①HomeWork【教】19～22頁の「古典文法のまとめ」の知識			
その他	97【国語ⅠⅡ】・97【国語ⅠⅡ】・96【国語ⅠⅡ】の第3問の②～④～⑤～⑥～⑦～⑧～⑨～⑩～⑪～⑫～⑬～⑭～⑮～⑯～⑰～⑱～⑲～⑳～㉑～㉒～㉓～㉔～㉕～㉖～㉗～㉘～㉙～㉚～㉛～㉜～㉝～㉞～㉟～㊱～㊲～㊳～㊴～㊵～㊶～㊷～㊸～㊹～㊺～㊻～㊼～㊽～㊾～㊿～			

Ⅲ シラバス「020～022・032 表現」

高校1年の春4月から5月は大きな環境変化に伴い、特に心が揺れ動く時期です。ですからこの春を逃してはならないのです。一方、2年生は1年過ごした高校生活を振り返って、3年生は本格的な進路決定へと挑む中、やはり何かしら心にさざ波の立つ季節が春ではないでしょうか。

時期	020	教科：表現（現代文）	文 章 Ⅰ 第3	【教】表現の探究（1）～①～
学習 目標	1) 文章の構成（現代文）			
学習 内容 指導	①「文章の構成（現代文）」19頁～18頁を読み、文章の構成と書きを整理する。 ②「文章の構成（現代文）」19頁を読み、単語と品詞の関係を再確認する。 ③「文章の構成（現代文）」10頁の【教】の【教】。 ④「文章の構成（現代文）」入門編のまとめとして20頁～22頁の練習問題「1」を解答する。			
評価	①HomeWork【教】19～22頁の「文章の構成（現代文）」の知識			
その他	97【国語ⅠⅡ】・97【国語ⅠⅡ】・96【国語ⅠⅡ】の第3問の②～④～⑤～⑥～⑦～⑧～⑨～⑩～⑪～⑫～⑬～⑭～⑮～⑯～⑰～⑱～⑲～⑳～㉑～㉒～㉓～㉔～㉕～㉖～㉗～㉘～㉙～㉚～㉛～㉜～㉝～㉞～㉟～㊱～㊲～㊳～㊴～㊵～㊶～㊷～㊸～㊹～㊺～㊻～㊼～㊽～㊾～㊿～			

時期	021	教科：表現（現代文）	文 章 Ⅰ 第3	【教】表現の探究（2）～①～
学習 目標	1) 文章の構成（現代文）			
学習 内容 指導	①「文章の構成（現代文）」19頁～18頁を読み、文章の構成と書きを整理する。 ②「文章の構成（現代文）」19頁を読み、単語と品詞の関係を再確認する。 ③「文章の構成（現代文）」10頁の【教】の【教】。 ④「文章の構成（現代文）」入門編のまとめとして20頁～22頁の練習問題「1」を解答する。			
評価	①HomeWork【教】19～22頁の「文章の構成（現代文）」の知識			
その他	97【国語ⅠⅡ】・97【国語ⅠⅡ】・96【国語ⅠⅡ】の第3問の②～④～⑤～⑥～⑦～⑧～⑨～⑩～⑪～⑫～⑬～⑭～⑮～⑯～⑰～⑱～⑲～⑳～㉑～㉒～㉓～㉔～㉕～㉖～㉗～㉘～㉙～㉚～㉛～㉜～㉝～㉞～㉟～㊱～㊲～㊳～㊴～㊵～㊶～㊷～㊸～㊹～㊺～㊻～㊼～㊽～㊾～㊿～			

己の内なる変化に目を向けることから始め、「想い」を形あるものとして表出し、共有することは人間としての大きな成長につながるはず。確かに、原稿を書き、人前で発表するというのは「難儀なこと」であります。しかし、この「難儀なこと」が現代社会の至る所で求められていることも事実ではないでしょうか。また、校内弁論大会がクラス代表を決める第1次選考のHR大会を経て、学年代表を決める第2次選考の学年大会へと進み、学校代表を決める弁論大会開催までの一連の流れも重要です。なぜなら、しっかりと手順を押さえて、あるいは段階を踏まえて、物事は運ばれていくということを見せるよい機会となるからです。

時期	022	教科：表現（現代文）	文 章 Ⅰ 第3	【教】表現の探究（3）～①～
学習 目標	1) 文章の構成（現代文）			
学習 内容 指導	①「文章の構成（現代文）」19頁～18頁を読み、文章の構成と書きを整理する。 ②「文章の構成（現代文）」19頁を読み、単語と品詞の関係を再確認する。 ③「文章の構成（現代文）」10頁の【教】の【教】。 ④「文章の構成（現代文）」入門編のまとめとして20頁～22頁の練習問題「1」を解答する。			
評価	①HomeWork【教】19～22頁の「文章の構成（現代文）」の知識			
その他	97【国語ⅠⅡ】・97【国語ⅠⅡ】・96【国語ⅠⅡ】の第3問の②～④～⑤～⑥～⑦～⑧～⑨～⑩～⑪～⑫～⑬～⑭～⑮～⑯～⑰～⑱～⑲～⑳～㉑～㉒～㉓～㉔～㉕～㉖～㉗～㉘～㉙～㉚～㉛～㉜～㉝～㉞～㉟～㊱～㊲～㊳～㊴～㊵～㊶～㊷～㊸～㊹～㊺～㊻～㊼～㊽～㊾～㊿～			

時期	023	教科：表現（現代文）	文 章 Ⅰ 第3	【教】表現の探究（4）～①～
学習 目標	1) 文章の構成（現代文）			
学習 内容 指導	①「文章の構成（現代文）」19頁～18頁を読み、文章の構成と書きを整理する。 ②「文章の構成（現代文）」19頁を読み、単語と品詞の関係を再確認する。 ③「文章の構成（現代文）」10頁の【教】の【教】。 ④「文章の構成（現代文）」入門編のまとめとして20頁～22頁の練習問題「1」を解答する。			
評価	①HomeWork【教】19～22頁の「文章の構成（現代文）」の知識			
その他	97【国語ⅠⅡ】・97【国語ⅠⅡ】・96【国語ⅠⅡ】の第3問の②～④～⑤～⑥～⑦～⑧～⑨～⑩～⑪～⑫～⑬～⑭～⑮～⑯～⑰～⑱～⑲～⑳～㉑～㉒～㉓～㉔～㉕～㉖～㉗～㉘～㉙～㉚～㉛～㉜～㉝～㉞～㉟～㊱～㊲～㊳～㊴～㊵～㊶～㊷～㊸～㊹～㊺～㊻～㊼～㊽～㊾～㊿～			

何事においても第1歩が肝心です。高校1年の春にしっかりと取り組んでおくことにより、2年、3年における大会はさらに円滑に運営され、内容もより充実するはず。また、

IV シラバス「023～029 評論」

小説にせよ、評論文にせよ、作者の「想い」の外的表現がその1作品となっているはずで、そこには作者から明確なメッセージがあり、「読む」ことにより、我々はそれを受け取ります。ただ、小説と評論ではその「想い」の伝達スタイルが異なります。しかし、「文字」を「言葉」へ、「言葉」を「文」へ、「文」を「形式段落」へ、「形式段落」を「意味段落」へとつないで結実していることには変わりありません。すると作品が「読む」側に求めるのは論理的に思考して「想い」を受け止めることだと考えられます。

時間	025分	科目	国語(Ⅰ)(現代文)	群	第 1 群	試 題	【得意の書】 読書の書、①～④
学習 目標	学習 内容	問題	1) 丹波武英に因る「中」の大切な一文(49頁～50頁)を「ア」「イ」「ウ」「エ」として選定。 2) キーセンシステム→各形式設問の出題・解答決定 ① 【教】6～11頁を読み、四式設問のうち7つを選び出す。 ② 出さなかったものをとり、各形式設問の4か7つを考える。 ③ 難易度をチェックし、設問その読み方や数値を確認する。				
参考	『HomeWork』学習課題(Ⅰ)現代文編、5～8頁の問題くまぐらへく3!>						
評価	95【国語Ⅱ】・92【国語Ⅰ】・90【国語Ⅰ】の熟し得たもの1>2>3>4>5>6>						

[illegible]

評論文には感情ではなくより冷静にメッセージを伝達するための効果的な構成が表れます。評論における「想い」とは作者の「意見」であり、その「意見」はある「対象」へと向けられているはずです。さらに極端に言う「意見」とは「対象」への「Yes・No」となります。仮に「原子力発電所の稼働」を対象とすると意見は「稼働賛成：Yes」と「稼働反対：No」となるわけです。そして、双方の意見の正しさを伝達するべく「展開」が設けられます。最後に「結論」にて「Yes・No」の再確認が行われます。小論文指導ゼミナール主宰の樋口裕一氏が多くの著書にて提唱している小論文の「四部構成」（問題提起・意見提示・展開・結論）は大いに参考になります。

収録	(05) 形式語法(一)(英仏文)	評 価 点	[B] 【訳】「形式の語」形式の語、一致一
学習 目標	1) 形式語法の概ひをつまらへ。包括的知識の修得。 2) 意味関係→→→物類・状態・時間・数量の明確化		
学習 内容	①【教】6～11頁の形式記述書の1～7頁を解説する。 ② 形式記述と形式語法の関係と、意味記述を要する。 ③ 耳習した意味記述から全体の組織構成を明らかにする。		
参考	『HomeWork』学習指導／現代文版／8頁の図解をよめ／219		
コード	07【国語Ⅱ】・07【国語Ⅰ】・06【国語ⅠⅡ】の第1群の類(→2→3→4→5→8ト)		

000	026	154	評論(一)(現代文)	第 4 回	19	【説】「浮世の夢」浮世の夢。――①――
平野 四郎 ・ 宇野浩二	1)	評論 浮世の夢 小説の現代化と作者意識の探求				
	2)	評論 浮世に対する著者の考え(「浮世」観、作者意識)				
		① 平野四郎の「現代文壇」の筆名を解説し、内容理解を深める。				
		② 文体の流れをまよめ、段落を把握する。				
		③ 組織をうけて自分の考えをまとめる (YES or No)				
まき	HomeWork	学習環境(一)現代文編(15頁)	【水の東京】の問題②③④⑤⑥⑦			
シト	92	【読後 1】・92	【読後 1】・96	【読後 1】の第 1 問の解②③④⑤⑥⑦		

V シラバス「054～067 漢文」

科目	054	科目名	国語と読書（漢文）	漢文 基礎 通	【注】新刊祝世親賢集・499頁・新刊の22巻
学習 目標	1) 漢文の読みかたに慣れさせる。 2) 読者の心を解する。				
学習 内容	① 【注】新刊祝世親賢集 / 新刊の方法 399頁を読む。漢文の基本文型を習得する。 ② 【注】新刊祝世親賢集 / 新刊の方法 499頁を読む。送り点の種別と読みとを把握する。 ③ 漢文初読の練習問題。				
道具	①HomeWork ②漢文初読の練習問題				
レポート	9の【読書1】-の【読後1】-96の【読書1】の第4問の解答(240頁)				

科目	056	024	科目と取手(漢文)	新	漢 語	04	【他】『漢文単語のとりあし』 (新漢語) 一頁
学習 目標	1)	漢文単語の基礎的な理解					
学習 内容	2)	漢文単語の3つづきの理解					
		①【他】93頁を読み、漢文単語の基本的事項を把握する。					
		②【他】88・89頁の例文を要訳し、漢文のりきとに照しむ。					
		③【他】88・89頁の例文から熟語を抜き出し、漢文と書下しとの関係を理解する。					
		④ 学習目標「1」の基礎を、①～③の学習を踏まえ、内容理解を深める。					
参考	『HanzuWeb』【他】88-89頁の例文を色で覚えるようにする。						
評価	07	【目標1】・【93】【目標1】・【96】【目標1】の第4問の問2・3・4					

古典である漢文ということでやはり音読を重視しました。ただ音読ではあるのですが、書き下し文ではなく、白文で読めるようになるまで繰り返し練習させました。その際には文の構造を意識させるようにし、まずは主語「S」と述語「V」を明確にさせ、次に目的補語（目的語か補語のどちらか）との関係を捉えさせました。目的

[illegible]

種別	67	種別	68	種別	69	種別	70	種別	71	種別	72	種別	73	種別	74	種別	75	種別	76	種別	77	種別	78	種別	79	種別	80	種別	81	種別	82	種別	83	種別	84	種別	85	種別	86	種別	87	種別	88	種別	89	種別	90	種別	91	種別	92	種別	93	種別	94	種別	95	種別	96	種別	97	種別	98	種別	99	種別	100	種別	101	種別	102	種別	103	種別	104	種別	105	種別	106	種別	107	種別	108	種別	109	種別	110	種別	111	種別	112	種別	113	種別	114	種別	115	種別	116	種別	117	種別	118	種別	119	種別	120	種別	121	種別	122	種別	123	種別	124	種別	125	種別	126	種別	127	種別	128	種別	129	種別	130	種別	131	種別	132	種別	133	種別	134	種別	135	種別	136	種別	137	種別	138	種別	139	種別	140	種別	141	種別	142	種別	143	種別	144	種別	145	種別	146	種別	147	種別	148	種別	149	種別	150	種別	151	種別	152	種別	153	種別	154	種別	155	種別	156	種別	157	種別	158	種別	159	種別	160	種別	161	種別	162	種別	163	種別	164	種別	165	種別	166	種別	167	種別	168	種別	169	種別	170	種別	171	種別	172	種別	173	種別	174	種別	175	種別	176	種別	177	種別	178	種別	179	種別	180	種別	181	種別	182	種別	183	種別	184	種別	185	種別	186	種別	187	種別	188	種別	189	種別	190	種別	191	種別	192	種別	193	種別	194	種別	195	種別	196	種別	197	種別	198	種別	199	種別	200	種別	201	種別	202	種別	203	種別	204	種別	205	種別	206	種別	207	種別	208	種別	209	種別	210	種別	211	種別	212	種別	213	種別	214	種別	215	種別	216	種別	217	種別	218	種別	219	種別	220	種別	221	種別	222	種別	223	種別	224	種別	225	種別	226	種別	227	種別	228	種別	229	種別	230	種別	231	種別	232	種別	233	種別	234	種別	235	種別	236	種別	237	種別	238	種別	239	種別	240	種別	241	種別	242	種別	243	種別	244	種別	245	種別	246	種別	247	種別	248	種別	249	種別	250	種別	251	種別	252	種別	253	種別	254	種別	255	種別	256	種別	257	種別	258	種別	259	種別	260	種別	261	種別	262	種別	263	種別	264	種別	265	種別	266	種別	267	種別	268	種別	269	種別	270	種別	271	種別	272	種別	273	種別	274	種別	275	種別	276	種別	277	種別	278	種別	279	種別	280	種別	281	種別	282	種別	283	種別	284	種別	285	種別	286	種別	287	種別	288	種別	289	種別	290	種別	291	種別	292	種別	293	種別	294	種別	295	種別	296	種別	297	種別	298	種別	299	種別	300	種別	301	種別	302	種別	303	種別	304	種別	305	種別	306	種別	307	種別	308	種別	309	種別	310	種別	311	種別	312	種別	313	種別	314	種別	315	種別	316	種別	317	種別	318	種別	319	種別	320	種別	321	種別	322	種別	323	種別	324	種別	325	種別	326	種別	327	種別	328	種別	329	種別	330	種別	331	種別	332	種別	333	種別	334	種別	335	種別	336	種別	337	種別	338	種別	339	種別	340	種別	341	種別	342	種別	343	種別	344	種別	345	種別	346	種別	347	種別	348	種別	349	種別	350	種別	351	種別	352	種別	353	種別	354	種別	355	種別	356	種別	357	種別	358	種別	359	種別	360	種別	361	種別	362	種別	363	種別	364	種別	365	種別	366	種別	367	種別	368	種別	369	種別	370	種別	371	種別	372	種別	373	種別	374	種別	375	種別	376	種別	377	種別	378	種別	379	種別	380	種別	381	種別	382	種別	383	種別	384	種別	385	種別	386	種別	387	種別	388	種別	389	種別	390	種別	391	種別	392	種別	393	種別	394	種別	395	種別	396	種別	397	種別	398	種別	399	種別	400	種別	401	種別	402	種別	403	種別	404	種別	405	種別	406	種別	407	種別	408	種別	409	種別	410	種別	411	種別	412	種別	413	種別	414	種別	415	種別	416	種別	417	種別	418	種別	419	種別	420	種別	421	種別	422	種別	423	種別	424	種別	425	種別	426	種別	427	種別	428	種別	429	種別	430	種別	431	種別	432	種別	433	種別	434	種別	435	種別	436	種別	437	種別	438	種別	439	種別	440	種別	441	種別	442	種別	443	種別	444	種別	445	種別	446	種別	447	種別	448	種別	449	種別	450	種別	451	種別	452	種別	453	種別	454	種別	455	種別	456	種別	457	種別	458	種別	459	種別	460	種別	461	種別	462	種別	463	種別	464	種別	465	種別	466	種別	467	種別	468	種別	469	種別	470	種別	471	種別	472	種別	473	種別	474	種別	475	種別	476	種別	477	種別	478	種別	479	種別	480	種別	481	種別	482	種別	483	種別	484	種別	485	種別	486	種別	487	種別	488	種別	489	種別	490	種別	491	種別	492	種別	493	種別	494	種別	495	種別	496	種別	497	種別	498	種別	499	種別	500	種別	501	種別	502	種別	503	種別	504	種別	505	種別	506	種別	507	種別	508	種別	509	種別	510	種別	511	種別	512	種別	513	種別	514	種別	515	種別	516	種別	517	種別	518	種別	519	種別	520	種別	521	種別	522	種別	523	種別	524	種別	525	種別	526	種別	527	種別	528	種別	529	種別	530	種別	531	種別	532	種別	533	種別	534	種別	535	種別	536	種別	537	種別	538	種別	539	種別	540	種別	541	種別	542	種別	543	種別	544	種別	545	種別	546	種別	547	種別	548	種別	549	種別	550	種別	551	種別	552	種別	553	種別	554	種別	555	種別	556	種別	557	種別	558	種別	559	種別	560	種別	561	種別	562	種別	563	種別	564	種別	565	種別	566	種別	567	種別	568	種別	569	種別	570	種別	571	種別	572	種別	573	種別	574	種別	575	種別	576	種別	577	種別	578	種別	579	種別	580	種別	581	種別	582	種別	583	種別	584	種別	585	種別	586	種別	587	種別	588	種別	589	種別	590	種別	591	種別	592	種別	593	種別	594	種別	595	種別	596	種別	597	種別	598	種別	599	種別	600	種別	601	種別	602	種別	603	種別	604	種別	605	種別	606	種別	607	種別	608	種別	609	種別	610	種別	611	種別	612	種別	613	種別	614	種別	615	種別	616	種別	617	種別	618	種別	619	種別	620	種別	621	種別	622	種別	623	種別	624	種別	625	種別	626	種別	627	種別	628	種別	629	種別	630	種別	631	種別	632	種別	633	種別	634	種別	635	種別	636	種別	637	種別	638	種別	639	種別	640	種別	641	種別	642	種別	643	種別	644	種別	645	種別	646	種別	647	種別	648	種別	649	種別	650	種別	651	種別	652	種別	653	種別	654	種別	655	種別	656	種別	657	種別	658	種別	659	種別	660	種別	661	種別	662	種別	663	種別	664	種別	665	種別	666	種別	667	種別	668	種別	669	種別	670	種別	671	種別	672	種別	673	種別	674	種別	675	種別	676	種別	677	種別	678	種別	679	種別	680	種別	681	種別	682	種別	683	種別	684	種別	685	種別	686	種別	687	種別	688	種別	689	種別	690	種別	691	種別	692	種別	693	種別	694	種別	695	種別	696	種別	697	種別	698	種別	699	種別	700	種別	701	種別	702	種別	703	種別	704	種別	705	種別	706	種別	707	種別	708	種別	709	種別	710	種別	711	種別	712	種別	713	種別	714	種別	715	種別	716	種別	717	種別	718	種別	719	種別	720	種別	721	種別	722	種別	723	種別	724	種別	725	種別	726	種別	727	種別	728	種別	729	種別	730	種別	731	種別	732	種別	733	種別	734	種別	735	種別	736	種別	737	種別	738	種別	739	種別	740	種別	741	種別	742	種別	743	種別	744	種別	745	種別	746	種別	747	種別	748	種別	749	種別	750	種別	751	種別	752	種別	753	種別	754	種別	755	種別	756	種別	757	種別	758	種別	759	種別	760	種別	761	種別	762	種別	763	種別	764	種別	765	種別	766	種別	767	種別	768	種別	769	種別	770	種別	771	種別	772	種別	773	種別	774	種別	775	種別	776	種別	777	種別	778	種別	779	種別	780	種別	781	種別	782	種別	783	種別	784	種別	785	種別	786	種別	787	種別	788	種別	789	種別	790	種別	791	種別	792	種別	793	種別	794	種別	795	種別	796	種別	797	種別	798	種別	799	種別	800	種別	801	種別	802	種別	803	種別	804	種別	805	種別	806	種別	807	種別	808	種別	809	種別	810	種別	811	種別	812	種別	813	種別	814	種別	815	種別	816	種別	817	種別	818	種別	819	種別	820	種別	821	種別	822	種別	823	種別	824	種別	825	種別	826	種別	827	種別	828	種別	829	種別	830	種別	831	種別	832	種別	833	種別	834	種別	835	種別	836	種別	837	種別	838	種別	839	種別	840	種別	841	種別	842	種別	843	種別	844	種別	845	種別	846	種別	847	種別	848	種別	849	種別	850	種別	851	種別	852	種別	853	種別	854	種別	855	種別	856	種別	857	種別	858	種別	859	種別	860	種別	861	種別	862	種別	863	種別	864	種別	865	種別	866	種別	867	種別	868	種別	869	種別	870	種別	871	種別	872	種別	873	種別	874	種別	875	種別	876	種別	877	種別	878	種別	879	種別	880	種別	881	種別	882	種別	883	種別	884	種別	885	種別	886	種別	887	種別	888	種別	889	種別	890	種別	891	種別	892	種別	893	種
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	---

補語「OC」とは便宜上勝手に名付けたものであり、漢文と日本語の往復作業中にある一文字が目的語か補語かと悩むのを避けるための造語です。そして「S、V、OC」に当てはまらない再読文字や助字等はすべて「I」

としました。これにより生徒は「S・V・OC・J」の関係に絞って文字のつながりを整理できます。KY高校勤務の頃、この作業を徹底的に行わせたところ英語を大の苦手とする生徒から「英語がわかるようになった」という声が聞かれました。確かに英語の5文型と重ねて教えておりましたので、思わぬ効用でした。

個人からグループへ、グループからクラスでという段階を漢文でも継続しました。すると「思考」、「表現」、「検討」、「確認」という作業を螺旋状に少なくとも2回は行うこととなり、興味関心も高まったように思えます。

VI シラバス「072～077 小説」

筆者の「想い」は小説の主人公の心情により伝えられます。すると冷静な場面設定から心情表出された言葉を丁寧につかみ取ることが求められます。そこで心情を汎用的に考える一助として「+」「-」「±」の方向性を打ち出し、その「度合い」を個人からグループ、クラスへと検討させました。

学年	科目	単元	学習目標
1	国語	小説	1. あらすじ・二重線と意味の整理 2. 心・言葉・行動・感情の分析と（形式設定→→→）感情設定
2	国語	小説	①【表】28～39頁を読み、あらすじをつくる。 ②【表】28～39頁の感情の動きを整理する。 ③ 形式設定と感情設定を整理し、構図を設定する。
3	国語	小説	①【表】28～39頁を読み、あらすじをつくる。 ②【表】28～39頁の感情の動きを整理する。 ③ 形式設定と感情設定を整理し、構図を設定する。

三島由紀夫は、評論『小説とは何か』における『遠野物語』再読に際しての、『あ、ここに小説があった。』と三嘆これ久しゅうした」というくだりで「炭取の回転」を「現実の転位の蝶番」として位置づけることにより「小説」についての見事な解説をしています。

学年	科目	単元	学習目標
1	国語	小説	1. 作品における心・言葉・行動・感情の整理 2. 主人公（登場人物）の感情設定
2	国語	小説	①【表】37(16)～39頁の形式設定と感情設定を整理する。 ②【表】37(16)～39頁の形式設定と感情設定を整理し、登場人物の感情を設定する。 ③【表】37(16)～39頁の形式設定と感情設定を整理し、登場人物の感情を設定する。 ④ 作品に記された感情の動きを整理する。
3	国語	小説	①【表】37(16)～39頁を読み、あらすじをつくる。 ②【表】37(16)～39頁の感情の動きを整理する。 ③ 形式設定と感情設定を整理し、構図を設定する。

VII シラバス作成からみた「国語」

シラバス活用当初、4人の教員がキーセンテンスの選定と意味段落設定のために頭をつき合わせました。不思議と意見は2対2に割れていました。微妙な点ではありましたが、なかなか双方が譲らずにそれぞれの「答え」と「根拠」を持って教室に向かうこともあり、説明にも熱が入りました。ある意味シラバス活用は教師間のコミュニケーションも深めたように思います。これは偏にシラバスによって「型」が与えられたからではないでしょうか。

さて「型」と言いますと、空手には技習得段階によってそれぞれにふさわしい「型」が用意されています。ある程度その段階の「型」を身につけるまでは次の「型」には進めません。その段階で留まり、繰り返し繰り返し同じ「型」に挑まなければなりません。この「繰り返し」により、筋肉が鍛えられて動きが柔らかくなり、姿勢もシャンとしてくるのです。まさに「型」習得に向けた「螺旋的の練習」の結果です。そして1つの型の動きの「意味」を体で理解することとなり、「型」の論理性に気づくのです。

シラバス作成を振り返るとその作業は「パターン化」であったと考えます。大きくは「評論」「小説」「古文」「漢文」への取り組み方であり、空手の「型」のように「構」からはじまる「流れ」をつくりたいと思ったのが始まりでした。そしてシラバスの中に「評論への構え」「小説への構え」「古文への構え」「漢文への構え」をある程度は提示できたように思います。今回はかなり極端なダイジェスト版でありますので、如何ほどそれぞれの「型」が伝わったか不安ではありますが、「構え」からその後の「流れ」を感じて頂ければ幸いです。

空手の「型」には動きがあり、具体的なものとして感じることができます。しかし、日常の「国語」ではなかなかそうはいきません。なぜなら思考過程を表現し、伝達する「ことば」というものが非常に抽象性が高いからです。ですから不定型ではなく、国語の「構え」から始まる「型」を繰り返して行うことが重要であると信じます。この空手のような螺旋的鍛錬が「論理的に思考する力」を養うとつながるのではないのでしょうか。

高等学校学習指導要領解説 総則編

第1章 総説

第1節 改訂の経緯

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような状況において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている。

第3部 討議 ーディスカッションー

討議 ——パネルディスカッション——



石井光夫教授（司会）：

それではよろしいでしょうか。これから、討議の時間に入らせていただきます。

ここからは、東北大学高度教養教育・学生支援機構の北原先生と倉元先生に司会をお願いいたします。これからフロアからのお話を頂戴することになるかと思いますが、ご発言いただく時には、挙手をしていただいて、所属とお名前をおっしゃっていただいてからご発言いただくことをお願いしたいと思います。それでは、討議に入らせていただきます。よろしくお願いします。

倉元直樹准教授（討議司会）：

それでは、討議に入らせていただきます。私司会を務めます、東北大学の倉元と申します。よろしくお願いいたします。

北原良夫准教授（討議司会）：

同じく北原と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

倉元直樹准教授（討議司会）：

これから残り時間が1時間15分ぐらいになるかと思いますが、基調講演、それから、現状報告を受けてのご質問がかなりの数きております。20枚ぐらいの質問票が寄せられております。なるべくご質問いただいたことに触れたいとは思いますが、あらかじめ、残念ながら話題に触れる時間がなくなる可能性もあるとい

うことをご承知おきください。申し訳ございません。



最初に、私の方で、それぞれのお話に関して、簡単に感想を述べさせていただきます。

まず、最初の岩本先生は、国が公に求めている「グローバル人材とは何か」ということではなくて、岩本先生ご自身の経験とお考えからお話しいただきました。非常に印象に残ったのはグローバル人材というのは、いわゆる世界市民のようなものを育てるのではなくて、根っこにある自分の地域、アイデンティティ、それを相手も同じように持っているということを尊重する、あくまでも、自分が、今、存在するところに対する影響ということを意識しながら、様々な能力を持った人を育てていく。そういうことこそが、グローバル化の意味である、というようなお話であったかと思います。

2番目の山口先生は、それを受けまして、東北大学が育成しようとしているグローバル人材像のお話、また具体的にTGLプログラムと

いう3年前から始めている東北大学での取り組みのご紹介いただいたということになるかと思います。

3名の現状報告の先生方は、まず、ダニエル・アイコースト先生は・・・私たちもダニエル先生が実践されている授業を一部体験をさせていただいて、英語でのディスカッションが、単に英語能力だけではなくて、学生の考え方なり態度なりに大きく影響していくというようなことをお話になったかと思いました。

また、松井先生は、高校で英語を使って英語教育ということのご実践の中から、やはり英語の授業というのは英語の能力だけではなくコミュニケーションを育てる。相手が何を考えて、何を思っているのかを推測できる力を育てるのだ、と。さらに、必ずしも恵まれた環境にない地域でできることというようにお話だったかと思います。

最後に東盛先生は沖縄という場所そのものが日本の中では極めて特別な環境で、最初からグローバルな条件を備えていた。また、ご自身がグローバルな体験を求めてアメリカに行かれた、と。それを、これから場合によっては統廃合の対象になってしまうかもしれない高校、どういう形で生徒たちに伝えていくか、というようにお話をいただいたということで、私は理解をいたしました。

私のこの理解が十分ではなかったり、本質を誤解していたり、というようなこともあるかと思いますが、それぞれの先生方に、短く、話したりなかったようなこと、あるいは、ここで伝えたいことにつて、お一方ずつ、お言葉をいただきたいと思います。まずは、岩本先生からお願いいたします。

岩本 渉氏：

大変、よくまとめていただきました。話した本人も、なるほどそういう事だったかと聞いておりました。ありがとうございます。ちょっと、1点、私が言っていて、誤解されかねないところ

があるとしたら、ひとつだけ、今のおまとめにはなかったですけども、私、人を理解する力とか、共に生きることが大事だということを申し上げましたけれども、それは決して日本的な意味で、ぬるま湯のような中で何となくお互い分かってしまうというような社会が大事だということを言った覚えはございません。むしろ、これから我々が直面しなくてはいけないのは、価値観が全然違う人たち同士がいかに理解しあうかということでしょう。



ともすると、我々は1600年ぐらい前、聖徳太子が「和を以て貴しとなす」と言った時から、和というのが大事だと教わってきました。英語で言うと、ハーモニーということになるわけです。和音とかいう意味でのハーモニーというのはドミソですとかドファラ、シレソというようにそれぞれ違う音が混じり合ってハーモニーが成り立っている。ところが、ともすると我々日本人がハーモニーと言って、「うん、しょうがない年寄りが言っているからここは我慢するか」「教授がおっしゃっているからそうなんだろうな」というところで、何となく我慢しちゃっているとすれば、それはこれから必要なハーモニーではないと、僕は思います。むしろ出る杭を育てる位の意味でのところに成り立つチームワークというのが、実はこれから必

要ではないかなというふうなことを追加させていただきます。

山口昌弘教授：

私は講演の中では大学の教員としての立場からの観点でグローバル人材の育成ということと話したのですが、その観点と、実は、学生が感じていることはかなりギャップがあるということを感じております。というのは、学生に対する色んなアンケート調査をしていますけれども、我々、今日話をしたのは、英語を含む、だけれども英語だけではないグローバル人材育成の像を出しているわけですが、学生にとっては「英語がどのくらいできるか」ということと、グローバル社会で自分がやっていけるかというその自信というのは、完全に相関があります。そういうことが非常に強く出ていて、この問題はそれを逆手にとってやればいいのか、それともそうではないんだということも示唆しつついくのか、そこはちょっと今、悩ましいと思っております。そういう事実があることを考えながら、我々はどういうふうに学生に向かっていくかということを考えております。

ダニエル・アイコースト講師：

付け加えること、ひとつします。今日の発表。先ほどのビデオ見て、この授業風景を皆さん見たと思いますけれども、この中で、一つこういう授業の前に非常に重要な授業がありました。それは、学生たちが自由にディスカッションする前に、一つの講義が全部見本になります。この見本が教育学でも足りないところだと思います。ですから、いわゆるこの見本はディスカッションの劇です。やっぱり、学生は「ディスカッションしなさい」と言っても、日本語でほとんど経験することがない。ですから、教員の責任は、まず見本作りだと思います。そういう見本を作れば、学生は本当に何でもできる。まず、そこは大きなポイント。ですから、このディス

カッションの講義、2回目の授業は全て見本。その後は、やってみましょう。まず、やっぱり、それは教員の仕事だと思います。

松井徹朗教諭：

僕は特に付け加えることはありませんので。

東盛敬校長：

では、お願いを1点ですね。本校が、今、統合の危機にございますので、もし、いいアイデアがございましたら、よろしくお願いします。

もう1点、これも私事になりますけれども、単身赴任ということで、今、職員住宅におりますけれども、なぜか妻が喜んでいると…いや、結構でございます。

北原良夫准教授（討議司会）：

先生方、どうもありがとうございました。それでは引き続きまして、皆様方から寄せられました質問票をベースにお話を進めていきたいと思っております。それでは、まずは、質問の数が多かった本学の…手前味噌になると申し訳ありませんけれども…TGLに関する質問から始めたいと思っております。まずは、細かい方の質問から初めて、話を膨らませていくという感じで議論を進めたいと思っております。

というようなわけで、山口先生にお願いしたいんですが、質問の内容としましては、運営とそれからその後の影響に関して、もう少し詳しく教えていただきたいということで、具体的にはまず留学の費用ですね。ここに関してのご質問が何件かありました。それから、AO入試で後期に入学が決まってから、入学前海外研修に関して、事前研修、留学とかやっているわけですが、対象者の出身高校へはあらかじめどのようなアナウンスをして、どういうプロセスを踏んで、事業を進めているのかということですね。それから、このプログラムの参加者のその後に関してなんですけれども、例えば参加していない人と比較した場合とか

で、どのような違いとか影響があるのかということが主なご質問ですので、よろしくお願いいたします。

山口昌弘教授：

ありがとうございます。まず留学、このグローバル人材の育成のために、留学というのは非常に重要だと考えておりまして、これに対しては大学としてなるべくバックアップしたいと。さらに、政府も今そこをバックアップしてくださる体制が取られています。例えば、JASSOから奨学金というのを出してもらおう。それから大学、今のところは大学の方で支援して、費用をカバーしていくというような体制でやっております。これは合わせると、大体、半期分の授業料ぐらいは、実は補助されているような感じになったのかなと思います。これらが本学としても力を入れたいということで、かなりサポートしています。

また、高校生のブリッジングのプログラムなのですが、これに関してはもちろん大学のリソースを使うというのはなかなか難しいのですが、基金がありまして、東北大学の寄付でまかなわれている基金等のサポートで、なるべくサポートしたいということで、やらせていただいております。これは、このプログラム自身を行うということは、高校側に周知すると言うよりも、入学した学生さんに、直接、通知いたしまして、こういうプログラムがあるということをお伝えします。

その際に、やはり我々一番重要だと考えたことは、危機管理です。やはり、これは大学生でもそうなのですが、送り出す以上、危機管理をしっかりやらなければならないということで、これを、通常、我々のプログラムでもやっていることなのですが、何回かの事前研修を行っています。その際のひとつは危機管理になっています。こういうことをしてはいけない、こういう危険性があるので、こういうことを配慮しなければいけない、といったようなことについて

は徹底的にやらせていただいています。



それと、プログラム参加者は、これは一般的に言えることなのですが、短期の2週間、3週間であれ、海外での経験をするということは、その後の彼らの人生に非常に大きな影響を与えているということをよく見て取れます。我々はこれを行ったきりの、派遣してそれで終わり、というプログラムではなくて、事前研修を行って、それで事後も研修を行って、報告会をしてもらう、ということをしているわけですが、そこではっきりと成長が見て取れる。特にそのブリッジングプログラムで行った学生さんというのは、全員がこのTGLプログラムに登録して、非常にアクティブにやっています。

北原良夫准教授（討論司会）：

山口先生、どうもありがとうございました。

今の最後におっしゃったのは、知っているか、知っていないか、派遣に行ったか行かないかみたいな区分だと思うのですが、プログラムに登録しているか登録していないかという視点では何かございますでしょうか。

山口昌弘教授：

はい。プログラムに登録しているか、していないかという学生のアンケート調査をしてお

ります。必ずしもプログラムに参加している学生さんだけではなくて、全学を対象にアンケート調査をした結果、非常にアクティブ、要するにグローバル人材に対して前向きである、それだけではなくて、実際に様々な行動を起こしているという事は見て取れています。それで、まだ1年しかやっていないので、これがプログラムによる成果なのか、それともそういう学生がこのプログラムに登録しているのかということが、もうちょっと年次で追っていかないと分からないのですが、参加している学生たちの意識の違いがクリアに出ています。

北原良夫准教授（討議司会）：

どうもありがとうございます。

ご質問いただいた方、この程度でよろしいでしょうか。もし何か、さらにご質問等、あるいは質問票は出されていないんですが、何かご質問のある方、ございましたらどうぞ挙手をお願いしたいと思いますけれども、よろしいでしょうか。・・・。

倉元直樹准教授（討議司会）：

それでは、私が若干補足と言うのも変なんですけれども、もしかすると、他大学のことをご存知の方、似たようなことは他でも聞いたことがあるというふうに思われるかもしれません。ただ、東北大学のTGLプログラムの一つの特徴は規模ですね。山口先生、確か2,500人ほどの入学者のうち、400名を卒業までに海外に送り出すという目標があるということで、よろしいでしょうか。

山口昌弘教授：

はい、そうです。このプログラムの中で、この5年間においては400名程度、と。もうちょっと我々自身が実力を付けたら、これを倍にしたい、というふうに思っております。そのためには、我々自身が経験をつんで、送り出せるような体制を作っていかなければいけない。

ちなみに東北大学で調査をしますと、海外にまったく興味がないという学生が、今は半分います。これが多いかどうかなんですけれども、結構、これは、逆に言えば、興味が少しでもあるという学生が半分いるということですから、これはかなり「内向き」と言われている中では大きいのではないかと思います。興味が少しでもある学生は、それなりに多いんじゃないかと思います。我々はその学生全員に対して、機会を提供できていないというのが事実で、それを機会というのを提供できるように時間をかけて努力をしていくということが必要だと思います。

倉元直樹准教授（討議司会）：

ありがとうございます。

私は高校に対して東北大学の情報をお伝えする立場にもあるのですが、このプログラムは急に決まったというようなこともあって、昨年度初めて、大々的にお伝えすることを始めました。これから、多分、知られていくことになるんじゃないかと思います。

入学前のプログラムに関しても、急に決まったので、昨年は高校にはお伝えしていなかったと思います。

山口昌弘教授：

そうですね。決まる前になかなかお話できないということがあって、もちろん、こういうプログラムを定めるために骨格的なところを、かなり前から準備していたんですけれども、そこをお知らせする機会がなかなか持てなかったということです。これに関しましては、今後も続けていく方針で、準備をしていくということです。

倉元直樹准教授（討議司会）：

はい、すみません。どうもありがとうございました。

ちょっと細かい話を先にさせていただいた

んですが、実はこれまでの議論をお聞きになって、もう一度「グローバル人材とは何か」というようなことに関するご質問が何点か寄せられています。その中で、キーワードとしての「国際化」インターナショナルライゼーション。それと「グローバル化」、グローバリゼーション。この二つがどう違うのか、というようなご質問がいくつか寄せられているのですが。

一方はお帰りになってしまったようなので、会津大学の山内先生、いらっしゃいますでしょうか。ご質問の意図をもう少し補足をしていただけると、それぞれの先生方にお答えをいただけるかと思いますが。

フロア：

ちょっと言葉で、私が若い時には、結構、国際化ということが言われていて、つい10年ほど前からグローバル人材とかいうことが出てきたんですが、あまり定義がはっきりしないところでグローバル化ということで・・・。

私としては、昔、よくインターナショナルライゼーションということで、そういうことで、結構議論されていたのが、グローバル。「言葉の遊び」ということを言うと怒られてしまうかもしれませんが、あまりしっくりこなくて、ただ「グローバル化＝海外留学」・・・。

いや、私自身、非常に大学として非常に小さな大学にありますが、教員の数、教員の比率が、元々外国人の人が多くて、実際に毎日の生活の中で国籍の違う人との話は非常に面白いんですが、ただ、グローバル化というのは何というか、グローバル化ということとインターナショナルライゼーションという言葉はイコール、一緒じゃないかなと思っていて、その辺は皆さんどうお考えなのかな、ということちょっと聞きたかったの、そういうふうに書かせていただきました。

倉元直樹准教授（討議司会）：

岩本先生、いかがでしょうか。答えにくいで

すよね。

岩本渉氏：

確かにおっしゃる通り、私が役所に入った時も、国際化にどうやって教育行政は対応すべきかというお話がございました。当時、国際化と言う時には、国際という時にはよく上司から言われたのは、「インター」という言葉と「ナショナル」という言葉がくっ付いてあるだろうと。国と国との間をどうするかということは、逆に言うと日本の国というものをいかに開いていくかということを主に議論したような気がいたします。

グローバリゼーションという言葉の中には、今度はグローブという言葉が入っているわけで、これは地球ということで。フランス語で言うとこれはモンディアリザションと言いまして、モンドというのは世界。そうすると、もちろんさっきも言いましたように、グローバリゼーションであろうと、国民主権国家を否定しているわけではないのですが、どうも国と国、それを超えちゃうような何かグローバルなもの。それがITの進展とともに、グローバルな、あるいはグローバルスタンダードみたいなことを言います。これは、案外、アメリカンスタンダードではないかというようなことで、それはそれで5～6時間議論を要するところでありまして、単に国と国との関係というのではなくて、わけの分からないものがグローバルなものということで、我々に色々な形で押し寄せてくるというのがあるのかなと思います。

では、それに対してどう備えるか。ある意味、そのグローバルなものが、これはどうしてもこれは避けられないものとしてあるということで受け入れなくてはいけないのだけれども、それがあつたために失つてはいけないものも、また別にあるわけで。そここのところの調整というのが、実はグローバル社会に対応する人間をどうやって育てるかということなのかなと。ちょっと何とも分からない問答みたいになって恐

縮ですが、これが私の今のところの考えです。

倉元直樹准教授（討議司会）：

歴史的にというか、時代の移り変わりという意味で言えば、国と国、というような単位で考えられる時代ではなくなっているということでしょうか。技術的にもそうなっていることが背景でしょうかね。東盛先生のお話を伺ったので、松井先生はどうでしょうか。そういった観点から考えますと…。

松井徹朗教諭：

心の準備をしていませんでした。

言葉の違いを尋ねられると、僕は分かりませんが、これがグローバル化なのかと考えさせられたことがあります。国際化とは僕の中では同じ意味ではないのですけれど。

旭川から札幌まで国道を車で走った時のことです。昼間、車で走った時ですね。国道沿いですから、昔からの商店とか民家があります。夜の8時に同じ道を旭川に戻る時、その国道沿いの家の窓に明かりが点いていないことに気づきました。裏には畑が広がっているのに、です。その時に、ここを耕している人は誰なのかと思ったのです。旭川の郊外にドンキホーテという量販店があります。初めてそこに行った時、驚きました。肌の色の違うアジア系の人たちが多く買い物に来ていました。観光客ではなく、地元に住んでいる人たちです。後に聞いたのですが、彼らは農作業の手伝いをしている人たちでした。僕の知らないうちに、外国の人が地域社会で働いていることを初めて知りました。でも実際、その人たちとの交流があるかという、実はあまりなかったり。彼らは彼らのコミュニティーをどこかで作っていたりします。先ほどの話でも触れたのですが、国外へ出て外国の人と渡り合うグローバル人材が必要とされる一方で、国内にもグローバル人材は必要だと感じています。グローバル化は地方でも確実に進んでいますから。

倉元直樹准教授（討議司会）：

はい。それでは、山口先生。

山口昌弘教授：

多分、「国際」という言葉と「グローバル」という言葉。これからも共存していく言葉で、どちらかがどちらかに全て置き換えられるという言葉ではないと思うんですね。岩本先生が言われていたようにインターナショナル。やはり、国と、あるいは日本語でも国際ですから、国と国があって、その中でぴっちり区切られた中で二つの国が関わっていくと。

例えば、ビザの発給というこれは、国際的なことだと思います。これはグローバルなものではないと。それから、留学生を「インターナショナルスチューデント」と言いますが、これはやっぱり「インターナショナル」だと思うんですよ。国というのがあって、それで留学生を定義しているの、そこはそうだと思う。

じゃあ、経済が国際化されたというのと、グローバル化されたというのはどういう意味だろうかということを考えてみると、経済では、例えば、ある会社が国際的にやっているといったら支店がいくつかの国にあるというイメージなんですけれども、グローバルって言ったら、自分たちの活動が、地球規模で影響を与えているというようなことなんだろうな、というふうに思います。

国際ということとグローバルというのは、いったい何がどうなんだろうというふうに、自分なりに考えようとしておりまして、なかなか常にその二つを区別して使いこなせているとは全くもって言えないんですけれども、いくつかの例をあげてみると、やはりそれはそういう違いがあると。今はどうなっているかという、社会はグローバル。さっき言った意味でグローバルな社会になりつつあるんだというふうに理解しています。

倉元直樹准教授（討論司会）：

ありがとうございました。よろしいでしょうか。

おそらくこの話も尽きないと思うんですが、若干、これに関連して、…同じくくりで言っているのか分からないのですが…「グローバル人材の育成に関して、国内で地域差があるだろうか。また、高校での現実と、大学が向かっていくグローバル化の取り組みが、隔たっているのではないか」というようなご質問がありました。実は、この国内の地域差というのは、日本だけの話ではないと思うんですよね、アイコースト先生。いかがでしょうか。地域の違い。先生ご出身が、アメリカのどちらかという田舎の方だったと伺っています。地域による違いは日本だけの話ではないですよね。

ダニエル・アイコースト講師：

まあ、先ほど言いましたが、1982年に日本に初めて滞在したのね。ここに来る前にちょっと色々調べてね。インターネットの前の時代。日本も含め、色々世界で仕事を探していて。実は。アメリカが不景気の時。どこでもいい。

ただ、当時はやっぱり、私、田舎者。ですから、東京、大阪、あのような大都会は駄目と思って、私わざわざ東北でいいと思った。ですから、私都会よりも東北の方がいい。

倉元直樹准教授（討論司会）：

ダニエル先生のご出身は？出身地はどこかという、都会の方ではなかったですよね。

ダニエル・アイコースト講師：

出身はこのミネソタ州の近く。ノースダコタ州。アメリカの中部の北の方。そんな時、分かったのは、私、やっぱり東北は、よく親しいところ。ニューヨーク市に比べたら。ですから、やっぱりその地域、そこは国の中でもその違いがすごくある。ですから私にとって東北は、いわゆるローカル。インターナショナルよりも自

分の地域と思っている。ですから、これは、結構、複雑なところがあると感じますね。



倉元直樹准教授（討論司会）：

ありがとうございました。いわゆる公平性というような意味での地域間格差を是正するてはいけないという発想は、やっぱり分かるんですけれども、地方は地方なりの取り組みができるというようなことは、多分、ご理解いただけたんじゃないかなと思います。

北原良夫准教授（討論司会）：

では、司会を代わりまして、次の話題に移りたいと思います。今も、先ほど来のご講演とか、今の補足とかでも色んな話が出ましたけれども、これからの社会に求められる人材の姿とか色んな話が出ましたけれども、その一方で、これも何名かの方からご指摘というかご質問があったんですけれども、現代の若者には内向き志向が強いのではないかというご指摘で、じゃあこの原因は何で、先ほど来の人物像とかに照らし合わせて、どのようなことをしていったらいいのかというようなご質問を何名かの方からいただいておりますので、そうですね。これはじゃあ全員の方に順番でお答えいただくということをお願いしたいと思います。

では、岩本先生から、すみません。

岩本渉氏：

内向き志向の原因と・・・。

北原良夫准教授（討議司会）：

原因とその対策というか。

岩本渉氏：

私個人としては、内向き志向の原因は、若者そのものにあるのかというと、それは違うだろうと思っております。

まず、一つは、大学に関して言えば大学の先生方が忙しくなりすぎていること。最近、大学の先生、教授から准教授から皆さんお忙しい。そうすると、自然、「雑務」が助教ですとかボスドクの方にまでいっている。それが、一つ、彼らが外に向こうという気をそいでいる原因に、なってないだろうかというのが一つあります。

それから、もう一つ。学会で名が知られているためには、ある程度の間、やはり、若いうち日本にいた方がいいという風土がいまだに残っていないかどうか。

それから三つ目。これはインターネットの普及ということによりまして、色々なことが即座に手に入るようになった。それだから、これで自分は外国のことを理解したという錯覚をいだいているとすれば、それは若者の責任であります。フェイス・トゥ・フェイスで、もうとんでもないブロークンな言葉で、同僚と議論してやっと得られたこととか、あるいは、自分の家の外国に例えば留学して、自分のアパートの湯沸かし器が壊れちゃった。それをとんでもない向こうの言葉で何とか通じさせた、この喜び。そういったものを味わえないとしたら、それは悲劇だと思います。

むしろ、解決策は何かというのは、今、言ったようなこと。それは誰だって、自分の親元から通って親に飯を作ってもらって洗濯をして

もらうと。こんな楽なことはありません。ただ、それを上回って、何十倍も上回るような喜びっていうのが、実は、外国ですごく苦闘したことから得られるということを若者たちにちょこっと提示する。「今の若い者は」というのは古代エジプトのピラミッドの中にもそういったことが書いてあるということですが、要するに、今の若い者は俺たちに比べて駄目なのだというのは、誰でもどの時代でも言っているわけです。だけれども、もうちょっと冷静に考えてみましょう。今の若者ってそんなに駄目なのでしょうか。別に若者に迎合するつもりはないのですけれども、むしろ我々50代、60代の者が、俺たち苦労したけどあんなに面白いことはなかったぜ、って教えてやる。それが、むしろ、今のグローバル人材育成プログラムなどでも、そういう体験の面白さを教えるというのがひとつ導入なのかなと思っております。すみません、長すぎて。

北原良夫准教授（討議司会）：

ありがとうございました。最初に前置きで、あくまで個人的なご意見だというお話でしたけれども、一応、お立場としては背中に文科省を背負っていらっしゃるのかもしれませんが、そういう立場でお話いただきましたので。

では、次は大学の側からということで、山口先生とそれからアイコーストさん。もしかしてアメリカとの比較でも構いませんので。アメリカの若者との比較でも構いません。もし何かありましたら、お願いします。じゃあ山口先生まずはお願いします。

山口昌弘教授：

岩本先生が言われたことに本当に同感なんですけれども、ただ一つ付け加えるとなると、決して根っから全て内向きだとは思いません。今まで、外に出る必要がない、非常に恵まれた社会の中で生きてきたので、出る必要は特に感

じていないのだと思います。

学生は、これからの社会がどうなっているか、そしてどういうふうに自分たちは生きたいか、ということを考えつつ、それでそういう難しいことを言わなくても、少し押してあげる。学生が少しでもそちらの方に目を向けるということをする、変わってくるということを実感として感じています。こういうプログラムを通じてですけれども。このプログラム自身はかなり、私自身が最初に行った時は、もう本当に一人で放り込まれて、しばらく生き延びて何とか帰ってくるような、そういう体験でしたけれども、これがかなりオーダーメイドでセキュアな中でやっているようなことなのですが、それでもやっぱり出ると違うと。やっぱり体験するということ。それに「きっとこれは面白いよ」と言ってみて体験させるということをしつつやっていく。それを体験した学生が回りに少しずつできてくると、あるところを超えればそれで動き出すと思っています。

あるクリティカルポイントがあると思うんですけれども、そこを突破させる。そうすると周りを見るとやっぱりみんな経験しているよということになってくるということまでいけばいいなと思います。

北原良夫准教授（討議司会）：

どうもありがとうございます。では、続けてアイコースト先生よろしくお願いします。

ダニエル・アイコースト講師：

これは大変難しい問題ではないかという気がする。でも、二つの視点から答えてみます。

一つは大学の教員の場合は、もしかしたら現在の中高の状況をあまり知らない。それは結構大きい。自分の時は覚えていると思うけれども、でもやっぱり色々変わっています。

例えば、簡単に言うと 80 年代、私、修学旅行に言った時には京都に行って、40 人部屋で学生が泊まりました。今は、もしかしたら個人

部屋で泊まるね。そういう個人で、二人で、とかね。ですから、だから今の学生の経験はだいぶ変わっているね、自分の時と比べて。ですから、私、20 年間高校で勤めてから大学に入る時に、ちょっと不安がありましたけれども、でも、実際、中高の世界がよく分かってから、結構楽。逆に。

それから高校の教員の目でいつも大学に教員の動きを見ていると、授業作りとかそんなに意識していない。そういう場じゃないからね、もともと。ですから、その視点が一つ。

あとは、もう一つはさっき言ったように、ディスカッションの場合、見本が必要。どんなことでも、ここでやっぱり東北大学の研究が強いところはいいところだと思う。研究室の方がやっぱり見本があると思うね。色んな実験をすると、見本を作っているところを色々見せるね。ですから、どんなことでも見本が必要ね。この学生はあれがないと進まないと思うね。ですから、見本があれば、結構、色々大丈夫だと思うけどね。

倉元直樹准教授（討議司会）：

内向き志向の原因という話で、高校の先生方お二人に、一つ保護者との絡みで何かありませんか？内向き志向の原因と対策についてということですが。

松井徹朗教諭：

内向き志向の原因ですか。僕も教壇に立っていますけれども、特に内向きとは感じてはいないです。何をもって今の若者たちが内向きと言われているのかが分かりません。その辺り何か、ここにいらっしゃる方で、今まではなかったけれど最近の子どもは全くこういうことをしなくなったとか教えていただければと。留学をしないということで内向きというふうに考えられているのですかね。外に行こうとしないということですか。



倉元直樹准教授（討論司会）：

いや、おそらくですね・・・。

フロアの先生方に振りましょうか。私は様々な高校を見ていて、「内向き志向」というのはすでに前提だと思っています。ただし、子どもたちの内面に内向き志向がある、という考え方が正しいのかどうかは分からないと思います。それで、「保護者の絡みで」というふうに申し上げたのですけれども。フロアの方で、特に高校の先生方で、この件に関して、どなたかご発言いただけませんか？

フロア：

静岡県の掛川西高校の駒形です。

現在の高校生は親の気持ちを押し量りすぎていると思います。静岡からわざわざ東北大学に何の話を聞きに来ているんだと思うかもしれませんが、やはり、県内の大学、近隣の大学への志向が強いのは、「うちの親は通えるところに行ってほしいと思っているだろう」というふうに、子どもの側から先回りして考えてしまっ、お金がかかるようなところには行けない、行かないというふうに思っているという意味で内向きと言えるんじゃないかなと思います。大学在学中に海外に出るなんてもってのほかというふうに生徒自身が親の気持ちを先回りして考えてしまっているというところがあると感じます。

もう一つ、やっぱり英語の問題だと思うんですけれども、英語が苦手、下手くそな子でも、海外に出られるようなシステムがあれば、と思います。さっきのお話では、ITP で 550 というようなお話ですが、私は国語の教員なんで全然分からないんですけれども、国際的な共通語、国際的だかグローバルだか分かりませんが、共通語っていうのはバッドイングリッシュだと思うんですね。下手な英語でもいい、それで伝え合うということが大事だと思うんですが、やはり、英語がうまくないといけないんじゃないか、という気持ち、生徒に二の足を踏ませているんじゃないかなと思います。あとは、大学入試の英語がどういうふうになるのかなということを強く思いますけれども。以上です。

倉元直樹准教授（討論司会）：

最後の話題は後に回すとして、東盛先生、どうでしょうか。

東盛敬校長：

内向きというのをどう定義するのかというのがあるかと思うんですけれども、本当に子どもたちが外に向いていく時には、まずしっかりと自分と向き合います。それがあって、次だと思うんですよ。だからその、今の状態の内向きというのをは、しっかりとまだ向き合っている状態に置かれていないんじゃないのかと。その結果、何か相談事にしても、友達としっかりとことん相談する、顔と顔をつき合せてですよ、状態なのかというと、どうもその状態もないのかなと。メールのやり取りで終わってしまっ、メールが来たらまたこれに急いで返さないといけないというふうな状況の中で、生徒と生徒の付き合い方が少し変わってきているのかなと思います。

それを外に向けるもう一つはやっぱり体験談ですかね。しっかりと夢のある体験談と関わっていくことによって、子どもたちも「じゃあ」

ということで、自分と向き合って、また外に目が向いていくのかなと。漠然とではありますけれども、そういうふうに思っています。



北原良夫准教授（討論司会）：

ありがとうございます。それぞれのお立場から、あるいは個人的なご経験とかを踏まえてお答えいただきましたけれども、特にご質問された方、この辺に関してはよろしいでしょうか。それ以外の方でも結構ですので、この件に関して何か新たなご質問とかおありでしたらよろしくお願いします。じゃあそちらの方。マイクお願いします。

フロア：

（発言者が特定できず、内容が確認できないため割愛。）

北原良夫准教授（討論司会）：

ありがとうございました。貴重なご意見、ありがとうございます。

それでは、その他に何かございますでしょうか。内向き志向に対するご質問などですが。よろしいですか。

倉元直樹准教授（討論司会）：

ありがとうございました。

すみません、また、話題が少し変わってしまいうんですけれども、グローバル人材の育成の方法について議論したいと思います。特に、高校での方法というようなことで、二つの観点のご質問が寄せられています。

一つは英語教育という話なのですが、先に1教科のみではない、他の・・・要するに英語だけではない・・・他の教科とのコラボレーション、そういった他教科との協同の可能性のあるのではないかと、というようなご質問です。それから、「文理の融合の中で何かできないのか」というような話ですね。教科を超えた取り組みというようなところで、高校側で何ができるのか、という話になるかと思うのですが、松井先生、東盛先生、多分、お立場が少しずつ違うと思うので、何かご意見があればと思いますが。

松井徹朗教諭：

他教科との人材育成のためのコラボですか。みなさんそれぞれ考え方に違いがありますから、なかなか一緒にやろうというのは、きっと大学の先生方も大変な思いをしているのではないかと思います。

ただ、英語教員について言うと、英語をコミュニケーションの道具として考える人と、学問としてとらえ細かな文法を教えたい人が、一緒に手を組んで何かができるかというと、それはかなり難しいですね。

では、国語の先生とコラボで何かをやりましょうと言っても、国語の先生の中にも、英語教員と同様、教科に対する考え方は様々です。国語の先生の中には、コミュニケーションと言うと何か薄っぺらい会話のようなものと考えている人も実際にいます。ただ、生徒とのコミュニケーションを重視した授業の実践では、数学の先生で非常に上手な人もいるし、理科の先生ですばらしい人がいます。体育の先生にもいます。

しかし、同じことを他の教科の先生と一緒にやりましようと言った段階でおかしくなってしまう。だから、各自がそれぞれやってくればいいんですよ。それを、そうしたくない人まで引っ張ってきてやってみても、実際うまくいかないですよ。だから、みんなそれぞれ自分の専門分野で、子供たちが言いたいことを言えるように、色々な発想を持ってしゃべってもいいという、そういう雰囲気を作って授業をやってくれたらいいと。これは個人レベルの課題であって、どこかと協力して予算を貰って来ないといけないというものではないと思います。

東盛敬校長：

同感でございます。いわゆる、その教科の特性があるわけですから、それをやっぱりその教科の中で、いかに「分からない」を「分かった」という感動体験とするかというのは、教科によっての特性になりますので、そこを無理やり結びつけると、いかがなものかなと思います。以上です。

倉元直樹准教授（討議司会）：

ありがとうございました。フロアの方ではどうでしょう。ご意見ございませんか。

フロア：

株式会社日本ドリコムの平木と申します。

実は、先日ある大学さんで英語科教員養成フォーラムというのに出て参りまして、そちらの方に国立教育政策研究所の直山調査官もいらっしゃってお話をお聞きしてきたんですが、まず、一つあるのは教科横断という意味で、授業の中での先生方同士のコラボレーションというよりは、例えば、今、社会でこういうところをやっているから、英語の授業の中でそういうところは扱うであったり、そういう協力の仕方。それは、当然、管理職がきちんと調整をとらなければいけないんじゃないかという部分。

それから、もう一つ、英語、これは教員養成

の問題にもなってくると思うんですけれども英語科の、英語をそこまで重要視するのであれば、英語の先生自身が政治経済だったり、世界の歴史文化であったり、日本の歴史文化であったり、そういったものについて、英語できちんとネイティブスピーカーの方に説明をできるだけのレベルの知識。それから英語の力というものがないといけないと思うんですね。

ですから、そういった部分の教員養成課程の問題というのも非常に大きいのではないかと考えております。以上です。

倉元直樹准教授（討議司会）：

ありがとうございました。この問題、よろしいでしょうか？なかなか、その教科間の協力というのは難しいというのが高校現場の現状であるということですかね。大学側も、それを認識しなければいけない、というようなことになろうかと思います。

もう一つ、ちょっとまた別な視点で、英語の中でのコミュニケーション、英語の授業ということでのご質問があります。

一つはアイコースト先生なんですが、「アイコースト先生の英語の授業というのは、東北大学の学生の受験英語力が高いから可能なのではないか」と。要はそういう質問ですね。要するに、東北大学生の学力の高さが前提で成立している授業なのではないか、という疑問です。

それでは、もう一つ、すみません。大学側への質問ということで、「高校側がコミュニケーション中心の英語で教育をしてきて、大学にとってそれは本当にいいのか」という質問がありました。最初の質問はアイコースト先生。2番目の質問は山口先生にお答えをお願いします。

ダニエル・アイコースト講師：

まず、このディスカッションの授業に関しては、これは東北大学じゃなくて、私、この講義はまず宮城学院女子大学で始めた。そこで、英文科でこのディスカッション講義がありまし

て、そこで作り始めました。結構、うまくいきました。いわゆる、このような講義はしっかり準備すれば 15 分間程度できます。これ、実はレベル合わせることができますね。ですから、あまり東北大学生だからできるとは思わない。実は、今でも宮城学院で 3 人の教員が、このやり方を使っています。

一つ重要なポイントは、このインプットの段階。いわゆるビデオ、または記事を使っている、そこで合わせられる。幸いなことに東北大学生は結構レベル高い、このやり方が使える。それでさらに面白くなる。

でも、やり方としては色んな可能性があると思うね。時間も変えられる、15 分間から 10 分でも。ですから、これは単純に一つの方法で、教員の理解によってそれが使えると思います。

倉元直樹准教授（討議司会）：

少しお待ちください。松井先生がうなずいておられたので。

松井徹朗教諭：

どの大学でもできると思います。大学によって学生の持つキャパシティの差はあると思いますが、教師がどう工夫して授業をするかですよ。自分の目の前にいる学生の口に入るサイズにしてやって、同じ味のものを食べさせることは可能だと思います。

倉元直樹准教授（討議司会）：

では、山口先生。大学にとって高校でのコミュニケーション中心の英語教育が望ましいか、というような質問になります。

山口昌弘教授：

まず、私は、英語を専門にして学生に接しているわけではないので、これからの発言はあくまで個人的な見解だと思っていただければ、と思います。

英語の習得ということに関しては様々な目

標が色々あると思います。まず、何でもいからコミュニケーションを取る、ということもあると思いますが、もし、外国でそれなりの交渉をしたいとか、国際会議に行つて、それなりに発言をしたい、それなりのしっかりした発表をしたいと思ったら、…僕は、これはすごくこの今の流れと逆らっていることを言うと思いますが…文法をしっかりやらなきゃいけないと思っています。文法がしっかりあった上で、コミュニケーションを取らないと、僕はいけないというふうに感じています。それと、ボキャブラリーですね。ボキャブラリーを、どういった種類のボキャブラリーを用意できるのか。例えば、普段使う英語のたぐいと、改まったところで使うべきボキャブラリーってやっぱり違うわけですね。そういった感覚を持っていないと、本当に国際的なところではちょっと恥ずかしい思いをするのではないのでしょうか。自分自身がやっぱり、英語については、まだまだやんなくてはいけない、鍛えなくてはいけないなどというふうに感じていますので、そういう意味で言うと、僕の印象ではグラマー、文法を覚えるというのはやっぱり若い時にやらないと難しいんじゃないかというふうに感じています。

一方で、コミュニケーションは、実は、行けばできます。数ヶ月経つと、やっぱりしゃべれるようになります。私もそうでしたが、しゃべれるようになるものだと思います。だけど、文法はできないですよ、数ヶ月では。子どもの頃からきっちり叩き込まないと、できないと思っています。

これは、あくまで私の個人的な見解で、どういうふうに、それはどういう人材になりたいかということに関わってくると思います。世の中のマジョリティがそういうところを目指すということではないとは思うのですが、少なくとも、グローバルなところでしっかりと発言をしたいというのであれば、たまに文法的なミスを犯したとしても、それなりの英語は必要だというふうに思っています。こういう感

じですみません。

北原良夫准教授（討議司会）：

ありがとうございます。松井先生、何か。

松井徹朗教諭：

よろしいですか。僕の前ほどの発言で何か誤解があったかもしれないのですけれども、文法は大事です。コミュニケーションに高校英語がシフトしたからといって、文法をおろそかにしているわけでは全くありません。ですから、例えば、前ほどのアイコースト先生の授業を受けていた学生さんも、きちっと文法を学校でそれまでやってきたから、あのレベルの授業を受けることができていると思います。外国に行ったらちょっと買い物をする時に必要な英語のレベルではないわけで、文法は大切です。高校でも、きちっと訓練して教えるべきところは教える。だから白か黒かと言われちゃうような議論だと、つまり、コミュニケーションなのか文法なのか迫られるような議論になると困ってしまいます。

白と黒の間には、何十光年という距離のグレーゾーンがあるわけで。だから今の英語教育を白黒で論じてほしくないのです。必要なものは、必要な時期に教える。ただ、余計なものまでここで教える必要はないだろうという、選択能力がもっと英語の教員にあってもいいかと思います。

北原良夫准教授（討議司会）：

ありがとうございます。元に戻って申し訳ないですけれども、山口先生にご指名でご質問があるんですけれども。今、語学、特に英語に関してお話をいただきましたけれども、大学の立場から高校現場に何を求めたいか。特に具体的に身につけておいてほしい知識とか、スキルとか。そういったものがあったらお話しくさといと。ちょっと話しにくいのかもしれませんけれども、もし何かありましたらお願いします。

山口昌弘教授：

現実問題としてぶち当たっているのは、やっぱり大学に入ってくる時点での……いわゆるこれを TOEFL で測るというのは正しいのかどうか、よく分かりませんが……英語力が低いという問題にぶち当たっています。これは、他の大学、留学生を見ていると普通に日本語で授業を受けている学生でも、TOEFL を 550 取っているのは当たり前なんですね。ところが、うちの学生というのはそうではないという問題を抱えているというところがあります。なかなか、そのところでは苦労しているということはあるのですが。

実は、今日、こういうところに参加させていただいて、非常にありがたいと思います。というのは、普段、何が高校とか中学の現場で起きているかということを知る機会が非常に限られていて、我々が学生を見て、「きつこうなっているんだろうな」というふうに推測しているということなんですよ。例えば、こういうことが言えるかなと思います。基本的な、論理的な文章が書けない。それは強く感じています。論理的な文章を、おそらく書いた経験がないのです。しっかりしたレポートを書いてほしいと思っても、ほとんどそういう経験がない。そこで、大学でレポートの書き方、そういったところからかなり取り組んでいるのですけれども、そういう、知識だけではない……高校側では色々やられているとか、あるいは高校、大学入試というものがあって、ということがあるんだと思うんですが……私自身がそういうところまで分からないのですが、実際に学生に接していると、論理的な思考力というか、論理的にものを書く力が非常に不足しているということを感じています。

北原良夫准教授（討議司会）：

どうもありがとうございました。じゃあちょっと倉元の方に変わります。

倉元直樹准教授（討議司会）：

こちらの方にいただいたご質問がまだあることはあるのですが、残り 10 分ほどになりましたので、あとはフロアの方から、質問票を出さなかった方も含めて、何か今までの話お感じになっていることでご質問を受けたいと思うのですけれども。

どなたかいらっしゃいますか？

フロア：

地方工科大学の教務部職員です。今日はどうもありがとうございました。

本学ではグローバル人材育成の取り組みを始めたばかりなんですけれども、本学の現状として、昨年新生に対して無料で、TOEFL-IP テストを受験できるようにしましたけれども、現状として半数しか受験しませんでした。本年度は全員受験を実施しています。TOEIC のスコアによって、成績評価と単位数が与えられます。英語科目は必修ではありません。

あとですね、無料の短期海外研修とか、留学への助成金、補助金を設けているんですけども、募集をしても学生が集まらない状況です。興味がないということ、学生からよく言われます。学部生 2,000 人程度いるんですけども、10%程度の学生しか、そういったグローバル人材育成、海外留学等には興味がなく、実際に参加等となると 1%しかいないということが現状としてあります。

それで、ご質問なんですけれども、英語学習への意欲を出させるにはどうしたらいいのか。動機付けをどうしたらいいのかという、根本的なところになってくるんですけども、本学のその英語に対する学習意欲ってというのがないという現状を目の当たりにして、グローバル人材育成までにもまだ行けていない状況なんです。よろしくお願いします。

倉元直樹准教授（討議司会）：

どなたにお答えをお求めになりますか？ご指名は？

フロア：

ご指名はないです。

倉元直樹准教授（討議司会）：

どうしましょう。英語学習への意欲を出させるために、工夫ということなんですが、やっぱりダニエル先生？

ダニエル・アイコースト講師：

大変難しいですけども、答えるとすれば、教員の場合、自分の持っているものがあるね。ですから、この数年間、私の場合、二つのことを頑張ってその辺の授業を作っているね。

一つは今日紹介したディスカッションのようなこと。それは色んな形でできると思います。ただ、もう一つはここで紹介しなかったところで、今、東北大学でもやっていますけれども、多読法のいわゆるリーディングの関係。これは、ある意味すごく可能性がある方法だと思います。ですから、ここで説明するより、もしご存知かもしれないけれども、この多読法はどんなレベルの学生でも可能ですし、色んなやり方があるから、これは一つ可能だと思います。

倉元直樹准教授（討議司会）：

よろしいでしょうか？他にフロアから、最後もう一方ぐらいご質問をいただく時間があります。

フロア：

（発言者本人の希望により割愛。）

倉元直樹准教授（討議司会）：

答えというのはよろしいですか。はい、では

ご意見を承ったということで。

最後、それではあもう一方、どなたか？

フロア：

すみません、高校の国語の教員です。

松井先生がおっしゃったように、答えは白、黒ではなくして、その中間のどこかにいろんな答えがあるのだろうというふうに思うのですが、そこであえて、また答えにくいことをお尋ねします。

岩本先生にお尋ねしたいのですが、グローバル人材育成ということがあって、今、小学校から英語を導入するという方針が出ております。私は高校の教員ですが、英語の面白さとか、そういう魅力を早い時期に子どもにわからせるというのにも必要かもしれないとも思うのですが、やはり日本の文化であるとか、先ほど山口先生がおっしゃったように、日本語での論理的思考力であるとか、そういうことの方を小学校段階では、発達段階に応じてしっかり指導すべきではないか、英語教育は少し時期尚早ではないかと思います。聞いた話によると、小学校で英語を習った子がそろそろ中学校にあがってきて、中には英語嫌いをもう小学校の時に身に付けてしまって、中学に入ってもそれがなかなか解消しないとか。本当かどうか分かりませんが、そういう話も耳にしたりします。答えにくいとは思いますが、小学校からの英語教育は、本当に果たして必要なのかどうかということについて、個人的な見解でも結構ですので、お聞かせいただければと思います。

倉元直樹准教授（討議司会）：

岩本先生、すみません、おおとりで。最後をお願いします。

岩本渉氏：

非常に核心をつく質問で、今日、この質問が出たらどうしようと思いながら、新幹線で来たのですけれども。私のこれまでの持論は日本人

の子どもで、日本語で考える力が育っていないうちに、英語を教えるというのはいかがなものか、それだったら、むしろ、国語の時間で論理的な思考力を育てるとか、そういう方が重要ではないかということ、よく役所の同僚に言いました。役所の同僚からの反応は、「岩本、お前は例外だ」と。つまり、「岩本みたいに子供の頃から外国人のネイティブに英語を教わってやっていれば、それは日本語ができてから英語ができればいい、ということなんだろうけど、そうじゃないんだ」と。「日本語を学びつつ英語を小学生のうちから勉強しなくちゃいけないんだ」というようなことを、よく反論で伺います。私自身も言語学者じゃないので、どっちがどうということは言えないのですけれども、最近、そういうふうに反論してくる同僚に、ちょっと歩み寄っています。

英語と言うのはグローバル化だからというので、私はなぜこのグローバル化で外国語教育の話が出てくるのにフランス語のフの字も出ない、ドイツ語のドの字も出ない、中国語のちゅの字も出ないというのは不満で仕方ないのですが、学習指導要領には「外国語」と書いているわけで、ただどまあしょうがない。英語はグローバル化のデファクトの言葉になってしまっている。確かに、私としては日本人として日本語でものを考えられない者が、英語でどれだけのことができるのかというのはあるのですけれども、逆に、英語で考える。英語でものともものを結びつける。それが日本語の方にも少し役立つようになるのではないかな、と。そういうような、ちょっと光を見出そうと、勝手に思い出しております。

実は、私は別に英語ができるのがグローバル人材だとは思っていないわけでありまして。私はむしろ、被災地に BBC のリポーターが来て取材した時に、「ありがとうございます」と言ってお辞儀したおばあさんの方が、よっぽどグローバル人材だと思っています。そこら辺を忘れてはいけないわけで。

だから、英語教育の方法、英語教育がどれだけ大事かということはもう言うまでもありません。ただ、その時に忘れてはいけないのは、先ほどもどなたかおっしゃったけれども、一人っ子社会に育つ。地域に何もグローバルのグの字もない、そういった産業すらない。そういった子供たちが、自分の地域をかけがえのない地域だと思って、それを大事にしていく。そこから、**think globally act locally** とか言いますが、世界的な規模の問題っていうのはこうあるんだ、そういった中で、自分のところの畑を耕すということがどれだけ危険な食品に対する防護壁になっているかと、そういったようなことを考えられるような子供が一人でも増えていくということが、これからのグローバル社会に向けた日本なのかなと思っております。長くなりましてすみません。

北原良夫准教授（討議司会）：

どうもありがとうございました。質問された方、よろしいでしょうか。ありがとうございます。

それでは、議論も尽きないとは思いますが、そろそろ予定の時間になりましたので、これで討議を終了したいと思います。講演から始まりまして、長時間色々お答えいただきましたパネルの先生方、どうもありがとうございました。

（拍手）

北原良夫准教授（討議司会）：

それでは、お忙しい中、ご参加いただきましたフロアの方もどうもありがとうございました。改めてお礼を申し上げます。

閉 会 挨拶

東北大学高度教養教育・学生支援機構副機構長 / 東北大学大学院工学研究科教授
安 藤 晃

石井光夫教授（司会）：

それでは最後に、閉会のごあいさつといたしまして、東北大学高度教養教育学生支援機構の副機構長の安藤教授からお話をいただきます。

安藤晃副機構長：

本日はお忙しい中、お集まりいただきまして大変ありがとうございます。また、本日貴重なご講演、またディスカッションをしていただきました先生方にもあらためて感謝を申し上げます。

私も実は、色々コメントを聞きながらノートに書いていたら、だいたい皆さんのメモが集まりまして、発言したくてうずうずしていましたが、せっかくの機会を奪ってはいけないと思いつつ、ちょっと自分の出番を待っていましたので、1分ほどお時間をいただきまして、少しお話させていただきたいと思います。

本日の中で、岩本さんの方からいただきました、本当にグローバルな人材というのはどういうことなのだろうか。特に、最後におっしゃっておられた、いわゆるその地域の中の一人として、自分にとって一番大事なことはなんだろうか。それからの世界のグローバルなところに、どうそれが生かされるのか、というのが非常に大事な観点だと思っています。これから自分たちが作るグローバル人材像という中で、えてして日本というのは色んな意味で限られたルールの中で、色んなことをするのは得意なんですけども、それを作ることができないということがよく言われています。山口先生が、いわゆるグローバル人材育成の中で新しい価値を創造できるような指導的人材を育てるというそう

いった観点を持っておられて、この事業を展開されております。



つまり、グローバル時代を先導する人材、ルール作りがきちっとできる人材を作るというのが、一つの観点ではないかというふうに私は思っています。例えば、スポーツの世界だと、ヨーロッパの人間は、自分が負けだすと勝手にルールを変えるんですね。例えば、柔道にしてもしかり、スキーのジャンプにしてもしかり。複合があんなに強かった日本がなんで負けるんだ、という裏には、全部、勝手にルールを変えられてしまった過去があります。また、最近でもパラリンピックできちんとルール通りに決められたコースを走った日本人が、他の外国人はみんなコースを間違えちゃったので、「お前もついでに1周走ってこい」と言われ、優勝できなかったりするんですね。要するに、そう

いった理不尽なことに対してきちんと言えない。そういったことを見るたびに、やはりこれから色んな価値観の違う人間の中で、生きていく力を付けるというのが非常に大事なことで、ろうというものが、本日、聞いていて大変感じたことでございます。

また英語に関してですが、英語というのは一つのツールであって、それを中、小学校から続けていって、大学でも勉強します。それぞれの過程で色々なやり方があり、教育の意味付けっというものが違うと思います。私も、今年から外国語関係の担当になっておりますけれども、大学に入ってきた学生にどういうふうに英語、それから先ほどありましたようなフランス語、ドイツ語など、第二外国語と言われている教育をどのようにするべきかと、色々と考えさせていただいておりますが、いわゆるグローバル社会の中で生き抜くための力を付けるという、そういった観点で取り組みたいと思って聞いておりました。

それで、これが最後になりますが、もう一つ東北大学の方もグローバルサイエンスキャンパスという事業を、これは優秀な高校生に対して大学が早期教育をする事業、それから、海外に行かせるという、そういった事業に、今、応募しているところです。それがうまく採択されました段階には、先生方、高校の先生方の方に色々ご案内させていただきたいと思いますので、ぜひよろしくお願いします。

という宣伝を申しまして、終わりのあいさつとさせていただきます。本日はどうも、大変お忙しい中、ありがとうございました。

(拍手)

石井光夫教授（司会）：

もう一度フロアでお話いただいた先生方に拍手で感謝申し上げたいと存じます。ありがとうございました。

(拍手)

石井光夫教授（司会）：

それでは、これで終了です。お気を付けてお帰りください。ありがとうございました。

講評

講評 1：第 20 回東北大学高等学校教育フォーラム 「グローバル人材の育成に向けて」に参加して

青森県立青森東高等学校
菊池 真理子 教諭

1 はじめに

私事であるが、高等学校の英語教員として採用され今年が20年目となる。その節目と言える今年、「グローバル人材育成に向けて」をテーマとするこのフォーラムについて講評を述べさせていただくのは光栄至極であると同時に、これまでの英語教員としての軌跡を振り返る機会となった。日々教科指導・進路指導をしている中で抱えていた疑問への解決を探る絶好の機会ととらえ、初心に戻り参加させていただいた。

2 基調講演

2-1 基調講演Ⅰ

「グローバル社会に求められるもの」

文部科学省参与 岩本 渉 氏

昨今耳にしない日はないと言ってもよいほど、よく言及される用語となった「グローバル」であるが、その定義付けはさまざまである。今回のフォーラムにおいても、後に続く討議の中で用語論的質問がいくつかなされたほどだ。「グローバル化はコスモポリタンを意味するのでも、主権国家を否定するものでもない」、そして「今いるところでアイデンティティを持ち、他の国のことも考えられる力を持つことである」という岩本氏の講演の中でなされた定義付けに、強く賛同したい。英語を流暢に話すこと＝グローバル化と考えている高校生は意外に多い。しかしそれは全くの誤解であり、英語であろうと何語であろうと相手に自らのことばで、正しく理解してもらいたい意見や内容を当該話者が持っていること、そしてその伝え方を知っていること

が重要なのだと考える。学歴や知識偏重の優勢は未だ拭えない現代日本だが、それだけでは世界に通用しない。どこで何を学んだかだけでなく、学んだことがいかに自分の教養を深め、言いかえれば自分の意見を発する際の裏打ち、拠り所となっているか、自己のアイデンティティをどれだけ強固なものにしてくれるかが、学びの目標の1つであると考え。自分の立ち位置、つまり自己のアイデンティティをしっかりと保持していないと、周囲の状況、特に他国の状況は見えてこないし、事態の善し悪しも判断しづらい。アイデンティティをしっかりと持つことがグローバル化につながっていくという考え方はその通りだと思う。

グローバル社会に対応し得るグローバル人材は、紛れもなく日本社会から生まれてくる。しかし、子どもたちの実態を振り返ってみたときに、上記で定義づけられるようなグローバル化は地域社会レベルで十分展開されているとは言えない。ワーキングプアといった表現が当然のように使用される経済状況の現代では、他国はおろか自分自身のアイデンティティをとらえ直すことさえ難しい時もある。この国土の小さな国で現実的に露わになっている地域間の多くの側面での格差を考えると、**「ローカルがきちっとしていることが肝心である」**との指摘はその通りだが、このローカルの精度をどこまで高めていくかを同時に考えていくことが、グローバル化に欠かせない急務であると感じた。そして、このローカルの精度を高める役割は、自分の所属する高等学校という教育現場にも課せられている。より一層気を引き締めて、授業研究、進路指

導にあたれば、と襟を正す思いである。

2-2 基調講演Ⅱ

「東北大学におけるグローバルリーダー育成の取組」

東北大学副理事/グローバルラーニング
センター長 山口昌弘 教授

山口先生による基調講演では、東北大学が
いかに本気でグローバル人材育成に着手し、
実績を積み上げているかについて深い認識を
得ることができた。理系学部生の英語力の低
さについての言及があったが、実際高校教育
の現場においても理系選択の生徒たちは英語
学習に対して苦手意識が強く、やや臆病な学
習姿勢をとっているように感じられる。理系
選択の高校生には効率よく公式や解法を読み
解く生徒が多く、それらに比べると英語の長
文読解などは、「単語の意味以外何のヒント
もなさそうに見えるから」と読む前から半ば
諦め気味の者もいる。また、「読む・聞く・
書く・話す」のいわゆる4技能のバランスか
ら成る英語学習は、彼らにしてみると泥くさ
く、答えが美しく完成しないことも不満に感
じるようだ。今回の講演を聞き、「理系には
英語力が不可欠である」という点を再確認し
た。では、高校教育においてどれだけの英語
力をつけさせるべきか。近年「英語の授業は
英語で教える」方針が改めて打ち出された。
もちろんこれまでも個人レベルでオールイン
グリッシュの授業やL.L.での英語による授業
などを展開してきたが、「英語で教える授業」
において最も大切な点は、間違いを恐れない
態度を養うことであると私は考えている。意
味のとり違い、聞き間違い、書き間違い、発
音の間違い。どれも現実場面で起こり得るこ
とばかりである。私は、他教科の授業におい
てより英語の授業においての方が間違いを恐
れない態度を育成しやすいと考えている。ほ
ぼ全ての活動に相手を必要とするからだ。間
違いを経験したり、意見を訂正したりされた

りする機会が多ければ多いほど、上達も早い。
大学で高等教育を受ける際に必要な力として、
間違いをおそれず未知の英文や未知の分野・
研究に果敢に挑戦しようとする態度に加え、
英語指導において今まで以上に4技能をバラ
ンス良く習得させる必要があると感じた。

「グローバル時代を先導する人材」には自分
の失敗体験に打ち克つ強い気持ち、失敗の後
も自分を保つ力がやはり必要なのだ、と改め
て納得させられる講演だった。

3 現状報告

3-1 現状報告Ⅰ

「英会話の先にあるもの—批判的思考とコ ミュニケーション能力の育成—」

東北大学高度高等教育・学生支援機構

ダニエル・アイコースト講師

英語学習の際、リーディングであろうとラ
イティングであろうと、必ず指摘される習得
必須事項の一つが上記の批判的態度である。
10数年英語指導に携わってきて感じるのは、
日本人にはこの批判的態度が、日常的にはあ
まり身につかないのではないかということだ。
島国という地理的条件のためか、長きにわた
る家長制度の風習のためか、それは私には断
定できないが、昔から和を重んじている日本
人には、この批判的態度が相手への攻撃であ
ると誤解を招くことも多いようだ。攻撃なの
ではなく、相手の意見を尊重し共有しつつも、
自分の意見もきっちり発しそれを理解しても
らう一連の流れ、それが批判的態度であると
私は認識している。しかし周囲より目立たな
いようにとか、周りの目を気にしたりして忍
耐強く自分の意見を押し殺し、予定調和を保
つことを良しとする雰囲気の中では批判的態
度はなかなか育たない。批判的態度の育成は、
言葉を換えれば双方向のコミュニケーション
には欠かせない要素である。日本人は自分の
意見を持っていないなどと、ひところ言われ
たりもしたが決してそうではない。ただそれ

を快適に伝えることに慣れていないだけである。近年はグループワークやディスカッションといった形態の授業も大いに増えてきた。本来協調性の高い日本人であれば、相手の立場を思いやりつつ自分の意見を述べることは必ずできるはずだ。あとは訓練次第である。

ダニエル先生はその手順において学生のスピーチ準備を強調しておられた。この点が特に重要であると感じる。英語学習の動機づけの1つとして、「英語がペラペラになりたい」と話す生徒たちがいる。この時、この生徒たちは話す内容についてはあまり意識していない。日本語での日常会話はどちらかというと情緒的に進められることが多いが、日本人の私たちが英語をツールとして使うのは、留学など日常体験の機会を除けば、ある程度目的すなわち伝えたい内容が存在する時である。それゆえ、何を伝えたいのかをはっきりと自覚する必要がある。準備して授業に臨むということは、意見を自覚するという観点からも、それを英語でしっかり構築するのでライティングの観点からも良い練習機会である。授業風景のビデオでは、学生たちが自律して生き生きと活動する姿が映っていた。こういった批判的態度の成長を促す指導及び活動を高校教育の現場でも常に模索していくべきである。

3-2 現状報告Ⅱ

「高大、真の接続の観点から」

北海道旭川北高等学校 松井徹朗 教諭

英語科教員として、日々様々な授業研究・実践を重ねておられる松井先生の報告の中には共感させられる部分が多々あった。「英語の授業は英語で行う」と言われ始めて久しいが、そもそもこのフレーズが言われ続けていること自体が問題である。裏を返せば、戦後間もない頃から続いていた文法・訳読式で英語の授業を展開している教員がまだまだ存在する、という事実を露呈しているからだ。もちろんそれが常に悪いということではない。

翻訳家等を目指したい場合は必要な作業かもしれない。しかし、これだけの経済大国日本で、一定の高水準を保ち続ける教育を受けた人たちが、国際舞台において少なくとも中高3～6年は学んだはずの英語で発言することすらおぼつかないようでは、文法訳読式の指導方法は改善の余地が大いに有りだと言わざるを得ない。実際の会話場面で文法の間違いや構文を一つ一つ確認しているような時間はまずない。むしろ、自分の発した意見に対して相手がどう反応するかを確認し、それに対してまた自分が意見を述べるといった即時性が求められる。一昔前まで主流であった文法訳読式では、この即時性を身に着けられない。だからこそ松井先生も、「英語の授業から訳読を排除する」とおっしゃったのだと考える。「わかる語彙から推測し、想像する力」が「他者との違いを受け入れリスペクトする力」につながるという意見にもうなずける。これは日本人のいわゆる「あうんの呼吸」や「行間を読み取る」のとは異質のものだ。相手が自分とは異なる意見を持っているという前提で、その違いをまるごと受け止めつつ自分の意見も相手に受け入れてもらう。どちらかがどちらかに合わせるのではなく、あくまでフィフティフィフティの関係だ。不思議なもので、日本語で話している時には上下関係やバックグラウンドが気になるが、ひとたび英語で話すとなると、正直にはっきりと意見を述べることができる、といった体験をした人は多いのではないだろうか。これでいいのだと思う。ローカルな場面で、例えば地元で、ご近所の年配の方に国際問題について英語で語れというのではなく、必要な場面で臆せずに、自分の意見をたとえ英語であろうと発することができる—このメリハリを、これから私たちは生徒に身につけさせていくべきである。松井先生の報告をお聞きして、改めてそう感じた。

松井先生の「ゴールは大学受験だけではな

い」との言葉も印象的だった。確かに、学んだ英語力をツールとし、卒業後大学などの上級学校あるいは海外等でどのように使いこなすかが重要なので、これはその通りである。しかし地方によっては、高等学校が地域や保護者から進路達成に向けて多大な期待を寄せられているところもあるので、ゴールをどこに設定するか常に意識することは必要であると考え。また多様な英語教授法が提示されている近年だが、そのゴールや到達度を評価した分析はあまり目につくことがない。勤務校でもcan-do statementsを作成しそれに則って授業を展開しているが、まだ経過途中であり分析には至っていないのが現状である。大学での学びやその先の人生につながる英語指導法の分析を深め、高校におけるグローバル人材育成の一助になると言える教授法を模索し続けることが、高校英語教員の責務であると感じた。

3-3 現状報告Ⅲ

「グローバル化と高等教育」

沖縄県立辺土名高等学校 東盛 敬 校長

東盛先生の報告をお聞きして真っ先に感じたことは、先生ご自身の authentic な体験へのこだわりであった。常に本物を求める姿勢、それが全身にみなぎっておりあふれるパワーを感じた。東盛先生は国語がご専門ということであるが、この authentic な感覚を大事にすることは、英語指導には常に求められる側面である。それは、とりもなおさず英語という教科が座学ではなく実技教科であり、その学習には現代社会の変化に伴い常に変化が求められるということも同時に示唆している。グローバル化について考えるとき、それは当然ながら英語指導に限定した話ではない。それぞれの専門教科の延長戦上から私たちの生きる現代社会へどうつながっていくのか、そしてその専門性がどのように社会の中で活かされるのか。そのメッセージを、指導教科

を通じて常に高校生に対し送り続けること、それが高校学校教育に携わる者の役割なのではないかと考える。その教科の授業が自分たちの生きる社会と深く結びついていると実感できれば、生徒たちの興味もますます強まり、やる気の増進にもつながる。得た「技や知識を己に凝縮する力」がその生徒の確固としたアイデンティティ確立の手助けとなることは間違いない。東盛先生の講演を拝聴し、これからの教材研究・授業展開をますます工夫していかなければならないと、自分自身のやる気を大いに増進させていただいた。

4 討議

東北大学高度教養教育・学生支援機構

北原良夫 准教授

東北大学高度教養教育・学生支援機構

倉元直樹 准教授

およそ200人近くもの方々が出席なさっていた今回のフォーラムでは、グローバル化の定義づけから、他大学でのグローバル人材育成に関する助言のお願いまで、大変広範囲にわたる質疑応答がなされた。また、教育関係者ではない一般の方も参加なさっており、改めて東北大学に対する世間の期待の高さを感じた。

5 おわりに

十数年前にさかのぼる新卒4年目、中高教員対象の研修会において、当時の教育委員会指導主事に私は次のように質問した。「現場でどんなに実践的英語コミュニケーション力を伸ばす授業を展開しても、高校生にとって大きな進路目標の一つである大学入試でその実践力が問われないのなら、進路目標達成を手助けすべき立場の高校英語教員はどうしたらよいのか」……その問いに対して明確な回答はなかった。以後高校教員として働き続けるなかで、「真の国際人を育てるため自分は何をするべきなのか」を常に念頭に置き今

日まで邁進してきた。日本の多くの大学で、中でも東北一の著名伝統学府である東北大学において、グローバル人材育成の強化およびコミュニケーションツールとしての英語力重視がますます目視できる状況になってきていることをこのフォーラムで目の当たりにし、大変心強く感じられるとともに、これまで実践的英語力を身につけさせることの大切さを信じ、教材を通して世界をとらえようとする姿勢を身につけさせることの大切さを信じて高校生の指導にあたってきたことが間違っていないことを認識できた。さらにはこのように世界に開かれた大学を目指し、そこから国際舞台へ羽ばたこうとする高校生の指導にあたることのできる我が身の幸福を改めて実感した。

持ち前の好奇心旺盛さから重責を顧みず参加させていただいたが、このような機会を与えていただいたことに深く感謝の意を述べたい。また、フォーラムへの出席に際し事務局の石井教授、倉元准教授をはじめ多くの関係者の方々にご尽力いただいたことにも、あわせて深く感謝する次第である。

講評 2：第 20 回東北大学高等学校教育フォーラム

岩手県立盛岡第二高等学校

鳴海 譲 教諭

1 はじめに

本大会テーマは「グローバル人材の育成に向けて——これからの高校教育・大学教育における課題——」。その案内文書の冒頭には、情報通信技術の飛躍的発展と情報のボーダレス化が進み、近未来の社会を担う子どもたちを育成する教育もグローバル化に対応することが求められていますとの記載があった。

グローバル化の波は、高校教育界のみならず義務教育界にまで及び「外国語活動」の必修化が平成 23 年度から小学 5・6 年生で実施となった。高校では平成 18 年度から大学入試センター試験でのリスニング試験が導入されるなど、話すことに重視した取り組みが行われている。さらに今年度からは「スーパーグローバルハイスクール」の指定事業も始まる。

今、未来の日本を支えていくべき若者に求められる「グローバル人材」とは何かを大学・高校それぞれの立場で考え、具体的に研究及び実践している報告をしていただき、大変参考になった。

2 基調講演

2-1 基調講演 I

「グローバル社会に求められるもの」

文部科学省参与 岩本 渉 氏

(1) グローバル人材とは？

① 経済産業省では、「社会人基礎力に関する研究会——中間取りまとめ——」（平成 18 年）で多様な人々と仕事を行う上で必要な基礎的能力として次の三能力が提言された。

- ・前に踏み出す力：主体性，実行力等
- ・考え抜く力：課題発信力，創造力等

- ・チームで働く力：発信力，傾聴力，柔軟性，状況把握力等

② 文部科学省中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（平成 20 年）では、学士課程で培うべき学士力を参考指針として次のように挙げている。

- ・知識・理解：多文化，異文化や社会と自然に関する知識の理解，人類の文化等
- ・汎用的技能：コミュニケーション・スキル，数量的スキル，情報リテラシー，論理的思考力，問題解決力等
- ・態度・志向性：自己管理力，生涯学習力，チームワーク・リーダーシップ，倫理観，社会的責任等

③ 「グローバル人材育成推進会議審議まとめ」（平成 24 年）では、グローバル人材として次の三つの要素を挙げている。

- ・要素Ⅰ：語学力，コミュニケーション能力
- ・要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感
- ・要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

(2) ESD とは？

① ESD に関する我が国の取組

ESD (Education for Sustainable Development) は、持続可能な社会づくりの担い手となるよう個々人を育成する教育をさす。その基本的な考え方は、人格の発展や自律心，判断力，責任感など人間性を育みながら，個々人が他人との人間関係や社会との関係性・自然環境との関係性を尊重できるよう支援し，

環境・経済・社会の統合的な発展を目指す取組みである。

ESD が育みたい力は、OECD（経済協力開発機構）がグローバルに通用する資質・能力として提唱しているキー・コンピテンシーに酷似し、

- ・社会、文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力
- ・多様な社会グループにおける人間関係形成能力
- ・自律的に行動する能力である。

更には、批判的思考力の育成をも視野に入れ、「収集した情報を明確化し、隠れた前提、推論の土台となる根拠や証拠を吟味し、論理的・分析的推論によって適切な論理を導き、最終的に、行動決定や問題解決を、発言する、文章化する。」ことが理念となっている。

② ユネスコスクールアンケート結果

日本にはユネスコスクールに登録している学校が全国に 705 校ある。標記アンケート結果では、「ESD を通じて育てたい資質や能力を明確化、問題解決力を高め、自ら、または協働して学習課程を重視した編成を試みましたか。」「教科横断的な指導計画を立てるなど指導の工夫改善をしましたか。」という質問へは、8 割以上の学校から前向きな回答が寄せられた。

③ 総合的な学習の時間と学力の相関

昨年度実施した標記アンケート調査では、「総合的な学習の時間」の主旨に即した活動に取り組んでいる生徒ほど、問題に対する平均正答率が高いという結果がでている。研究のプロセスとして、第1段階は実社会や生活における問題について自ら課題を設定する。第2段階では探求の過程を経由し、例えば 1) 課題を設定、2) 情報の収集、3) 整理・分析、4) まとめ・表現、第3段階は自らの考えや課題が新たに更新され、探求の過程が繰り返される仕組みである。

(3)「学習：秘められた宝」

ユネスコ「21 世紀教育国際委員会」（1996 年）には、学習の四本柱が述べられている。

- ・知ることを学ぶ
- ・為すことを学ぶ
- ・共に生きることを学ぶ
- ・人間として生きることを学ぶ

日本の文化の創出は、周囲を海に固まれた陸地による「有利」「不利」、天候の利による影響が大きい。「わび」「さび」など。

・ラポルテュール

グローバル化社会で世界を渡り歩くために、今後の日本のあり方として、諸外国との中にあって対等に法律などを創出し、自国に貢献する人材の必要性が増えるものとする。

価値観を異にする人々と評価観を共有できるのか。空気を読めない、出る杭を育てる指導のあり方を模索するのがグローバル化を意識するこれからの日本の教育には必要な価値観であり、人材育成の必要性を感じる。

2-2 基調講演Ⅱ

「東北大学におけるグローバルリーダー育成の取組」

東北大学副理事 / グローバルラーニング
センター長 山口昌弘 氏

現在、東北大学で行われているグローバル人材育成における取組状況について、その経緯や進捗状況が理解でき、参考になった。

(1) 文部科学省「グローバル化」プログラムの紹介

2006～ グローバル(GCOE) 12 拠点

2009～ グローバル採択 (G30)

2012～ グローバル人材育成 (GGJ) 全学
推進型

2014～ スーパーグローバル大学

(2) グローバル時代の到来

- ① ベルリンの壁崩壊 (1989 年)

- ② 航空機チケット格安化
- ③ 情報通信革命 ※携帯・スマホ

(狭義) 経済や人々の往来のグローバル化
 (広義) 上記に加え、情報通信革命+急速な
 技術革新+急激な社会 (グローバル
 時代)

- ・グローバル化は新しい文化
 産業革命に続く革命

(3) グローバル人材の定義

- ① グローバル人材とは
 - ・グローバル化社会において活躍する
 - ・グローバル時代において活躍する
- ② 要素Ⅰ：語学力，コミュニケーション能力
 要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命観
 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

(4) 東北大の取組

- ① グローバル人材育成推進事業スタート (2012 年)
- ② 里見ビジョンにおけるグローバル人材育成の位置づけ (2013 年)
 - ・グローバルリーダー育成プログラムの充実を核とする教育改革
 - 六つのキー・コンピテンシー
 - i. 専門力
 - ii. 鳥瞰力
 - iii. 問題発見・解決力
 - iv. 異文化国際理解力
 - v. コミュニケーション力
 - vi. リーダーシップ力
 - ・グローバルな修学環境の整備
 - ・学生支援の充実・強化
- ③ 高度教養教育・学生支援機構の設立 (2014 年)

3 現状報告

3-1 現状報告Ⅰ

「英会話の先にあるもの——批判的思考とコミュニケーション能力の育成——」

東北大学高度教養教育・学生支援機構

ダニエル・アイコースト 講師

授業の基本的なあり方・考え方について見直すきっかけをいただいた。現在，コミュニケーション能力の重要性が説かれているが，その能力の根幹をなすものは何か明確に答えられなかったように思う。読む・書く・聞く・話すの4種類の言語スキルが必要でそれを磨くことが大切になる。その手立てとして，3～4人グループでのディスカッション (15～20分) を3回で約50分間行うことによりその能力向上に劇的な効果がある。終盤には，まとめとして授業内容について英語で感想を書き，自己評価を行うという取り組みや授業スタイルには共感するところが多かった。

通常の授業では，PDCA サイクルの重要性を認識していながらも実施できていない実状がある。しかし，日々，自らの授業を見直し生徒の実状に合わせた授業構成と支援の必要性があると感じた。それがグローバルコミュニケーション能力を養う授業であるならば，その能力を身につけさせるべく，今回の授業を参考にしながら手立てを考えたいと思う。

3-2 現状報告Ⅱ

「高大，真の接続の観点から」

北海道旭川北高等学校 松井徹朗 教諭

9年前から資料収集と作成をし，年を追うごとに完成度を高められた功績は計り知れない。日本語を介さないで，語訳・文訳する手立てを模索し得たその過程は困難を極めたのではないかと推測される。指導方針の基本は，能力の育成を基本に，限られた地域における地道な指導の継続には敬服するばかりである。

- ・訳読しない指導が基本

- ・指示されない違和感からのスタート
- ・発言できる雰囲気作りからスタート
- ・コラボレーション能力の育成からの始まり、誰とでも誰の意見でもリスペクトで
きる環境。
- ・宮城県では 80%の高校で英語のみで授
業が展開。

3-3 現状報告Ⅲ

「グローバル化と高校教育」

沖縄県立辺土名高等学校 東盛 敬 校長
Globalization とは

- ・グローバル化とは何か。

高校教育

グローバル化へ対応する教育は、情報収
集と発信、交流する力の育成や本物の技
・知識を己に凝縮する力を育成すること
をとおして「生きる力」を育成するところにある。

授業【国語：シラバス作成を通して】

- ・授業の定義
「わからない」から「わかる」の感動体
験とコミュニケーションの場。
パターン化による生徒の主体的活動の場。
- ・授業の発展
「やる気」の波紋
社会へつながる思考・判断・表現力の育
成
- ・海外、県外に出て行く卒業生が増える
- ・大学で役に立っているとの報告

高等学校【辺高グローバルプロジェクト】

- ・辺土名高校を名護高校の分校化（案）予
定
- ・目標：教育環境を充実させ、校訓で語ら
れ、校章に示されるグローバルな人材育
成を目指す。
- ・校訓：誠〈誠を以て己を持し〉
愛〈愛を以て人に接し〉
勇〈勇を以て事に当たれ〉
- ・校章：「高」は白色、「波」は金色色、
「万里の波濤を蹴って進む高校の姿を表

す」

- ・キーワード：「地球を構」に「Say・
I・You」
- ・キャッチフレーズ：グローバルアイデン
ティティー☆辺土名

4 討議（パネルディスカッション）

《TGL プログラムにおける、留学経費》

大学からは半期分の学費程度の費用が補助
されている。留学する際は、危機管理を配慮
事項として特にも説明している。

《グローバル化と国際化の違いについて》

後者は国と国との関係を基本に捉える考え
方で、前者はそれを超えて地球規模で自国か
ら世界で活躍しようとする意識が基本的な考
え方ではないか。

《若者の内向き志向について感じること》

大学で指導にあたる方々が多忙化し、学生
とのやりとりや関係をつくる時間が減少して
いること。加えて、学生自身が日本で学ぶこ
とのメリット（利益）が多いとの判断をして
いること。何より、情報過多の時代を反映し
諸外国の知識が理解できたと学生が錯覚して
いることがその原因と考えられる。

将来像への後押しをすることで、学生の生
き方に変化が生まれる。周囲への波及効果も
ある。

大学では中高生の状況を知らないことがハ
ンデとなっている。高校の現場では内向きだ
とは考えていない。

親の考えを先読みして、心配をかけない行
動をとるよう配慮している点においては内向
きといえるのではないか。

現代っ子はメールのやり取りにしる、表面
上のやり取りだけで、顔と顔を突き合わせて
腹を割って話すことにおいては内向きといえ
る。

生徒自身が自分と深く向き合ってこなかっ
たつけが今表面化しているのではないか。道

徳教育の問題であろう。

《英語以外の教科とのコラボレーションは可能か》

教科の特性があるので、それぞれの教科で独自に取り組むことが望まれる。

《ディスカッション講義は学生の学力レベルが高いからできるのではないか》

この講義は、宮城学院女子大学で始めたものであり、東北大学の学生レベルが高いからできるのではない。ほとんどディスカッション経験がない学生であるので、学生に見本を見せることが教員の重要な役割である。

《高校ではコミュニケーション能力重視でいいのか》

個人的には、文法（グラマー）英語の必要性を感じる。どういう人材になりたいかに関わる問題であろう。

二者択一ではない。コミュニケーションか文法かではなく。どちらも重要で、どちらも軽視できないものである。

《興味を持たせる英語講座のあり方について》

ディスカッション講座の実践と多読（リーディング）法を試すことをおすすめします。

《グローバル化推進に向けて所感》

一人っ子家族が多いご時世、子どもを家から出したくないと思う親が多い。就職先の薦めにも乗りにくいのではないか。

《小学校からの英語教育は必要か》

日本語が育っていない子どもに英語でどれだけのことができるのか疑問である。逆転の発想で、日本語が身に着いていないからこそ、能動的な英語能力育成が達せられるのかもしれない。

5 まとめ

日本人として日本語でものを考えられない者が、英語でどれだけの事ができるのかとい

う懸念はあるが、逆に英語でものとものを結びつける、それが日本語をより深めることに役立つのではないかと考えられる。

しかし、英語ができる人＝グローバル人材だとは思わない。例えば東日本大震災の被災地で取材に来た BBC のレポーターに「ありがとうございます」と言ってお辞儀をしたお婆さんの方がよっぽどグローバル化された人材である。

日本には全くと言っていいほどグローバル性のない地域社会に生きる子どもたちが大勢いる。そんな子どもたちが、自分たちの住む地域をかけがえのないものとして大切に思うことを出発点として、そこから世界的な規模の問題を考えられる人に成長する事、これこそが、本当のグローバル人材の育成ではないか。自分の畑を耕すことが、ひいてはどれだけ危険な食品に対する防護壁となっているか等、そんな事を考えられる子どもが一人でも増えてくれる事が、これからグローバル社会に向かおうとする日本にとっては必要な事であろう。

講評 3：第 20 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して

宮城県仙台第一高等学校

阿部 伸 教諭

1 はじめに

このたびは、このようなフォーラムに参加させていただき、東北大学高度教養教育・学生支援機構の事務室の皆様、関係の皆様感謝申し上げます。

毎年開催される高等教育フォーラムですが、今回は個人的にも大変楽しみにしておりました。テーマ「グローバル人材の育成に向けて——これからの高校教育・大学教育における課題——」は、まさにこれから大学へ生徒を送り出す、高校側の直近の進路指導上の課題・視点でありますし、外国語（英語）の教科指導に携わる者として、また子どもたちの発達課題に合わせた高大接続のあり方を考える現場にいる者として、多くの意見を拝聴できる貴重な機会でありました。

2 開会挨拶

はじめに、開会の挨拶の中で、東北大学高度教養教育・学生支援機構長の花輪先生は、東北大学の考えるグローバルな人材像には、七つの視点があり、その中の一つに鳥瞰力があるというお話をなさっていました。鳥瞰力とは状況を臨機応変に捉え、ダイナミックに視点を変えて、物事を視る力であり、常に高みを見ながら深いところに近づいていく力である、というものです。議論の中身については触れていませんでしたが、様々な文化や価値観の異なる社会状況の中で、物事の本質へ近づき、解決に向かう糸口を探るものの見方として参考となるものでした。本日フォーラムの議論のキーワードの一つとなりました。

3 基調講演

3-1 基調講演Ⅰ

「グローバル社会に求められるもの」

文部科学省参与 岩本 渉 氏

海外経験が豊富な岩本氏からは、「グローバル社会に求められるもの」というタイトルで、「1. グローバル人材とは？」「2. ESDとは？」などの項目について、国が求めるグローバル人材の概念と、国際的に日本が発表した行動計画の紹介がなされ、ご自身の体験を交えながら、わかりやすくお話をいただきました。特に、平成24年6月の「グローバル人材育成推進会議審議まとめ」の要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーをあげた点は、決して言語（英語ができる）力があればよいと考えるのではなく、「言語以外の自分の文化、自分が拠って立つところ、を大事にしていく、あるいは、それを外に向かって発表できる力が必要になってくる」という具体的で明確な道筋を示すものでした。

よくいわれる言葉に、"Think global, act local" というものもあります。直訳すると「グローバル規模で考えて、現地にあわせて行動せよ」という意味ですが、この言葉をもとに私なりに考えてみると、次のようなことが言えるのではないかと思います。

現在の日本においては、日常の生活のどの場面でも外国人を目にし、仕事における顧客や同僚として、また普段一緒に外国人と活動することがあたりまえのような生活状況にあります。しかし目の前にいる外国人は、日本人とは異なって、それぞれの文化を持ち、生まれ育った各地域・各地元の価値観に根ざしています。また社会も、たとえば日本の自宅

から、世界のどこかにあるサーバー上で稼働するサイトにアクセスし、画面上でクリックして注文すると、注文が外国のどこかの国に飛んで、運送業者を経由して税関を通り、数日後には自宅に届くというような世界にいます。そのようなコミュニケーションの対象となる外国人も、まさに自国以外ではその国の地元のコミュニティに所属し、そこでの価値観に根ざして生活しています。このことを考えれば、グローバル化社会の本質は、「画一性」ではなく「多様性」の尊重である、ということもできます。

このような世界規模で連動する仕組みが既に基盤となって、私たちの生活を支えている時代にあっては、「現地で考え、地域にあわせて行動し、グローバルの仕組みを活用する」という意味の **"Think locally, act regionally, leverage globally"** という言葉のほうがりしくり来るように先生の講演を聴いて感じました。

と同時に、「自分に拠って立つ」の解釈は自由だと思いますが、日本人としてのアイデンティティーにその解釈を置き換えながら、より発展させ、地球家族の一員としての「心」を培う教育や社会的なメッセージを発信していくことも大切だと強く感じます。「外に向かって発信していく」ことイコール日本人としての発信ではなく、地球の一員である個人レベルでの発信（貢献）という形で広く浸透させることが大切であると思います。そうした「多様性」を尊重しながら、共に理解し合うために、おたがい自国の文化や物の見方・考え方・価値観などを発信し合う。そうしたあなたが、偶然日本人だったということではないでしょうか。

3-2 基調講演Ⅱ

「東北大学グローバルリーダー育成の取組」 東北大学グローバルラーニングセンター長

山口昌弘 教授

山口先生からは、これまでのグローバルプログラム施策の変遷について触れながら、グローバル化は新しい文明であり、一過性の現象ではなく、時代の大きな流れであることとらえていること、また2013年8月に公表された東北大学「里見ビジョン」に基づき、高度教養教育・学生支援機構の設立と東北大学がグローバル社会で活躍できるリーダー育成のためのプログラム（TGLプログラム）の紹介がなされました。

このプログラムは2012年から5年間の事業計画で、特に全学推進型が採用されており、生徒を送り出す高校側にとっても大変魅力ある事業であると考えます。全学部生を対象に授業等のサブプログラムはもちろんのこと、海外へ学生を多く派遣する「海外研鑽サブプログラム」は、志の高い学生が切磋琢磨しながら学んでいく場としては理想的な環境が与えられていると感じます。高校側もこうした取り組みの例を参考にしながら、個々の大学での様々なプログラムを生徒に情報提供することが肝要であると感じました。

特に、入学前にAOⅡ期入試に合格した生徒を対象に希望を募り、短期の留学経験をさせる取り組みについては、新しい高大接続の形であると感じており、注目しています。もちろん、ただそれだけでは英語のコミュニケーション力の大きな上達は望めませんが、上達したいという強い動機付けになり、将来の長期留学する際に敷居が低くなるといった効果が期待できます。多額の費用をかけての研修であることを考えれば、高校側や高校生にとってはとても魅力的であるし、また同時に大変貴重な機会でもあります。プログラムの研修内容を充実させ、大学や研究施設での見学や講義を聴くといったものだけでなく、交

流など積極的に関わる活動を入れ、生徒の海外へのチャレンジ意識が高まるようにするなど配慮いただければ幸いです。いずれにせよ高大接続の新たな推進役として注目されるプログラムであることは間違いないと言えるでしょう。改めて東北大学の先見的な取り組みに敬意を表したいと思います。

4 現状報告

4-1 現状報告Ⅰ

「英会話の先にあるもの——批判的思考とコミュニケーション能力の育成——」

東北大学高度教養教育・学生支援機構

ダニエル・アイコースト 講師

東北大学の学生たちの実際の授業場면을映像で紹介していただきながら「ディスカッションを用いたコミュニケーション授業」を報告していただきました。先生の授業スタイルは授業を三つのステップに分け、4技能の言語スキルをすべて刺激させ、すべてのスキルを磨いていくものでした。

私が特に目から鱗の落ちる思いをしたのは、2番目のステップディスカッションステップでした。グループディスカッションを異なるメンバーで3回行う中で、一つのトピックについて討議し合ううちに、自分の考えを発展させることができ、さらにそのトピックに関する単語や表現を楽に使えるようになるとの指摘です。さらに1回目（練習）→2回目（練習試合）→3回目（試合）として、プレレーションワークシートの利用の仕方に配慮し、自分の答えを話させる工夫は大変参考になりました。

サブテーマの「英語を通じて批判的な思考やコミュニケーション能力を育成する」については、これがいかなるものなのか、具体的なイメージをつかむことができました。それと同時に「批判的思考力」は、まさに「生の」ディスカッションの中でしか直接的には生まれないものであり、またコミュニケーション

能力を磨く設定の中でしか養い得ない能力であると認識したものです。

しかしながら、高校現場では「ディベート・ディスカッション」を授業時間内に取り込もうとすれば、他の語彙・語法や文法知識、難しい構文の理解が疎かになるのではという懸念から、単元が終わった後に Lesson 内に登場したトピックを設定し、生徒にまとめた文を「話すこと」や「発表すること」を求めるのが主流になっています。それでもじっくりとアイコンタクトをとり相手の表情を見ながら、意見を述べたり、討論したりするレベルには、まとまった時間として50～60分の中で行うことは難しいと感じます。発表も暗唱をベースにしたスタイルに終始し、どうしても現行の授業展開では表面的、一時的になりがちです。50分、55分と制限された高校の授業内では、「話すこと」から「考えて議論する」レベルまでには持って行けないという現状認識は消えません。一般的な高校教育活動の現場は、柔軟な対応が困難であるという実情も考慮した上で、「コミュニケーション重視の授業」を展開していくにはどうしたらよいか、また高校カリキュラム全体の枠の中で、一定の言語習得の学習環境を多くかけられない事情をどう改善してゆけばよいか、改めて考えさせられます。小学校からの英語学習の必修化もあり、母国語と外国語、子どもの発達段階に応じた学習課題等を総合的に議論することも必要ではないかと考えます。

4-2 現状報告Ⅱ

「高大、真の接続の観点から」

北海道旭川北高等学校 松井徹朗 教諭

モデル校として9年間英語による授業を展開してきた実践の中で、従来の訳読中心の授業からの転換を短期間で迫られ、日本語を介さず英語を理解するという、即座の対応が求められるコミュニケーション力とはどういう

ものなのかの分析の指摘がありました。先生は、コミュニケーションの成立には相手が言わんとしていることの7割理解していれば残りの3割を創造力、つまりわかっている語彙や文脈を手がかりとして、また相手がいる場面では顔の表情やその場の状況や雰囲気から判断しながら推測することが大切になるということ、したがって教師の仕事は生徒に内容を推測する力を身につけさせることで、内容の7割しか理解できなくても残りの3割を創造力や推測力で理解する力を育てる必要があるということ、ペアワーク活動の中でも、お互い助け合いながら問題を解決させていく過程に、たとえ指導の中でコミュニケーションが成立していなくても失敗を恐れず積極的に発言することを促し、「推測する力」や「創造する力」を育成し、それが子供たちの異文化を理解する態度や今後生きていく上での経験的な心構えを養うことにつながるということ等を、北海道の小規模な高校の事例も含めて報告をいただきました。

先生は、生徒の学力レベルや地理的条件等に触れながら、グローバルな環境を経験することが身近になっていく社会においても、そのような相手を尊敬する気持ちを育てていくことが大切であると力説していました。私も同感です。限られた時間内の報告ではありましたが、「英語による授業」のもたらす効果、生徒の学力の変容や授業の展開例・進学指導重点校での指導実践例等、その一部でも良いのでより具体的な場面に即して説明をしていただけるとなおありがたかったと感じています。

4-3 現状報告Ⅲ

「グローバル化と教育」

沖縄県立辺戸名高等学校 東盛 敬 校長

ご自身のこれまでのユニークな経歴と体験から、先生らしい熱のこもったお話を伺いました。教職につく前には、グローバル化の中

に自ら身を置き、その後高校教育の現場へ転身した先生は、国語教員として研究活動をするも、グローバル化へ対応する教育を実践し、なお「分校化」という新たな課題へ向かっています。その姿に大変感銘いたしました。

グローバル化に対応する教育とは、必要な情報の収集を可能にする力とそれを発信していく力の育成のことであり、それらが交流することを通じ、本物の技（術）や知識を己の中に凝縮する力となって、「生きる力」の育成につながるのではないかとのお話がなされました。それは英語や国語に限らず、どの教科にも通じる点であり、生徒の主体的な活動の場を増やし、自分の意見やエネルギーを相手に伝える場面を提供することが大切であると話していました。

「内にこもった子どもたち・学生像」ということで後の討議の中で話題にあがりましたが、少なくとも社会的状況も踏まえて、積極的に議論することは大切であると私も感じます。交流を促進する活動は社会、地域・職場はもちろん、学校、大学、研究機関等、教育活動の中でも必要であることは間違いないし、あらゆる機会を捉えて他の文化・価値観・物の見方に触れあうことで、子供たちは生の人間的な触れ合いを経験し、そこから様々な刺激を受け、様々な価値観を受け入れる態度を養うことになります。しかし、少しでも「内にこもる」子どもや学生のこと話題にのぼる以上、実際の学生像や社会的背景も分析しなければならないと考えます。コミュニケーションの土台を作る発信力は、人間誰もが子どもの頃に経験する、人間関係を楽しむことが素地としてあり、その喜びが子どもたちの心を豊かにする点を今更ながら確認できました。

5 討議

本日お話をいただいた5名の先生方がパネラーとして登壇し、会場からの質問をもとに、

多くのトピックに対して、様々な意見交換がなされました。「大学の立場からの提言」

「高校の英語の授業の形態」「小学校からの英語の導入」「人材育成の方法」等々が主なテーマでした。

その中で、山口先生から「一般的に見られる大学生の英語力」についての指摘がありました。実は、この点は高校側としても非常に気になるところです。どのような生徒を高校から大学へ送り出すのか、大学入試やアドミッションポリシー等がそれに大きく関わることは当然でそれが一つの指針とはなりますが、果たして大学入学後の学生の実態がどうか、どう教科学力（英語力）が定着しているのか、こうしたことについて高校側ではなかなか生の声を聞くことはできません。そうした点では山口先生のお話は大変新鮮でした。このような討議を聴くことは大変貴重であり、今後も機会があれば参加したいと思います。

6 閉会挨拶

閉会の挨拶の中では、東北大学高度教養教育・学生支援副機構長の安藤先生から締めくくりとして、「価値観の違う世界で人類が共存していくためには『ルールづくりのできる人材・リーダー』が求められている。英語はあくまでも、そのためのツールであって、東北大学でも英語以外の他の外国語、フランス語、中国語なども視野に入れて、地球規模で活躍する人材の育成のために『Global Campus』作りに取り組みたい」とのお話がなされました。

Rule（ルール）は「まっすぐな棒、規範」を語源とし、尺度として恒久的に変わらないものと理解しています。それが習慣として社会に定着し、誰もが平和な生活を営める社会・世界作りこそ人類全体が望む理想であると考えます。そのためのルール作りは鳥瞰的な視点で、なおかつ、それぞれの文化背景を持

つアイデンティティーや力が協力し合い、解決する方向に向かうことが大切であると思います。困難を極めることですが、一つずつ歩みを進めていくしかないでしょう。

7 おわりに

このフォーラムの企画主旨にあるように、現在は、社会の「グローバル化」が叫ばれ、教育も未来へ向かって、グローバル化への対応が求められ、小学校での外国語活動の必修化や高校での英語による授業、大学入試もセンター試験のリスニング試験導入ばかりか、新たな入試システムの検討と一部の大学による外部試験導入と、話題はつきません。ともすれば、我々高校側の教員も、ふだんの教育実践や教科活動、そして新たな大学入試に向けた指導だけに、目線はいきそうですが、はたしてその先にあるものが何なのか、それを子どもたちにしっかりと、具体的に説明できないと本当の意味でのグローバル人材の育成のための実践にはならないと感じます。

次の世代を担う子どもたちが、果たして、これからどのような世界の中で、どんな人材となっているのか、またそのような世界で、いかに人とコミュニケーションをとり、どんな社会を作っていくのか、そしてその子どもたちが、そのまた次の世代の子どもたちに何を伝えていくのか、そういう大局的な視点が非常に大切であると思います。本日のフォーラムからは、グローバルな社会に生きる人材を、どう育成していくかばかりでなく、そこから少し先をしっかりと見据える視点というものをしっかりと伝えてくことの大切さを学んだ気がします。高校教員であるとともに、一人の子を持つ親として、そのような視点・課題意識を持ちながら参加させていただいたことに感謝し、講評・感想とさせていただきます。

講評 4：第 20 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して

秋田県立秋田南高等学校
山本 長幸 教諭

1 はじめに

今回で 20 回目となる東北大学高等教育フォーラムであるが、私にとっては、これまで参加する機会がなく、今回が初めての参加であった。今回のテーマは、「グローバル人材の育成に向けて」である。最近は、「グローバル化」、「グローバル人材」など、「グローバル」という言葉をいたる所で目にし、耳にするようになっていく。高校現場では今年から「スーパー・グローバル・ハイスクール」の指定も始まり、私が勤める秋田南高校も、「郷土や国家を支える高い志と国際的な視野を備えたグローバルリーダーの育成」を基本理念として、平成 28 年度より中高一貫教育校としてスタートする。そのような中で、今回のフォーラムのテーマは非常にタイムリーで興味深いものであり、様々な視点からお話を伺える絶好の機会と期待しながら参加させていただいた。

2 基調講演

2-1 基調講演Ⅰ

「グローバル社会に求められるもの」

文部科学省参与 岩本 渉 氏

岩本氏の基調講演は、グローバル人材に求められる力の紹介から始まった。「グローバル人材を育てる」とは、よく聞く言葉ではあるが、どのような力を付けさせればよいのか、その解釈は曖昧でバラバラであることが多い。この講演の中では、経済産業省が提言する社会人基礎力、文部科学省が挙げる学士力、グローバル人材育成推進会議がまとめたグローバル人材に必要な要素が紹介された。その三つには、我々がよく耳にするコミュニケーション能力や問題解決力などの言葉が、少しず

つ違ったニュアンスで並んでいた。

次に、ESD という言葉が紹介された。これは、Education for Sustainable Development の略で、持続可能な社会を作るための教育を指している。この ESD で育みたい力と OECD が示しているキー・コンピテンシーという力の中にも、データや情報の分析能力や人間関係形成能力などの言葉が並んでいた。どの言葉も「グローバル人材」の話をする際にはよく聞く言葉である。どの言葉も、言われてみれば、グローバル人材が身につけなければいけないものとしてもっともな力ではあるが、改めて考えてみれば、グローバルという言葉が使われる前から、生徒、学生に身につけさせなければいけないとされてきた力でもある。グローバルな人材となるためには、これらの力のほとんどを、より高度に持たなければいけないということなのかもしれない。

よく、グローバル人材＝地球市民という考え方がされがちであるが、岩本氏は、この基調講演の中で、グローバル化は地球市民化ではなく、主権国家を否定するものではないとおっしゃっていた。確かにこの考え方は現実的に即しており、「地球は一つ」や「国境はない」という考え方からスタートするより、グローバル化する世界の中で、自分たちの国、地域、文化をどう守っていくかということや、異文化を背景とする人のアイデンティティをどう尊重していくのかということなどを考えていくべきなのだという主張は大きな説得力を持つものであった。協力と競争、この二つのバランスをどう取っていくのかがグローバル化には大切なのであると教えられた。

2-2 基調講演Ⅱ

「東北大学におけるグローバルリーダー育成の取組」

東北大学副理事／グローバルラーニング

センター長 山口昌弘 教授

山口氏の基調講演では、東北大学におけるグローバルリーダー育成プログラム（TGLプログラム）の紹介があった。山口氏は、グローバル化は産業革命と同じくらいの世界的に大きな流れと話していたが、まさに、情報、技術の発展や社会的な変化はめざましく、スマートフォンの普及に伴う変化や、リーマンショックが日本に与えた影響を例に取るまでもなく、グローバル化は否が応でも進んでいる。そのグローバル化された世界に対応できる者が、グローバル人材なのであろう。

TGL プログラムは登録制で、授業と課外活動の両方で一定の要件を満たせば、東北大学グローバルリーダー認定証が発行される。そのためには、TOEFL ITP で 550 点以上であるとか、海外留学経験があることなどの条件を満たしていなければいけないようだ。

山口氏の講演からは、東北大学がこのプログラムに懸ける意気込みが感じられた。留学生を戦略的に受け入れて人数を増やして、その留学生とグループを作らせ課題解決型の授業をしたり、TOEFL の受験を必須としたりと、様々な手だてでグローバルリーダーを育成しようとしているのが窺えた。

3 現状報告

3-1 現状報告Ⅰ

「英会話の先にあるもの——批判的思考とコミュニケーション能力の育成——」

東北大学高度教養教育・学生支援機構

ダニエル・アイコースト 講師

東北大学のアイコースト氏からは、ビデオ映像や授業資料などを含めて、東北大学での英語の授業の報告があった。アイコースト氏は、大学生には、高校までと大学での英語の授業の違いを知ってもらうことが大事とし、

高校までは入試というゴールがあるが、大学では英語を使えるようになるということがゴールであることを認識させなければいけないと語っていた。高校現場でも、英語が使えることをゴールとして授業をしているつもりではあるが、では、入試はどうでも良いのかといわれると、それも否定できない。進学校であればなおさら、特に生徒側にしてみれば、何といても入試が一番のゴールであることは間違いないであろう。

また、アイコースト氏は、英語でディスカッションすることがクリティカルシンキングの力をつけることにつながると語り、実際の授業の様子をビデオで見せてくれた。その授業の中では、生徒の力に合わせた事前のインプット、生徒が話すことを準備してくることに、何人かとディスカッションした後にとまとめの時間を取り文章化することが大事であるということであった。確かに、そのうちのどの一つが欠けても効果は望めないし、それがうまくいけば高校生や中学生でもその発達段階に応じて取り入れられる授業であることを示唆してくれた。

3-2 現状報告Ⅱ

「高大、真の接続の観点から」

北海道旭川北高等学校 松井徹朗 教諭

松井氏は、新指導要領でうたわれている、英語による英語の授業を 10 年前から実践されており、その経験に裏打ちされた報告は、非常に参考になった。英語で授業をするために、初めは先生用に完全なマニュアルを作ったそうで、そのような周到な準備がなければ全ての先生が全て英語でという授業はなかなかできなかったのではないかと感じさせられた。松井氏が言われるとおりの、コミュニケーションという側面から考えればいちいち日本語を介してる暇はなく、日本語を介入させることは不必要であるということは、当然であると思う。また、コミュニケーションには推測が必要で、その推測力をつけさせなければ

ばいけないという点も、普段の日本語でのコミュニケーションを考えても、もっともな指摘であると思った。

グローバル社会で活躍するのは生徒全員でなくとも、全ての生徒が必ずグローバル化された社会で生きていかなければいけない。そのために、コミュニケーション力、他者と協力する力、違いを受け入れ尊重していく態度を高校時代に身につけさせなければいけないという松井氏の考えは、グローバル人材を育成する者が再認識すべき観点であると強く実感した。

3-3 現状報告Ⅲ

「グローバル化と高校教育」

沖縄県立辺土名高等学校 東盛 敬 校長

東盛氏の報告で一番感銘を受けたのは、氏の生き方そのものかもしれない。ラジオ番組にあこがれて東京の大学を受験し、外国から帰国した友達の影響でアメリカに渡り、しかも西海岸から東海岸まで渡り歩くなど、氏の思ったことをすぐ行動に移す、その行動力にまず驚いた。

東盛氏は、グローバル化に対応する教育とは、情報の収集・発信力の育成と共に、本物の技や知識を己に凝縮する力の育成が必要であるとし、それが生きる力につながると語っていた。課題発見力やコミュニケーション力がグローバル人材に必要な力であることはよく言われるが、確かに氏の言う本物に触れて感動する機会を与えることは、あまり取り上げられていないような気がする。しかし、よく考えてみれば本物に触れさせ、感動を与えることができれば、それをもっと深く知りたい、人に伝えたいという気持ちは自ずと生徒達の中にわき上がってくると思うし、その後の生き方も違ってくるのではないと思う。

「わからない」を「わかる」に変える感動体験とコミュニケーションをする場が授業であるという東盛氏の言葉に、「心」が動かなければ習ったことも定着しないであろうこと、

隣に座っている友達やクラスメートとのコミュニケーションがなければ、一つの教室で数十人が一緒に授業を受ける意味もないのだということを再確認できたのは大きな収穫であった。

4 討議

基調講演、現状報告を受けた討議は、テーマが今話題のグローバル人材の育成に関してということもあり、フロアからの質疑も含めて非常に活発なものとなった。その中で印象に残っていることをいくつか述べてみたい。

まず、グローバル化を話題にする際に、必ず出てくる globalization と internationalization の違いについてであるが、前者には globe、つまり「地球」という言葉が含まれ、後者には nation、つまり「国家」という言葉が含まれているという考え方に集約できるのではないと思った。ただ、ここで興味深かったことが2点ある。一つ目は、グローバルな社会であっても自分のアイデンティティは失ってははいけないし、他者のアイデンティティも尊重しなければいけないということ。二つ目は、この二つの言葉は共存していくのであって、「国際的」という言葉が「グローバル」という言葉に取って代わられてきているのではないということであった。

次に取り上げたいのは、今の若者は内向きであるかどうかという問題である。討議の中では、決して内向きではないという意見や、子供が親の気持ちを酌みすぎて、心配をかけまいとして行動する結果であるなど、様々な意見が出された。現代は、情報機器の発達によって居ながらにして様々なことを疑似体験ができてしまうし、外に出て冒険しなくても満足できる環境が整っているのに、内向きになるのも仕方がないとも思うが、それでも私は、今の若者も金銭的、そして時間的余裕があれば、外の世界に飛び出してみたいという気持ちを十分に持っているのではないかと考

えている。そのような中で、討議の中に出て来た、自分と向き合う時間が不足してるのではないかという意見や、外国で苦勞してつかんだ喜びを伝えることで外向きにできるのではないかという意見は新鮮なものであった。

他にも、グローバル化を感じる機会のない田舎でも、自分たちの畑で作っている野菜が世界の安全な食生活を守る一助になっていると考えることが、グローバルな考え方であるという意見や、英語でのコミュニケーションには文法も大事であるという意見、高校生のうちに日本語でいいから論理的な文章を書けるようにしてほしいという意見など、様々な話題に興味深い意見が出され、大変勉強になった討議の時間であった。

5 おわりに

冒頭でも述べたとおり、私にとって初めての参加となった今回のフォーラムであるが、期待通り、様々な収穫が得られたものとなった。今までは、グローバルな人材を育てるために生徒に多様な力をつけさせなければいけないと重荷に感じていたところもあったが、グローバル社会＝現代社会と考えれば、結局は今を生きる力をつけさせるということになり、それはどの時代でも教育が担っていかなければいけない普遍的な課題であると考えれば、少しは肩の力を抜いて進んでいけるような気がした。もちろん、従来とは違う新しい試みも増やさなければいけないが、それを考える際の材料が得られたことが、今回のフォーラムに参加しての大きな収穫であったと思う。

最後に、このフォーラムに参加する機会を与えてくださったことを、企画・運営に携わった皆様に深く感謝いたしたいと思います。ありがとうございました。

講評5：第20回東北大学高等教育フォーラム

「グローバル人材の育成に向けて」に参加して

山形県立山形南高等学校

高橋 徹 教諭

1 はじめに

東北大学高等教育フォーラムには、今回も含めて3回参加する機会に与っています。毎回、テーマに関わる多角的な検証と活発な討論に、多くのことを学ばせて頂きました。今回の「グローバル人材の育成に向けて」というテーマを最初に知った時は、「それは英語の先生の為のテーマでは？」と思い込んでいましたが、実際に参加してみると、高校や大学の教育の在り方、或いは「知」の在り方そのものに関して、いろいろと考えさせられることが多い内容でした。

2 基調講演および現状報告について

岩本渉氏（文部科学省参与）の基調講演1は、「グローバル化とはアメリカ化のことではない」とする本会の趣旨を、明確に示すものでした。「バスに乗り遅れるな！」的なグローバル化を唱える主張には、既にできあがっているルールに日本が従っていないと批判し、日本独自のものを「ガラパゴス化」とのレッテルを貼って無価値と断じるかのような嫌いがありました。それに対して岩本氏は、「他の国と共に参加し、他の国と共にルールを作る」ことの重要性を説かれ、「グローバル化がローカルにどのような影響を与えるかを考えられなければグローバルな人材とは言えない。」と述べられました。「英語の先生の為のテーマ」という思い込みを、打破してくれるものでした。

山口昌弘氏（東北大学教授・副理事・グローバルラーニングセンター長）の基調講演2は、東北大学に於ける現在のグローバル人材育成の全体像を示すものでした。それに対し

て、ダニエル・アイコースト氏（東北大学高度高等教育・学生支援機構講師）の現状報告（1）は、東北大学における英語教育の実際を示すものでした。基調講演と現状報告にまたがる形で、東北大学の今回のテーマに関する取り組みが、紹介されたことになります。

松井徹朗氏（北海道旭川北高等学校教諭）の現状報告（2）は、「英語のみの英語の授業」という、現行の高等学校学習指導要領に於ける「グローバル化対応のための目玉」の実践例が示されました。そして東盛敬氏（沖縄県立辺土名高等学校々長）の現状報告（3）は、氏自身の、グローバル人材によるローカルな課題に対する取り組みのこれまでと現在（国語教育の革新・沖縄空手道の世界への進出・校長としての取り組みなど）を語られたものでした。

以上5名のパネリストにより、「グローバル人材の育成に向けて」というテーマの様々な切り口が示され、フロアの一般参加者を、討論へと誘いました。

3 「グローバル化」とは何か

「グローバル化は、従来のインターナショナル化とどう違うのか？」という問いが、討論の一つのトピックになりました。この問いに対する筆者の考えを述べると、次のようになります。

「インターナショナル」には、主権国家の存在を当然の前提とし、全ての交流も、主権国家を単位としてなされるという理解があるように思われます。それに対し「グローバル化」ないし「グローバル化ゼーション」には、主権国家の存在は前提ではなく、交流も主権

国家の下位団体・組織が主権国家の仲介ないし規制を介さずに行えるものである、という印象を受けます。それはある意味、主権国家を溶解させる動きとも言えます。これは主権国家からの解放といえる一方で、主権国家による保護を喪失させ、全ての人々を全世界的な（それこそグローバルな）弱肉強食の競争へと駆り立てる怖れを有しているとも言えます。そのため、グローバル化を否定的に捉える言説も次々と登場しています。

しかしグローバル化を全く拒否することは、貿易立国である日本にとって、それこそ非現実的で大変危険なことです。グローバル化が不可避であるなら、その副作用への対応をどれだけしっかりと行えるかも問われることになります。グローバル化という言葉を用いる際には、「主権国家の溶解」ということの正負それぞれの影響を考える事が、不可欠と思われるかもしれません。

4 若者は「内向き」か

この問いに対する反応は各人各様で、「何をもって“内向き”と言うのかがわからない」という意見もありました。筆者は、現在の若者に「内向き」というか「物事への視野の狭さ」を感じることがあります。しかしその原因は、現在の若者が育ってきた「失われた20年」に大人が与えてきた環境にこそあると思われます。

この20年余り、新たな成長産業を見出すことが困難だった中で、IT産業が脚光を浴びましたが、それは何をもたらしたのでしょうか。例えば、今や小学生にまで携帯電話やスマートフォンが普及しています。そのことは、同時に子ども達の人間関係の形成に大きなバイアスをかけることになりました。SNSは、青少年達を常に同世代の他者との位置関係に神経をすり減らす状態をもたらしました。そんな中では、自己とじっくりと対話する事はできません。それが「内向き」と

も表現される「視野の狭さ」を若者達にもたらしたと言えます。

また現在の大学生には、「自由な時間」はどれだけあるのでしょうか。「学部3年から就職活動」を異常と思うことができない社会に、彼らは生きています。東北大学の学生はそうでないとしても、それは幸福な例外でしょうかありません。大学生の大半が、広い視野を養う暇もなく就職活動へと急かされているのです。学部新卒・新採の機会を掴むことができれば、非正規雇用の蟻地獄が口を開けて待っています。そして正規雇用としての就職が叶っても、若者達には即戦力であることが要求され、「使い捨て」にされる恐怖と常に向き合わなければならない人も存在するのです。若者の「内向き」や「視野の狭さ」とは、現在の日本社会の全体の度量のなさの現れであると思います。

5 「英語は一つのツール」である筈が

このシンポジウムは、「グローバル化＝アメリカ化」や「グローバル化＝何事も英語で」という短絡的解釈の否定を前提としていました。しかし、グローバル化の進行は異文化との共生を当然のこととするのですから、外国語の習得によってそれを深めることは当然求められます。英語もその外国語の一つであることは、言うまでもありません。「英語は一つのツール」である訳です。ところが、日本人の英会話力がいつまで経っても上達しないとの批判が、本末転倒と言うべき現象をもたらします。

フロアからの発言に、「英語教員が英語で政治経済や世界史を授業出るようにしては？」というものがありました。発言者はどういった規模でそれを実行すべきとしているかはわからないで、杞憂かも知れませんが、世界史教員である筆者は、己の立場を否定される危険性を感じました。日本国内の大学で、授業を英語で行うことを原則としているところ

もありますが、それは何をめざしているのでしょうか？どの学問領域にしても、英語で発信する力が求められていることは理解できますが、例えば、日本史の古文書読解の演習を全て英語だけで行うことは、意味ある授業になるのでしょうか。大切なのは日本語での思索や発想を、英語に限らず多言語で発信することだと思います。従って、英語教員が英語で政治経済や世界史の授業を行うのではなく、社会科（地理歴史科・公民科）の教員が、例えば英文の要約を教材の一つとして用いた授業を行ったりするべきと考えます。また、一つの主題について複数の教科で同時期に授業を行えるようにシラバス策定の段階で協議して実行したり、総合学習を各教科相互乗り入れの場にするこゝも、考えられます。「英語と他教科のコラボレーションは不可能、あるいは難しい」のは現実ですが、特に総合学習で各教科の日常の学習とは全く別のことをやるよりは、各教科相互乗り入れの場にする方が、大いに有意義で、教員にとっても実行しやすくなると思われます。

この「英語は一つのツール」ということを強調するように、「閉会の言葉」では東北大学に於ける第二外国語拡充に関する言及がありました。「グローバル化＝何事も英語で」との短絡的解釈を戒める言葉として受け止めました。

6 望まれる「グローバル人材」とは

「3. 『グローバル化』とは何か」で述べたように、グローバル化による主権国家の溶解は、正負二つの影響を私たちに及ぼします。主権国家に制約ないし保護されていたより身近な地域＝ローカルも、グローバル化の正負二つの影響にさらされます。グローバル化は経済に典型的に現れていますが、TPPに対する期待と反発の両極端に見られるように、グローバル経済推進の副作用は未知数なだけに、反対も強くなります。真のグローバル人材に

は、岩本氏の言われるように、「グローバリゼーションがローカルにどのような影響を与えるかを考えられる」能力が必要です。その能力によって、グローバル社会と主権国家や地域社会の共存の先導者になってもらいたいと思います。その為にはやはり、岩本氏が言われるように、「他の国と共に参加し、他の国と共にルールを作る」人であることが求められます。筆者は、その大先達として、山形県出身で1930年代に常設国際司法裁判所（現在は国際司法裁判所）の所長を務めた安達峰一郎を挙げます。彼は、常設国際司法裁判所の所長になっただけではなく、1920年代に常設国際司法裁判所設置規定を起草する際に、現在の国際司法裁判所にも適用されている組織原理を提案して採用された人物です。※そのような、「他の国と共に参加し、他の国と共にルールを作る」人こそ、真の「グローバル人材」と言えます。

7 むすびにかえて

「それは英語の先生の為のテーマでは？」との思い込みは、今回のフォーラムに参加して氷解しました。しかし、フロアからの意見を訊くと「グローバル化＝英語」という短絡的理解は、大変根強いようです。筆者は世界史教員です。日本の高校世界史は、様々な批判はありますが、一方では最も満遍なく人類の諸文明の歴史を網羅した内容になっています。それは、日本における外国史・異文明研究の多彩で分厚い蓄積があつてのことです。日本からのグローバル化推進の際に、この蓄積を活かさないとするれば、それは余りにも大きな損失といえます。現在のところ、制度としては高等学校地理歴史科の1科目としてのみ存在している世界史を、どう展開させていくかを、筆者は考えていきたいし、多くの方々にも考えていただきたいと思います。

牧田幸人『国際司法裁判所の組織原理』有信
堂高文社 1986年

関野昭一『国際司法制度形成史論序説——わ
が国の外交文書から見たハーグ国際司法
裁判所の創設と日本の投影』国際書院,
2003年

講評6：第20回東北大学高等教育フォーラム「グローバル人材の育成に向けて——これからの高校教育・大学教育における課題——」に参加して

福島県立福島高等学校
浜田 伸一 教諭

1 はじめに

本校は、ほとんどの生徒が東北大学をはじめとする国公立大学への進学を志望する普通科の高校である。生徒ひとり、ひとりが進路実現できるような学力を養成していくことはもとより、昨年からは進路指導部の目標に「キャリア探究力の養成」を掲げ、大学、学部、学科選択に当たっては、「自分が将来、社会とどう関わっていき、何をなすべきなのか」という視点を持ち続け、最終的には自分で納得のできる進路選択ができるようにすることを重視したいと考えている。

したがって、今後、生徒たちが関わっていく社会がグローバル化していけば、必然的にそれに対応できる人材を育てるための役割を担っていくことが使命となることは言うまでもない。巷に溢れている「グローバル化人材」という言葉がもつ多様な意味合いをどう共有し、高校、大学それぞれの段階で何ができるかを考えるうえで本フォーラムは大変参考になった。2012年からの大学での「グローバル人材育成」に続き、高校でも2014年からはじまる「スーパーグローバル・ハイスクール」の事業も高大連携のあり方を探る指標になるのではないか。今後も大学や他校の先進的な取り組みから学んで行きたい。

2 基調講演

2-1 基調講演Ⅰ

「グローバル社会に求められるもの」

文部科学省参与 岩本 渉 氏

岩本氏からは、フランス日本国大使館やユネスコでの経験を踏まえたうえでの「グロー

バル人材とはどのような人材なのか」についてご講演いただいた。経済産業省の社会人基礎力や文部科学省の汎用的技能、グローバル人材育成推進会議によるグローバル人材の概念などを踏まえ、一度、整理する必要があるのではないか。語学力やコミュニケーション能力は要素として言うまでもないが、それだけにとどまらず、「主体性、チャレンジ精神、協調性、柔軟性、責任感、使命感、課題発見能力、リーダーシップ、判断力、創造性、交渉力」「異文化理解力と日本人としてアイデンティティ」などなど。ESDの育みたい力やOECDのキー・コンピテンシーについても参考になったが何より、岩本氏の「グローバル人材とはどのような人材かはわれわれが考えていくべき」との言葉に納得させられた。

また、総合的な学習の時間の主旨に即した活動に取り組んでいる生徒ほど全国学力・学習調査における正解率が高かったというデータが紹介された。本校では「スーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）」事業の一環として総合的な学習において、「知の技術の獲得」として発想法の演習や情報検索や図書館の利用について学んだり、「テーマ別研修」や「ディベート講座」などを設けているが、それらをより充実させていくことがグローバル人材の育成のみならず学力の養成に繋がるとすれば、今後、取り組みを継続していくうえでの拠り所となる。

2-2 基調講演Ⅱ

「東北大学におけるグローバルリーダー育成の取組」

東北大学副理事 / グローバルラーニング
センター長 山口 昌弘 教授

山口先生からは東北大学で行われている「グローバル人材推進事業」の取組みの紹介をしていただいた。それに先立ち、グローバル時代の特色について、「経済や人の往来のグローバル化と情報通信革命・急速な技術革新」との指摘があった。その後、「東北大が育てるグローバルリーダー」についての説明があり、第一に「専門力」を挙げられた点に「東北大らしさ」を感じた。

外国人留学生との共修プログラムや海外留学の促進などにより大学生の主体性が育っていることや、AOⅡ期合格者が高校生時代に海外で研修できるプログラムなどが紹介された。留学や海外研修に参加できる学生は一部でも、そのことにより育った主体性や積極性は他の学生にも良い刺激を与えているのではないか。

本校でもSSH事業でイギリスや台湾などの大学での研究会や高校生との交流を実施しているが、コミュニケーション能力や主体性の面で優れた成果が現われているといえるだけでなく、そのことが他の生徒にも良い影響を与えている。また、台湾など外国から高校生が訪れ、交流の機会を持てたことで多くの刺激を受けた。特に、台湾の高校生の英語力に圧倒され、英語学習の必要性を痛感する生徒が多いようだ。異なる価値観や文化に触れる機会を持つことは好奇心やチャレンジ精神を育てるうえでも大きな力となるのではないか。

大学での取組を踏まえ、高校でどのようなプログラムが有効かを考える契機としたい。

3 現状報告

3-1 現状報告Ⅰ

「英会話の先にあるもの——批判的思考とコミュニケーション能力の育成——」

東北大学高度高等教育・学生支援機構

ダニエル・アイコースト 講師

先生の東北大におけるディスカッションを用いたコミュニケーション授業についての報告は英語で行われ、報告書をまとめるため私の耳はこれまで以上に先生の英語に集中した。そして、自分の英語力のなさを痛感することとなった。国語科とはいえ、これではグローバル人材を語れないだろう。ただ、聴き取らなければならない状況ができれば、必死になることを実感した。

先生の授業の特長は、トピックに関する記事や動画への感想を書いておき、話すべき内容の準備をしっかりとした上で、ディスカッションさせるという点にある。準備をさせるためのスタンプ評価など、細やかな指導もなされる。コミュニケーション能力と思考力を同時に養成できるよう工夫されていた。また、ディスカッションには見本が必要との言葉も参考にしたい。

先にも述べたように、英語で会話をしなければならない状況と話すべき内容の準備ができていれば英会話力は鍛えられると思う。本校でも、外国の高校生へのプレゼンテーションや外国人留学生に対する市街地案内、さらには、スカイプを使つてのフランスや韓国の高校生とのディスカッションなど、参加した生徒達は大変な思いをしながらも、なんとか相手との会話を成立させるため必死になり、以前よりも英語力をつけていった。フランスの高校生とは原子力発電を、韓国の高校生とは、「高校生による旅行ビジネスプラン大会」での旅行企画立案をテーマにして討議した。

3-2 現状報告Ⅱ

「高大、真の接続の観点から」

北海道旭川北高等学校 松井徹朗 教諭

先生が先進的に継続してきた英語による授業の研究・実践の報告をお聴きした。コミュニケーションのためには意味や相手の気持ちを推測できる「推測力」をつけてやることや、ペア・グループ学習を通して他者との違いを受け入れることができるようにすることの必要性を説かれたが、大変参考になった。また、ひとつではない解答に向かって話し合いをして、自分の考えをまとめるといった、先生の授業を受けた生徒であれば、先の東北大における英語の講義にも自然に対応できるに違いない。先生は後の討議の際に、「高校での英語がコミュニケーション中心でよいか」との問いに「文法かコミュニケーションか」の二項対立で考えるべきではなく、教える順序やどこまで教えるかについて考えることの大切さについて述べた。また、北海道の小規模校で一人でも、生徒がグローバル社会の中で活躍できるよう、英語教育に情熱をそそぐ先生の話が心に残った。北海道の農家でも外国人労働者が田畑を耕している現実を踏まえると、地方(ローカル)においてもグローバルな視点や能力が求められるようになるとの指摘は、先に、岩本氏が「グローバルな視野でローカルのあり方を考える必要がある」と述べたことをより、具体的に私たちに示してくれている。

3-3 現状報告Ⅲ

「グローバル化と高校教育」

沖縄県立辺土名高等学校 東盛 敬 校長

先生はアナウンサー、アメリカ語学留学、沖縄空手道の修行といったさまざまな体験を交えながら、シラバス作成による、わからないことがわかるようになる感動体験の大切さやパターン化による生徒の主体的活動の場をつくってきたことなどを報告された。社会へつながる思考・判断・表現力の育成を目指す

ことで、海外や県外に出て行く卒業生が増加しているという。英語だけに限らず、情報収集力や選択力、発進力などはむしろ国語教育の中で養成されるべきであろう。そして、それらの力が生きる力に結びつく。グローバル人材を育てるための国語教育の重要性を痛感すると共に、先生のグローバルで主体的な生き方に感銘を受けた。

4 討議

東北大の山口先生に東北大学の取組による成果についての質疑があり、まだ、プログラムがはじまって1年目であり、海外体験により主体性が育ったのか、主体性のある学生だからこそ、積極的にプログラムに参加するののかの見極めが難しいとの説明があった。ただ、海外体験が短期でもある学生は成長が見て取れ、行動を起こしており、他の学生との意識の差は大きいとのことである。

「グローバル」と「インターナショナル」との違いについての質疑があり、「グローバル」が地球全体を一つと考えるのに対し、「インターナショナル」は国と国の相関関係で捉えたものとの回答があった。また、この二つはこれからも並立して存在していくとの指摘もあった。

若者の内向き指向に対する働きかけとして何ができるかという話題ではネット上の理解で満足させず、外に出ることの楽しさや体験することの大切さに気づかせたいとの意見が出された。また、この傾向は、保護者の影響が大きく、自分と向き合う機会がないことによるのではないかという意見も出された。確かに、高校生についても同様の傾向が見られる。

高校における英語の取組同様、グローバル人材育成に向けての他教科との連携は可能かという質疑に対しては、教科によって考え方が異なり難しく、同じ教科内でも指導観が異なることもあるとの回答があった。教科間の連携が難しいのであれば、先にあげたように、

総合的な学習やさまざまな行事を通して、さまざまな能力を伸ばしていくことは可能ではないか。

5 おわりに

今回、本フォーラムに参加することで、これまで未整理だった「グローバル人材」に必要な能力について考えるとともに、それらの能力を育てるために、高校において何ができ、どう、大学に、そして、社会に引き継いでいけばいいのかという視点を持つことができた。英語を中心とした語学力が求められることは事実だが、それは、コミュニケーションをするために必要なスキルであり、「語るべき内容」を同時に育てていくことが肝心ではないか。それは、専門性かもしれないし、その人の好奇心に基づく人間的な魅力によるものかもしれない。社会でたくましく生きていく力をつけていくことは、グローバル化する社会の中で生き抜く力をつけていくことと同義であるように思える。たとえ、外国で生活しなくても、国内での外国人労働者は72万人となり、ローカルにグローバルが侵入し、誰もが、グローバル社会とは無縁でいられない以上、その変化に対応できる力を育むためにはどうしたらよいかという課題を念頭に日々、生徒と向き合っていかなければならないとの思いを強く持った。

アンケート・参加者統計

第 20 回東北大学高等教育フォーラムアンケート

(回収数 82, 回収率 56.6%)¹

1. 御所属

(1) 高校:52 名 (63.4%) (2) 大学:18 名 (22.0%) (3) その他:12 名 (14.6%)

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。

(1) よかった:77 名 (95.1%) (2) どちらとも言えない:3 名 (3.7%)
(3) 改善すべき:1 名 (1.2%)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか。

(1) よかった:61 名 (76.3%) (2) どちらとも言えない:15 名 (18.8%)
(3) 改善すべき:4 名 (5.0%)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

(1) よかった:63 名 (78.8%) (2) どちらとも言えない:13 名 (16.3%)
(3) 改善すべき:4 名 (5.0%)

5. ディスカッションは如何でしたか。

(1) よかった:51 名 (79.7%) (2) どちらとも言えない:11 名 (17.2%)
(3) 改善すべき:2 名 (3.1%)

6. 時間は如何でしたか。

(1)短すぎた:3 名 (3.9%) (2)ちょうど良い:61 名 (79.2%) (3)長すぎた:13 名 (16.9%)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

(後述)

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

(後述)

ご協力ありがとうございました。

¹ ダブルマーク、無回答は個別の集計から除く。

アンケート自由記述

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。¹

- 様々な立場の観点が聞けて良かった。(高校, よかった)
- 本校に必要な関係あるテーマです。(高校, よかった)
- 本学としても取り組んでいかなければならないテーマなので興味を持って聞くことができた。(大学, よかった)
- 必要性は感じながらも, どこか遠い話のように感じていたため。(その他, よかった)
- 日本の教育が変化しなくてはならないことを知れました。(高校, よかった)
- 日本がめざす方向性に関するテーマだから。(高校, よかった)
- 内容, 流れがスムーズであった。(大学, よかった)
- 大学・高校そして中学校と様々な分野の方の意見を聞けたから。(高校, よかった)
- 接続可能な教育から 10 年目, 震災を経てグローバル人材育成にどんな影響があったのか, これからどのような視点で育成するのか, 方向性が見えるフォーラムだった。テーマがタイムリーでした。(高校, よかった)
- 人材育成のヴィジョンがわかった。(高校, よかった)
- 実践例の講師の配置が特によい。(高校, よかった)
- 時流にのっている。(大学, よかった)
- 最近の東北大の変化と共に非常に興味深いものでした。(高校, よかった)
- 今まさに考えなければならないテーマで, よい選択だったと思う。(高校, よかった)
- 今, 特に注目されているテーマなので。(高校, よかった)
- 高校教育の状況を踏まえることが大切と思われます。(大学, よかった)
- 現在自分及び職場で関心の高いテーマであった。(大学, よかった)
- 具体的な施策を知ることとグローバル化の本質的な部分を知ることができた。(高校, よかった)
- 興味深いテーマだった。(高校, よかった)
- 興味のあるテーマだった。(大学, よかった)
- 教育において「グローバル」はキーワードであるため。(大学, よかった)
- 基調講演は平凡だが高等学校教師を招いたのはよかったと思う。ただ高校と大学(と文科省)のつながりがはっきりしないので, 東北大とつながりのある高校の関係者を招くとよかったのでは。(大学, よかった)
- 何者かよくわからないものにかみくだこうとする形が。(高校, よかった)
- 何がグローバルなのかということを考えられたこと, 意見を伺えてよかった。(高校, よかった)
- 英語教員なのでとても興味があった。(高校, よかった)
- 英語教育を考える上で今一層考えなければならないと思うから。(高校, よかった)
- まず, グローバル人材とは何か。またその意義や今後の育成への展望について, 国の施策や大学教育の現状などから理解することができました。特に各大学の人材育成事業の成果

¹ 末尾の括弧内は所属, 選択された御意見。

や評価について今後追求していきたいと思いました。(その他, よかった)

- まさに高大で求められている視点でタイムリーだった。(その他, よかった)
- とても興味のある内容だった。(高校, よかった)
- テーマ自体はタイムリーで良いと思うが, 発表内容にバラつきがあり, まとまりが無かった。(その他, どちらとも言えない)
- テーマ自体はタイムリーでよい。(高校, よかった)
- テーマについて深く知ることができた点。(その他, よかった)
- ディスカッションを聞いて, わけがわからなくなりました。テーマはいいけど, まとめる方向が?。(高校, 改善すべき)
- タイムリーなテーマであった。(大学, よかった)
- タイムリーでした。(高校, よかった)
- タイムリーである。(大学, よかった)
- さまざまな考え方を知る機会となった。(高校, よかった)
- これは今, 不可欠なテーマ。(その他, よかった)
- このテーマなので参加しました。(その他, よかった)
- グローバル人材の育成は本学の課題であり, 取り組み始めたばかりで, 大変参考になる内容でした。(大学, よかった)
- グローバル教育に対する大・高の現場からのとりくみを感じることができたのでよかった。(高校, よかった)
- グローバル化の動きが整理できた。その対応の一例(東北大)も知ることができた。(高校, よかった)
- グローバル化の定義がわかった。(高校, よかった)
- グローバルの考え方, 議論, 参加者の意識。(高校, よかった)
- グローバルの意味がよくわかった。(高校, よかった)
- グローバルとは何なのか。いろいろなアイデアをいただけた。(高校, よかった)
- 「今」を反映している。(高校, よかった)
- 「グローバル人材とは」について様々な御意見をうかがえたので。(その他, よかった)
- 「グローバル人材」というテーマには食傷気味でしたが切り口が面白かった。(高校, よかった)
- 「グローバル化」に対する大学の考えを聞いた。(高校, よかった)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか。

- 例年に比べると, ちょっと興味がわきかねた。(高校, 改善すべき)
- 本学に参考になる内容が少なかった。(大学, どちらとも言えない)
- 豊かな経験を聞いたから。(高校, よかった)
- 文系・理系の両先生方がグローバル人材育成について見解を話してくれたこと。(高校, よかった)
- 日本人が必要とされる能力と人材育成に関する内容である。(高校, よかった)
- 内容の重複, 主旨不明瞭 ← (解消しました), 話術の巧みさがもったいない。テーマについて何を伝えたいのかが伝わらずに終わった感がある。(その他, どちらとも言えない)

- 内容が理想的すぎたように感じました。(高校, どちらとも言えない)
- 東北大学様の取り組みの紹介が具体的で興味深かった。(大学, よかった)
- 東北大学の先進的な取組について知ることができ参考になった。(大学, よかった)
- 東北大学の取組についてよく分かった。(高校, よかった)
- 東北大学の取組が具体的にわかった。(高校, よかった)
- 東北大学の取り組みへの積極性がよくわかった。(高校, よかった)
- 東北大学の教育の実際がよくわかった。(高校, よかった)
- 東北大の取り組みがわかった。(高校, よかった)
- 東北大の取り組みがよく分かりました。(高校, よかった)
- 定義としては良いが, 東北大学の取り組みは果たして最終的(卒業時)にどのような人物になっているのか見えない。(高校, どちらとも言えない)
- 大変参考になりました。(高校, よかった)
- 大学, 社会が考えるグローバル人材像の具体が理解できた。(その他, よかった)
- 人にふれた話がよかった。(高校, よかった)
- 深いものが根底にあると感じた。(その他, よかった)
- 情報が役に立ちそうであるから。ただし山口氏の資料はほしかった。(大学, よかった)
- 山口先生のスライド資料の印刷版が手元に欲しかった。(高校, どちらとも言えない)
- 最後に日本文化の成り立ちについてグローバルな視点を示されたのはよかった(岩本先生)。(その他, よかった)
- 講演者の先生方の経験にもとづく“人材観”をうかがうことができ, 大変ためになりました。(その他, よかった)
- 言葉が先行している中で, 実在の理念と実際のとりくみをうかがえて参考になった。(高校, よかった)
- 経験談が良かった。(大学, よかった)
- 具体性があり, 勉強になりました。(大学, よかった)
- 貴重な立場にいらっしゃる岩本先生のお話で, グローバル人材の大枠をとらえることができましたが, もう少し具体的に焦点を当てた例や事例をおききできればと思いました。(高校, よかった)
- 期待が大きかったので。(大学, 改善すべき)
- 既知の話が多い気がした。(大学, どちらとも言えない)
- 岩本先生の我々が社会を構成していくという視点。(その他, よかった)
- 岩本先生のお話でグローバル人材の整理ができた。(高校, よかった)
- 岩本先生からはもっと深い話を聞きたかったです。(ESD もグローバル人材定義も知っていたので)。(高校, どちらとも言えない)
- 岩本氏 → ためになった, というよりお人柄がわかった。山口氏→資料の準備と配布。(大学)
- よかったが, 結果グローバル人材育成に向けてこれからどう取り組むのがいいのか不明。(高校, 改善すべき)
- もう少し時間が長ければもっと具体的な話まで聞けたのではないか。(高校, どちらとも言えない)

- テーマに沿って、実際の現場の講演で必要な情報が得られた。(高校, よかった)
- テーマについて深く知ることができた点。(その他, よかった)
- さまざまな視点と幅広い知識, 考え方を知り得た。(高校, よかった)
- さまざまな考え方が聞けて勉強になった。(高校, よかった)
- グローバル人材育成について本質的なことをきけた。(大学, よかった)
- グローバル人材育成への歩みがよくわかった。(大学, よかった)
- グローバル人材に必要な要素が明確化した。(高校, よかった)
- グローバル人材についての考え方, 東北大学の TGL の取り組みについて, わかりやすく講演いただいた。(高校, よかった)
- グローバル人材とはどのような人を育てればよいか少し明確になってきた。(高校, よかった)
- グローバル人材がどういうものかイメージを具体化できた。(高校, よかった)
- グローバル人材, 社会について深く学ぶことができた。(高校, よかった)
- グローバル社会の職場の一例であるユネスコでのご体験をうかがえ, かつ, 大学現場に身をおかれる立場からグローバル再考の中身をうかがえた点。(大学, よかった)
- グローバル化の中で求められる人材について学ぶことができました。(大学, よかった)
- TGL 参加の学生の様子, 感想, グローバル化について学生はどう考えているか?。(高校, どちらとも言えない)
- TGL に少しかたよっていた。(その他, どちらとも言えない)
- SSH 指定校に勤務しており, 英語教育と SSH と両方の観点から学べることがあった。(高校, よかった)
- 1 はよくまとめられていたが, 2 はボリュームがありすぎた。(その他, どちらとも言えない)
- ☆もっと長く聴けるとよかったです。(高校, よかった)
- 「グローバル人材」について学べた。(高校, よかった)
- (よかった) 文科省の講演では紙ベースの資料があり聴きやすさ感じた。
(改善すべき) 東北大学の実践の方にも資料があると助かると感じました。(高校)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

- 様々な取り組みを知ることができ, よかった。(高校, よかった)
- 目標がそれぞれはっきりしていて, 実践を明確に行っていることがわかり, たいへん刺激になった。(高校, よかった)
- 北海道の旭川の松井先生はとてもよかった。論点がズレている発表者もいたように感じる。
(大学, どちらとも言えない)
- 北海道, 沖縄と。(高校, よかった)
- 非常によかったのもあった。(大学, どちらとも言えない)
- 日本は広い。都市部だけが日本ではない。(大学, よかった)
- 日本の北から南, 外国とグローバルという点でもよい話でした。(高校, よかった)
- 内容はとにかく人選が面白いと思います。(高校, どちらとも言えない)
- 内容に深みを感じない。(その他, どちらとも言えない)
- 特にアイコースト先生の授業は生徒の実際の反応がわかってとてもよかったです。(高校,

- よかった)
- 地方の方々が最先端の教育を行っていることが分かりました。(高校, よかった)
 - 大学での英語の授業を知ることができて, 参考になった。(高校, よかった)
 - 大学での英語の授業の様子を知ることができた。(高校, よかった)
 - 大学, 高校現場での実践例など参考になった。(高校, よかった)
 - 松本氏, 東盛氏 → もっと「教育実践」の中身についてお話し頂きたかったです。東北大での日本人英語教師の授業についても報告して頂きたい。(大学)
 - 松井先生の推測力, 創造力のお話。(その他, よかった)
 - 松井先生のすべての生徒にグローバル時代を生き抜く力が必要という話。(高校, よかった)
 - 授業の大切さを改めて学ぶことができました。(高校, よかった)
 - 実践例をもう少し見たかった。(大学, どちらとも言えない)
 - 実績など数値で示すべき。(高校, よかった)
 - 自己紹介が長すぎる, 本題をもっと話してほしかった。(大学, どちらとも言えない)
 - 時間が短いと思います。次回はグローバルハイスクールの取組を報告してもらってはどうか。(高校, どちらとも言えない)
 - 資料を熟読致します。(その他, よかった)
 - 指導が生き生きとなされており, 生徒, 学生らは希望をもって勉学に励むことができると感じた。(その他, よかった)
 - 高大の先進的取組が聞けた。(その他, よかった)
 - 高校のおふたりのレベル。(大学, 改善すべき)
 - 現場でのご苦勞がしのばれた。(高校, よかった)
 - 現在, 各校で取組もうとしているが難しい課題であり, その解決策を教えていただけた。(高校, よかった)
 - 具体的取り組みを知ることができた点。(高校, よかった)
 - 具体的な教育現場での取り組みを知ることができた。(高校, よかった)
 - 具体的で分かりやすかった。(大学, よかった)
 - 教材の例や指導法が提示され参考になった。(高校, よかった)
 - 教科指導の面とテーマに対する報告者の意見が参考になった。(高校, よかった)
 - 学校での具体的な取組をもう少しお聞きしたかった。(その他, どちらとも言えない)
 - 各校の取り組みがわかった。(高校, よかった)
 - 英語教育にかたよっていた。グローバル≠英語教育のような印象を受けた。(大学, 改善すべき)
 - 英語をききとる力の必要性を感じました。(高校, よかった)
 - もう少し時間が長ければもっと具体的な話まで聞けたのではないか。(高校, どちらとも言えない)
 - もう少し時間があれば具体的な取組が発表できたのかもしれませんが…。(高校, どちらとも言えない)
 - もう少し具体的な話が聞きたかった。そのためには時間が長い方がよい。(高校, 改善すべき)
 - プラクティカルでした。(大学, よかった)

- どの先生方のお話も今後に活かせると思いました。(高校, よかった)
- とくにダニエル氏の方法論は興味深かった。明日からでも実践できそうだと思う。(高校, よかった)
- とくにアイコースト先生のプレゼン。(高校, よかった)
- ダニエル先生はよかったです。松井先生, 東盛先生のご発表は少し趣旨がずれていたように思います。(高校, 改善すべき)
- ダニエル先生の話にはひきこまれた。(高校, よかった)
- ダニエル先生の授業の様子は高校にとっても刺激があり, 大変感銘を受けました。(高校, よかった)
- ダニエル・アイコースト先生の発表は良かったが, 他の2名については疑問が残る。(その他, よかった)
- すばらしい実践です。(高校, よかった)
- グローバルという言葉が他人事ではなく, 常に目の前にあって, 意識していなければならないということを痛感した。(高校, よかった)
- アイコースト先生の授業内容は大変参考になりました。(大学, よかった)
- アイコースト先生の授業の様子をうかがえて良かった。(その他, よかった)
- Daniel 先生の授業紹介や, 松井先生のお話, とても参考になりました。(高校, よかった)
- 3人の先生方の立場の異なる具体的事例から現場でのヒントを多くいただくことができました。I was really inspired! (高校, よかった)
- 3人の先生方がしっかりと“身のまわり”“目の前のこと”を充実させることで広く見渡しているという点。(高校, よかった)
- 1, 2は力をいただける話でした。3はテーマには不向きな内容が多かった。(その他, どちらとも言えない)
- ☆もっと長く聴けるとよかったです。(高校, よかった)
- ・教科教育における(今回は国語, 英語)グローバル人材の育成の実践について大変期待が持てました。他教科, 科目にも応用できると思いました。
・松井先生のお話から, 現場で実践することは難しいという現状をうかがいましたが, 大変印象的でした。(その他, よかった)

5. ディスカッションは如何でしたか。

- 様々な話題で話し合われた点良かった。(高校, よかった)
- 様々な話題でよかった。(その他, よかった)
- 様々な立場からの意見を聞いた。(高校, よかった)
- 様々な発展的な意見が参考になった。(高校, よかった)
- 様々な考え方に触れることができ, 今後の指導方法に役立てたいと思った。(高校, よかった)
- 様々な意見を聞いたから。(高校, よかった)
- 様々な意見をうかがうことができた。(その他, よかった)
- 様々なバックグラウンドを持つ方から話を聞く貴重な機会でした。(高校, よかった)
- 発表に直接関係ない, よい質問が多かった。(大学, よかった)

- 突っ込んだ議論が聞けて大変よかった。(高校, よかった)
- 討議のテーマが告げられていなかったのが今一つ盛り上がらなかった。(その他, どちらとも言えない)
- 答のない問題も多かったが, 多岐にわたってよかった。(高校, よかった)
- 東北大, 北海道旭川北高, 沖縄辺土名高それぞれの具体的現場での「授業」の様子知れた点。(大学, よかった)
- 大変有意義な議論でした。ぜひこのテーマで何度も開催してほしいと思います。(高校, よかった)
- 多様な意見があり良かったです。(高校, よかった)
- 進行はよくなかったが, より一層身近な例におきかえて考えやすかった。(高校, よかった)
- 深めることができました。(高校, よかった)
- 若者の内向き志向の話は本音が聞けて勉強になりました。(高校, よかった)
- 高大の求めるグローバル人材のとらえを知ることができた。(その他, よかった)
- 高大が入り交じったディスカッションにより焦点がぼやけてしまったから。(大学, どちらとも言えない)
- 考えることが多かった。(その他, よかった)
- 個人的にはインターナショナルは文化の用語, グローバルは経済の用語と聞いて納得したことがあります。(高校, よかった)
- 各先生方の立場だけでなく, 個人の考えも聞けて良かった。(高校, よかった)
- より発展あるパネルに。(その他, どちらとも言えない)
- より多角的視点で考えられました。(高校, よかった)
- よかったのもあった。本音が聞けたところはよかった。(大学, どちらとも言えない)
- もう少し司会の方が上手にパネラーの方にふっていただきたかった。(高校, どちらとも言えない)
- もう少し具体的な話が聞きたかった。(指導に関して)。(高校, どちらとも言えない)
- もう少ししぼって短めにしてほしい。(高校, 改善すべき)
- フロアの意見を取りあげてくれたのが良かった。(大学, よかった)
- グローバルという用語に関するディスカッションは少し残念。(専門的でない) 内向きな若者についてのディスカッションはおもしろかった。(大学, どちらとも言えない)
- いろいろな側面からの話しがでて, 大変勉強になりました。(高校, よかった)
- いろいろな意見を交換することができて参考となることが多くあった。(高校, よかった)
- internationalization と globalization の討論。internationalization と globalization の差に関して英語の母国語話者は経済活動が介在するか否かであるにとらえているように思います。この質問はダニエル先生に尋ねてほしかったと思います。(高校, どちらとも言えない)
- 「グローバル人材の育成に向けて」に対し, 語学学習ばかりが中心となり, おかしい話になった。主体性, 実行力, 課題発見力, 創造力, コミュニケーション能力…などをのばす工夫について話を広げるべき。司会がヘタだったと思います。(高校, 改善すべき)
- 「グローバル人材とは」が, 少し見えました。(高校, よかった)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

- 文理の融合、分野の交流（高校では、教科の横断）。（高校）
- 東北大学の宣伝だけではなく、様々なレベルの大学に適用できる話を中心にしてほしいです。（高校）
- 大学入学前、入学時、入学後、卒業に至るまでの追跡調査（例えば指定校推薦入学者の評定平均値と入学後の成績の相関関係など）の取りくみ事例。（大学）
- 新しい機構における「グローバル化のすい進」状況をききたい。（大学）
- 今年のような形がよいと思います。テーマ → SSH に対して大学が望むこと。（高校）
- 今回のような形式で結構です。（大学）
- 今回と同様で結構です。（大学）
- 国際バカロレアや外部検定試験の活用など、多様化する入試の今後の展望やその意図するところは何か？（高校）
- 高大接続と学生募集（教育改革への視点から）。（その他）
- 現在、岩手県では大学入試と高校の英語教育のバランスの取り方に苦慮しているので（All English の授業や観点別評価など）、大学入試をする側の意見を聞きたいです。（高校）
- 結果、成果を報告するフォーラム。例えば東北大は具体的にどのような「グローバル人材」を輩出しているのか。（大学）
- 継続して同じテーマについてフォーラムを行ってほしい。（その他）
- 形式は今のようでよい。・現代文の指導について ・論理的思考力育成 ・感性教育の可能性などに関心があります。（高校）
- 教養教育と専門教育の接続、教養教育の教育課程の評価。（大学）
- 基調講演を短めに → 30 分×2 人程度。ディスカッションを長めに、このフォーラムはディスカッションが魅力です。（高校）
- 企業経済界が求めるグローバル人材とは何か。（高校）
- これからの入学試験に関して、関係者の話を聞きたい。（大学）
- キャリア教育について。（高校）
- キャリア教育における高大連携のかたち。（高校）
- キャリア教育（職業選択や社会でどのように生きていくのか）を考えさせるテーマがあるとうれしいです。（高校）
- お任せします。（高校）
- 「高大教育接続」について知りたい。（高校）
- 「高校教育（英語）と大学入試」大学の先生方はどのようなお考えをお持ちですか？（高校）
- 「① 大学からみて高校に何を求めるか」「② 大学入試はこう変わる」直撃テーマがよい。（高校）

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

- 様々な立場の専門家の考えを伺うことができとても勉強になりました。（高校）
- 有益でした。ありがとうございました。（大学）

- 毎回参加していますが（４回目？）楽しみにしています．やはり大学のキャンパス内での実施がいいなあと思います．（高校）
- 毎回，大変時代にマッチしたテーマを企画しており毎年楽しみである．
（お願い）→山口昌弘先生のスライドをフォーラム冊子に掲載してください．（高校）
- 本日はありがとうございました．（大学）
- 本当に参考になる有意義なフォーラムでした．それぞれの先生方の意気込みが伝わってきました．ありがとうございました．（その他）
- 勉強になりました．（高校）
- 文系（英・国）の現状報告だけでなく，理系の分野もあると良かったです．（高校）
- 日本人全員が英語に興味を持ち，ディベートやディスカッションができるようになる必要はないのではないのでしょうか．例えば，英語科の学生で（苦手だったら）「数学や物理」の留学にいくら無料でも希望しない生徒はいると思います．まずは，日本語，日本文化，道徳をしっかり教え，その上で基本的英語，そして必要な人にディベート力などをつけるべきだと思います．（高校）
- 東北大学大学院卒ですが，もう一度今の時代に東北大の学生になりたいと感じた次第です．東北大を目指す高校生への有効な情報を得ることができ，感謝致します．グローバル人材についてより明確なイメージを持つことができました．（高校）
- 中・高の先生方の意見も聞くことができとてもよかった．このような機会はまた参加したい．（大学）
- 大学と高校の教員が集まってお互いに意見交換等ができる会で連携して教育を考える機会となります．閉会后，情報交換会があると，もっと充実した意見交換ができるのではないかと思います．（高校）
- 参加させていただき，大変勉強になりました．ありがとうございました．（高校）
- 今後もこのような高校と大学の交流の場が欲しいです．（高校）
- 高校・大学の関係者がもう少し交流できる場（自分でするのが当然ですが…）があると盛り上がると思います．[立食形式の交流会や，日本語でも英語でもいいので生徒（学生）にやらせているグループ討議等]（高校）
- 基調講演で英語圏一辺倒でない方を出してくれたのがよかった．（高校）
- 関係の皆様の多くのご準備に感謝いたします．誠にお世話様でした．（大学）
- 楽しく貴重な時間を過ごせました．ありがとうございました．（高校）
- より広い視野で授業に取り組もうと思います．（高校）
- とても勉強になりました．ありがとうございました．（高校）
- テーマが大きく，論点をしぼるのがむずかしかったようだ．（その他）
- ダニエル先生の存在はかなり大きかったと思う．グローバル化と関係ないテーマでも是非他国からの意見を聞きたい．（高校）
- せっかく高大のつながりのテーマなら，東北大に多く学生を送っている高校とのコラボフォーラムを計画なさってはどうか．（大学）
- グローバル人材の育成で英語教育はとても大切ですが，ツールとして使うことと英語以外の教科の知識や特に国語力，日本語力も大切である．グローバルを英語だけに頼るのはどうかと考える．（高校）

- グローバルに対する先生方の考え方をうかがえて大変有意義でした。（大学）
- ありがとうございました。（高校）
- **TGL**をもっとすすめて、意欲ある高校生を受け入れてくれる大学であり続けてほしい。（高校）

参加者統計

1. 参加者総数: 171 名

(講演者・招待参加者: 11 名, 大学: 45 名, 高校: 83 名, スタッフ等: 15 名, その他: 17 名)

2. 参加者地域別

宮城県内: 74 名

宮城県以外の東北地方: 48 名

(青森県: 6 名, 岩手県: 20 名, 秋田県: 6 名, 山形県: 11 名, 福島県: 5 名)

東北地方以外: 48 名

(北海道: 8 名, 茨城県: 4 名, 東京都: 11 名, 新潟県: 1 名, 富山県: 1 名, 山梨県: 1 名,
長野県: 1 名, 静岡県: 4 名, 三重県: 2 名, 滋賀県: 1 名, 京都府: 1 名, 大阪府: 4 名,
岡山県: 1 名, 広島県: 1 名, 高知県: 1 名, 福岡県: 1 名, 長崎県: 2 名, 鹿児島県: 1 名,
沖縄県: 2 名)

不明: 1 名

多くの方々に御参加いただき、ありがとうございました.

総括責任：東北大学高度教養教育・学生支援機構高等教育開発部門 教授 石井 光夫
編集担当：東北大学高度教養教育・学生支援機構高等教育開発部門 准教授 倉元 直樹

IEHE Report 56*

第 20 回東北大学高等教育フォーラム報告書

新時代の大学教育を考える（11）

グローバル人材の育成に向けて
—これからの高校教育・大学教育における課題—

発行：2014 年 12 月

発行者：東北大学高度教養教育・学生支援機構

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

Tel: 022-795-7551

Email: ieheoffice@ihe.tohoku.ac.jp

印刷所：株式会社 ホクトコーポレーション

* No.55 以前は CAHE TOHOKU Report として刊行

